連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol.6 No.1

第21号

対人援助学会

NO. ２１　M O K U J I

目次		002
ハチドリの器	見野　大介	003
執筆者@短信	執筆者全員	004-012
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	013-017
臨床社会学の方法	中村　正	018-026
ケアマネだからできること	木村　晃子	027-032
街場の就活論	団　遊	033-035
カウンセリングのお作法	中島　弘美	036-041
映画の中の子どもたち『真夜中のゆりかご　』	川崎二三彦	042-043
コミュニティを探して	藤　信子	044-046
蟷螂の斧　part ２	団　士郎	047-056
学校臨床の新展開	浦田　雅夫	057-059
学びの森の住人たち	北村　真也	060-062
幼稚園の現場から	鶴谷　主一	063-067
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	068-073
先人の知恵から	河岸　由里子	074-077
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	078-080
対人援助学＆心理学縦横無尽	サトウタツヤ	081-085
日本のジェノグラム	早樫　一男	086-089
きもちは言葉をさがしている	水野　スウ	090-098
お寺の社会性　～生臭坊主のつぶやき～	竹中　尚文	099-101
これからの男性援助を考える	松本　健輔	102-106
ノーサイド　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	107-108
男は痛い！「ハッシュ！　」	國友　万裕	109-115
援助職のリカバリー	袴田　洋子	116-119
周旋家日記	乾　明紀	120-122
トランスジェンダーをいきる	牛若　孝治	123-127
役場の対人援助論	岡崎　正明	128-131
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	132-134
十代の母という生き方	大川　聡子	135-139
電脳援助	浅田　英輔	140-145
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	146-148
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	149-154
周辺からの記憶	村本　邦子	155-165
病児保育奮闘記	大石仁美	166-170
ラホヤ通信	高垣　愉佳	171-173
知的発達障害の家族の日々	大谷多加志	174-176
連載第二回　対人支援点描	小林　茂	177-180
新連載　「あ！萌え」の構造：序論	齋藤　清二	181-193
新連載　海の向こうにでて見れば	石田　佳子	194-197
新連載　清武システムズ	しすてむきよたけ	198-199
新連載　そうだ、猫に聞いてみよう	小池　英梨子	200-203
編集後記	編集長＆編集員	204-206

ハチドリの器　4

見野　大介　*Mino Daisuke*







左上：

ストライプ柄のケーキ皿。

左真ん中：

コマ型の鉢に多肉植物。

右上：

アトリエ。ここで制作や陶芸教室を行ってます。

右下：

自作の器でコーヒータイム。



第21号 執筆者 @短信

齋藤　清二　新連載

今回から新しく連載を始めさせていただく、齋藤清二（さいとう・せいじ）です。今年4月から立命館大学応用人間科学研究科に所属させていただいております。

3 月までは富山大学保健管理センターで、医師・カウンセラーとして 12 年ほど働き、その前の 20 数年は、富山医科薬科大学（今は存在しません。旧富山大学・旧高岡短期大学との統合により、その短い生涯を閉じました。合掌）で、消化器内科・心療内科の医師として働いていました。病院と学生相談室をフィールドとする心理臨床の実践歴は約 30 年ほどになりますが、ここ10年くらいは、コミュニケーションに困難をもつ学生への支援と、自殺防止対策を中心とする大学生支援システムの構築と運営に力を入れてきました。私が去っても十分に機能し、持続するシステムになったと感じたので、今年をもってそこを離れることにしました。

新潟県に生まれ、東京での 2 年弱の研修期間を除くと、人生のほとんどを日本海側（私自身は裏〇本という言葉のほうがしっくりするのですが、最近では差別用語ということで、公の場では使用できなくなっています。表より裏のほうが多くの大切なことを含んでいるようで好きなのですが…）で過ごしてきました。京都に移り住んでまだ2ヶ月ほどですが、これまで経験のない古都での味わい深い生活をさっそく堪能しています。

連載の内容は、あまり真剣味のないテーマで恐縮なのですが、対人援助に引きつけて言えば、支援課程のさまざまな場面で生じる対話の中で、その人にとって最も大切なもの（好きなもの）を話題にとりあげ、それについて語ってもらったり、シェアしたり、その展開を応援したりすることが、問題の原因を探して遡っていくことよりもずっと有効であったケースを複数体験してきたということが動機になっています。何か既成の理論を借りてきて当てはめてそれでよしとするのではない考察を、ゆっくりと進めて行ければと思っています。

石田　佳子　新連載

マレーシアで暮らし始めて約 1 年半が経ち、少しは周りが見えるようになって来た頃、まるでタイミングを見計らったかのように、編集長から執筆のお誘いをいただきました。

正直言って、錚々たる方たちに交ってこのマガジンに連載をさせていただく側になるとは考えてみたこともなかったので、吃驚しながら「臨床や対人援助と無縁の暮らしにどっぷり浸かっている今の私にいったい何が書けるやら？」と自問しました。

それで、思い出したのです。こちらへ来る前、唐突に「仕事を辞めて、マレーシアへ行く」とご報告した際の団先生の反応を。

私も人生半世紀以上生きていますから、「師」と呼ばれる方の中には「弟子」を所有物のように支配したい欲求が生まれることもあることも承知しております。「師」も人間ならば、心血注いで育てた「弟子」が、ある日突然勝手にどこかへ行ってしまったら、面白くはないでしょう。

だから、（自分の中では大恩ある「師」と思っている）団先生に、確かな理由も目的もなく海外へ移り住むとお伝えした時、まったく不安がなかったかと言うと嘘になります。「いや、そんな方ではない」という期待と、これまで他の師との間で味わった苦い経験から生まれる「でもやはり、人間だもの」という不安・・・しかしまぁ、思い切って伝えたわけです。

そうしたら先生、おっしゃいましたっけ。「そりゃ、オモロイな！行って来い！行って来い！」って。『やっぱり～！』と力が抜けて、『まったくもって“らしい”なぁー！』と思いました。

結局、私が団先生を「臨床家としても人間としても見習いたい（師）」と仰いでいる理由は、こういうところ（変幻自在に物事を捉える視野の広さと、あれこれ言われなくても真意をつかんで温かく受け止める懐の深さ）にあるのだから、この人がそう言ってくれるなら、「書いてみませんか」という、その言葉に甘えよう！ちょうど自分の中にもやもやと湧いてきているものを言葉にしてみる絶好の機会を与えられたのだ！と考えて、お引き受けしました。

そういう訳で、多少なりとも「オモロイ」ことを書いて行ければ嬉しいのですが、今回は緊張し過ぎて少々硬い文章になってしまいました。そのうちに埒もない与太話になるのではないかと（それはそれで顰蹙だろうと）我ながら恐れていますが、お読みくださった方に「オモロイな」と思われたら大成功！という気持ちでこの連載をさせていただくつもりです。どうぞよろしくお願いいたします。

小池　英梨子　新連載

4 月からの新生活の拠点は、兵庫の特急が止まる駅の近くで、南向き三階の角部屋、静かだしオートロックまで付いて家賃 3 万 9 千円という優良物件だ。レタスと大葉とバジルを栽培できるくらい大きな出窓もあり、かなり気に入っている。でも、これを人に話すと「ワケあり物件でしょそれ！そのうち出るかもよ…」と言われることがある。そんな時、昔姉に言われた事を思い出す。

姉：「人間ってさ、嫌な人もたまにいるけど、ほとんどの人がいい人じゃん？だから、幽霊もきっとほとんどいい人だと思うんだよね。」 確かに、とその考え方に納得させられた勝手に怖がってごめんなさいと反省した小学生の頃から、一人とか暗い部屋とか怖くなくなったんだよなぁ、と思い出す今日この頃です。今回のマガジンから連載させていただくことになりました！猫と人をめぐる活動の事を書いていきます。よかったら読んでください。

しすてむきよたけ　新連載

元フリーター＆今もそんな感じ・喫煙者・髭面・髪の毛伸ばし中・思い返せば、生活の拠点がわりとあちこちで、今もそんな感じ。我ながらいい塩梅で、のらりくらりしている者。嘆き、ぼやきが多い。

現在、清武システムズという自分でもなんだかわからない仕事を展開中。原稿の初めに綴っています。（読んだところでわかるモノではありません。）

これから、僕が経験したことを綴っていきます。

小林茂　連載第二回

（臨床心理士）

先月、ふと製薬会社のイーライリリーのIT広告に目に留まった。そこにはADHDについて紹介されており、そこにあった自己診断テストを内心ワクワクしながらしてみた。結果は、モノの見事に「医師に相談してみた方が良い」と出た。ショックというよりも、「やっぱり‼」と笑ってしまった。

私ごとになるが小学生３年生頃から学校の先生にいじめられ続けた。毎日、殴られない日や廊下で正座させられない日はなかった。そういう毎日が続くと、同級生からのいじめも起こる。嫌なもので優しかった先生の名前よりも思い出したくもない体罰を続けた先生の名前の方が記憶に残っている。その頃から「なぜ自分ばかりが…？」と自分が呪われているか、不運の星のもとに生まれてきたのか、解決しそうもない理由しか思いつかず途方に暮れていた。殴られる痛みよりも、同級生の前で殴られ続ける惨めさは苦しい限りであった。漠然と自分が生まれてきたことに嫌悪感を抱いてきた。そんな自分への客観的な原因を見出すことが発達障害というキーワードであった。自分がずいぶん遅れて、いい歳となってから臨床心理学を学び、ADHDについて知った時から「これ、自分に当てはまるわ。」と自覚するようになった。私自身が小学生の頃には、発達障害という便利な概念もなく、主観的世界では自分が感じている感覚が、他の人も感じている“普通”の感覚であろうと思っていた。それがようやく大人になって相対化できるようになり、まかりなりにも社会的な生活を送るようになっている。しかし、もう少し早く知っていれば、これまでのしんどい歩みを幾らかでも軽減できたのにな、と思う。だが、時代が来るのが遅かった！

臨床心理学を学び始めたのは、本業(?)ともいえる仕事から派生したためであり偶然だが、人間や社会について考え、理解する道筋の一つとなっている。対人援助の“人”の部分は、他の誰かというよりも、まず自分という人を助けることに役立っていそうです。

水野スウ

21号原稿をそろそろ書き出そうと思っていた矢先、団編集長から書き手さんたちにあてた、次号〆切日確認のメールがとどきました。

その中の団さんの言葉、「この場があるから記録され、次の時代に向けたメモとして残ってゆく」「検討可能な今の時代の記録はいつも必要」「何かがあった時だけではなく、私達それぞれの目が及ぶ範囲の今を、自分の言葉で整理して記述する」に、とても勇気づけられました。

今の私がしていることも、私の目がおよぶ範囲の今を、自分の言葉で整理して記述していることだと、このところ強烈に思っていたからです。

私に限らず、このマガジンに執筆されている、さまざまなヒューマンサービスの現場の方のも、福祉の方のも、教育分野の方のも、それぞれの目がおよぶ今を、次の時代にむけたメモとして残している、ってことなんだ。あらためてそんなきもちでみなさんの原稿を読み返した時、ここに、このマガジンという今の時代を記録する共有空間が存在していることに、とても感動しました。ありがとう！と言わせてくださいね。

さて、今回の短信は、ちょっと長いおまけつき。

私の若い友人の長瀬正子さんがこのたび、「社会的養護の当事者支援ガイドブック　～CVV の相談支援」という本を、CVV のスタッフと一緒にだしました。 CVV は、Children's Views & Voices の略。子どもの視点と声を大事にしながら、養護施設などで育った経験のある人たちをエンパワメントすることを目的に活動している、日本ではまだ数少ない当事者団体です。

さまざまな理由から血のつながる親のもとで一緒には暮らせない子どもの育ちを、社会でささえる仕組みや、そういう場の営みのことを、「社会的養護」と呼ぶことになったそうですが、一般には、児童養護施設とか、里親、っていったほうがわかりやすいかもしれません。まだ耳慣れない言葉で、私のまわりで「社会的養護」という言葉を知ってる人は、ほとんどいませんでした。

このガイドブックを読むと、CVV は、いま施設で暮らす子どもも、社会に出た人も、この場があることで、出逢ったり、つながったり、一緒にごはん食べたりできる。そしてなかなかよそでは話せないこと、話してもわかってもらいにくい不安や悩みを聴いてもらえたりする、小さいけど大切な、交差点みたいな場所なんだな、ということがわかります。みんなで話し合って決めたCVV の理念、その 5 に「おもしろく、楽しい場であることを大切にします」とあるのも、とてもいいな、と思いました。

当事者と、社会的養護に深い関心を持つひとたち（その中には、先生もいれば弁護士さんもいる）がともにスタッフになってCVV を運営してきて 15 年近く。その間に培われた、相談支援での大切な考え方や、ひとを支援する立場になった時に必要な情報が、当事者のインタビューもまじえていっぱい詰まっているこのガイドブック。当事者であってもなくても、支援、っていうひろい意味でいろんな人に読んでもらいたい本です。

このちいさなガイドブックが、社会的養護という言葉や、当事者支援という概念、そして、CVV という個性的な活動をしてる支援の場が大阪にあること、などなど知るきっかけの一冊にもしなれたら、とてもうれしいです。

本の編集とデザインは、いつも私のマガジン原稿をレイアウトしてくれてる娘の mai works が担当しました。ガイドブックは、A5 版 86 ページ 900 円。mai works の web shop からもお求めいただけます。http://mai-works.com/



高垣愉佳

母が重度のアルツハイマーでグループホームに入所しています。父は既に他界している為、何かある度にグループホームから連絡が来て飛んでいかざるをえない生活です。先日も母が腰椎圧迫骨折を発端に体調を崩し、連日ホームから電話がかかり、度々訪問するという大変な状況がありました。母はもう私の名前は覚えていませんが、娘だという事は覚えているくらいの状態です。そんな母に「あんた今何の仕事してるん？」と聞かれました。色々な仕事をしているので、一つ一つ大きく紙に書き出しながら説明すると、「あんたそんなに賢かったやろか？いつの間にそんななったん？」と(笑)。「小さいころから自転車の後ろに乗せて塾ばっかり行かせてもらったおかげで、そんなに賢くはないけど、ぼちぼちやっていける程度になったんよ。」と言うと、少し遠い目をして、「あれな、あれで良かったんやろうかって。小さいころから勉強ばっかりさせて、申し訳なかったとずっと気になっててんけど、あれで良かったんか？」と聞かれました。私の名前は忘れても、若い頃の記憶やそれに伴った感情は失われていないのだという事に少し驚きました。私が「あれで、良かったんやで。結果良ければ全て良しやろ。」と言った時の、母のほっとした顔が忘れられません。(注：体調不良から復活しました。まだまだ介護は続きます。)

浦田雅夫

学生の保育実習で幼児さんに会うと、ちょっと前まで「ゲラゲラポー」と踊っていたのにいまは誰もそんなことしていない。もうちょっと前は、「でもそんなのかんけーねー」とかいってたっけ。でも、いつの時代でも「けん玉」は流行っているんですよね。

見野 大介 みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

個展やクラフトフェアへの出店などで、3～5月があっという間に過ぎ去りました。多くの出会いがあり、とても実りある経験になりました。

気づけばもう初夏のような暑さが訪れ、梅雨も間もなくやってくるでしょう。そして、猛暑。

昨年は8月に京都五条坂での陶器祭に初めて出店したのですが、あそこまで過酷なものだとは思いませんでした。毎年出店してる人に脱帽です。私は…多分もう出さないと思います(笑)

夏は工房に引きこもって制作に集中し、秋のイベントラッシュに備えたいと思います。

早樫一男

我が家の都合により、身の回りの整理を5月の連休前後から始めました。一応のめどは5月末です。
公務員生活を退職した時点で、随分整理したつもりでしたが、今回、想像していたよりも多くものを整理
することになりました。その一つが、さまざまな書類関係です。これまでから、整理を心がけていたものの、
一方で、20年以上も前の書類を残していたので、今回、処分することにしました。これまでの出来事などは、
私の頭の中の記憶として残っているだけになります。次に多かったのが写真類です。特に、「ネガ」の多さには、
我ながら感心しました。子どもの写真を撮影することに凝った時期があったので、「ネガ」はその名残でした。
書類にしても写真やネガにしても、「いつか見るだろう」と考えて、残しておいたものです。しかし、実際には、一回も見ないという状況が続いていたのです。それだけに、今回、思いきって処分できたと思っています。整理の
作業を行いながら、これまでの人生を振り返る一方で、これからの人生を考えると、最小限、必要なものだけを
身の回りに置いておこうと決意した次第です。

中島弘美

個人開業をしている大阪の CON カウンセリングオフィス中島代表・中島(みずとり)弘美です。

CON の中に研修センターを立ち上げ、和歌山で初めて「家族コミュニケーション講座」を開催しました。4 回連続講座参加者の顔ぶれは、ケアマネージャー、高齢者施設職員、医療機関職員、児童相談所職員、高校教員などで、日々家族さんたちとかかわりのある方々です。

そのメンバーで家族面接のロールプレイをすると、かなりの迫力！
「わたしのやり方やっぱり、追い込んでいる気がするわ」「こんなときいつも何をきいていいかわからなくなる！」「家族さんの気持ちなんかわかってきたわ」グループから影響を受けて、これまでの対応に対する発見、ことばかけのひと工夫、さらに家族理解が深まるなど、参加者とともに学べる講座です。

ステップアップの連続講座Ⅱが 6 月 3 日、7 月 1 日、8 月 5 日、9 月 5 日いずれも水曜日 18 時 30 分～20 時 30 分でスタートします。

木村晃子

～ゼロ地点その2@ゆうばり～人間ではない仕事

大学を辞め、自宅から離れ就職、ひとり暮らしの始めての冬を越し、春を迎えた息子。

冬の間は、休みの前日あたりに自宅に帰ってくることもあったけれど、雪が解けてからは全く連絡がない。ゴールデンウィークを前に、スケジュールの確認をしてみた。

「地域のことを色々やらせてもらっているから、休みは帰らないよ。」とのこと。イベントの手伝いに出ているらしい。遠く離れて一人暮らしをしている孫が気になる私の母が、夕張へ行きたいと言う。長女はバイト、次女は部活。時間に自由があるのは、私と母位なので、連休中に息子のいる夕張にドライブに行ってみた。

小さな駅前で、小さなイベントをしていた。出店も少なく、私のイメージする祭りごとと比べると、にぎやかさに欠ける印象もあった。

そこへ、ひょろひょろと歩いてきたのが、「メロン熊」。夕張を象徴するキャラクターだ。愛嬌をふるまいながら、その辺りにいる人に近づいていく。休みの間、イベントに訪れたお客さんたち（特に子どもたち）と、にぎやかに場を盛り上げていたらしい「メロン熊」。

「人間とは別の姿で、人に近づいていくことは楽しい。」と、自分に与えられた役割を堪能していたのが、私の息子だった。普段は、障がいを持つ子ども達の支援をしながら、休みの日には、また別の姿で地域につながっていく。そのどれもが楽しいと充実の顔を見せられると、どんな場所でも楽しむことができるのは、才能だと感じる。そして、息子の姿を誇らしくも感じる。

北海道　当別町　普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

藤信子

この春は、京都の数カ所に桜を見る散歩に出かけることができた。3月の終わりに御所に行くと、通りかかった自転車に乗った人が「近衛の桜が咲きましたよ」と教えてくれた。この人から声を掛けられなかったら、中立売門から南に行こうとしていたので、見逃すところだった。4月になって佐野藤右衛門さんのしだれ桜を見に行った。次の休みは植物園の桜を見た後で、半木の道を歩いた、紅しだれにはまだ早いだろうと思ったけれど、もう五分咲きだった。次の休みの夕方は龍安寺に散歩に行って、桜の植えてある庭に行った、白い八重桜がきれいだった。今年は桜のシーズンは短かったけれど、散歩の途中いくつもの種類の桜を見ることができた春だった。

中村周平

私事で恐縮ですが、前回の短信で触れさせていただいていた入院から無事に退院しました。編集に関わっている方々には大変大変ご迷惑をおかけしました。本当に申し訳ありません。

ここまで高熱が続いたのは、受傷後初めての経験でした。入院後、数日間原因が分からなかったことも不安を掻き立てる要因にもなっていました。

退院後も、再発を恐れるあまり外出を控えることも多くなりました。ただ、「このまま家でビクビクしてたら何もできひん。今日元気でも明日元気いられるかわからへんにゃったら、今日できることは思いっきりやらなあかんのとちゃうか」

これまで当たり前だったことが当たり前でなくなることは、痛いほど自覚していたつもりだったのですが、どこかでそのことを見て見ぬふりする自分がいたと思います。

坂本九さんには申し訳ありませんが、「明日があるさ」は無いと思って日々頑張ろうと決心させられた出来事でした。

浅田英輔

3月末に異動があり、県庁の障害福祉課に在籍しております。通勤時間が20分から1時間20分ほどになり、朝出る時間も帰る時間も遅くなりました。新しいところで2ヶ月ほど経ちますが、なんとかなっている感じです。「自分のやっている仕事にケリがつく」というのは対人援助場面ではあまり多くないことだと思います。この感覚は嫌いじゃないです。でも、たまには面接したい！って思います。

中村正

2001 年から 3 年程、京都御所の西側にあるラジオ局、KBS 京都で「はりきりフライデー」という番組に通った。今いくよさんと今くるよさんがメインをつとめていた。朝の 9 時から 15 分程度、大学のそれぞれの専門家をゲストに招いておしゃべりをするというコーナーがあった。時事的な用語をやさしく解説するという企画だった。記録を見ると、当時の時代を反映して、ドメスティック・バイオレンス、虐待、ストーキング、接近禁止命令、ハラスメント、ジェンダー、ひきこもり等を取り上げていた。お二人は 3 時間の番組をしゃべりつづけていた。マイクの周囲には飲み物はもちろんおやつがたくさん置いてあった。ゲストも交えて本当に楽しそうに話をしていた。そして話をひきだすのがうまかった。息が合っていて流れるように会話がすすんだ。一方的に聴くだけではない。難しい話をリスナーのきもちになって問いかけてくれた。こんなに上手く質問されたのははじめてだった。大学での講義よりもやさしく解説できたように思う時間だった。コミュニケーションのプロだと思った。毎回の会話を録音したカセットテープが残っている。今となっては大切な声がつまっている。すでに退職したお世話になった先輩教員たちの訃報を聞くことも増えてきた。若い世代が現代史を知らないので社会の問題をきちんと伝えることも痛感している。世代をつなぐ役割が多いことに気づく 50 代半ばとなったなとつくづく思うこの頃である。

坊隆史

今回も健康ネタです。年々体つきが豊満になってきている。ついに職場上司からも「おなかの貫録がついてきたんじゃない？」との指摘があった。これまでも食生活は意識してきたはず。ついに禁断の運動療法に手を出さないといけないのか…。ガンバリマス。

松本健輔

http://www.hummingbird-cr.com

HummingBird　代表

春、大学入学して初めて話した友達とアメ村に買い物に行った。その時、友達が普通に1万円もするＴシャツを買っている姿を見て都会はすごいなと思った。あれから10数年。未だにＴシャツに一万円は払えない。いろいろと自分自身変わってきたと思っていたが、意外と価値観はかわらないんだと最近ふっと思った。

牛若孝治

あなたに「責任」なんかとってもらわなくてもいい！！！

よく、バス停でバスの時間を聞いたり、目的地の出入り口の場所を聞いたりしたときに、私に聞かれた相手が「分からない」と言ったとしよう。すると私は、「ああ、分かりました。じゃあ、他の誰かに聞いてみます」と言う。すると相手は何を思ったか、「いや、私の責任で探します」と。（おいおい。こんなところで「責任」なんか持ち出してきてどうするんだよ）と思いながら私は言う。「あなたに「責任」なんかとってもらわなくてもいいんですよ。あなたは「分からない」のだから、おとなしく引き下がっておいて下さい」と。

「あんた、そんな言い方ないやろ」と思う人がいるかもしれないが、なぜこんなときにわざわざ「責任」なんかとる必要があるのか。この国は、5 年後に、東京オリンピック・パラリンピックという国際的な祭典を開催しようとしている。「自分より弱い立場の人に何かしてあげなければ」という気持ちが高じて、つい「責任」という言葉を使ってしまうのだとしたら、それは大きな間違いである。この国が先進国であるなら、どんなに弱い立場の人から頼まれたときでも、自分ができなければ「できない」とはっきり言うことの方が、国際社会人として必要なことである。

袴田洋子

たぶん 20 年ぶりくらいに、◯◯をしました。楽しくもあり、しんどくもあり、こんな気持ち、久しぶりだなぁ～としみじみ思いました。そして、◯◯をするって、人にとって、やっぱり大事なのかなぁとも思いました。不器用なので、バランスが取れずに、苦労しましたが、よい経験になったと思います。継続するのかどうか、わからないのが、またいいのかもしれません。

団遊

ぼくが代表をつとめるアソブロック株式会社の事業内容は、「ウチソトを問わず関わるすべての人に成長する機会を提供すること」です。なので、一般的に言われる主力事業というものがなく、傍目から見ると「何でもやっている会社」に映っているようです。

その見た目をさらに加速させている事業が「アイドル事業」です。6 人のアイドルが所属し「ゆるめるモ！」という名前で活動しています。ところがその「ゆるめるモ！」が一躍人気を獲得してきました。先日は「赤坂 BLITZ」というライブ会場でワンマンライブを満席にし、年末には「Zepp TOKYO」でワンマンライブがあり、さらに秋には彼女たちが主演の映画が全国公開されます。

いよいよ「ゆるめるモ！」にアソブロックが乗っ取られそうな、今日この頃です。



乾明紀

前号の短信で歯痛のことを書きましたが、5 月中旬に再びその痛みが私を襲いました。数日我慢したものの、堪らず歯科医の元に駆け込み病状を訴え神経を抜いてくれと訴えました。しかし、いつものごとくドクターは様子見を主張します（笑）。そのときの診断でわかったことは、痛い歯側のあごの内側の筋肉がかなり硬直していたことでした。インターネットで調べると「天容」と呼ばれる箇所だと思うのですが、そこの筋肉を 2 分間解して寝ることと日中は「あいうべー体操」をするように言われてその日は家に帰りました。ドクターの言うように、天容を解すことで噛み合わせの位置が変わり、しばらくして痛みは大分緩和されました。神経を安易に抜こうとしないドクターの診断はさすがですね。次回の短信には歯痛ネタを書かないですむようにしたいものです。

大石仁美

この春から犬と一緒に暮らしています。2 か月半のラブラドール。名前はブライアン。テレビでブライアンというカメラマンの写真展をみて、勝手に名前を失敬しました。

人間でいうと 2 歳になったばかり。たまにボールで遊ぶけれど、どちらかというと、「抱っこ！」をせがむことが多いです。膝の上に座りに来て、上目づかいに媚を売るのです。「僕をかわいがってね。」と言っているのでしょうね。

お気に入りの遊びは、机の脚に渡してある高さ12センチの横木の下を潜り抜けること。ズズッーと床に手足を伸ばし、ベターッとモモンガが飛ぶ時のような姿勢で潜り抜けるのです。これがおもしろくてたまらないらしく、何度も何度も繰り返している様子は、何とも微笑ましい限りです。

人間の子どもとすることがよく似ているんですね。先日はティシュを引きずり出す遊びも覚えてしまいました。「しまった！やられたぁー！」気が付いたときはティシュの山。ほんまに人間の子と一緒です。

彼の部屋は、私の使わなくなったベッドの上に木枠を組み立ててサークルを置いたものです。これは年初めに木材を買い込み、時間のある時に少しずつ、ああでもない、こうでもないと経験もない、のこぎりの引き方もおぼつかない私の、笑っちゃうほどいい加減な、それでも一応寄せ木造りの労作なのです。お母さんが、赤ちゃんを迎える前にいろいろ準備するのと同じです。

高い位置にあるので、階段をつけ、自分で上がり降りが出来るようにしましたら、最初、こわがっていた彼も、2日ほどの練習で出来るようになりました。なんておりこうさんでしょう。はやくも親ばかの私。

同じ子育てでも、大きく違うところは、人間の子どもが泣いたときは、やさしく抱きしめて、声掛けすることが大切ですが、犬の場合は、鳴いているときは無視すること。犬である自覚を持たせることですから、ママの私は、ぶれないように可愛がって、「あなたのおかげで、健康に過ごせ、楽し

い日々だったわ。」と思い切りの笑顔で終末を迎えたいものと思っているのです。1日10回のおむつ替え(トイレシーツ替え)や、敷き毛布のお洗濯など手間はかかるけれど、大きくなってのお散歩も大変だろうけれど、そんなことは一緒に暮らす喜びに比べれば何のことはない。

今しかできないことの一つ。80歳になって犬のお世話は出来ないと思うから、ブライアン、ともに年を取るまでよろしくね！

村本邦子

春はゆっくりしていた。2年ほど前から年老いた両親の様子を見に、定期的に田舎に帰っているが、いつも慌ただしくとんぼ返りしてしまう。このGWはのんびり数日過ごしたが、案外近くに素敵な場所がたくさんあることを知る。古民家を使った工房やレストラン、カフェ。登り窯のお祭りを覗き、絵付けにも挑戦した。みなさん、スローでアートな生活を楽しんでおられる。都会であくせく働くのが無理になったら、田舎に戻るのもいいかなぁなんて思った。

しかし、少しのんびりしていると、突然、クリエイティブに頭が冴え始め、次々と面白いアイディアが浮かんできて、結局、忙しく走り回ることになるのがお決まりのパターン。今は後者である。ゆったりと器の大きい人になるには、まだしばらく時間がかかりそうだ。

國友万裕

2月で、51歳となりました。人生あと30年くらいかなあ、30年なんてすぐ過ぎるだろうなあとしみじみ思っています。この歳になると、さすがに老後のことが気にかかってきます。ぼくは、貯えがないので、働けるところまで働かなくてはとは思っていますが、大学の講師は70歳くらいまでだし、70過ぎた老人を雇ってくれるところがあるのかなあーと心配になります。それに家族がいないので、お一人様の老後になることはわかっています。

とりあえず、健康が一番なので、この頃、熱心にスポーツクラブでマッスル系のプログラムをやっています。おかげで、徐々に肩やお腹は筋肉がついてきて、シャワーを浴びたあと、鏡に自分の身体を映して、われながら、50代のわりにはいい身体だ、とほくそ笑んだりしています(笑)。

この頃、スポルノセクシャルという新語が生まれたとのことです。スポーツとポルノを合わせた言葉で、同性愛・異性愛を問わず、シェイプアップされた自分の身体を見ていれば、性欲が解消される男性とのことです。なるほどー。俺もひょっとするとこれに近いのかもしれません。女性の恋人も男性の恋人もいないけど、それなりに幸せだからです。

ぼくの日常は、仕事、映画、スイミング、マッスルトレーニング、外食、人との交際などで過ぎていきます。ぼくの Facebook を見ている友人からは、「國友さんの生活って優雅よねー」と言われます。母からは、「あなたは今が青春よね。友達もたくさんできて」と言われます。今年の誕生日はかつての教え子たちに祝ってもらいました。仕事が先生なので、若い学生たちに若さをもらえて幸せです。

最近、水島広子さんの『女子の人間関係』(サンクチュアリ出版)という本を読みました。女性度の高い女性は嫌われるという部分には共感します。恋人がいなかったら幸せではないと思い込んでいる女性は、ぼくは好きになれません。水島さんも言っているけど、独身者には自由があります。これ以上の幸せはないのです。

これからは胸をはって、「俺はスポルノセクシャル！」と宣言しましょうか(笑)。

北村真也

京都府教育委員会認定フリースクール
「アウラ学びの森 知誠館」代表。
(http://tiseikan.com)

また、新しい年度が始まりました。今年の 4 月に知誠館の取組みがNHKで放映される機会があって、全国からお問合せをいただくようになりました。ありがたいことです。

古川秀明

自分の中にある、ちょっとモヤモヤした気分の講演会の出来事を書きました。恨みごとを言いたいわけではないのですが、こうして文章にするとなぜかすっきりするので不思議です。会場に残られたみなさんは本当に熱心に聴いて下さったので、話してと聴きての波長を合わせるのも、講演の重要なスキルであることを学びました。
シンガーソングカウンセラー

西川友理

京都西山短期大学昨年 10 月の対人援助学会研究会でお話された梶原先生の「解決構築アプローチ」のセミナーが、5 月に神戸で開催され、受講してまいりました。

その際、一緒にワークを行った方が、本当に偶然に、このマガジンの、私の文章の読者さんでした。

ところがその方、Nさんは特に福祉職養成に関わっている方というわけではありませんでした。

「えっ、それなのに読んで下さってるんですか！嬉しい！…と言うか、ええと、どうして読んでらっしゃるんですか？」

と伺うと、

「職業に対するアイデンティティをしっかり考えようと思えるから。平たく言うと、仕事がんばろうって思えるんです」

と答えてくださいました。えぇぇ何それ、めっちゃ嬉しいんですけど(興奮して文章が乱れるほど)！

そう言われて気づいたのですが、確かにこの連載の文章を書く時、第一稿目はそのつもりなく書き始めていても、いつの間にやら「私の仕事って結局何やねん？」「つまりこの疑問の根底には何があるねん？」と自らに問い直しつつ、書いています。

書いて、推敲して、調べなおして、また書き直して…を重ねるうちに、だんだん自分の仕事の今が見えてきたり、最初は見えなかった問題が見えてきたり…。

「そうか、自分ではそのつもりがなかったけど、この5年の連載は、現場の事を書きながら、自分の福祉職養成人(変な言葉ですが)としてのアイデンティティを確認・補強してきた日々だったんだな。また、そういう部分を受け取って読んで下さる方がいらっしゃるんだな。」

と、大変感慨深い思いをしました。

N さん、その後、調子はいかがですか。ご機嫌で、順調にお過ごしですか。今号はあなたのおかげで書けました。ありがとうございます。

次回からも、がんばります。

坂口伊都

『家族の練習問題 6』をもうお読みになりましたか。様々な家族の姿が描かれ、感慨深いです。私の身近な家族で、強い個性を持っているのは実母です。子どもの頃は、この母親の存在が大き過ぎて手に余していたのですが、今は楽しみながらつきあえるようになっています。

この前も、母が心臓のバイパス手術をしなければならなくなったと大騒ぎがありました。母から電話が入り、検査と手術には家族の付き添いがいると言います。しかし、母はこちらの都合も聞かずに手術日を決めてきました。その日は、かなり難しいので日をずらせないかと言うと、「もう決まったから」「友達にきてもらうからいい」「私なんかどうなってもいいんだ」と言い出します。だんだんとイライラしてきて、こちらも思わず「誰も行かないなんて一言も言っていないでしょう。友達は家族じゃないの。少しぐらい努力をしなさい」と怒ってしまいました。そうしたら、その会話を傍らで聞いていた家族が全員たじろいでいます。これ以上電話口で母と話していられないと思い、夫に電話を代わってもらおうとしても電話を受け取ってくれません。その横から娘が電話を受け取り、「もしもし、おばあちゃん」と可愛い声で話しだしました。ナイス娘。ナイスフォローです。

母もこの電話で何かを感じたのでしょう。病院に電話をしてくれ、無事に手術日をずらすことができました。手術日当日、3時間ほど待たなければならないと覚悟を決めると、1 時間で戻ってきて、「手術ができなかった」と言うのです。えっ、どういうこと？と戸惑っていると、検査の結果、手術の必要がなかったということがわかりました。そんなことが起こるのだということにも驚きもしましたが、その後の母の軽快さへの変貌に笑ってしまいました。検査前までは、それなりに病人風情でしたが、もう大丈夫となってからは逞しさの塊で、看護師さんに冗談を言っています。改めて、母の丈夫さに脱帽です(笑)

河岸由里子

臨床心理士　北海道かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

愛犬が亡くなって間もなく1年になる。16年間、我が家の一員として、子どもたちの心の拠り所になってくれていた。子どもたちが大きくなって家から離れても、帰省する第一の理由が犬に会うことであった。そして、子どもたちが会いに来ると、30kgもある大きな体全体で、喜びを表現していた。一方私は16年間の殆どの日々を散歩させてもらった。一体全部でどのくらい歩いたのだろう？雨の日も雪の日も風の日も・・・。この犬のお蔭で大きな怪我もしたが、今思えばたくさん歩いた分健康をもらってもいた。

犬の遺骸は動物専門の葬儀所で火葬にし、骨壺に入れたまま家に置いていた。お墓をどうしようか悩んでいたが、つい先日庭の片隅、かつて犬小屋があったすぐそばに埋め、大きめの石を置き、周りに花を植えた。骨壺の中の骨は真っ白で小さく、もろかった。

子どもたちには出来たお墓の写真を撮ってメールで送った。今までにモルモットやハムスター、金魚などの命も見送ってきたが、16年もの長い間の関係はずっと深い。家族がこの犬にどれだけ助けられてきたか、様々な思い出がめぐる。生き物である以上いつかは別れの時が来る。分かっていても悲しい。ただただ感謝である。合掌

団士郎

バドガオン（バクタプル） ネパール

大地震が起きて被害甚大な様がTVニュースで流れる。最初は情報、そしてカトマンズ（ネパール）の映像。二、三日してバドガオンのダルバール広場の崩れ落ちる建物の映像が溢れた。ああ、あの寺院群が倒壊したのだ。やっぱりそうか・・・と思った。



2000 年の夏、カトマンズに行こうなんて思っていなかった。ネパールのことなど、ろくに知らなかった。滅多にない一人旅をすることになったとき、HISの窓口担当者と話している内に決めたものだ。

バンコクで乗り継ぎ一泊の後、カトマンズ・トリブバン国際空港に着く。着陸のやっかいな空港として、世界でも有名らしいが、私は操縦しないから分からない。ヒマラヤ山脈をかすめて降りる感じだ。（ただの感じだけど）

一週間、無目的にカトマンズに滞在した。ポカラとか、ヒマラヤトレッキングのベースの村など、現地ガイドのお薦めもあったが、行かなかった。カトマンズとその周辺の街を散策してcafeに居た。カトマンズから 15 キロ、古都バドガオンには二度出かけた。気に入ったcafeは、ダルバール広場の真ん中にあった。

なにか由緒ある建造物だろうと思われる古い三階建て？の二階に上がる。狭いところだがお客も少なく、窓辺に陣取って広場を眺めはじめた。

歩き回るのにも疲れていたのだが、長い間、広場を見ていた。何か祝い事があるのだろう。老若沢山の女性が赤い布の衣装でおしゃれして、何処かに向かってゆく。独特の風貌によく似合っていて魅力的だ。

結局、3 時間近く、ネパール人女性が次々に晴れ着で通るのを見続けていた。長時間の女性観察など、後にも先にもこれっきりだ。今のようにスマホを持ってれば、パチパチ撮ったに違いない。

2015 年、その町並みが倒壊する映像をみた。又いつか、行ってみたいと思っていた理由が変化し始めた。

岡崎正明

銀行や携帯ショップなどでもらう整理番号。病院やお役所でも一部で取り入れるところが出てきて、利用範囲が広がりつつある印象である。

効率化とかいろいろ理由はあろうが、その中のひとつに「プライバシーに配慮せよ」というのがあるようだ。待合で名前を呼ばれると、病気や様々な事情を知られる心配があるということだろう。本文でも書いたので読んでもらいたいが（ぜひ！）、

個人情報の保護というのは、最近よく聞くキーワードである。

もちろん特定の人に知られたくない病気や制度利用に対しての配慮は、あっていいと思う。しかしなんでもかんでも「番号にしろ」というのもいささか現実的でないし、「囚人じゃないんだから」という反対意見も出てきそうだ。

先日、とあることで家族そろってお祓いを受けることになった。結構大きな神社で、受付で名前や年齢・住所を書き、玉串料を納めて待合室へ。ほかにも何組かお客さんがおり、家族連れや会社関係らしき人など様々。10分ほどでアナウンスがあり、私たち家族も含めて待合室にいた全員が奥の祈祷所に通された。50人はゆうに入れそうな大きな部屋の正面に鏡が置かれ、うやうやしく神様が祀られている。

安産祈願、商売繁盛、病気平癒。それぞれ切実な願いを抱えて来ている。祈祷所の独特の雰囲気もあり、みな神妙な表情で頭を垂れ、祈祷の声を聞いていた。

「ナンタラカンタラノ・・」

と独特の調子で神官が祈りの言葉を捧げていく。その途中。

「岡崎〇〇。三十〇歳。〇〇〇に住まいし〜・・」

おいおい。個人情報ダダ漏れじゃん。なんとなくどのお客さんのことか雰囲気で分かるし…。

だがもちろん祈祷中もその後も、個人情報を読み上げられたことに異を唱える輩はいなかった。当然だろう。神様の前で「整理番号135番のぉ〜」などという誤魔化しは許されない。そもそも願いが届きそうにない。

プライバシー保護が通じない世界もあるのだと感じ、同時に思い出したのは故・中島らも氏が大阪の街で見かけたという、ターバンを巻いてノーヘルでバイクに乗るインド人の話だった。

何事にも適用外はあるということだろう。

鶴谷圭一

今回の原稿を書いている最中に園児を連れて園外保育に出かけていった。

近くの公園までバスで行って広場を散策して、お弁当を食べ、食後に 3 つしかない固定遊具(20 メートルほどしかない小さなローラー滑り台、ジャングルジム、緩やかでスリルのないターザンロープ)で遊んだ。

一番人気はローラー滑り台、子どもたちは何往復しただろう！何回も何回も滑っては駆け戻ってくる。年長組と年少組のペアで行ったのだが、年少児はほぼ 100%走って戻ってくる。年長は時々歩く。楽しいことがあれば子どもたちは驚くほど動いて遊ぶのを目の当たりにして、今回のテーマ「楽しく運動能力アップ」を思うとき、環境があれば、大人の指導などなくても運動能力はぐんぐん伸びるのだなあと、改めて思う。

原町幼稚園ホームページ

http://www.haramachi-ki.jp

メール　osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター　haramachikinder

千葉晃央

◆「障害者雇用という経験から」対人援助学会第15回(通算39回) が 2015 年 5 月 22 日(金)にキャンパスプラザ京都で行われました。 ゲストスピーカーの中條與子さんは視覚と聴覚にハンディをお持ちで、これまで「一般雇用」と「障害者雇用」も共に経験され、そのなかで感じていることを話して下さいました。障害を伝えての就労、伝えずに就労、途中で伝えた就労などいろんな経緯で働きながら、体験されたエピソードの数々。そのなかで困ったときに相談にのってもらった労働機関の対応や、一般にピアな関係と整理される同じ障害者雇用で働く仲間とのお話など、たくさん学ぶべきことがありました。中條さんありがとうございました！◆休日に釣り人として過ごしました。隣の釣り人に話しかけ、逆に「釣れますか？」と釣り人として話しかけられました。人生初の出来事でした。川に入って釣る息子に向かって、蛇が水面を泳いできた事件もあり(笑)蛇が驚いていました。結構女性の釣り人も多くて驚きました。小鮎は本当においしかった。アユの背越しに一匹だけしました。塩焼きも最高〜。釣りは今まで本当に縁がなかったなぁ。やっていないことをするのはいいですね。連れて行ってくださった職場の大先輩に感謝です。

大川聡子

「10 代の母という生き方」を連載しています。内容は 2012 年に立命館大学大学院社会学研究科に提出した博士論文を一部改編・修正したものです。順当に行けば、次号は若年出産を選択した母親達の径路を TEM で記述していくことになるのですが、私が書くのもおこがましいのと、この部分はあちこちで発表したり、投稿して査読者からご指摘を受けたりで、論文中で最も進化したと言えば聞こえがいいですが、全く原形をとどめていないので、執筆に時間がかかりそうだなと思っています(〆切破り予告ではありませんよ〜)。

大谷多加志

4 月から大学院に入学し、学生と仕事の両立を図る日々になりました。大学で研究をすることが仕事を推し進め、仕事を進めることが研究へとつながるようにと考えていましたが、その循環が思惑通りに生まれつつあるように思います。ただ卒業まで3年。先は長いので、うまく循環を維持できるように、時間や気力体力の使い方を工夫していくことがこれからの課題です。

久しぶりに大学に戻って、自分が在学していた頃以上に、大学院に進学するという選択が一般化していることに気づきました。突き詰めたいと思うものがあること、探究心を持つことはもちろん尊いことでありますが、オーバードクター、ポスドク問題も聞こえてくる現代です。一回り年下の若者たちの前途を心配に思う気持ちも湧き上がってきます。『人の心配より、じゃあお前はどうなんだ』という声が聞こえてきそうですが、まったくその通りです。まずは当初の目的である、K 式の改訂に向けての実質的な課題を検討するために、1つずつ準備をしていければと思います。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

今回で「お寺の社会性」は最終回を迎えました。ありがとうございます。できれば次回から異なるタイトルで連載のご縁をいただければ、嬉しいものです。また、よろしくお願いします。

川﨑二三彦

リフォーム完了余話

昨年夏、我が家のリフォーム着手に伴い一時的に引っ越してから約 10 か月。どうやら工事も完成して再入居し、深謀遠慮、細部拘泥、苦心惨憺した書斎にこもる日々が続いている。正真正銘アサメラの一枚板を大枚はたいて二枚購入し、天板を自慢のL字型に収めた机は完璧で、2 か所の出窓にカラーレーザー複合機、テレビ、電話等々を配置、パソコンも買い換え、ついには、ここを「児童福祉執務室 Guan」と名付けることに、しようかな、などと悦に入っていたら、突然ごく近くで不機嫌そうな声がする。



「あなた、押入に 10 箱も段ボールがあるじゃない。これ、一体いつになったら片付けてくれるの。私は困ってますからね！」

おっと、書き忘れていたけれど、リフォーム完成と軌を一にして、私の勤務状況は大きく変化してしまったのである。というのも、8 年間の単身赴任生活が終焉し、4 月からは週 2 日、1 泊 2 日で京都－横浜を往復するようになったのだ。だとしたら、1 週間のうちの残り 5 日は自宅書斎勤務。ならばやはり「執務室」と呼ぶほかないではないか。もちろん私は室長兼秘書兼庶務係及び部屋掃除担当職員である。



ただし、この執務室。一見すると大変環境がよいのだが、仕事をするには大変困った問題が発生した。というのも、たった 6 畳のスペースを一歩出ると、いや、一歩も出なくとも、常に某婦人の絶えざる干渉が繰り返されるからである。

なおかつ悪いことに、6 畳執務室に都合 4 本の書棚を置いたにもかかわらず、それらはあっという間に埋まってしまい、残った本は、段ボールに詰め込まれたまま、人目を避けてこっそり押入の奥深くしまい込まれたという次第。某婦人に発見されるのに時間がかかろうはずもなく、お叱りを受け続ける日々が続くのであった。

さいわい、ついこの間結婚したばかりの娘夫婦が、「温泉旅館を予約したから出かけてみたら」などと殊勝なことを言ってきたので、とりあえずは押入問答から離れて休戦、今宵は、淡路島・洲本温泉に



夫婦仲良く逗留しながら、身体を温め、近況をしたためているのでありました。

（2015/05/31 記）

荒木晃子

これがアップされる頃には、特定非営利法人卵子提供登録支援団体（NPO法人 OD-NET）の理事及びマッチング委員長を退任している。5月の年次総会で、既に辞任の意思表明をしたのだが、任期満了退任の方が事務手続きも簡単なのではないか、とのアドバイスを尊重してのことだ。振り返れば、就任依頼を受けてから、はや約2年半が過ぎた。ボランティア活動の一環だったので、多忙だが対価を伴う業務でもなく、義理があるわけでも、自ら望んで就任した訳でもない。反対に、相当悩み、様々な方面で知恵や力を貸していただいている諸先生方に相談したうえでの決断だった。就任後は、社会的責任と所属することへのリスクだけは高く、随分と大きな労力と時間を費やしたように思う。当初、ある人は、「割の合わない活動だね」、別の知人からは、「現時点で、卵子提供の法整備はまだ無理だよ」、さらに「やめたほうがいいよ」とアドバイスをくれた友人の言葉を思い出す。

丁度その時期、それまで自宅で介護していた母の症状が進行し、入院先から帰宅困難な状況にあった。病名は、進行性核上性麻痺。パーキンソン病の一種で、症状はALSの身体症状に類似した進行性の脳性麻痺だ。その6年ほど前に父を亡くし、一人娘だった私は、様々な福祉サービスの提供を受けながら、ひとりで母の介護にあたっていた。「一分一秒でも長く母のそばに付き添っていたい」そんな思いを抱きつつ、一方では、「どんな時でも自分の人生を思う存分生き抜いていきたい」とも考えていて、後者は両親の願いでもあった。

選択に迷った時、いつも父と母の意思を確認しながら生きてきた。ふたりとも、決して答えをくれるわけではないし、指示を出すこともなかった。しかし、父と話しているうちに気持ちの整理がつき、母と話した後には、なぜか決心がつくのが常だった。時に叱咤し、時に激励しながらも、父と母はいつも私の人生を守り、導いてくれていた日々が懐かしい。

一年半ほど前のクリスマス直前、母は天国へと旅立った。最後まで、静かで美しい、大地のような存在だった。いま、大きな役目を果たした現在の私に、天国にいる父と母の言葉がきこえる。

「背負っている大きな荷物は降ろせばいい。自由になった両手を広げ、大きく背伸びして、一歩間に踏み出してみるといい。いつも見守っているから、安心して先に進めばいい。」

サトウタツヤ

このままで行くとまた原稿を落としてしまうと思い、とにかく何かを書いてみた。もし今回原稿を落とすとすると、実に半年間何も載らないことになる。そうなると、このまま自然消滅。。。。。ところが、前回の短信をみてびっくり。書く内容の予告までしていたのであった。しかし、今から前回予告を埋めることはできない。そうなると、このまま自然消滅。。。。。でも前回予告と違っている。でも今から書くことはできない。。。。以下略。。。。。といわけで、今回どうにか執筆者に残ることができました。。。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

21：　作 業 着

千葉　晃央

援助者×利用者@SNS

私の作業着姿を SNS にアップした。そうするとある方がコメントをくださった。「涼しそうでいいですね！」という旨だった。私が着ていたのは作業服の夏服で、生地も薄く比較的涼しい。そして、そのコメントを下さった方が働く事業所は最近、作業時間内の作業服着用を導入したばかりと聞いていた。そのため、夏服と冬服の使い分けまでは手が回っていないようだった。確かに利用者全員分の作業服を夏用、冬用二組準備するのはコスト的にも大変である。そんな様子も援助者と被援助者の垣根を超えて、SNS というところで聞こえて来る時代になっている。

真夏日でも長袖・長ズボン作業服

5 月になると私は半袖で過ごすことも多くなる。関西では 5 月から 10 月までは半袖が中心のワードローブになる。そのため、作業服もほぼ半年ごとに夏服と冬服とで衣替えを行っている。冬服は生地もしっかりとしていて、とても丈夫である。そして、冬の時期の私の最近の好みは作業服のズボンを少し余裕があるサイズにして、そのズボンの下にスウェットもはいて、防寒することである。冬の作業場はどうしても寒い。作業する環境は基本的に工場のように空間的に余裕がある。仕上がったものを出荷に備えて外に出す、ほこりや臭気の問題で換気が必要である等外気が入り込むという状況は常についてくる。そのため、アンダーウェアやカイロ等の個人での調節は欠かせない。これは利用者の皆さんも同様である。

「作業着におろす」

とはいえ、こうして作業服を採用している福祉的就労の現場は一部だろう。ここで話している作業服は、いわゆるブルーのよく工場の方が着用している作業服である。このようなユニフォームである作業服を採用していない事業所では、通勤着と作業着を区別をしていることが多い。作業時に着用する、動きやすい、汚れてもある程度大丈夫な服装をその着用目的から「作業着」といっている。(職員は「この服少し傷んできたから、作業着におろそう」というようなポジションにしていることが多い。) そのため「作業着」は人によってまちまちで統一のユニフォームではない。朝登園する時は通勤着を着用し、カバンのなかには作業の時に着る服をもってくる。そして、事業所に着くと、更衣室にいき、自分のロッカーに荷物を入れる。そこで作業着、厳密にいうと作業時に着用する服に着替えている。

「着替え」という仕掛け

私の身近なところでは職員と利用者の更衣室を共用している。つまり、着替えを共にする「裸の付き合い」的要素も伴っているともいえる。一泊で事業所全体が出かける行事などがあるとさらにその度合いは増す。それゆえ、様々なこともわかる。一人暮らしをしている方もいるので、衛生面での自宅での下着の取り換えができているのか？機能面での下着の傷みなどで買い替えの必要がないのか？そして、体の健康面では、腫れ、むくみ、ケガ、傷がないか？そんなことも見えてくる。ケースによっては、ご本人が 1 人で入浴等ができていると、かえって周りの人が気づかない。いつもの状態ではないことを、他者に伝えるというのは健常者と比べて生起しにくい行動である。そして、そういった日常の着替えの場面でみられた体の状況から、虐待？というようなことも確認したことがなかったわけではない。ズボンを脱いでカサブタがあるのがわかって、実は通園途上で転倒していたことがわかって、病院へいくという類のこともあった。こうした着替え場面が就労の場にあることによって導かれるものもある。

作業中、作業服の胸元に見えた（作業服の下に着ている）シャツとお昼の食事場面で着ているシャツが同じで、着替えができていないので声をかけることもある。作業中は胸元の V ゾーンから出ているシャツにも汚れは結構付着する。そのため、通勤着、



著者近影　（撮影：成田舞）

お昼の食事の時に着るものとは着替えるように働きかけている。

ベテランはズボンの裾が短い？！

話しを戻して、作業服はユニフォーム屋さんに作ってもらっている。ウエストのサイズ、股下を採寸して、そして上着の胸元に名字のネームを刺繍して数日で届けられるというのが私のよくお世話になったお店とのやり取りである。毎日使うので洗濯も頻繁にされ、また翌日使うので乾燥機も用いる。乾燥機を用いるとやはり「縮む」。そのため、ユニフォーム屋さんはそれを見越して、大きめのものを準備してくれる。それでも数年着ていると縮んでいく。裾はじわじわと短くなる。そして、人間の体のサイズの方は加齢とともに体重が増える人も多い。そしてなおかつ服は「縮む」。生地の傷みも日々発生するので、ある程度着ていると今の体のサイズにあわせて作業服の買い替えが必要になる。私のよく知るところは洗濯を事業所でしている。そのため洗濯機と乾燥機とあわせて約 20 台日々稼働している。毎日使うので電気製品の洗濯機器の傷みも家庭とは比べ物にならないほどはやい。フィルターの汚れもすごい。毎日、掃除機で利用者さんが掃除をしてくれている。

洗濯が終わるとその方のロッカーの前に作業服を配る。その日着る作業着、洗濯している作業着と 2 着を着まわす。(夏用も冬用も合わせると計 4 着。) 洗濯、返却がきちんとできていないと自分の作業服がない、仕事ができない、どうしよう！となる（もちろん、予備も準備している)。人数も多いので、たまに他の方の作業服と紛れてしまったり洗濯機に取り残されていたりがほとんどである。

～もすなる針仕事といふものを…

ある日、扉を開けると男性職員ばかりが 3 名、作業着のボタン付けをしていた。全員が利用者さんの作業着のとれたボタンをつけていた。「ここにきて、ボタンのつけ方を先輩に習いました。家ではしたことがありませんでした。家庭科の授業で習ったかな…」と一人の職員が話す。そうした補修・修繕も利用者ご自身、もしくは職員がしている。そのため、事業所には裁縫道具と予備のボタンの準備が必須である。

汚れも傷みも勲章

新しい作業服はのりがきいてパリパリである。使えば使うほどにあちこちがクタクタにはなるが、それはそれで「勲章」のようにも思える。なかには「汚れているのがかっこいい」というか「仕事している感」を味わいたくて（かな？)、洗うのを嫌がる利用者の方もいる。頑張っている証拠を実感できるのがいいのだろうなぁと感じている。それも一つの広い意味での着こなしなのかもしれません（ダメージ加工的？)。衛生上の問題があるので定期的にその方のロッカーの中にある作業服を洗濯に出して洗うようにと私たち職員が関わるのもよくある場面である。



（撮影：橋本総子）

また、安全上、作業着の袖のボタンを留めていなくて、ヒラヒラさせながら作業をしていたり、上着の裾やその下の服がヒラヒラと出ていたりするのは危険である。機械に巻き込まれたり、引っかかってしまったりして大きな事故につながりかねない。

気持ちを作る服

私がいるところでは職員のジャージ着用は禁止です。これはジャージの動きやすい服装というのが誰のための機能か？というところです。つまりそれは着用している職員のための機能ではないかというところである。家でジャージを着用している人も世の中にはいるが、ある景色の中にいる人がジャージばかりということは運動をする場面でしか見られない。知的障害者の就労は生活場面なので、生活場面の服装、もちろんケアに必要な動きを制限しないものを着ている。ジーンズや T シャツで働くことも多い。

作業服を着ることを支援場面で意図的に採用しているところもある。作業場面とそれ以外の場面とで気持ちを切り替えることを目的にし、気持ちの張りが出ることを期待している。仕事に意識を向けることができる、お金をもらっている時間であるという意識を具体化できるあたりを狙っている。同じ制服を着ることでの所属意識とここにいる全員で力をあわせて一体となって頑張っていることも共有できるし、共有してほしいという思いがある。

みんなが作業服を着るとますます職員なのか利用者なのかはわからなくなる。そして、そのスタイルで共に汗を流して働く。その共有体験が支援のベースにある信頼関係を作っている。

作業服も、人も大切に

サイズが合わなくなった作業服はネーム刺繍を外し、他の方が使えるよう予備用として保管する。リサイクルである。他にも、別の事業所で不要になって、まだ使える作業服もいただいている。事務机、ロッカー、靴箱なども多くのリサイクル品を私の現場では使っている。資源を生かし、大切に使う。この姿勢はわれわれが持つ福祉観とも共通している。

BACK ISSUES

食べる 20　2015 年 4 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

(9)日常生活

中村正

１． 日常生活への関心

暴力をふるう加害者たちとの面談やグループワークを続けている。子ども虐待、高齢者虐待、夫婦間暴力、体罰をくわえる教師、性犯罪者等へと対象者は拡大する。その内容も多様で、暴力にいたるまでの葛藤があるし、同じ暴力でもそれぞれ異なる背景がある。

また、家庭内暴力という類型化だけではとらえきれない家族問題の多重さもある。そういう人たちを対象にした面談のあり方について悩む。特段の万能薬があるわけではなく、ひたすらひとつひとつの事例に対応しながら、最適だと思えるケース運びについてみんなで知恵をだしている。もちろん加害者臨床や更生のセオリーはあるが、それを当人たちに当てはめるようなことだけはしたくないと思い実践している。

加害者の更生にむけて、暴力を肯定する認知の「歪み」を修正する等として体系化され、主流となった認知行動療法があり、それはまとまったアプローチとして取り組みやすい手法であると感じつつも、とはいえ暴力を問題対処の仕方として身につけ長く生きてきた人たちにプログラムだけで何かがうまくいくわけでもないことも脱落率や参加感覚の悪さをみて思う。

さらに各地で起こる紛争や戦争をみると、社会もまた暴力を否定できていないことが目につき、マクロな社会環境がミクロな対人係に与える影響もあり、脱暴力は個人から社会にまで広がる課題であることを痛感する日々である。

そうすると、暴力をふるう人との面談やグループワークを意味づけるための、もう少し大きな、彼の生きる日常生活に着眼して脱暴力を働きかける対象を意識することになる。

ここでいう日常生活は独特な意味をもつことばである。それは、その人が暴力や虐待を含んで組織している「日常生活の論理」を表現することばである。具体的には、意味づけ、解釈の枠、行動の仕方等の組織された日常環境のことである。彼にとって暴力は非日常ではなく、日常性を帯びていると考える。

暴力をふるう人の日常生活の論理、そこには、①暴力を肯定する男性性のジェンダー作用、②問題解決法としての暴力（体罰や躾等）の選択、③暴力を意味づける（言い訳する）ことばと動機の構成、④被害者批判や非難者非難という中和化作業という文脈構成がある。

暴力をふるう人の日常生活はどのように組織されているのだろうか。どんな臨床技法や理論を用いるにしても働きかける対象者の特性を明確にすることは必須である。そこに迫るひとつの手法としてエスノメソドロジーというアプローチが応用できるので、それを紹介しておきたい。

社会学には独自な仕方で日常生活をとらえる方法がいくつかある。人間を理解するということや社会的行為とは何かを深く掘り下げ、人びとの日常生活における関心と行為の動機について詳細に研究するアルフレッド・シュッツの理解社会学・現象学的社会学がある。

また、アービング・ゴフマンは人びとの相互行為を多様な場面設定において研究している。精神病院での対人関係、対面的相互作用、

Ritsumeikan University
Nakamura Tadashi

スティグマのある人びととの相互作用等である。後の号で取り上げるがゴフマンは「フレーム」分析を提案している。行動分析でもなく精神分析でもない関係性と相互作用の分析単位のことである。

そのなかでもここで扱うのは人びとのやり方や実践の過程を記述するエスノメソドロジーである。前半ではエスノメソドロジーについて紹介し、後半ではこうした日常生活を把握することが対人援助や臨床実践にどう関係するのかについて検討したい。

２． 微細な相互作用を可視化する −行為動詞で記述する日常生活

エスノメソドロジーはアメリカの社会学者、ハロルド・ガーフィンケルが提唱した方法論である。これは社会の構成員がどのような方法で日々の実践を遂行し、秩序を維持しているのかについて記述するアプローチである。「エスノethno」は民族や人種という意味ではなく人びと（構成員）という意味である。「メソッドmethod」は、やり方や方法、それに論理や学を意味する「-logy」をつけて構成されている。ある社会や集団の成員が日々の生活実践をおこなうために用いる常識的知識に注目してそれを記述する。

ガーフィンケルは、たとえばアメリカの陪審員の審議経過を詳細に分析し、そこで用いられている市民の常識的知識がどのように事案を整序しているのかについての規則を見いだしている。法律的知識が動員されて何らかの評決にいたるというよりも、常識的知識を総動員し、「事実をみきわめる、例示する、論理的な関係をつける、自らの倫理や常識に照らして事案を整理する、他の人と論議をするための根拠をクリアにする」等の手続きにしたがって、陪審員という集団に固有の知識が使われている過程を研究している。

エスノメソドロジーは、説明する、記述する、会話する、理解する、記録する、定義する等の「行為動詞」をもとにして人びとの実践を把握する。実践の際に用いられている規則や知識の適応のさせ方、会話の仕方、語彙、他者との関係の取り方等が研究対象となる。

たとえば、「パッシングpassing（通過作業）」という実践をとりあげている。この行為動詞で記述されているのは、性別違和感（性同一性障害）をもつアグネスの行動である。インタビュー調査をもとにして記述されている。女性にみえるように自然なふる舞いを行い、女性になりたいと願うアグネスの日常のジェンダー表現の実践作業を記述している。社会が期待する普通の女性を表現するためにアグネスの用いる「取り繕いワーク」である。たとえば身体検査のとき、女性の友人と海にでかけるとき、事実の露見や破綻に備えて実践をしている様が記述される。社会の構成員がもつ性別に相応しい常識的知識を基準にして実践している様子が描かれる。

また、「問題の定式化にかかわる実践」がある。エスノメソドロジストの水川は沢木耕太郎の「おばあさんが死んだ」というルポを例示して説明している（『人の砂漠』新潮文庫、1980年）。ある死を自殺であると定義する際の「手続き」が扱われている。沢木のルポに登場する事例は「栄養失調と老衰のため悲しく死んだ」と報道されたケースである。そのおばあさんの死亡を確認した医師は「心不全（高度栄養失調兼脱水症）」と死因を記した。しかし担当のケースワーカーは異なる印象をもった。「他人の世話にはならない」という言葉を聞いていたので、「自損行為」ではないかと思ったという。沢木は「割り切れなさ」をそのケースワーカーの言葉に感じたという。エスノメソドロジー風にいえば「状況の定義」問題となる。「自然な死としての病死と自殺的な死」の線引きをおこない、それに意味をつけていく作業であるとエスノメソドロジーは考える。

常識的知識はこうした概念同士のつながりをつけることによってスムーズな日常生活の流れをつくるように作用する。「老衰−病死−孤独死」という知識の連鎖と、「抵抗−不信−自損」という知識の連鎖は全く異なる文脈をつくる。ともに成り立つが、医師の判断を起点に前後の物語が編まれていく。死亡診断書は威力をもち、後者の連鎖は退けられていく。亡くなった方の生活をみていたケースワーカーの直感は、リアルだけども弱い。ナラティ

ブセラピーのようにいえばドミナントな（主流となっている）手続きとして病死の確認がすすみ、前者の連鎖が実践されていくことになる（『エスノメソドロジー–人びとの実践から学ぶ』新曜社、前田泰樹・水川善文・岡田光弘編、2007年）。

定式化するという行為は日常生活の論理にそくして納得のいくものとして人びとの「腑に落ちていく」知識を構成する実践である。他にも、孤独死だけではなく、過労自殺、いじめやいじめ自殺、各種のハラスメント等にかかわりこの「定式化問題」（状況の定義）が存在している。何が真相であったのかをめぐり日常生活についてのものの見方が紛争となる。それがどのような文脈で、どんな概念の連鎖として語られるかという「形式」において内容が変化することを記述するのがエスノメソドロジーである。これを「インデキシカリティ（文脈依存性）」とエスノメソドロジーはまとめる。

エスノメソドロジーは、「見られているが気づかれていないseen-but-unnoticed」ことを把握する。たとえば、暴力をふるい、虐待をくわえる人の日常生活がある。彼らのことをジャスティス・クライアントjustice clientという。規範形成に課題をもつ人たちという意味である。彼らが自らにとっての「自然なかたち」で暴力や虐待に頼って生きている様子やそれらを正当化している姿を描く。暴力をとおして満たしている欲求があり、しかも暴力の他に用いる手段がなく、身近な他者を選択する。暴力を用いることが正当化されるように意味付けをし、その瞬間の状況を解釈し、暴力をふるう理由を動機として構成し、その暴力をやむを得ないものとして行使するという経過がみてとれる。

その過程を記述することで、暴力を含みこんで日常生活を組織している様子が見えてくる。暴力や虐待が生成する一連の流れがあり、その都度の出来事が連続体としてあり、暴力をふるう人の日常生活として組織されている。しつけが昂じて虐待へといたると虐待者はいう。ではそこで想定される「しつけなければならない事態」とは何か、それはどう認識、認知されているのか、暴力を用いてまで修正しなければならないことなのか、そこで暴力を用いることで満たしている欲求は何か等、行為者の文脈依存的な行動としての「暴力の実践」を読み解く。

しかし暴力をとおして満たしているその欲求はあくまでも加害者の側の欲求であり、虐待をくわえられる側に内在する理由があるわけではない。暴力は、時に正当防衛や抵抗として、弱者の側から行使されることもあり、やむを得ないこととして認知される。しかし親密な関係性でおこる暴力の加害は、その関係においてすでに力を持つ強い側がふるう暴力である。ただ、思春期青年期暴力は、時として子どもという立場の弱い者が振るうものであり、それは親という責任ある立場が反抗しにくいという関係を利用して成り立つ。単に立場の権力性ではないこともある。

では暴力で満たす欲求とは何なのか。暴力による自己実現、コントロール感や達成感を満たすこと、暴力をふるう相手を矯正することで正義の感覚を得ること等だろう。これらが暴力を正当化する文脈をかたちづくる。

こうした日常生活の実践を把握することは援助、支援、臨床にいかにかかわるのか。対人援助学にとってのエスノメソドロジーの意義をいくつか関連する話題からみてみたい。

３．手紙を書く行為の意味–「被害者への手紙」と「漂流郵便局」

発話行為は（必要な時に発しないことも含めて）、エスノメソドロジーの研究対象である。ことばは日常生活においては何らかの概念を表現するというよりも、その発話（発話しないこと、他者の発話を遮ることも含めて）をとおして何かを実践している。行為に注目するので、たとえば沈黙は「発話の欠如」ではなく、能動的な行為となる例がある。加害にも被害にも沈黙はつきものだし、いじめ、ハラスメント、虐待では無視するという行為として、より攻撃性を増し、積極的な役割を沈黙という行為が果たすことになる。

暴力をふるう人たちは、グループワークでも個人面談でも、十分にはことばがでない人たちである。暴力をふるうその場や状況においてことばは後景に退いている。ことばは暴力行為としての暴言にしかならない。いずれにしても本来の対話を促進させるコミュニケーションとしては機能していない。ことばの沈黙といえる。

ことばが沈黙すると身体が語りはじめる。暴力は彼らの思いや感情を伝える「コミュニケーション」として観念されている。多様な形態のボディ・ランゲージがあり、暴力はそのひとつの形態である。しぐさ、奇声を発する、衣装にこだわる、ピアスやボディ・ペインティング、マスクをつける、サングラスをかける等、実に多様なボディ・ランゲージがある。暴力もこうした身体のことばであることをエスノメソドロジーは描く。

また、他者に沈黙を強いることは暴力のひとつである。これをサイレンシングsilencingという。自ら沈黙することをセルフ・サイレンシングself-silencingという。とくに男性の寡黙さはその作用の典型である。相談をしない、援助を求めないあるいは拒否する、弱さを認めにくいという男性性の特徴を構成するもとになる「男性的な日常生活の実践」を根拠づけるのがこの沈黙である。

また、感情作用として、男性性ともかかわり感情を表現することばがみつからない事態に陥り、行き場を失った感情は症状として身体と精神に影響することがある。失感情症という名づけもあるので、ことばがないと感情も行き場を失う。感情とことばが結びつかない事態として沈黙や暴力があるとすると、その秘めた破壊力が理解できる。

さらに、暴力をふるう人は他罰性が強い。そうした他者観をもって日常生活を営んでいる。暴力や虐待を正当化する際に罰すべき他者をつくりだすのだ。その他者を矯正するための正義の暴力だと認識している。とくに親子、夫婦、恋人、親友、師弟関係という親密な関係性においてこそ暴力は意味があると考えている。それこそが感情的な絆になると加害者は考えている（中村正「殴る男」に書いたことである。所収されているのは市野川容孝・鷲田清一他編『身体のレッスン』岩波書店、2007 年）。

こうした他者の典型は被害者である。しかし、親密な関係性における暴力の矛先は他者という認識が乏しく、暴力をふるってもよい相手として認識している。他者の他者性は低い。自らの暴力による被害全体の理解や被害者への想像力は欠如する。逆に、罪の意識が構成されず、忘却、無視、回避、逃避する傾向がある。そうなると被害者への謝罪も困難となり、被害への直面化もしにくい。

加害者臨床はこの点を扱うことになる。ことばの沈黙をなくし、他者として認識するためのコミュニケーションへと回路を開く。この点を意識して、刑務所の性犯罪者再犯防止プログラムでは、「届かない手紙」を書くことがある。宛先は自らの被害者である。もちろんそれをいきなり届けるのではない。罪の意識が成立していないと謝罪が攻撃的になるからだ。

また、子ども虐待で離れればなれになっていた親子がコミュニケーションを再開する家族再統合事業において親子間の手紙のやりとりをする。筆者が主宰する「男親塾」でもその練習をする。自らの行いを反省し、子どもの気持ちに配慮するコミュニケーションにする力が要る。届かない手紙として相手を想像して書く。虐待の反省や謝罪こそが対話をすすめるカギとなるが、これがなかなか難しい。「お父さん、どうして殴ったの」と子どもが問いかける。お父さんはあれこれ理由や背景を書く。それは言い訳だらけとなり、子どもからするとまるで子どもが悪いように聞こえる。これでは謝罪にならないない。ひとこと、「ごめん」と言えるかどうかがその後を決める。

総じていえば、ハラスメント、いじめ、虐待、暴力をふるう人たちは沈黙や言い訳という作用の結果、ことばが出てこない。謝罪や反省のことばを無理に押しつけるようになると表面的なものになる。被害者理解や謝罪のはるか手前の段階にある、痛み、傷つき、悲しみ、弱さ、配慮等の語彙と文脈が自らの内側にないことが多い。被害者理解どころか自己理解が必要な人たちがジャスティス・クラ

イアントである。

そこでまずは自己にまつわるこうした感情が生起するエピソードをみつめる。そのような感情が生じた経験を想記してもらう。できれば感情生活史として叙述することもすすめる。脱暴力の前の、こころほぐしのための人生の振り返りである。これは自分でおこなうライフストーリーワークである。

鎧を着たようになっているから暴力が必要になるので、その鎧を脱ぐとむき出しになる自己がある。その自己に向き合う。認めたくない自己像も含まれる。自暴自棄となるような不幸も見えてくる。万能感に溢れた自己は、万能でありえるはずがないので、それは逆に傷つきやすさともいえる。暴力は虚勢のようにみえてくる。こうした自己理解のためにも暴力をふるうという行為のエスノメソドロジーは役立つ。日常生活ではあまり意識されない図柄として彼らの日常生活があることを曝きだすからだ。暴力をふるう人に欠けていることや偏りのある実践であることがエスノメソドロジーの記述からみえてくる。そこが眼目である。加害者臨床の対象として暴力という行為に照準することができる。

ジャスティス・クライアントたちとの対話で重視していることは、「他者への想像力」をいかにして育むかである。自ら傷つけた他者は、本来は重要な他者として存在しているはずである。自己をつくり直し、やり直していく際に貴重な人として被害者がいる。なんといっても謝罪すべき相手である。しかし十分に罪の意識がないと、謝罪のことばで相手をさらに傷つける。謝罪は本当に難しい。刑務所ではこうして届かない被害者への手紙を書く練習をしながら、ことばを開発する。ことばがないと感情も生起せず、他者への配慮という心性も生まれず、謝罪のこころが育たない。

伝えたいのにその人宛には出せないし、届けることのできない手紙が世の中にはたくさんある。それを預かるところがある。「漂流郵便局」という。そこは人びとの思いの詰まった「手紙のミュージアム」である。地域の郵便局を改造している。局長さんもいて、アーティストもいる不思議な郵便局である。届かない手紙を受け取るという郵便局である。配達はしない。全国から漂着した手紙が展示してある。訪れた誰かがいつかは読む。もちろんそれは宛先の人ではない。他者の思いを直接には関係ない人たちが読み、自らの思いや経験に重ねる。こうして想像力やつながり感が活性化する。

漂流郵便局には、「届け先のわからない手紙、預かります。」と記されている。「過去／現在／未来、もの／こと／ひと、何宛でも受け付けます。」、「『漂流郵便局留め』で寄せられた手紙たちを『漂流私書箱』に収めることで、いつか所在不明の存在に届くまで、手紙を漂わせてお預かりします。」と書いてある。その宛先はいろいろ。ボイジャー１号さま、亡くなったお母さん、神様、あの日のお姉ちゃん、70 才の私から 80 才の私、夕暮れの町であった見知らぬおじさま、あの頃の僕・・・と続々と届いているという。

届けることばがまだないのであれば、絵文字でも、川柳でも、イラストでもいい、少なくとも暴力というボディ・ランゲージではない身体のことばを、言い訳や弁解も含めて、そして少しばかりの謝罪かも知れないが、セルフ・サイレンシングのただ中にいる者たちの手紙を預かり、いつか届けるべき被害者に届くようにする媒介者が「漂流郵便局」のようにあればよいと思っている。沈黙という会話の実践を描きだすことのできるエスノメソドロジーに学ぶことは多い。

４．ことばをかけあう−自殺者の少ない地域の日常生活と関係的存在

問いを反転させて日常生活を把握するとその問題の様相の異なる面がみえてくることを記述するのもエスノメソドロジーの効果である。自己に向かう暴力としての自殺をとりあげてみる。どうして人は自殺をするのかというアプローチでリスクを扱うだけではなく、どのようにして自殺をしないように人は日常生活を生きているのかを追求することである。自殺の動機や理由を探るだけではないタイプ

の自殺の研究、つまりどうしてその地域や集団では自殺する人が少ないのかについての研究である。自殺の社会的な要因研究の先駆けとなったフランスの社会学者、エミール・デュルケームの『自殺論』（中公文庫）は自殺の社会的要因を解明している。現代社会においても当てはまるかどうかは論議の余地はあるが、自殺の社会学的な変数の設定という点では現代においても意義がある研究だ。

『自殺論』では、結婚しているかどうか、宗教はどうか、気温や日照時間等の気象要因、年齢の影響がそれぞれ地域毎、年代毎に考察されている。自殺率が低くなる社会的自然的要因として設定している。

こうした視点と重なるユニークな研究がある。自殺率の最も少ない地域の特性をさぐった研究である。岡さんの書物はそれを現代日本社会に応用し、自殺率の低い地域での人間関係として導き出す。どうして自殺したのかという当人の原因と動機に焦点をあてた研究ではない。徳島県旧海部町（人口三千人）のフィールドワーク調査をもとに『生き心地の良い町-この自殺率の低さには理由がある』がまとめられている（岡檀、講談社、2014 年）。

岡さんの問題意識はこうだ。戦争被害者体験についての聞き取り調査をしていて、その心の傷の程度に個人差があるけど、その前後には、兵士たちが戦後に帰還していった故郷やコミュニティの規範、隣人たちの価値観が関係していると考えたからだという。これまで自殺多発地域における自殺危険因子の研究は多いが、自殺希少地域における自殺防止因子の研究は少ないので、後者を研究して社会に環流させればよいと考えたという。

調査の結果を次の５点にまとめている。①いろんな人がいてもよい、いろんな人がいたほうがよいという考えがある。②人物本位主義を貫くという。③「病」は市にだせという。④どうせ自分なんて、と考えない。⑤ゆるやかにつながること。

①の例として、「朋輩組（ほうばいぐみ）」をあげている。5 歳前後の幅のある若者が異年齢集団をつくり活動をする。「生業にかかわる連携、地域の保安、普請（家屋の修繕）、冠婚葬祭の手伝いなど、地域住民の日常生活に密着しており、メンバーが暮らすコミュニティと不可分の関係にある」（43 頁）という。会則もなく、自由参加であり、ゆるやかな組織である。伝統的な地域互助組織の閉鎖性や強制加入とは相違する。伝統的な組織のようにして地域のつながりを機能させるが、窮屈だと現代人はついてこないので、自由度も高いように運営しているという。また、アンケート調査を実施して、「ほとんどの人は信用できる」「相手が見知らぬひとであってもほとんどの人は信用できる」という意識が自殺多発地域と比べて有意に高いという。「いろんな人がいたほうがよい」という積極的な多様性奨励となっている。

③の「『病』は市にだせ」も特徴的である。「病とはたんなる病気だけではなく、家庭内のトラブル、事業の不振、生きていく上でのあらゆる問題」を指す。市というのは公開の場のこと。ひとりで抱え込まずに相談をするということだ。やせ我慢しない、虚勢を張らない、耐えないことがすすめられ、さらけ出すことが大切だという。「でけんことはでけんと早ういいなさい。はたに迷惑かかるから。」という中年女性の声が紹介されている。

逆に比較調査をした自殺多発地域では自分の個人的な悩みを誰かに相談することについて強い抵抗があるという。うつになった友人を「そりゃさっそく見舞いにいかにゃ」と海部町の人びとは考えている。うつを隠さない、みんなで囲んであげるという気風が自殺防止因子として機能している。その象徴としてこの③がある。

自殺予防因子とは海部町の人びとの日常生活や対人関係である。それは暮らし方のエスノメソドロジーとして読むことができる。いろいろな変数で自殺危険因子や自殺率の高い町との比較を試みているので、この調査は説得力がある。

この自殺研究から考えたいことは、暴力後のやり直しの生活への示唆が得られることである。暴力を防止する法律により、そして行政の介入により、脱暴力を指南された加害や虐待の当事者たちを脱暴力へと導く回路をどうつくるのかという際に、①から⑤が重なる点である。「暴力と虐待（の事実）を市に出せ」

は家族の秘密をつくるなということだし、夫婦や親子の葛藤から暴力へと昂じていく過程で他者への相談があれば事態はまったく異なるだろうし、「朋輩組」のアイディアは筆者らがとりくむ脱暴力のためのグループワーク「男親塾」に近い。そして暴力をふるう人たちの日常生活それ自体がここで示された予防因子のように組織されていないので危険因子を含んだ様子にみえる。この変容を促すためには臨床やプログラム、あるいは更生を誘導する社会制度（回復的正義や司法、ダイバージョンとしてのカウンセリング受講命令等）として介入することをも契機としつつ，脱暴力への人生の組み換えのために社会ができることを置き石のように設定できればと思う。そのためにも脱暴力へと生きる過程の研究があるので、それを紹介しておきたい。

５．「ことばにする」という行動さえあれば−逸脱行動を止める過程の研究から

逸脱行動や問題行動の研究は、それ自体を説明しようとする研究が多く、加害者臨床もその人のリスクに着目する。しかしどうして犯罪を犯すのか、なぜ暴力をふるうのかについての研究だけではなく、逸脱行動や問題行動をしないでいる理由やそれが止んでいることに焦点をあてることこそが脱暴力支援や加害者臨床には必要である。こうした研究を離脱研究（デジスタンス desitance）という。デジスタンスとは距離をおく、止めておく、しないようにするという意味であり、総称して離脱と表記されている。エスノメソドロジーはデジスタンスを研究することにも役立つだろう。

デジスタンス研究を牽引する英国の犯罪学者、シャッド・マルナは『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」』（津富宏監訳、明石書店、2013年）を著している。元犯罪者に対する面接調査をもとにした研究である。「更生した人と更生していない人」に分類して比較分析し、犯罪をした人の更生の要因について考察している。

この研究は、①犯罪をした人の更生とは、再犯をしない状況の持続であり、更生への肯定的な動機付けや自己効力感を持つことが重要であること、②犯罪をした人が犯罪について言い訳や正当化をすることは、一般に、更生の妨げになるとされていたが、更生を促進する側面があること、③言い訳や正当化には文化的な背景があること、の３点が論じられている。それぞれ常識とは異なるアプローチである。立ち直りには独自な日常生活の論理があるという。

たとえば、アルコール依存症の人について、刑罰に対する恐怖、体調の悪化、家庭の崩壊、失職等を契機として断酒の決意をすることが通例だが、このような否定的な動機だけでは飲酒を止める決意を持続することは難しく、断酒の持続のためには、肯定的な人生の目標を持ち、成功体験を重ねることによって、動機付けをより高めていくことが不可欠であるという。

さらに、ニュージーランドの元受刑者調査から、更生した人と更生していない人を比較した結果、それぞれが置かれた社会的環境には明らかな相違が認められなかったが、更生した人には重要な認知的変化を経験しているという特徴があることを明らかにし、特に、「自分の人生をどう考えるか」という点に更生していない人との相違があることを指摘した研究もあるという。自己理解や内省という作業が止め続ける行為には欠かせない。

また、更生の過程における主観面の変化についても論じている。更生の過程では、アイデンティティ、自己像、自分や他者を評価する枠組みがそれぞれ変化すると論じ、具体的には、①青春期の自分の行動や自己像に対する評価が変わり、②時間の流れに対する意識が広がり、③人生の目標が、安定した対人関係を伴うような適切なものに修正される、と指摘した研究を紹介している。

そして、犯罪をした人の更生には、次の５点の内的変容が必要であるとしている。すなわち、①自己陶酔から他者への配慮に移行すること、②社会の価値観を受け入れ、適切に行動すること、③社会的な対人関係における

快適さが高まること、④自分と同じコミュニティの人々に対する配慮をするようになること、⑤人生の意味ということに対する関心が強まることである。

くわえて、更生していない人のうち、長期間の犯罪歴がある人は、共通して、犯罪、刑務所、人生における立場に対して「うんざりしている」と述べていたという。彼／彼女らは、犯罪行為をしたくはないが、薬物依存、貧困、学力や能力の不足、社会の偏見のせいで、自分の行動を変化させることが困難だと感じており、自分には他の選択肢がないとも感じていた。更生していない人のナラティブは、「非難の台本condemnation script」(p.75)という言葉で表現することができるという。自分の人生は破滅的で不遇に運命付けられているという考え方である。このような考え方によって、まっとうな世界では成功できないと感じ、犯罪に代替的な快楽を求めることがある。

更生した人のナラティブには、更生していない人と比較して、①「本当の自分」(88頁)についての中核的な信念の確立がみられること、②人間は宿命を乗り越えることができるという楽観的な見方があること、③生産的でありたい、社会、特に次世代に何かを還元したいという情熱があること、という３つの基本的な特徴があるという。

こうして、「非行・犯罪者の多くは、自分の気持ちや考えといったとらえどころのない事柄とじっくり向き合い、それを言葉にして他者に伝えることに慣れていない」、「非行・犯罪者は、『行動することによって自己の内面を語る者』」だから、「非行・犯罪行為は、自身が内に抱える様々な思いが、無意識のうちに行動に置き換わり、社会規範から逸脱した形をとるとき、表面化する。言い換えれば、心が行動へと置き換わってしまわないうちに、言葉によって形を与えること（言語化）ができれば、非行や犯罪（行動化）をしなくてもすむと考えられる」と記している。総じて、「一貫した信用に足る自己物語を必要とする」（19頁）。

こうした離脱過程を詳細に記述することは逸脱行動を止めている者の日常生活の論理と実践を記していくことに他ならず、そこで共通に読み取れることをまとめ、加害者臨床や更生に活かすことができる。

離脱研究は社会への再参入のことであり、それを実現することのできる社会的条件が求められている。自殺予防因子と近似のものだろう。暴力をふるう人たちの生きている日常生活の論理を把握し、そこに係留して脱暴力支援が組み立てられるべきという示唆でもある。プログラムとして構成された脱暴力へのグループワークや多様な臨床方法も、こうしたデジスタンス過程の一貫に組み込まれて作用することで脱暴力化にむかう人生の航路（ライフコース）に資することとなる。各種の更生プログラムそれ自体の成否だけを論じていてもあまり意味がない。

６．日常生活のエスノメソドロジーと対人援助・臨床

離脱過程の研究として非行少年のその後の立ち直りの人生を本人が記述した『ジャック・ローラー–ある非行少年自身の物語』（クリフォード・ショウ著、玉井真理子他訳、東洋館出版、1998 年）がある。ジャック・ローラーは酔客から金品を奪うギャングたちのことであり、シカゴでの実話であり、ライフストーリーを自ら描いた文章を社会病理学者が解説しながら記している。

今回は「ことばにする」という行為の大切さを考えてきた。加害者臨床というカウンセリングやプログラムは確かにことばにする意図的な機会として機能する。しかし、ことばにすることのできる日常生活そのものが成立することが本来的な脱暴力へと向かう道だろう。ことばにする必要のない日常生活を組織して生きてきたことそれ自体、つまりエスノメソドロジー的な日常性それ自体の解体がいる。

そのジャック・ローラーの生活史は彼の日常生活解体の記録として読むことができる。社会的処遇 social treatment の経過がショウによって記されている。生活環境の改善に取り組んでいる。逸脱的集団の少ない地域で里親のもとで暮らすように措置をした。その地

域の同年齢集団とかかわるように配慮をし、あわせて就労支援をしたという。これらを当人の日記をもとにして考証している点がユニークである。こうした日常生活が再組織できればことばの発出のしかたも変化していくことになる。

暴力のきっかけを語ることばが一般に貧しい。「頭が真っ白になって」「カッとなって」「あまり覚えていない」「むしゃくしゃして」「酒のせいで」「殴らせる方も問題がある」等と、要領を得ないことばしかでてこない。そのなかで経過を理解するための事実を確認する。それらはこの社会が持つ語りの水準であり、意図的ではないにしろ男性性に由来するセルフ・サイレンシングの効果や自己防衛が働き、どちらかといえば、「沈黙する、言い訳する、取り繕う、回避する、中和化する」等を軸としたことばの実践（発話行為）でしかない。プログラムやカウンセリングだけでことばを紡ぐことは初発の契機にしかならない。その後へとつなぐことが大切だ。暴力をふるう人についてのエスノメソドロジーが描いた日常生活の解体とそれに変わるものを入れ替えていくことが長く続く脱暴力の王道なのだろう。

中村正（なかむらただし）
立命館大学／臨床社会学・社会臨床論
2015 年 5 月 29 日受理

ケアマネだから
できること

21

ケアマネ、あの眼、この眼　～娘の不登校～

木村晃子

居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

今回は、ケアマネ仕事とは離れ、全くのプライベートな出来事を書いておこうと思います。これは、親としてなのか、ケアマネという対人援助の仕事をしている職業人という立場からなのかは、自分でもよくわかりません。ヒューマンサービスという括りで考えた時に、学校の先生も、ケアマネジャーも、共通する姿勢があるのではないかと考えました。私の中の母親の部分か、或いはケアマネジャーの部分なのかはわかりませんが、娘の不登校を通して、大きな怒りや悲しみを感じながら歩んだ３か月を、今の記録として残しておこうと思ったのです。「書いてもいいよ。」と言ったのは、不登校だった娘です。書くことで、誰かの目に留まる時、ほんの少しでも、誰かの元気の種になることを願いながら、書いてみようと思います。

～その時～

１月下旬の寒い朝。飼い犬にエサを与える当番の長女が起きてきた。エサを与えた長女は、その後２階の自室に上がって行った。てっきり登校準備をしていると思っていると、そろそろという時間になっても、自室から降りてくる気配がない。何度か階下から、大きな声で「遅刻するよ。」と叫んでみても、私の声に反応もないため、同じく登校準備をしていた次女に、「声をかけてきて。遅刻してしまう。と頼んだ。間もなく、一端は２階に上がって行った次女が、階段を下りて、私のもとへやってきた。「お母さん・・・」と、その声は小さいながらも、何か緊張を含んだ言い方

だ。「泣いていたよ。学校で、嫌なことがあったのだって。」次女は、ためらいながら私に教えてくれた。青天の霹靂などではない。ただ、クールで気丈な長女が、ここにきて（３学期が間もなく終わりに近くなっているこの時期に)、ストップしてしまうなどとは予想外だった。「言わないで・・・」、気を遣うように次女が私を見つめる。「大丈夫だよ。」と言いつつ、私はそのまま長女の部屋に向かった。

「どうしたの？嫌なことがあったの？」

「私は、クラスの子に嫌われていて、嫌なことをされている・・・」そう言った後は、涙で言葉にはならなかった。先ずは、学校へ連絡して、この言葉を伝え、状況を確認するために、その日は休ませること、状況が分かり次第、学校の先生へも経過を報告することとした。

この出来事が、青天の霹靂でなかったことには、いくつか思い当たることがあったからだ。

～入学後まもなく～

中学を卒業して、期待を胸に希望する高校へ進学した娘は、兄の影響を受けてか、野球部のマネジャーになった。意外な選択にも感じたが、ちょうど同じ春に高校を卒業した兄が、３年間高校野球に没頭する姿を見ていたことが、高校野球の面白さを発見したのだとも理解した。高校野球のマネジャーの仕事も生易しくはない。休日も早朝から、遅い時間まで、部員と同じように活動している。「大丈夫？楽しい？」と声をかけると、わずか１か月と少しの時点で、「・・・」沈黙の表情が返ってきた。部活を辞めたいと言い出したのも夏休み前のことだった。夏休み入り、担任教員と、娘と私の３者での懇談があった。その時に、クラス内での、多少の人間関係のゴタゴタがあったことを担任から聞かされた。今は、解決している、というのが担任の説明でもあり、娘もそれ以上のことは言わなかった。けれども、入学後一度も娘の口から、学校生活について「楽しい」という言葉を聞いたことがなかったのは、私の中の気がかりでもあった。何度となく「学校は楽しい？大丈夫？」と声をかけたことがあったが、一度も楽しいという言葉は返ってくることはなく、「楽しくなくても学校は行くものだから。」と、表情を変えずに言う長女を、クールな個性ととらえていたのは、その痛みに気が付くことが遅れた母親である私の失敗だったと思う。

夏休み中も、部活に通っていた娘は、休みが明け、秋の大会が始まる直前に、夜中に選手の一人一人に持たせるお守りを作っていた。（このような仕事が、野球部のマネジャーには代々あるようだ。）そして、その大会が始まると娘は部活を辞めた。後で、知ったことだが、退部の意向がなかなか受け入れられず、最後は、黙って部活に行かなくなって辞めたという結果になった。そして、入学間もない頃、この部活の中でも、明らかな、嫌がらせ行為が娘に向けられていたこともわかった。

～タイミング～

雪深い毎日の中で、新年を迎えた。間もなく、私に「顔面神経麻痺」という奇病が取りついた。幸い、自分の異常を早期に感じることができ、すぐに病院にかかったことも功を奏し、発症から２週間ほどで、私の顔の麻痺は随分と快報に向かっていた。そして、私の回復を見計らったように娘が学校に行けなくなったのだ。子どもというのは、親のことをよく見ているものだ。きっと、病状の最悪な時には､私に遠慮していたのだろう｡辛い中、頑張って学校に通っていたことを思うと、私が元気になることで、娘の我慢が限界を迎えることができたのかもしれない。

とは言っても、親としてこの事態を冷静に対処できるほど容量も持ち得ていない。長い人生の中で、学校に行かない日があっても、どうということはないことを承知の上、早期に対処しておかなければならないこともあるのだろうと想像し、焦りと、どこに向けて良いかわからない怒りも感じていた。

～事実や気持ち～

いったい何が起こったのか。これからどうすれば良いのか｡まず娘の話が聞きたかった。けれども、娘に、「可能な範囲で教えて欲しい。」と言っても、最初のうちは、思い出しては言葉にならないうちに泣き崩れてしまい、とてもその出来事を話題に扱う状況ではなかった。

月曜日から登校できなくなった娘の学校に、土曜日に親が行き、担任を始め教員との面談を果たした。娘から、可能な範囲で、誰に、どんなことをされたか、を確認した上で、学校としては対処していく、とのことだった。その後、娘も相当悩んだ挙句、自分の気持ちや自分が受けた事実を話すことで、状況が好転することを期待して、幾人かの男子生徒の名前と状況を確認することができ、学校側へ伝えた。すると担任は該当生徒へ確認し、事実としては､あっさりと認めた生徒だったが、「そんなつもり(娘を傷つける)はなかった。」という説明だったようだ。その後、期末試験の時期が来て、それらの生徒への指導は保留されたまま、学校側は、娘に面談することができない状況では、何もできないと言わんばかりに、対応が宙に浮いてしまった。何が起こったか、事実を伝えることで、状況が変化し、学校へ戻れるかもしれない、少しだけ娘が持った可能性も、テストや、入試に対応が優先されていくうちに、ゼロになってしまった｡早期対応の重要性を感じる時期であった。学校の言い分としては、「本人に会えないから。」というものであったが､叶わない状況の中で、何ができるか、できることを探し問題のこう着を防ぐことが大切だと思うのが、事実がどうかに拘る学校側としては、双方（被害･加害)の話を聞かなくては前に進めない、と言った印象だった。生徒が事実を認めたの

にも関わらず､｢そんなことをしたら人は傷つくのだから｡」という当たり前の説明言語が、該当生徒に対する指導だったと言われても、娘が安心して学校に復帰する光にはならなかった。

～節目、決断～

学校に戻れる可能性が限りなくゼロになった時点で、次の目標は、４月という節目に新しくスタートできる環境を整えることだった。転校先の学校を調べ、公立の単位制高校に転校するための手続きを進め､転入試験を受け、４月の転入学が決まった。

転入学が決まった時点で、元の学校と娘の面談が叶う形となったのだが、あれだけ本人の話が聞きたいと言っていた学校側は、娘の気持ちを聞く前に、自分たちが確認した加害生徒の言い分を説明し始めた。それには、娘に非があるような説明であった。娘はひどく落胆をした。

問題が発覚した初動期の対応が雑で、既に次の再スタートが決まった時点での面談に、何の意味があったのだろうか、と思う。ましてや、加害側の主張だけが擁護されているような印象を強めてしまったことも、学校や教員に対する不信を募らせてしまった。

～多様な社会、多様な生徒～

設定目標の通り、娘は４月を新たなスタートとすることができた。定時制高校は、それまで通っていた全日制の学校とは、およそシステムが異なっていた。幸い、全日制高校にほぼ１年近く通い､習得した単位も認められ、新たな学校では、必修科目よりも、選択科目を選ぶことができる状況だった。それは、娘の興味関心の高い韓国語の授業や、異文化交流などという科目もあるようだ。さながら、大学のような雰囲気だ。それら、全ては先生らの丁寧な相談対応の元、自己決定することをサポートされているのだ。

この学校の生徒のほぼ半数近くが、小中学校の時に不登校を経験し、更に、１２人に一人は発達障害という診断を受けている生徒もいるとのこと。３年または４年かかって卒業に必要な単位を修得すれば良い仕組みになっている。卒業後の進路も、大学や短大、専門学校、就職、自宅療養など多様な進路になっている。ここで、非常に驚いたのは、大学進学と言っても、難関国立大学に合格している生徒もいるということ。学校の授業だけでは不足するところを、先生方が授業とは別に、休み時間等にサポートしつつ、学ぶ意欲のある生徒を支えているということだ。一方で、小中学校の不登校で学べなかった学習についても、丁寧に再度学習できるような体制も整っているのだ。多種多様なレベルに対応するということは、手間も暇もかかることで、それが望ましいことであっても、なかなか実現されにくい社会になっている今、とても誠実な学校の対応を感じたものだった。

この学校では、学校に到着することで、まずよし、とされていたり、休んだり遅刻の連絡ができることでよしとされたりもする。それは、出来て当たり前、という価値ではなく、学校や先生は、生徒にできないことがあれば、できるようになって、社会に参加し、つながっていけるように、育む環境であるという前提があるようにも感じた。

授業の始まりや、終を知らせる合図もない。当然、時間の管理は各自に任されている。それもまた、何もかもが管理される多くの学校システムに対して珍しくも感じてしまうが、本当の意味での自律というのは、そういうものなのだろう。

様々な道があることを娘は知った。成績が良くても、将来への夢が描きにくかったこれまでとは違い、娘が夢を描けるようになってきた。学校や、授業が楽しいと言っている。先生が声をかけ様子を心配してくれる。思い切って自分の悩みを打ち明ける。そのような体験の中から、「大人は・・・先生なんて何もしてくれない。」と、かつて抱いた絶望も色を薄めっていっている。今の娘が元気に学校へ通っていることが何よりも嬉しい。

～様々な状況の中で～

生きていると、自分のことや、自分の周りで様々なことが起こる。いつでも冷静な対処などできるわけではない。私は、普段は、ケアマネジャーとして、多くの高齢者やその家族の相談援助の仕事をしているが、いざ、我が身に起こった出来事に、冷静な思考などは持ち合わせていないことを実感した。

まず、私がしたことは、職場に自分の抱える状況を伝えたことだった。こんなことが起きました。何かと心配事を抱えています。そのようなことを、同じフロアーの仲間に伝えることで、私が時に怒ったり、落胆している様子を受け止めてもらうことができた。親として、心配事を抱えた状態であろうとも、ケアマネジャーとしては、誰かの相談に応じる必要がある。自分が安定していなければ、誰かの相談に応じるエネルギーなど保つことは難しい。その面では、職場の仲間にサポートされていることで、ケアマネジャーとしての相談業務を全うすることができたと思う。仲間には本当に感謝であった。

そして、このような仕事のつながりから、この道のプロ（カウンセラー）に個人的に相談をし、助言をもらうことができた。それは、とても大きな心の支えとなった。

～今をつくること～

娘が学校に行けなくなった時、家の中にじっとしていた訳ではなかった。その時にしていたアルバイトには通っていたし、好きな東方神起のコンサートにも行くことができた。友達と約束をして、ショッピングにもでかけていた。その時々に支えてくれた友達がいた。学校に行けなくても、どこかに行けたらいい

と思う。何かにつながっていたらいいと思う。人は、いつ、どこで、どんなことに影響されるかわからない。時間という薬もあるようにも思う。ただそれは何もしないということではなく、何かを探し続けることなのかもしれない。

今、娘は元気に学校に通っている。どこからでも、道を拓いていけることを体験したのではないかと思う。これからも、きっと色々あるだろう。今を楽しむことができたら、少し先の未来も信じることができるはずだ。そして、自分の痛みを知ったら、誰かのそれにも想像が巡るだろう。

当たり障りのない、面倒をさける風潮。目の前で誰かが苦しんでいても、「知らなかった。」と言って通り過ぎていける無神経さ。弱さなのか、図太さなのかわからない人間たちがこの世の中にうようよしている。

自分は、どのように生きているのだろうか。

どのように、生きていくのだろうか。

街場の就活論 vol.21

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

団 遊（だん あそぶ）

ダブルワーク、トリプルワークの推奨

先日広報された、リクルートホールディングスの今年の新卒採用募集告知が少し話題になっている。

・30 歳以下なら誰でも新卒枠で応募ができる
・面接でスーツの着用を禁止する
・手書きの履歴書は不要とする
・オンラインでの面接も受け付ける

など、色んな角度から話題にされているが、その中でぼくが注目したのは

・入社後の副業を可とする

となっている点だ。つまりダブルワークができるというのだが、この点には大いに賛同する。ダブルワークは、単にお金の問題だけでなく、色々なメリットを内包していると思うからだ。

アソブロックもダブルワーク推奨

ちなみに、ぼくが代表をつとめるアソブロック株式会社では、ずいぶん前からダブルワークを率先して勧めている。できることなら、「専業不可」としたいくらいだ。

おかげで、今では 15 人のメンバーのうち、11 人までもがダブルワーク、トリプルワークをしている。例えば取締役の安井（もとは一般社員として入社）はアソブロックのほかに、J 社の取締役、そして S 社の代表取締役（近日就任予定）を務めている。林はアソブロックの一員として働く一方で、プロの演出家としていくつもの舞台に関わっている。阿部はアソブロックの一員として働きながら、web マーケを主業務にする S 社の社員でもある。阿部の場合は、S 社からヘッドハントされたときに、「ダブルワークはどうでしょう？」と逆提案した経緯がある。

多くの会社がダブルワークを推進すればいいと思うからこそ、今回はその効果をいくつか挙げてみたいと思う。

＊　＊　＊

1：自己肯定感の向上に寄与できる

当然、複数の会社や場所で必要とされるということは、仕事において、より多くの人から認められているということだ。専業の場合、能力とは関係なく、社内政治や、割り振られた仕事の当たり外

れで、自己肯定感を高めにくい環境に追いやられることがある。また、周囲もそれを環境被害だと認めないので、たちが悪い。その結果、自己肯定感の欠如に起因する卑屈さや、自ら成長したいという気持ちを封じ込めたりしてしまうことがある。

ダブルワークにはそれがない。2 つ、あるいは 3 つの足場があれば、専業に比べ、客観的に自分自身を見つめやすい。あるいは、あまりに居心地が悪ければ、1 つ捨てればいい。そのように、自分のキャリア構築において自由度が高い自分でいられる。

2：成長意欲が倍増する

そうは言いながらも、アソブロックの 11 人もそうだったが、最初はダブルワークに躊躇する傾向がある。それは「できるかできないか」ではなく、「申し訳ない」と思ってしまうからだ。専業で頑張っている人もいる中で、自分だけ軸足を複数にするのは、何かここを軽んじているような風に見られるのではないか？　その結果、大事にしているこの場所での居心地が悪くなるのではないか？　どうもそのようなことを考えてしまうようだ。

だがそこは気持ちの問題であるから背中を押してあげることと、一方でマネージャーが「兼業推進である」ということを常に肯定し存在を認め続け、あのあり方はうちの会社的には正しいのだ、と言い続けることで程なく解決する。

そしてその結果起こるのが、本人の成長意欲の倍増である。人は受けた恩は返そうとする。まだまだ一般的ではないダブルワークを認めてくれた組織に対して、自分にしか出せない結果を出すことで貢献しようと考えるようになる。

3：組織変革が進む

昨今「働き方変革プロジェクト」や「女性社員の働きやすさ向上委員会」みたいなものに取り組む会社は多いが、なかなか成果はあがりにくいと聞く。その点においても、ダブルワークの導入は大きな効果を発揮する。

そもそも、ダブルワークを是とする制度設計をしなければならないし、また、色んなケースが出てくるので、常に柔軟に設計変更をしなければならない。例えば先に出た林くんの場合、お芝居の演出の仕事が入ると、集中して稽古をするときと、本番の合計 1 か月くらいは出社が完全にできなくなる。「ダブルワーク推奨」というからには、当然それを内包できる制度を考えないといけない。

そのような多様な働き方に柔軟に対応できる制度を構築していくことは、必ず今後に生きていくと思う。頭で考えた理想に制度を近づけていく努力ではなく、現場で起こる事態に制度を合わせていく、ということを日々繰り返す方が、制度は強くなると思うのだ。

リクルートホールディングスも、最初はさすがにこの点は対応できないであろう。つまり、この枠組みの中であればダブルワーク OK ですよ、という狭義の承認に留まるはずだ。これではまだまだダブルワーク OK であるとは言い難い。

また、一方で、ダブルワークをしてもらうということは、「この場所に魅力がなければ去られてしまう」というリスクを常に抱える。そのため、所属するメンバーにとって居心地のいい組織になれているかを常に自問する環境に置くことができる。これも、組織変革の大きなエンジンになる。ダブルワークやトリプルワークを実現できるメンバーは、当然仕事のパフォーマンスが高い。そんな彼らに対し「それでもここにいる理由」を提供し続けることは、つまりは魅力的な会社への階段を上がり

続けていることにほかならない。

4：人材採用に困らない

規模の大きくない会社や一般的に人気が低い職種に、仕事能力のある人に来てもらうのは大変である。力のある人は、集まるところ集中する。ところがダブルワークを推奨すると、そんな人たちもドアノックしてみようかと思ってくれるようで、アソブロックはとんど人材採用に困らない。ちょくちょく興味がある人があらわれてくれる。それはきっと、会社の業態への興味というより、組織への興味なのだろうと感じることが多い。

また、ダブルワークを認めると、逃げ場ができる分、ひとつの業務に身が入らないのではないか？と聞かれることがあるが、そんなことはない。専業なのに業務に身が入らない人など、星の数ほどいる。ダブルワークができるような人は、元来仕事が得意なのだ（あるいは得意になるのだ）。ぼくの中学時代の同級生に、野球部の部員なのに、サッカーの試合の時だけ頼まれてフォワードとして試合に出ていた友達がいた。そしてよく点を取っていた。それと同じようなものだと思う。

5：収入的安定をもたらす

ぼくはよくうちの会社のメンバーにこういう話をする。「今の時代、賃金は容易にはあがらない。目指せ 1,000 万円といっても、会社から月給 80 万もらうには、かなり能力を認められないと無理だろう。でも、30 万円を 3 社からもらうのであれば、スキルを高めれば可能性はなくはないと思う。そのくらいの給料を払っている出来の悪い一般社員は山ほどいる。つまり 1/3 の時間でその人以上のパフォーマンスを出せれば、マネージャーとしてはあなたを選ばない理由はない」

仕事人として、やはり給料はひとつの評価軸であると思う。それほど多額はいらないが、やはり安すぎると自己肯定感も低くなる。賃金の話題が出しにくい日本にあって、アソブロックはメンバーの給与開示が進んでいる。それもこれも、自助努力であげることができる環境にある、とメンバーが共有できているからだ。

＊　　＊　　＊

正社員の新しいカタチ

雇用の安定を会社に求めにくい時代になっている。それならば、雇用の安定は自分自身で作り出すしかない。ダブルワークはその第一歩になる制度だと、ぼくは考えている。この制度は、導入するもしないも、鍵は経営者層が握っている。年功序列・終身雇用が崩れ、フレックスや裁量労働、あるいはノマドワーカーと呼ばれるようなフレキシブルな働き方がトレンドになってきた先に、新しい正社員の形が作られていくのだと思う。

そのプラットホームに、ダブルワークやトリプルワークはなり得るだろう。なぜなら、あくまで個人的実感でしかないが、それらの制度を取り入れることは、確実に会社の発展につながっているし、また従来の呼び方で言う「従業員」からもすこぶる評判がいいからだ。

文／だん・あそぶ
「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

カウンセリングのお作法　第三回

カウンセリングの流れ

CONカウンセリングオフィス中島　中島（みずとり）弘美

カウンセリングの流れについてお話します。面接の段階は、必ずしも明確に存在しているわけではなく、クライエントさんの状況に合わせて進められますが、今回は、大まかに四つのプロセスに分けて紹介します。

第一段階　ジョイニング

カウンセラーはクライエントさんやその家族とお会いします。支援をするうえでまず大切なことは信頼関係を築くことです。この段階は、クライエントさんの世界にカウンセラーが参加させていただくという意味で、ジョイニングと呼ばれています。困っている話をしやすいように、**言葉や言葉以外に伝わるメッセージ**に配慮しながら、対応します。

第二段階　状況を知る

「どういったことで、こちらに来られましたか。どなたからでもどんなことでも、様子をきかせていただけませんか」と、支援が必要である状況を知る段階です。どんな出来事があり、どんな感情になったのか、しっかりと受け止めます。何が良くなかったのかの原因追究や悪者さがしではありません。怠けや甘えているなどの評価をすることなく、さまざまな情報を把握するプロセスです。

第三段階　目標、方向の確認

「どのようになりたい、どうなったらいいなとお考えですか」

目標についてクライエントさんのお考えを確かめます。決してカウンセラーが方向を決めるのではなく、クライエントさんとご家族の思いとともに進んでいきます。どうなりたいのかわからない、あるいは、家族で考えが異なる場合もあり、どうなることが納得できるのか調整をしながら方向を確認します。

第四段階　強みを把握し今後へ

状況や目標を理解して次のステップです。クライエントやご家族の強みや良さ、何とかやっておられる点を把握しながら、今後について話し合うプロセスです。何かの困難さを抱えながらもなんとか生活できている点に焦点をあて、それらを今後に活かしていくことを考える段階です。

「これまで大変ななか、よくやってこられましたね、これからどんなことができるか考えていきましょう」

～　カウンセリングの流れ　～



第１段階	**ジョイニング**	クライエントの世界にカウンセラーが参加させていただくことで、信頼関係を形成するプロセス。 「こんにちは、私は○○です。▽▽さんですね」
第２段階	**状況を知る**	クライエントやその家族がどのような状況にあり、支援を必要としているのか、様子をきかせていただく。 「どういったことで来られましたか、どなたからでも、どんなことでも、けっこうです、おきかせください」
第３段階	**目標、方向の確認**	支援を必要としている情報が集まれば、クライエントやその家族がどうなることを望んでいるのかを確認する。 「どうなったらよいとお考えですか？」
第４段階	**強みを把握し今後へ**	クライエントやご家族の強みや良さ、何とかやっておられる点を把握しながら、今後について話し合うプロセス。 「これまで大変ななか、よくやってこられましたね、これからについて考えていきましょう」

言語と非言語

話す言葉と、言葉以外に相手に伝わること

「あしたから練習に来なくていい！」

あなたは仮に中学生だとします。もしも、所属するクラブ顧問の先生が、まじめに練習をしていない部員の姿を見て、怒鳴ったとしたら、あなたはどう感じますか？

言語では「あしたから練習に来なくていい」と伝えています。しかし、言語そのものの意味以外に、大きな声や表情から、「おこっている、こわい、叱られた」とショックを受けるかもしれません。

顧問の先生はしっかりと練習をしなさいという思いを伝えたいにもかかわらず、感情的な言い方になりました。言葉を省略し、来なくていいとだけ大きな声で話しました。先生の意図するところを理解できる場合は良いのですが、言葉だけの理解だと、混乱します。

「明日から練習に来なくていいらしい」

言語と非言語

カウンセリングの流れ、第一段階のジョイニングは、カウンセラーがクライエントとの関係を築くために、話す言葉と、言葉以外に相手に伝わることを意識しながらお会いします。

言葉そのもの＝バーバル、言葉以外に伝わることすべて＝ノンバーバルといいます。

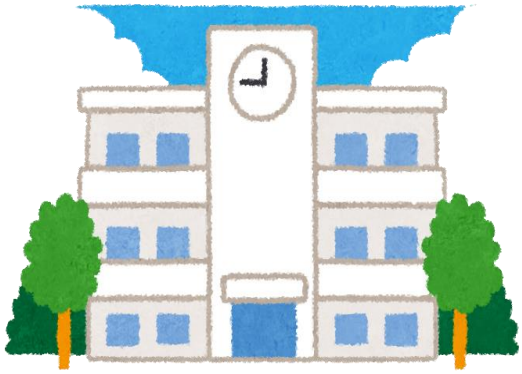
言葉と、言葉以外に伝わるノンバーバルなメッセージが一致しないと、メッセージを受け取る側は、不快、混乱、居心地の悪さを感じます。

そこで、カウンセラーは、クライエントさんに、少しでも話しやすいと感じていただけるように、言葉だけでなく、ノンバーバルメッセージの表情、視線、しぐさ、態度、話し方、さらに面接の空間にも細心の注意を払います。

信頼関係を築く過程は地道な作業のくり返しで時間がかかりますが、一瞬のできごとから、その関係がくずれることもあります。意図としないことが知らず知らずのうちに伝わることもあるでしょう。

カウンセリングでは、クライエントやご家族に伝わるさまざまな印象、メッセージ、言語と非言語を意識しながらお会いします。

言語と非言語を一致させるコミュニケーションが重要





「あしたから
練習に来なく
ていい！！」



部員

「叱られた！！　ショックだ～　来なくていいと言っているけれど、
練習に行かないとまた叱られるよ、きっと」



部員

「ふーん、あしたから来なくていいらしい～」

ノンバーバルメッセージ

知らず知らずのうちに何かが伝わっている

ノンバーバルの表情、視線、態度、話し方、そして、カウンセリングの面接空間について、ひとつひとつ、考えてみましょう。

まず、カウンセラーの表情です。無表情にならず、柔らかい自然な微笑みが求められます。気をつける点は、楽しい話題ばかりではないので、ニコニコ笑い顔にならないようにします。

視線です。クライエントさんが特に大切な内容を話されているときには、しっかりとお聴きしましたよとうなずき、視線ははずしません。顔や目を見つめすぎると圧迫感があります。視線を合わさない時間が長いと、無関心のような印象があることを忘れないようにします。

お話をうかがうときは、やや姿勢は前傾にし、ゆったりと落ち着いた態度を心がけます。筆記用具を不必要に持ち続けたり、自分の鼻や髪の毛に触れたり、首を回したり、足をゆすったりする癖がある場合は、一度見直しましょう。

話し方です。カウンセラーの声は、大声でも元気な声でもなく、ささやくような声でもなく、クライエントさんの話し方に合わせます。大き過ぎる声は威圧感があります。少しゆっくりで、はっきり、トーンはやや低めが落ち着いている印象です。

また、話す速度が速すぎると、問い詰められる気分になり、考える時間がなく、窮屈な感じがします。ゆっくり過ぎると適度な緊張かがなくなるため、テンポも意識します。

さらに、クライエントさんが話しやすい雰囲気をつくるために、実際に面接をする空間について考えます。さまざまな制限があることも予想されますが、少しでも工夫できるところがないか、検討します。

面接室は、静かで安全な空間が必要です。そして、部屋の壁、カーテン、椅子、机などの色、照明、座る位置関係、視線を向けられる小物、室内の温度、椅子の座り心地など、クライエントさんの目にするもの、感覚にどのような影響するのかを知っておく必要があります。もちろん清潔さも重要です。

そして、カウンセラーの服装も個性的になって不必要な感情に訴えていないか、クライエントやご家族の立場になって準備します。

カウンセリングの空間





ノンバーバルメッセージ大切です！

表　情　柔らかい自然なほほえみがベスト　無表情やニコニコし過ぎを避ける

視　線　凝視し過ぎず、大切な話しのときは、急に視線をはずさない

態　度　やや前傾姿勢にし、ゆったりと落ち着いて話をお聴きします

話し方　大きな声になりすぎないよう、ささやく声になりすぎないよう、
クライエントさんの話し方に合わせます

ゆっくり、はっきり、少しトーンは低めが落ちついて聞こえます

早口すぎると問い詰められている印象

面接空間　クライエントさんへの影響を点検する

静かで安全なスペース

部屋の配色　照明　視線を向けられるカレンダーや観葉植物

室温　椅子のすわり心地

カウンセラーの服装　個性的でないもの

映画の中の子どもたち

第20回 真夜中のゆりかご

－実は母たちの物語－

川﨑　二三彦

児童虐待

児童虐待がテーマというわけではないが、虐待問題が登場するらしいと聞いて出かけて観たのが本作品。2014 年のデンマーク映画である。

のっけからだった。「ヤクの捜査だ」と、アパートの一室に刑事 2 人が踏み込むと、DV がらみの夫婦喧嘩が佳境を迎えており、刑事に驚いた夫がわめき散らす。

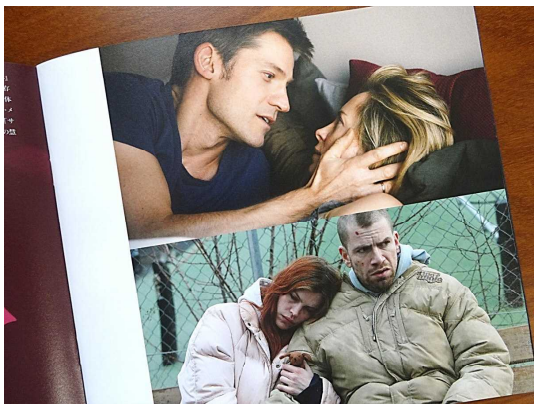
「オマエが呼んだのか！」

妻は激しく否定し、咄嗟に彼らを締め出してしまった。「ああ、これじゃ殴られる」などと心配したものの、なるほど DV とはかくあらんと思わせる描写だろう。

刑事はドアを蹴破って再び突入するが、奥の部屋を覗いて思わず顔を背ける。そこには、生まれたばかりの赤ちゃんが、糞尿にまみれて泣いていたのである。

「福祉課に連絡だ！」

映画はこうして始まり、子どもは保護され夫婦は連行される。誰が考えても納得できる展開だ。ただし、私が虐待問題にかかずらわっているせいかどうか、その後の流れに引っかかって物語に乗り遅れてしまった。というのも、ヤクが検出されなくて夫婦が釈放されたのはいいとして、例のベビーもすぐに彼らの元へ返されたからである。



「かなり重篤なネグレクトじゃないか。デンマークでは、これでも親に引き渡すのかい？」

「一度、この国の虐待対応システムについて調べなくちゃ」

などと、ああでもない、こうでもないと思案しているうちに、物語は私を置き去りにしてどんどん進んで行ったのである。何しろ本作は、これだけの DV・虐待・ネグレクトがある夫婦に子どもが返されてはじめて成立する仕立てなのだから、いかんともし難い。

突然死

さて、こんな捕り物を続けている敏腕刑事も、帰宅すれば愛すると妻と生まれたばかりの赤ちゃんが待っている善良な夫であり、父である。ただし、愛くるしいベビーは夜泣きが激しく妻は疲れ気味。それを気遣って、夫は懸命にベビーをあやし、泣き止むまで車に乗せて深夜の街をドライブするなど、かいがいしく働くのである。

そんなある朝のこと。なぜか子どもが息をしておらず、それに気づいた妻が絶叫し、錯乱する。

駆け寄った夫が救急車を呼ぼうとすると、今度は一転、妻は凄まじい形相で拒絶する。

「イヤ！　電話したら、私は死ぬ!!」

「子どもはもう死んでるんだよ」

ははあ、この映画、ネグレクトの次は「突然死」なんだ。今の私の職場じゃ珍しくもない、食傷気味の話かい？などと思っていたら、物語は、あっというまに核心に向かって突っ走る。

「遺体とこの子をすり替えてきた」

刑事の決断だ。

2 組の親子は、ここへきて大きく交錯するのである。

特殊の中にある普遍

さて、実の親から子どもが切り離さ

れることで生じる悲喜こもごもの映画は無数にあり、本連載でもいくつか取り上げた。たとえば「八日目の蝉」は、誘拐犯が子育てをするという設定だったし、「もうひとりの息子」は、2 組の夫婦の子どもが取り違えられる話だ。すると本作は、両者を足して 2 で割ったようなものかも……。

それにしても、どうしてまた、こんな特殊な設定をしなければならないのか。物語世界に入りそびれながら考えていて、はっと気づいたことがある。それは、特殊な状況だからこそ、普遍的な姿を浮き彫りにすることができるということだ。

「愛する子どもを失ったのに、この上、妻にまで死なれてなるものか」と思いつめた刑事の、前後を失い常軌を逸した行動に妻はどう反応するのか。固唾をのんで見ていた私は、不条理に納得せず困惑する彼女の言動に、ある意味、胸をなで下ろしたのだが、もう一組の夫婦の反応も、なるほどと思える内容だった。何しろ、朝起きてみたら、息絶えた子どもがそこにいるのである。薬物依存の DV 男は、預かり知らぬ乳児虐待で逮捕、拘留されるなんてまっぴらだと罪を免れるべく奔走するのだが、パートナーの母は、瞬時に一つの確信を得て、「あの子は生きている」と口走る。

「馬鹿もん、死んでるじゃないか！」

「死ねば、顔つきだって変わるんだ」

夫はぐだぐだ言う妻を尻目に死体を遺棄し、狂言芝居を打つのだが、彼女は、それを茫然と拱手傍観する。

＊

気がつくと、私もこのあたりから次第に映画の世界に入り込んでいた。

「あんな夫婦に育てられるより絶対幸せだ」と刑事の夫に説得され、戸惑いながらも母乳を与える妻。だが、ある夜彼女は、子どもを乗せたベビーカーを道路の真ん中に置いて通りかかった車を止め、ドライバーに必死の思いで掛け合うのであった。他方、DV 男の妻は、逮捕されても「あの子は死んでいない」と繰り返し、挙げ句、病院に送られる。

では普遍性とは何か。簡単に言えば、男は問題解決に奔走し、女は感情に身



をさらすということだ。

まだ映画を見ていない人のために、ここで結末を書くわけにはいかないが、短絡、保身、浅知恵、もしくはそれら全てが当てはまるとも思える男の行動とは対照的に、生死を問わず子どもと分離された母たちは、否応なく湧き起こる自らの感情に抵抗などしない。結果、激しく翻弄されて破局を迎えもすれば、思いもかけず強くもなるのである。女性監督だからというわけでもないのだろうが、本作は、対照的な 2 人の女性に対照的な結末を用意しつつ、そうした母の姿を表現させている点で納得させられるものであった。それにしても、男が気づくのは、いつも遅すぎる。

なお、本作は最後に再びある種の児童虐待を登場させることで、完結するということも付け加えておこう。

＊ 2014 ／デンマーク

＊鑑賞データ　2015/05/24　TOHO シネマズ　二条

＊公式 HP http://www.yurikago-movie.com/

＊ Twitter への投稿　http://coco.to/movie/38779

＊題名を　click すると本文へジャンプします。

＜これまでの連載＞

第 1 回　プレシャス
第 2 回　クロッシング
第 3 回　冬の小鳥
第 4 回　その街のこども
第 5 回　八日目の蝉
第 6 回　いのちの子ども
第 7 回　ラビット・ホール
第 8 回　サラの鍵
第 9 回　少年と自転車
第 10 回　オレンジと太陽
第 11 回　孤独なツバメたち
第 12 回　明日の空の向こうに
第 13 回　旅立ちの島唄
第 14 回　くちづけ
第 15 回　もうひとりの息子
第 16 回　メイジーの瞳
第 17 回　ファイ
第 18 回　思い出のマーニー
第 19 回　ショートターム

コミュニティと集団精神療法
（　1　）

藤　信子

ここ数年大学院生とエルサルヴァドルの1980 年代の内戦時代に書かれた論文を読んでいて、「心理療法が始まるまで（9）」に私に、仕事と人の発達について考えさせてくれたことを書いた。30 年以上も前の論文、そして言語はスペイン語だったものの英訳版を，今頃読んでいるのはいくつかの理由がある。始めに、この Martin-Baro の論文集“Writings for Liberation Psychology”（1994）を手に取ったのは、私自身が近頃のPTSD に対する医療の世界の捉え方に充分納得していない(「心理療法が始まるまで(5)」)ところからだった。Orford(2008)のラテンアメリカの解放の心理学について書かれた箇所に出会い、欧米の従来の PTSD を「医療化」「個人化」する考え方ではない方向に関心を持った。そして Martin-Baro の論文を少しずつ読む中で、エルサルヴァドルのそして多くのラテンアメリカ諸国の 80 年代の状況を考える時に、却って私たちの国、社会の特徴が見えてくるという体験をしている。

例えば先日読んでいたのは，当時のラテン

アメリカの労働の社会的配分は、現実の秩序を定義し、そして法制度を支配階級のニーズに合わせて作られていること、また雇用体系が社会階級の地位に結びついているということだった。社会階級という概念自体が、現代の日本人にとってなかなか分かりにくい上に、社会的階級と仕事が固定する、というのはどのようなイメージかと言う話になり，院生から江戸時代の「士農工商」みたいなものだろうか？とか資本家が生産手段を独占し、労働者を搾取して余剰を産むことを考えたら良いだろうか？という質問があった。私のイメージでは、「士農工商」は武家が作った社会制度を維持するためであり、武士が生産手段を管理はしていても，全てを所有していた訳ではない。そもそも武士階級もその制度の中で管理されていたのだと思う。西欧の資本家の出現・資本主義社会の成立と、ラテンアメリカがスペイン、ポルトガルによって植民地とされ、征服した宗主国の子孫が先住民を抑圧して経済手段、政治魔で独占していたような体制は、少し違うような感じに見える。論文を理解するために、そのような話をしていくうちに、それぞれの社会の特徴が少し見えて来るような気がする。社会体制を理解するとまでは言えないが、自分の住んでいる社会が私たちの行動に影響を与えているということを理論として分かっているけれど、実感できるのはこのように社会制度の違う国のことを見る時に可能になることがあるのだと感じる。私にとって、自分のいる社会を相対化して考える機会になっているから面白い。

私たちを取り巻く社会について考える方法については、いろんなやり方が考えられるかも知れないが、私はグループで話し合う（集団精神療法）方法を実施する中でも自分と（その意識と）社会との関係を考えている。個人は、自分の中で家族、地域、文化の中の対人関係の歴史を受け継いでいると同時に、現在の個人を取り巻く職場、仲間、地域社会、政治などと相互に関連し合っている。そして集団精神療法というのは、この対人関係の歴史（「内のグループ」）と取り巻く社会的環境（「外のグループ」）を語り合っていると私は考えている（藤　2011）。集団精神療法は精神療法であるから、自分が苦痛，悩みを感じていることについて話し合うのだけれど、私の場合はいろんな話をしながら、自分の社会的な環境との関係や、自分の中で受け継ぎ作ってきた関係の特徴を見ることで，自分の苦痛、悩みについて見ることができる。もちろん、そこには安心して話せるための構造が必要だけれど。

私たちの行動が、社会環境との相互作用との中で成立しているということを、どのように見ることができるかという方法論については、短いスパンで考えることができるのは、行動分析の三項随伴性を見ることでできるだろう。しかし、行動のスパンの長い場合や広い場合は，実験をから考えるこの方法では難

しい。環境，制度と個人の行動、意識との関係を考えることは、PTSD の予防やケアにも通じると考えられるが、グループで話すというアプローチは、それを可能にすると考える。

Martin-Baro は、イエズス会の神父であり、ラテンアメリカにおける解放の神学の実践をする中で、労働者や農民の苦しい生活からの解放と言う視点から，心理学のあり方も見直した。論文を読むと、自分の見る視点は、社会のどの部分を見て考えているのかについても，考える必要があることを教えられる。コミュニティ心理学者は改革者であるように、と言われるが、誰と立場を共有しようとしているのか自覚することが大事なのだと思う。自分の研究や臨床が基づく理論が、どのような対象の在り方を基礎として見ているのかに自覚的であるために、これから時々事例も見ながら、社会的相互作用をどのようにとらえているか、そしてそれはどのような立場から見ているのか、についてこの欄で考えていこうと思う。

文 献

藤　信子（2011）私の・外のグループ、内のグループ．集団精神療法 27（2）112－118

Orford, J.（2008）Community Psychology.、Challenges, Controversies and Emerging Consensus. Chchester,, Wiley

Martin-Baro,I. , Aron, A. and Corne(ed.), Writings for Liberation Psychology. Cambridge, Harvard University Press.

蟷螂の斧

第二部

トークライヴ2001

第五回

団　士郎

仕事場D･A･N／立命館大学大学院

この連載で何をしたいのかを改めて考えてみた。よく言われるように、世の中の出来事の移り変わりは繰り返しだ。テクノロジーの革命的変化は否定しないが、それを享受する側の人間は、怠惰になったりする傾向はあっても、大きく進歩した事実はない。変化はいつも外に起きていて、人間の内側にはそれ程起きない。

だから外界に次々起きる物的変化や、流行の言葉を追いかけていても、大したことは何もない可能性がある。無論、大したことがしたいかどうか、起きて欲しいのかどうかにも議論の余地はあるが。

私には、同じ事を泡（アブク）のように繰り返すのではなく、ささやかで良いから次の一歩を刻んでみたいという欲望が強い。だから言葉ひとつとっても、お約束のラベルのようなものを次々合唱する業界人になりたくない。世間が言うことも、業界人が口を揃えることも、心の中で呟く昨今の言い回しも、皆、流行の類型である。

こんなことを言いたくなる理由は、多くの人たちが一所に留まって事態を深めるほど、そこにはいないからだ。誰もがつぎつぎ移ろって、さっさと居なくなってしまう場所に、何かが根ざしたり芽吹いたりはすまい。一生懸命ではない、一所懸命が言葉としては先なのだ。

14年前の日々、私が記述していたものは当時の主観的現在だ。そして今も又、今から１０年後から見れば、過去と呼ばれる主観的現在を記述している。比べてみると過去も現在も大した違いはなさそうだ。

常に私はその時の現在にすぎない。現在は、いつもその時の自分でしか語れないということだ。なのに１０年経ったら、「過去」という言い方で今のことを語る。

テクノロジーに関わって何かを論証していたなら、その後の１０年間に新しいことが発見されて、昔の話は陳腐化しているのかもしれない。しかしそんな中味ではないから、修正したり言い繕ったりする必要もほぼない。私はそんなことを記したいのではなく、時代の事実、現在の主観を述べてきた。それが１０年経った今の私に、何に見えているのか。１０年の時間が何を及ぼすのか、そんなことを考えたがっている。

樽詰めされていた言葉の封をあけて、空気にさらして、今の自分が味わう。それは昔話とは違うのではないか。なつかしいだけの過去話などしたいと思わない。「今、だろう」といつも思って生きている。今が一番面白い。その理由は、沢山の振り返ることが出来る経験を自分の言葉で重ねてきたからだ。

誰かに借りた言葉でその時々をやり過ごすのは、ただの消費者でしかない。そこで何かを見つけることも、気づくこともないだろう。そうではなくありたいと思ったとき、一つの方法として、自分の１０年前の言葉を、自身で吟味するのは面白いのではないかと思ったのだ。

2001年7月

（１４年前）

07/01　日曜日、午後から関西カウンセリングセンターで家族相談士養成講座の講師。会場に川上範夫さん（奈良女子大）が待っていて久しぶりに対面。たいへんな事態のなかでよく生き延びたものだ。受講生65人だが、申し込みは120名を越えたと聴くと、すごいなと思う。センターの常連顧客群がそれだけあるのだろう。

講座のデモンストレーション面接にボランティアで出てくれたDさん。結構たいへんな情況を抱えていることが判明して、どう聴いたらいいものか少々躊躇する。あっという間の3時間はいつものこと。

終了後、受講生のなかにいたNHKの人が、夏休み中の番組出演の打診にくる。企画が通ってタイミングがあえばと答えておく。

旭屋書店で中村正さんの新刊をみる。なかなかきれいな装丁の本である。

川上さんとはそれ程親交があったわけではないが、同時代の業界人。大学が絡んで勢力争いがスキャンダルの様相を呈していた。私は探偵ではないので、真偽などしらない。裁判官になるか、弁護士になるか、検察官になるか。姿勢は個々人で決まっているような気がする。

Dさんは遠方から参加していた人で、これをきっかけに、KISWEC（京都国際社会福祉センター）の通年訓練にも新幹線で毎週通ってきた。人が学びに動機づけられる要因の一つに、個人的事情が大いにあるなと思った。

07/02　産業社会学部の授業12回目。今回は技術と人間をテーマに「人間関係論」。終了後、研究室の床で1時間眠る。起きだしていつものレストランでカレーを食べてクラスターに。村本さんのグループワーク、参考になるところあり。その後、三グループに別れて話し合い。ついつい私が話してしまう。原因のひとつはUさんだったかも。いろいろたいへんな情況での通学だときいているので、気遣ったのもある。終了後、教員三人で打ち合せと雑談。中村さんにサバティカル（一年の研究休暇）の話があるらしい。しばらく延ばすそうだが･･･。

大学院がまだ、今の全体体制に固まる前のことのように思う。忘れてしまっている事も多いが、変化し続けているのだなぁ。中村さんはこの翌年だったか、サヴァティカルで一年シドニーに滞在。その間の助っ人に、先端研の立岩真也さんがクラスター担当で来てくれた。

07/03　連日熱帯夜だ。クーラーをかけて寝ている。同志社女子大は今日が前期最終講義。今年度いっぱいで終了にするかなーと思いはじめている。コスパからいうと、時間を取られすぎるのである。でも、レポート読んだり、顔を見ていると可愛いしなぁと思ったり。夜の家族療法訓練には、久しぶりにアンコントローラブル・チルドレン登場。父親の情けなさと妻の変な自信はパターンのような気がする。

火曜日午後は新田辺の同志社女子大で「ユーモア特論」の授業。その後、夜は伏見桃山でKISWEC家族療法訓練の通年コースを担当。それに、午前中、依頼のあるときには大津家裁で調停の仕事を入れていた。今考えると、よく働いている。五十代半ば、張り切っているなぁ。

07/04　予定の少ない水曜日。コロラドで「木陰の物語」の下書き。なかなか決まらなかったが、この線でいこうと決心して描き始めると二時間。仕事場にきて雑用を片づけていると、Nが来る約束の時間になる。1時間半ほど、大学の話や近況の雑談。6時からはF君がケースカンファレンスに。今日は彼自身の出身家族について考えたいと話し始める。ルールをきちんと守って、節度を持ちすぎたために感情がどこかに消えてしまった家族の物語だった。今、脳梗塞で入院中の母親の病室が、彼が婿養子に入ったF家のお産を迎えた時の病室と、余りにも違って･･･と呟く。

彼の父親は妻の病状について、医師に詳しく説明を聞いたりもしない人だという。教員カップルの二人の息子が、故郷によりつかない。彼も家を出たかったという。地元公務員を退職して、婿養子に入ってフリーターとは奇妙な選択だ。

連日、いろんな人にいろんな役割で会っていた。今もまだそういう傾向はある。しかし、そこここでパートタイム労働をしている気はない。むしろ、自分を浦島太郎化させないように、様々な切り口でモニターしている。蛸壺入り専門家にならないように、業務全般をデザインしているつもりだった。

そして今、その目論見は概ね果たせているように思う。それは、この時期の働き方と今が、それ程変化ないからだ。たいていのまがい物は、説明は大げさな割に続かない。あれは何処に行ったの？と言いたい事象は多い。しかし私の場合、ここに書いていることの大半は、現在も進行中である。

07/05 「木陰の物語」のペン入れの時間が、締め切りまでにどう探しても見つからない。やむなく仕事場泊まり込みで仕上げをする。久しぶりだ。翌朝は、起きてそのまま相談室に。このところ新規相談の予約が減っているので、まぁなんとか･･･と思ったらやっぱり予約ゼロ。昼食のついでに書店をのぞいて5冊購入。趣味的なものばかりだ。「シーナ映画とコーキ映画」高間賢治著、「こんな映画が、」吉野朔美著、「プラハ旅日記」山本容子著、「来て見てトルコ」小林けい著。そして「地球の歩き方 21・イスタンブールとトルコの大地」。

この夏休み、トルコに出かけてみようかと思っている。夫婦二人珍道中にするか、久しぶりにパックツアーの参加者になるか、まだ思案中である。

紙司・柿本から、DAN通信用の紙のカットが出来ましたと連絡あり。夜はぼむの例会に大阪へ。今日の集合は徹底されていなかったのか、みんな忘れている。篠原と坂口の三人だけ。それなりに面白く話して過ごす。

別居、自活をはじめた娘、大学を退学することになりそうな娘。各家庭でいろいろなステージが始まる。

吉野朔美さんは私の新刊「家族の練習問題6」に原稿を寄せてくださっている。山本容子さんのリトグラフが一点、我が家の玄関に架かっている。プラハにはこのしばらく後に妻と二人で旅をした。DAN通信を出していたこの時代、ツイッターやfacebookはまだなく、ホームページ作りが主流だった。なかなかそこには手が出ずにいた。マンガ集団「ぼむ」のメンバー、それぞれの家庭事情は、この後の10年で大きく変化することになる。今なら全て分かる変化を、この時点には何一つ知らない。人生はそういうものなのだ。そして次の 10 年もきっとそうなのだ。

07/06 新潟プログラムの準備をする。夕刻のANAに乗るまでにやったらいいのだから、比較的ゆっくりしている。土曜日は三十人、日曜日は二十一人の受講生とのこと。新作・木陰の物語（第十七回）を修正して完成。「少年育成」誌に発送。

八条口から空港バスで伊丹に。レストランで胡麻冷麺をたべて、スタバで金剛出版から出したいと思っている本のプランを練る。定刻発の519便、お婆ちゃんばっかりである。なんかそういうツアーで埋める時期なのか。新潟空港から宿舎の厚生年金会館に。ロビーにKさんが待ってくれている。騒がしい居酒屋風の店で、食事をしながらいろいろ話す。つい、相談を受けてしまっている。

木陰の物語17回だと！現在183回だから、よく続いているものだ。「月刊・少年育成」は2011年に休刊になってしまったが、連載は他で続いている。

金剛出版から出したいと思っている本とは「ヒトクセある心理臨床家の作り方」。まだ出ていない時期なのか。

この後も数回、新潟を訪れるようになったが、地域継続プログラム実施の試行錯誤期だといえる時期である。

07/07 さあ、新潟プログラム。第一日は初心者のための講座。話と実習と、ビデオで。30人弱の参加で、初めての人が圧倒的に多い。入門プログラムを繰り返すことの意味は大きいと思う。理論や技法がどんどん進化して、追っかけている人以外、手出しできなくなるパターンは駄目だと思う。なかなか好評裏に一日目終了。

世話人Kさん宅で打ち合せ。こどもたち小学校3年と1年の男兄弟と一緒に回転寿司屋に。おいしい店で一皿100円ではない回転寿司。8時すぎにはホテルに戻って休息。

07/08 第二日は継続的に学習している人たちが中心。順調なプログラムはこびだったと思う。今回は昨日の初任者、今日のリピーターともに、医療関係者比率はそう多くなく、標準的な受講者群。みな、地域で力のある専門家

だという。昨日の感想文を読んで、絶賛に近い反応に喜ぶ。来年の日程の仮押さえも。

この頃から現在に至るまで、地域で家族理解WS（家族療法WS）の継続開催に知恵を絞ってきた。各地で事務局を担ってくれる人たちの苦労を、それ程分かっているとはいえないが、とにかく結果は出る。続いている地域、立ち消えになった地域。

その分析に関心はないが、私的に継続の秘訣は思うことがある。それは受益者自己負担の原則である。予算の組まれたWSは皆終了し、再開することはない。自分たちのお金を出し合い、週末休日に、有志が事務局を引き受けて準備したモノだけが、10 年を超えて続いている。

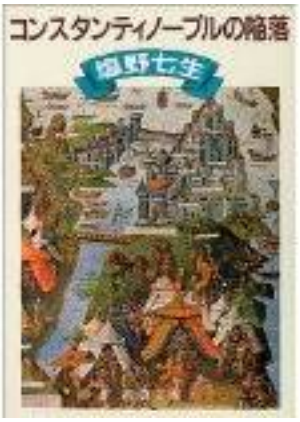
07/09　文学部「人間関係論」の授業最終（来週は群馬行きなので休講）。終了後拍手がわく。何度目かだが嬉しいものである。研究室でゆっくりしていて、院の授業まで過ごす。

今日は私が家族療法の訓練ビデオを使って、あれこれ話すことになっている。三時間あるので、ゆっくり目にみんなに家族を鑑賞してもらった。終了後、次週私が不在のプログラムや、秋からのことなど話す。文部科学省へ提出の私の業績書も完了のようで、中村さんのペーパーワークに感謝する。

バスでいったん仕事場に戻って、こと葉に電話。今週末群馬に行くが、レッスンとの兼ね合いで会えるか打診。火曜日夜はレッスンだそうだ。夏休みの帰省も聞くと八月二十日頃になるらしい。二十五日からは我々が海外旅行に出る予定。典子はちょっと迷うが、結局行くという。

娘はまだ舞台芸術学院の二年生。何も決まってはいないが、合っていた道なのだろう。熱心に学校以外のレッスンにも出向いていた。一年目、女子学生ばかりの管理人の居るマンションに住むよう手配したのだが、その夫婦からがんばりを誉めて貰っていたことを思い出した。そして二年目は一人暮らしのマンションに引っ越したのだった。

07/10　女子大の春学期が終了した。夏の後半の旅はイスタンブールに決めてH. I. Sに。窓口の近藤くんは、昨年カトマンズの旅を薦めてくれた担当。トルコ航空直航便は空席待ち、KLMなら確定で一応そっちを確保しておいてキャンセル待ちにする。八月二十五日出発確定である。帰国は航空会社がどっちになるかで多少差がある。その後、夕刻まで仕事場で月刊DAN通信作り。思った感じに仕上げる。kiswec訓練は、子供のいない中年夫婦。こなれたカップルだと思う。よくも悪くも防衛が上手。世間知、如才なしをみる。



イスタンブールは一週間、異国の街を堪能した。塩野七生著「コンスタンティノープルの陥落」をその街角の歴史遺産に居ながら読書する贅沢を体験。これはなかなか楽しいものだった。「読んでから行くか、行ってから読むか」の究極的折衷。

07/11　今日の午前中までがゆったり気味の隙間だった。午後から東大阪市立金岡中学校で教員相手の講演。紹介してくれたT先生は純朴な人。しかし60人くらいとの触れ込みながら、実際は20人弱。教員が駄目なのはこの選球眼の悪さにあらわれている。ここは選んで聞きに来んかい！バカ教師ども！！と思う。本が8冊売れたのだから、来た人は皆思うところがあったのだ。終了後、校長室で1時間ばかり続きの演説をしてしまう。でも教頭は、実はわからない人なのだと思う。無駄だったかもしれない。

大阪にきているので、いどむ（次男）に電話すると、相談があるから会いたいというので仕事が済むのを待つことにした。一日中あちこち営業で出かけているようで、川西で電話に出た。今から会社に戻ってからというので、大阪駅のカフェで、来週の仕事の段取りをあれこれ。ハードスケジュールなのに準備がまだまだ。お茶を飲んで、書

店でめぼしいものを見繕って、そのあと梅田新道交差点の会社の前で待つ。我ながら変な父親かも。会えたのは21時15分、しゃぶしゃぶ屋で食事をしながら健康問題（メンタルではなく、痔だ）について相談を聞く。

教師を一般化して語っても意味はないが、教頭の集まりや管理職の研修会に呼ばれての感想を言えば、総じて根拠もなく横着な人が多い。生徒・子どもを相手に過ごし、教員だけのコミュニティでの少々、疎まれ者をやっていると、そうなってしまうところがあるのだろう。

どんな業界にも少なからずあると思うが、井の中の蛙にならないように、外の世界に目がいくように心がけておくのは重要だ。

一昔の大学人だって、自分で言ってる「学者バカ」なんて謙遜じゃなくて、そう言っていたら許されると思っている甘えだ。

振り返ってみると、こんな風に仕事場近くに出かけて、大企業勤めの次男に会うのは、後にも先にも一度だけだ。

07/12　朝、相談室は新規ケースと経過のある不登校改善カップルの二件。終了後大津へ。家裁で新件の調停一回目。いわくつき、なるほど。そして一度仕事場に戻る余裕などなく、草津の勉強会に。フリートークで、盗む子、嘘をつく子の話。

07/13　タイトなスケジュールを綱渡りのようにこなしている。準備時間に制限が出てきているのがきつい。朝はいったん仕事場に出て、今夜のトーク2001の準備。そして大津に戻って家裁に。調停二回目の親子である。穏やかを装っていた爺さんも、時間が経つと正体があらわれる。日本語のあいまいなこと極まりない一家。孫娘の躾ひとつまともにできないで、音を上げて、自分の娘を批判する。いい歳して何を言ってるんだと思う。結構暇がかかって京都に戻る。

結局、冊子は二つ折りにできないまま持ってぱるるプラザに。長谷川さんと支配人に手伝ってもらって完成。いつもよりちょっと少ない目の五〇人弱の参加。暑いさなかに上出来である。典子と京都駅ビルの回転寿司を食べて帰宅。

調停の仕事を5年で辞した。だんだん新件を受けなくなってフェイドアウト的に最後にした。一番の理由は、ここに訪れる人たちが真面目ではないと思ったからだ。

嘘つきなのである。言い方を変えれば、それを自分の言い分だと思っている。ばれなければ何を言っても良いし、批判される筋合いはないなんて思っている業界だった。

いろいろ思うことはあったが、カウンセリングの世界で長くやってこれらた理由の一つは、それでも何とかしたいと願いを持って居る人とあえたからだ。

白黒付けるという結論がつまらない。そういう意味では調停は悪くないのだが、弁護士が入ってきて、裁判にしてくれと言っている方も、言われている方も、人間としていかがなモノかと思うような司法内ストーリーしか持てない人たちが多かった。

流儀が違うのだと思うから、そのゲームからは降りたいと思った。

07/14　教員のための家族理解ws三回目。サブシステムがテーマ。話しながら、時代が携帯電話で自他境界を壊しつつあることに気付く。一日楽しく学んでいただいているようで安心。18:00 までを長丁場だとも思わずやりきる。いったん仕事場に戻って、明日からの群馬行きの準備である。メールの返信もだしておかなくちゃ。いどむに約束したことも問い合せて調べておかなくちゃ。

当時、電波という侵入物に学校、教室という場が、何の知恵も持たなかった。受信機である販売物に関する取り決を「校則」として語っていただけだ。

今振り返れば分かることだが、ケータイ電話は、ケーターからスマホへと進化し続けた。一方、校則は力もないまま、陳腐な後追いを今も続けている。

コンサートホールや劇場空間はスマホの電波が圏外になるように設定されているところが増えた。そういうことは可能なのだ。

規制緩和と野放し、やり放題の区別をつけないでどうするのだと思う。

07/15 九時三十四分京都発のひかりで東京へ。新幹線乗り継ぎで、高崎から前橋に到着。S井さんに迎えられて「ぐんま思春期研究会」の会場へ。

近年ますますその印象を強めている、親の側の自立援助力低下を、具体事例をあげながら話す。終了後、S井さんの車で伊香保温泉までドライブ。一時間ほどの行程。二十年ぶりくらいの伊香保だ。PCAの第一回合宿で平木さんと初めて会ったのがここ。

夕食後、十人で家族面接ビデオを見ながら事例検討会。親子に見えず、夫婦に見えない三世代家族。施設入所少年の一家。母親の非常に不活発なのが目につき、抑鬱を疑うが、はたしてそうであった。

二件目は緊張感のかけた母子三人。父親は直前に欠席。活発でいい加減な家族。小学校六年生で繰り返される万引きがあり、半年ばかり日に三本の煙草をすっていたことがあるとか。なんだいそれ！といいたくなるエピソード。自分に見えることがことごとく意味を持っていたりするので、まんざらでもない気分になる。



07/16　八時頃おきて朝食に。部屋で児童心理の校正。今日、明日は群馬県主催の家族療法勉強会。最終的に91人の参加申し込み。さて実際はというと、欠席者もある一方、申し込んでなくて当日参加もあり、結局90名。すごい人数の会になった。企画者は大満足だろう。この中から地域ネットワークのキーパーソンになってくれる人が輩出してくればいいのだ。レクチュアーの後、デモ面接にT君が挙手してくれて開始。一日目にぎやかに終了。中央児相の事務室から「児童心理」校正原稿をfax送信。その後いつものロイヤルホテルのレストラン個室で、養護施設職員４人とIさんで食事。9時半頃までサービストーク。ホテルに戻って1時就寝。

07/17　7時半過ぎに起きて朝食。公所主催の研修会なので、9時開始。しかしなかなか定刻には集まれない。30分ほど調整トーク。一徳ビデオを見て考えるプログラム。午後は事例提供して、検討。順調に終了。時間にゆとりがあると、少々くどくなる癖がある。さて80人ほどのなかから連続的に学ぼうとする人が何人あらわれるか。

駅に送ってもらって東海道新幹線乗り継ぎを尋ねると、米原一岐阜羽島間集中豪雨のため現在運行を見合わせているという。なんだ、なんだと思いつつ東京へ。到着時間丁度に運転再開の報せ。運のいいこと、一応指定席券を購入したが、ホームにいた出発待ちひかりの自由席にのる。その結果、通常よりも早めくらいに京都に。明日は夕刻からの仕事。

群馬での継続WSはここから始まった。数年通い続けることになったし、そのメンバーの人たちが各部署でリーダーになり、管理者として組織を活性化させていった。今も音信や交流のある人もある。群馬で児相研セミナーも開催された。

07/18

怒濤の一週間が終盤を迎えている。なんとか乗り切った。今夜は門真に行って、明日嵯峨野高校で出張三昧は一区切りだ。

地下鉄をおりたところで、引きずっているトランクの上に置いていたカバンが落ちた。いやな予感で中からポータブルdvdを取り出してスイッチを入れたが、映像がでない。あーあ、壊れてしまっている。液晶は落下に弱いという話をきいたところなのに、ものの見事にである。しかしその時のがっかり具合が低レベルであったことにも驚く。モノで気持ちがゆさぶられる度合いがホント小さくなった。ただ、修理に持っていかなくちゃならない。その手間が面倒・・。そうだ、図書館の本も返却しなくちゃ、督促がきている。門真の勉強会の準備をしていて気がついたら、出発予定時刻を過ぎていた。あわてて京阪電車に。寝屋川駅で同じく遅くなっていたKさんに鉢合わせ。Yさんは、駅前の車中で待っていてくれた。

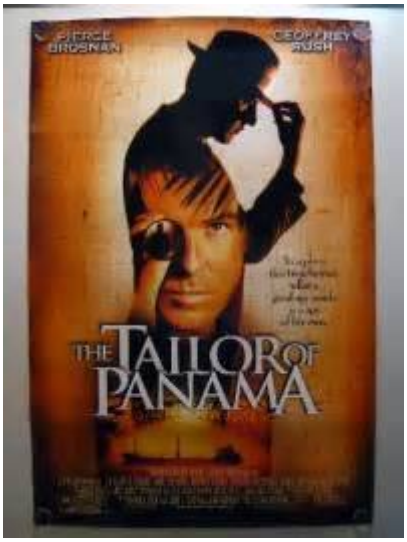
「必要ですね」と、携帯電話の番号交換する。それにもかかわらず後刻、登録されていないのを発見。まったく、手持ちの道具ひとつまともに操れない。

待っててくれたYさんは、結婚して関東に移動した。そして10数年後、神奈川のNPO主催のWSの講師として呼ばれたのだが、事務局は彼女だった。

長期展望での取り組みには、関係者の異動や、転身も含まれている。そこにしかないのではなく、他の場所にも、更に時が経ってもなのである。社会システムに変化を処方するとは、そう言う息の長い繰り返しの営みだ。

07/19　朝は相談室。このところ、どの曜日も新規ケースは減っているらしい。暇なのは結構なのでゆっくり、アレコレ雑用を片付ける。午後は嵯峨野高校PTAで講演。高校山岳部時代の同級生Hさんの依頼。Kくんの娘も通っていた「こすもす科」がある高校だ。女生徒が7割近いそうだ。快調に終了して、仕事場に戻ると芳賀書店からの封書。変な感じであけてみると、出版ができなくなったという断り。なんということだと思う。自社事情と社会情勢ばかり書いた挙げ句、こちらの作業が遅いのでこうなったみたいな言い回しに呆れる。これでは出せたとしても、とたんに倒産なんてことも考えられる。このところ、出版話は立て続けに不調である。文春新書が快調なのがうれしい。出版の不況は、こんな無礼なことを平気でやるようになってきているのか。

壊れたDVDの修理依頼に久々の自転車で。寺町のタニヤマ無線でDVDソフトを眺めたりして楽しむ。久しぶりにゆっくり遊んだ気分。上映時間を調べて、**「テーラー・オブ・パナマ」**を観に。狙いすぎかなと懸念はあったが、案の定、失敗だった。ジョン・ブアマン監督に3000点のつもりだったが、はらたいらに3000点にするべきだった。ともかく予告編は楽しかった。今月末は映画三昧にしたいものだ。



今では通じない時代の冗談。はらたいらに3000点は、巨泉のハウマッチという番組のパターン。

出版話はこの頃からドンドン苦しくなって今も進行中なのか。この時、計画して完成間近だった本「ちんちんがやってきた」は別の出版社から出た。そして、絶版にもならず、今もロングテール商品としてネットで見かける。

07/20　海の日。超久しぶりに約束のない一日。マイペースで過ごせる。金剛出版の石井さんから、性教育本の出版のことで、見てみたいとEメールで言ってくれたので、「一癖ある心理臨床家の作りかた」の連載コピーと一緒に送る準備。明日のWSのレジュメ。月曜日の茨木天王小学校講演の準備。

07/21　教員のためのWS第4回。終了後、いったん浜大津の戻って準備をして湖西線マキノ駅へ。ぼむの釣行である。みんなは既に今日一日やっている所に合流する。白谷温泉八王子荘、ってどこだ？二十一時過ぎに駅について、タクシーを呼ぶと、「十五分ほどかかりますけど、本当に待ってますか？」と言われて驚く。人気のない駅前で、カメムシの飛んでくるのをはらいながら待つ。考えてみるとフライロッドに触るのは前回の釣り以来。何の準備も工夫もない、最低のフライフィッシャーである。着いたのは何とも言えない宿。「老人憩いの家」と看板。宿泊客なんていない。夕刻は、温泉だけに入りに来た客でごった返していたらしい。朝霧駅の花火大会事故のニュースをきいて、想像力のない人間ばかりの不注意時代になっていると思う。素人ばかりで、勝手な思いつきイベントで人を集めたりしていると、こんな事になるのだ。

07/22　六時起床で、知内川の支流八王子川上流で釣り。何もかからないし、釣れない。場所を変えてさらに少々。しかしまったくかかる気配なしに近い。それでも坂口と、川辺で四方山話をして楽しんでいる。いい気分だ。小物が何匹かあがった人もあったが、釣果のないまま陽が昇って終了。朝食後ゆっくりして、ドライブを経てブルーベリーの里のレストランに。なかなか美味しいランチ。こんな山のなかにこれだけの集客は、立派なもの。野々口に乗せてもらってケーキ屋に寄ってから帰宅。夕食後、「千と千尋の神隠し」のレイトショウにいって驚く。なんとチケット完売、売り切れである。アーカスに入れないなんて、どういうことだと思いつつビデオを借りて帰宅。

今も、釣り旅行と称した温泉旅を漫画家仲間と継続中。フライフィッシングはイメージとして美しい。でも、自然渓流で釣れるほど上達しなかったし、したいと思っても居なかった（私は）。テンカラ竿で釣れない川に、二三度キャスティングして、ぐだぐだ喋って、魚を追い散らしていたら十分だ。いつも言うように、キャッチする前にリリースしている。彼岸に殺生するモノではないと南光さんは語るが、私は年中殺生しない。できない。

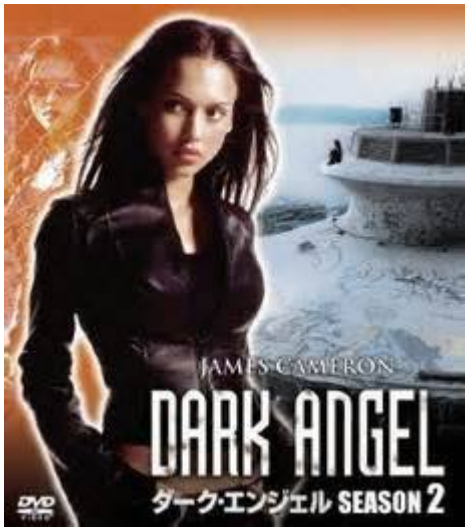
40年付き合いの漫画家親父達と、10年以上フライフィッシング。例会では基本的に毎月会う。継続は力なのである。

07/23　朝から茨木市の天王小学校、校内研修会に。勉強会にきていたY田さんの斡旋。校長にあって話すと、春日丘高校の同級生T君だという。記憶も面識もないが向こうは名前は知っていた。茨木市のY口やK瀬、H田等の連れである。おもしろおかしい二時間を過ごしてもらって終了。

あまり暑いので、そのまま京都に戻る。仕事場 D·A·Nに戻って、戸口の「管理会社にお電話下さい」の張り紙に首を傾げたが、ドアを開けて納得。玄関入ったところ水浸しである。電話で聞くと、五階の住人の洗濯機の蛇口が外れて水道が全開のまま水びたしになった模様。全くまいったなぁ･･･。管理会社の社員が掃除に来てくれて、損害について聞いてゆく。上の住人が損害を補償するという。DVDの破損、出版企画の直前オジャン、マンションの水浸し、ああこれで三つの悪いことが終了か。そう思うと、そんなに被害が大きいわけではなかったので、良かったと思ったりする。修理、修復すればいいモノばかりで、有り難い。

E県児相から虐待イベントで講演の依頼。しかし予算が決まっているという。一応、こちらの定価を話すとちょっと検討をといった後すぐ、断りの電話。あまりにも余地のない反応に驚く。遠方から二日取られて、その言い値ではあわない。基本的には自分の提示価格を守ろうと思い直す。

今日こそと思って**「千と千尋の神隠し」**レイトショーへ。思ったとおり今夜も列ができている。入場は十分できたが、時には私一人のこともあった映画館で、こんなにたくさんの人が･･･と宮崎駿監督の力に驚く。そして実際映像はまたまた物凄い。こんなイマジネーションはどうしたら湧いてくるのか･･･と絶句。宮崎作品のなかでもかなり好きな一本だ。帰宅して夜中、**ジェームス・キャメロン「ダーク・エンジェル」**（1）を観る。そこそこ面白いのだがテレビシリーズだなと思う。



講演の謝金など定価のあってないようなものだ。だから法外な芸能人のギャラもあれば、交通費に負けるような既定も存在する。

フリーで仕事を始めた頃、行けばいくらかにはなるが、断れば一円にもならない現実と遭遇した。更に、多くは大学の教員など給与保障のある身分の人が大半を占めたため、暗黙の了解として、「他にちゃんとお給料貰ってるんだから、これで来てくださいよ」と言うメッセージが蔓延していた。

これでは駄目だと思った典型が、最後まで謝金の話はしない依頼だった。過去の繋がりもあったので引き受けたものだった。

終了後に受け取った封筒を見て「そんなバカな」と思った。半日かけて出かけて、図書券5000円が入っていた。

このメカニズムが反映されて酷いことになっているのがスクールカウンセラー（SC）の世界だ。私はSCをしたことがない。臨床心理士ではないから依頼されなかったこともあるが、ルールがいい加減なのが好きになれない事とも大きく関わっている。

SCは最初、当時のカウンセリング業界（一部には、個

人開業の人や、カウンセリング料を決めて面接していた人はあった。当然そこには、当時の目安金額があった。概ね3000円～5000円だったと思う）からすると、法外な価格設定でスタートした。

カウンセリング経験の長短にかかわらず、時給7000円とか聞いた。時の勢力が後押ししていた時期だったのだろう。半日4時間で28000円。半日ずつ週二回を、他勤務との関係で一日にまとめて日給56000円。週一勤務で月給224000円だという。

これこそバブルだろうと思った。大学の教員が週一でSCを引き受けて、この支払いを受けていた。それに、依存的な新卒SCも乗っかっていた。

私は法外なことなど続かないし、社会の標準から外れた優遇は、必ず問題の火種になると思っていた。そして実際、ダンピングの繰り返しと、ドンドン卒業する臨床心理士に仕事をと言うので、臨床心理系大学院の教員は卒業生をSCに配置した。その結果、既得権者の年配SCは仕事が減った。と言うことは、赴任校が減らされると言うことだった。三校に行ってたものが二校に。二校に行っていたものが一校に。それは給料が三分の二、半分になるということだった。

こんな事が起きても、働いていたSCは文句を言わなかった。自分たちの身分問題を大多数が大学教員で構成された府県の臨床心理士会に委ねていたからだ。

今、SCは国家資格問題でも、給与問題でも、厳しい状況を抱えている。今だけを語れば、いろいろ事情があることだろう。私は内部の者ではないから、知らないこともあるに違いない。

しかし、忘れてはならないのは、物事の社会の中での成り立ち方である。自分にだけ都合の良いルールや仕組みが定着することなどない。

どのような制度設計や規定だと説明されても、納得のいきにくい好条件は用心が必要だ。

お金の話はみんな苦手なようにふるまう。拘っていないかのごとき見栄を張ることを日本人は過剰に世間から学ばされる。そして、世界に向けても、「金のことばかり言うな！」と気取っている。その口調で近隣諸国に上から目線の苦言を呈している。

若者達はpかねを使わない満足を希求し始めている。多くを望まないで、幸せに暮らす。自己満足は出来るだろうが、その人自身が持たされていたはずの使命感は消えてしまうのではないか。

07/24　大学院前期最終の日。午後は仕事場で「晩年学F通信」の原稿完成。「児童心理」の原稿おおかた完成。金剛出版の石井さんから、とても面白く読んでいる。さっそく「一癖ある心理臨床家の作り方」の出版企画が通ったとメール。うれしいかぎりである。夕刻から立命へ。創思館ボックスで先週のテープを受け取る。研究室で、聞き始めるが、中村さんのはなし、面白い。今日は前期最終の、全体説明。その後、勘違いで臨床心理領域の説明会に入ってしまう。Tさんはやっぱり変だと思う。学生をなめているのか、子供扱いしているのか。とにかく不思議感拭えない。村本さんが後で、ブーブー。

07/25　今日は一日仕事場D·A·Nに。コロラドで木陰のプラン。部屋の水漏れは止まらないし、クーラーからも水漏れ。まるで水浸しマンションだ。昼食に出ている間に、管理会社の人が入って天井の電気設備のところに穴を空けている。漏電していたようだ。なんだか凄いことになっている。「児童心理」の原稿完成。家裁の記録完成して郵送。19時にIさんがSVに来談。専門校で授業を始めたことや、施設利用者間の恋愛沙汰のメカニズムなど、22時まであれこれ話す。

07/26　朝、約束の時間に空調設備会社の人が来てくれる。階上の水漏れとは関係なく、排水が詰まっていたようで掃除してくれた。きちんとメンテナンスをしてくれる人に感謝である。たまたま昨日、久しぶりにアドレスを目にしたのでメールしておいたら、大学の同級生タッキから返信。

頼まれていた全国情短施設研修会にYくんを訪ねてゆく。ホテルを借りて、完全に昔型の研修会である。情短はほんとうに目的に見合う機能ができるものとして動きだしているのかどうか、分からない気がする。ないよりはある方がいい、昔そう思っていた前提を崩された記憶は今も鮮明だ。本当はこの世界で、一緒にやってくれないかという声がかかってもいいのだろうが・・・

連日、水漏れの話題連発。長い賃貸マンション利用の中で、初めてで、おそらく最後のトラブル。滅多にこういうハプニングには遭わないのだが、この時は参った。

07/27　KISWEC嵯峨野WS、出向く前に仕事場に。クーラーかけるとまた水漏れ。直っていないじゃないか。親切そうな奴だったが技術者の未熟にも困ったものだ。管理会社に電話しておく。でも今日から三日間は不在。

今回のWSは27人と少なめ。しかし、これくらいの方がなにかにつけて運営しやすい。川畑くんのオープニングトークから開始。夕刻、決定をキーワードの初期インタビュー実演と訓練。夜は例によって、22時から講師室に千客万来。

07/28　二日目。朝から一日家族作りと面接展開。小グループ、張りつきの一日。夜は少ない情報からイメージを使っての事例検討の練習。京都南部は昨日から大規模断水。川畑くんの家はたいへんそうだ。

07/29　三日目。午前中は早樫君がいつものNAKATUKAビデオを使ってセッション。午後の質問コーナー、早樫君は仏教大学の通信スクーリング出講で不在。

KISWEC家族療法訓練 STEP1，STEP2を嵯峨野の施設で合宿形式でしていたのはこの頃までだろう。施設の運営母体が変わってしまい、いろいろ変化せざるを得ない中で、新築なったセンターの建物で開催に変わった。そして合宿形式でもなくなった。その方が現代的なのだろうが、形式の持っていたのりしろ部分の良さは滅じた。



07/30　やっとゆっくり出来る夏休み。もらい物の株主優待券で**「猿の惑星」**へ。まぁこんなものだろうと思っていた程度の映画。でも納得。映画館が混雑しているのは良いが、ざわつくおばさんに注意する。

ゆっくり本屋を散歩。**ボブ・グリーン新作「デューティ」、「千尋と不思議の町」、「好きになっちゃったイスタンブール」**三冊購入。

道中スタバで「発達」の連載原稿、「知的発達障害と家族援助」の原稿案を書く。木陰の物語新作はフィニッシュして発送。

まったく郵便局の不在時の小包み対応は腹立たしい。取りに来ないなら返送するからね！が最初に書いてあるような文書を入れておくな！でも仕方ないので、同志社女子大からのレポートを局まで取りに行く。久しぶりに自転車に乗る。

帰路途上の喫茶店で開封、半分採点する。あまり内容がない。こちらの情熱が冷めてきたのだろうか・・・。

07/31　火曜日。そこそこの時間に出掛けて、コロラドであれこれプラン。女子大の採点済ませて記入。仕事場のクーラーの水は元気よく落ちる。もはや楽しみである。夜はKISWEC訓練の最終回。Uが思いのほか力のないことに気付く。若いということを差し引いても、K、S、Uと似たタイプの腑甲斐なさをKくんが抱えている気がするのはもっともだろう。女性の方がバイタリティがある。

夜中、期待してみた**「プルーフ・オブ・ライフ」**、何だか冗長な映画だった。もっと短くテンポのあるドラマにすればいいのにと思った。

今より多忙な日々を過ごしながら、夜中にせっせとDVD を見ている。好奇心と時間配分の変化なのだろうと思うが、もう少し映画は観たいと思う。

キネマ旬報を毎号配達してくれていた街の書店主が体調を崩したとかで閉店してしまい、配達されてないことにしばらく気づかなかったという迂闊さも手伝って、30年以上継続購読していたキネマ旬報から遠ざかった。そうしたらしばらくして、映画情報に疎くなっているのに気づいた。

一番顕著だったのは、機内で映画を見る機会があったとき、ほぼ事前情報がない事態だった。今から公開される作品について、何も知らなかった。

学校臨床の新展開

― ⑳スクールソーシャルワーカーが足りない ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

石を投げれば

法曹家養成の専門職大学院である法科大学院は年々受験生が減り、淘汰が進んでいるようです。今では、珍しくなくなりましたが、大学別の司法試験合格者数ランキングもよくでてきましたね。「アメリカでは、石を投げれば弁護士かカウンセラーにあたるって言うんだわ」とアメリカ帰りの人に聞いたことがあります。日本ではまだまだ、石を投げても弁護士あたる感はありませんが、ずいぶん増えた気はしますね。2014 年 3 月末時点での、弁護士数は 35,045 人です。この 10 年で１万人以上増えています。「ワーキングプア弁護士」の出現など、「大学院は出たけれど、司法試験には受かったけれど・・・」、という生活困窮の弁護士もちらほら聞きます。一方、心理カウンセラーを代表する資格として臨床心理士は、2014 年時点で、29,690 人です。こちらもまた、この 10 年で１万人以上増え、弁護士と相似形の伸び率となっています。こちらの方は、長年にわたり現在進行形で「国家資格化」大キャンペーン中ですが、何度となく国会の解散とともに見事に泡と消え去っています。いったい、どうなることやら。

スクールカウンセラー導入 20 年

さて、今年は学校現場にスクールカウンセラーが導入されて 20 年の節目

です。「黒船」にたとえられたスクールカウンセラーの導入でしたが、いまや事件が報道されるたびに、「緊急で心のケアを行うスクールカウンセラーの派遣が行われる予定」というのがセットで報道されるようになりました。学校には必要不可欠と認識されるようになってきたようです。スクールカウンセラーの任用要件は、当初、臨床心理士のほぼ独占状態でしたが、最近では学校心理士や臨床発達心理士といった他の学会認定資格者等についても任用する自治体も増えてきています。

足りない

スクールソーシャルワーカー

一方、こころの問題だけではなく、困難な社会構造的な貧困問題や被虐待環境下による育ち等を背景とした非行問題、複数の課題を有する家族など支援が難しい多様なケースが顕在化するなかで、近年、ますます福祉的な支援を行うスクールソーシャルワーカーへの期待が高まっており、2014年には国によって 2019 年までにスクールソーシャルワーカーを１万人に増やす目標も掲げられました。スクールソーシャルワーカーの任用要件はこれまで文部科学省は「スクールソーシャルワーカー活用事業実施要領」のなかで、「社会福祉士や精神保健福祉士が望ましい」としていましたが、実際には臨床心理士や元教員など多岐に渡っていました。そこで、2014 年度末に日本社会福祉士会と日本精神保健福祉協会は文部科学省あてに連名で、スクールソーシャルワーカーやスーパーバイザーの任用要件を社会福祉士や精神保健福祉士とすること、スクールソーシャルワーカーの常勤採用化の推進などについての要望書を出しています。これは、同年秋に同会が文部科学省あてに出した「子どもの貧困対策を総合的に推進するための要望」の再確認事項でもありました。文部科学省では、これらを受け、2015年度から「スクールソーシャルワーカー活用事業実施要領」を一部改正し「スクールソーシャルワーカーの選考は、原則として、社会福祉士や精神保健福祉士等の福祉に関する専門的な資格を有する者のうちから行うこと。」としています。ただ、これでは人材不足となるためただし書きもあります。「ただし、地域や学校の実情に応じて、福祉や教育の分野において、専門的な知識・技術を有する者又は活動経験の実績等がある者」ということです。しかし、原則＝福祉専門職となったことにより、今春、各地ではスクールソーシャルワーカーの人材確保が難しくなったようです。なかには大卒即スクールソーシャルワーカーになった方や高齢者福祉現場等異分野からの学校現場への参入なども当然ながらあり、「こんな若い人に・・・」「福祉専門職と言っても・・・学校の

ことは素人」という学校側の声も聞かれ、いま、ひとり職場で苦境にいるスクールソーシャルワーカーも少なくはない模様。スーパービジョン体制の確立を強く望みます。

「社会福祉士」という資格

「社会福祉士」の資格に対して「あの資格しんどい思いをして取ったのに何にも意味がないのですよ。」という人に最近、複数出会いました。2015年に実施された第 37 回社会福祉士国家試験の合格率は 27%。他の国家試験と比べると低い合格率。受験資格にはさまざまなパターンがありますが、一番多いのは福祉系の大学生の受験者です。同じ国家資格でも保育士や介護福祉士（すでに国家試験化は予定）と違い、卒業するだけでは即資格取得とはいかない社会福祉士は、国家試験も受験せねばなりません。そこで各大学ではいろいろと受験対策をしていますが・・・。厚生労働省では、合格率の大学別ランキングを示しており、そこでは合格率 100%から 0%までが明かされています。福祉系大学では学生が国家試験を突破するだけのモチベーションと学力を育むことについて、大学間格差がかなり大きいのだろうなあと思います。福祉系学部のなかの半分がうける大学は多い方で、全体の３分の１、４分の１、５分の１くらいしか受けない学校も多いのです。合格率が極めて低い福祉系大学の淘汰も法科大学院同様すすんでくるのでしょうか。社会福祉士が夢ある資格になるために、社会的価値ある資格になるためには、社会にその「専門性」が認知されなければということになるのでしょうね。そういう意味ではスクール―ソーシャルワーカーに期待。

しかし、時給でいうとスクールソーシャルワーカーの相場は 3000～3500 円。スクールカウンセラーの時給は 5000 円前後。「高い」ようですが、実際には交通費込々であったり、休暇中は無給であったり、年間契約であったり、ほとんどが不安定職場です。それに「なんでワーカーのほうが時給安いの？」

学びの森の住人たち（15）

－学校でもない学習塾でもない、〈学びの森〉という世界が投げかけるもの－



アウラ学びの森　北村真也

4. ラウンドテーブルのテーマ

これまでのラウンドテーブルで取り上げてきたテーマは、以下のようなものでした。

（2011 年度）
- 「支援」とは何か？
- 「見立て」をめぐって
- 「巣立ち」をめぐって

（2012 年度）
- 「精神病理」と「社会病理」のあいだ
- 「変化」と「変容」のあいだ
- 「キャリア支援」と「キャリア形成」のあいだ
- 「ラウンドテーブル」と「生活」とのあいだ

2011 年度は、主に私たちが普段あたりまえに思っていることの問い直しを試みました。

「支援」とは何か？これは、アウラの森にやって来た、極めて自律的な一人の不登校の女の子のことをエピソードとして取り上げました。7 人兄弟の 2 番目という彼女の願いは「一人で生きること」。ところが学校という社会は、なかなかひとりになれない世界だったのです。小学校高学年くらいから、女の子同士のグループが作られるようになり、彼女は、そこで無理にグループに入って行動することが辛くなっていきました。そしてグループから離れ、一人で休み時間に読書をしていると、今度は先生がみんなの輪の中に入れるようにと、いらぬお節介をやいてくる。彼女からすれば一人でいたいのに、家でもみんなと一緒、学校でもみんなと一緒、それが苦しくてとうとう不登校になってしまったのです。その後、アウラの森へとやって来た彼女は、自律的に学習を積み上げていきます。学校は全欠にもかかわらず、定期テストは 8 割以上の結果を出していました。私は、そんな彼女と話しているうちに、「彼女は果たして、問題の子どもなんだろうか？」という問いが私の脳裏をよぎったのです。そしてその問いは、やがて「一人で生きたいという彼女に対する支援っていったいなんだろう？」という問いとなって私の元へと戻ってくるのです。私はここに「支援」というコトバで一括りにしてしまうことで、私たち自身が見えなくなってしまっている何かがある

のではないかと考えるようになり、その時の思いが、そのままこのテーマとなっていったのです。

「見立て」をめぐって、これはあるスクールカウンセラーから「この子はボーダーラインだからある程度はしかたない」と言われたことがきっかけで生まれたテーマでした。私はこのことを機に「診断や判定、評価っていったいなんだろう？」ということをしきりに考えるようになっていきました。30 年前、私が心理を学び始めた頃は、診断というのはドクターの領域でした。彼らは患者の病理を診断しそれに見合った薬を処方することがそのシゴトでした。ところが、この診断がやがて心理領域へと広がり、教育領域にまで入り込んでしまうことになりました。もちろんそこには、さまざまな検査法や病理の概念化が進み、それぞれの状況にあったラベルが用意されていったという背景があります。ただ精神病理や人格障害、あるいは発達課題といったことが一般化されることによって、そのコトバがラベルとして流通し、そのラベルを張られてしまうことで安易に済まされてしまうようなことも現実に起こっているように感じたのです。ボーダーラインであろうがなかろうが、その子は毎日私たちの目の前にやってくるのです。自分の今をどうにかしようとしているのです。私たちがやらないといけないことは、第一に目の前の子の今日をどうするかなんです。そんなことをお話ししながら、見立ての意味についての再検討を試みたのです。

やがて 2012 年に入って、私たちは「あいだ」というコトバに注目します。不登校の問題をどこかに焦点化させ、それを本人の問題としてだけ捉えていくのではなく、絶えずもう一つの軸を想定しながら、問題そのものを面として捉えていく必要があるのではないかという思いが、私の中にあったからです。

「精神病理」と「社会病理」のあいだ、ここでは、ある中学生の男の子のエピソードを取り上げました。彼がアウラの森にやってきて間もない頃は、「ボクは高校へもいかないし、就職もしない。将来は親の年金で生活して、親が死んだら生活保護で暮らしていく。ワーキングプアになるより、生活保護をもらった方がリッチだから…」そう話していました。相手の視点が、ほとんど欠落した、かなり自己中心的な子どもでした。そんなある日、彼が毎日持ってくるお弁当、それはお母さんの手作りだったのですが、寸分違わず、その内容から、配列、量に至るまで毎回全く同じものであることに気がついたのです。実は、彼のお母さん自体が精神的な生きづらさを抱えていたのです。彼の行動には、極端にこだわりが強く、イレギュラーなことになると急激に不安が高まります。その結果、まわりを非難したりひきこもったりといった行動をとって、社会とのかかわりを制限しようとするのです。最初私たちは、彼の問題性に注目をしていたのですが、次第にその親の課題の存在に気がつき、さらには家族構造のいびつさに気がついていったのです。「この家族の中で彼が適応するためには、彼は問題性を身につけないといけなかったかもしれない」やがて私たちはそんな風に考えるよ

うになっていきました。そうすると、いったい問題の所在はどうなるのでしょうか？彼個人にあるのか、果たして両親、家族全体、あるいは社会…？　改めて考えてみると、問題の所在とは何だかわからなくなっていくのです。だから、これがその時のラウンドテーブルのテーマとなっていったのです。

「変化」と「変容」のあいだ、このテーマの中では、子どもたちが表現する「コトバ」そして「物語」に注目しました。アウラの森で、変容を遂げていく子どもたちの多くは、その過程でいくつものコトバを残していきます。それは、過去の自分自身や過去の経験に対する再構築の過程であり、再定義の過程です。彼らはコトバを獲得することで、自分自身を大きく変容させていくのかもしれません。この時のラウンドテーブルでは、参加者の個人の物語が次々と紹介され、ラウンドテーブル全体が「ナラティブコミュニティ」となっていったのです。

このようにアウラの森の日々の現実が、ラウンドテーブルのテーマとなり、そのテーマそのものがラウンドテーブルのあり方に表現されていくようなことが生じてきました。「ナラティブコミュニティ」というコトバで表現されたラウンドテーブルの現実は、アウラの森の子どもたちの現実、そして子どもたちに関わる私たち自身の現実と重なっていくのです。つまり、ここに不登校という現象が、やがてコトバや物語を媒介にしながら、社会そのものへと回帰されていく構造が確認されるのです。

ラウンドテーブルの参加者は、アウラの子どもたちのエピソードをもとに自分自身を振り返ります。「巣立ちをめぐって」というテーマの時も。「果たして私自身は、巣立っているんだろうか？」とベテランの支援者が問い始めるのです。つまりこの時、アウラの森の子どもたちと、この支援者は同じテーマを異なる階層で捉えていることになるのです。この瞬間、彼らのテーマがラウンドテーブルに集う大人たちのテーマと一致するのです。子どもたちのことが、他人事ではなくなった瞬間です。

「何事も自分事として考えること」これもまた重要なことです。自分事として考えることは、主体的、能動的に考えるということ、そしてそういった姿勢の中では、ひとりでに省察思考が生じていくのです。あたりまえを問い続け、自己更新していく。それはまさに、A. ギデンズの言う〈再帰的自己自覚性〉に他ならないのです。



『幼稚園の現場から』
21・楽しく運動能力アップ！

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

今の年長児は
25年前の年少児と同じ！

　このタイトルは、2012年３月号の幼児教育機関誌『げんき№130号』エイデル研究所発行に特集された「子どもの体力・運動能力低下」についてのレポートで、山梨大学の中村和彦教授が付けられた小見出しです。
中村教授はその後いくつかの雑誌で、こどもの運動能力の低下について記事を書いておられますが、こどもの運動能力が低下していることは、時折流れるニュースでも目にすることと思います。
　実際に日々子どもたちと接している私たち保育者はリアルに感じています。たとえば、滑り台の上まで登れない、しゃがもうとすると足首が硬いため後ろに転んでしまう、すぐに疲れてしまう･･･そんな子どもが少しずつ目立ってきています。とくに幼稚園新入園児の３歳児の未発達ぶりが最近感じられますし、全身運動が十分にできていないためかことばの遅れにもつながっている気がしてなりません。

　そんな状況を見て、国もテコ入れをしなければ間に合わないと考えたのか、平成27年度初めには文部科学省から全ての幼稚園、保育園、認定こども園（以下園）に幼児期運動指針策定委員会が編集した『幼児期運動指針ガイドブック』と『幼児期の運動に関する指導参考資料（第一集）ＤＶＤ』が送られてきました。

※文科省のＨＰに掲載されています。
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319192.htm

※指針のベースとなった３年間の調査結果についてはこちらに詳しく出ています。
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm

国が乗り出すほど子どもたちの運動能力は落ちているのです。

　それはタイヘン！幼児期からしっかり指導しないといけない！と思いますよね。東京オリンピックを見据えてスポーツ庁（2015年10月から文科省の外局に設置）も設置される予定で、大いにスポーツ意識が高まっている昨今。

その気運に乗って、
幼児にも運動だ！

というように短絡的に「スポーツ＝運動」の意識を幼児に当てはめると困りますよ、というのが今回のテーマ。

　幼児の運動能力（誤解を防ぐために体力とは言わない）の低下にずっと警鐘を鳴らしてこられた中村和彦教授は一貫して**「幼児の運動能力の向上は、それ以降のスポーツ的な運動とは違って「あそび」が主体になるべきで、様々な動きを遊びの中で経験させることが大切だ」**と主張しておられます。もちろん今回のガイドブックにも関わっていらっしゃいます。

　私は、このガイドブックを見たときに、私ども園の保育者に向けて**「スポーツじゃなくて、もっと子どもを遊ばせろ！」**という提案がなされていると受け取りました。

なぜか？

　なぜ文科省が、あそびを通して教育を行う幼児教育の専門家である保育者に向けて**「もっと子どもを遊ばせなさい！」**と言わなくてはならなかったのか。それは、多くの園が子どもを遊ばせていないからなのだと思います。
保育園についてはよく知りませんので何ともいえませんが、現在ほとんどの幼稚園が民間のスポーツ教室関連の会社に外部講師を委託して運動の時間を設けています。私の園も例外ではありません。

外部スポーツ講師を

委託する理由は、
- 男性保育者が少ない職場なので体育的な活動に男性講師が入ることで活気が出る。

・運動能力の低下を防ぐためにしっかりやってます！というカリキュラムを入れたい。

というような思惑があるわけだが、

最近こんな話を聞きました・・・

ある園児数の多い幼稚園で

講師による運動の時間。マット運動の指導がその内容だったが約30～40分の時間の間に一人の子どもが運動したのは、２回程度でその他の時間はずっと“待ち時間”だった。体を動かしていない時間がほとんど。（これは通わせている保護者に聞いた話）これで運動能力の向上は望めるのだろうか？

実は、『体育の科学』という機関誌では、

2010年にすでに幼稚園での運動指導の実態と幼児の運動能力の比較調査が発表されていました。（2010年５月発行(社)日本体育学会編集／杏林書院発行）

正確には「幼児の運動能力と運動指導並びに性格との関係」という内容の研究報告で当時十文字学園女子大学の杉原隆氏ほか６人の研究者によって調査報告がなされているが、今回は関係ある箇所の結果だけピックアップさせて頂く。

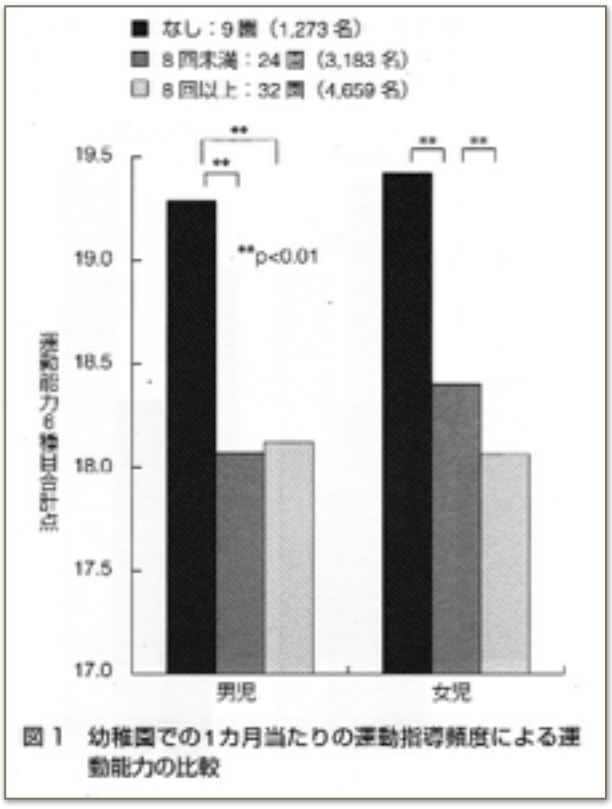


図１　幼稚園での1カ月当たりの運動指導頻度による運動能力の比較

上の図１では、運動指導を積極的にしている園よりしていない園のほうが運動能力は高いことを示しています。

研究報告では、**運動能力を向上させようと導入した運動指導が逆に幼児の運動能力の発達を阻害してしまっている現実**を次のように分析しています。

運動能力発達阻害の原因

○第一に、運動が一斉指導の形で行われているため、子どもは説明を聞いたり順番を待っている時間が長く、実際に体を動かしている時間が短くなってしまっている。（まさに、先ほどのある幼稚園の事例！）

○第二に、幼児の運動発達の特徴と指導が合っておらず同じような運動の繰り返しが中心で運動能力の発達にほとんど貢献していない。

○第三に、やりたくもない運動をやらされる子どもが多いため、運動に対する意欲が育たない。

この３点を踏まえた上で、**あそびを通して運動能力を向上することが大切だとまとめている**が、この時点では具体的な内容は示されていなかったし、遊びと運動の曖昧な境界線をどうするか？も問題となっていた。それから５年経って文科省が具体的な指導内容を伴ったガイドブックを発行したということでしょうか。

☆もう一つ注目すべきグラフがあったので紹介します。

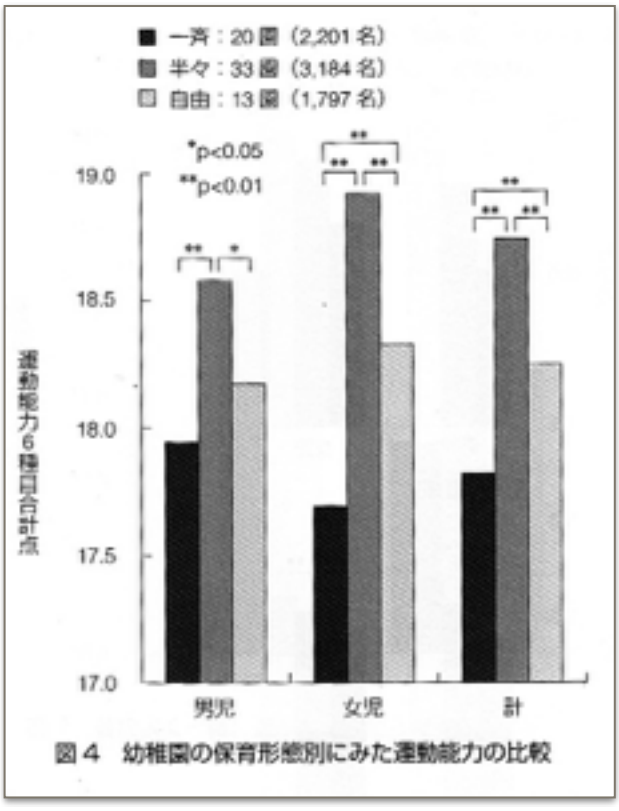


図４　幼稚園の保育形態別にみた運動能力の比較

図4は、①一斉に指導を行う方法、②半々に行う方法、③自由に遊ばせているだけという保育形態での運動能力の比較で、②半々がいちばん数値が高かったのを示している。
子どもまかせでもダメで、やり過ぎてもダメ、ほどほどに保育者の指導が入るやり方がいいという結果だ。

これは、救いでした！

なぜなら、私の園でもスポーツ会社の講師を委託して従来型の運動指導を行っていたからです。やめなくても良い、工夫しよう！という方向性が示されたからです。

ここからは図１の報告を読んでショックを受けた後、講師と取り組んできた私どもの園の事例をご紹介しましょう。

講師と園の連携

私どもはジャクパという会社に運動指導を委託しておりました。幸いなことに、この会社の方針は「園のやり方に合わせる」という方針だったので先のレポートを見て担当講師と話し合い、逆効果にならない運動指導の方法を模索して参りました。講師も契約を切られてはかないませんので、真剣に考えてくれました。

まずは、待ち時間をなくす

たとえば鉄棒を指導しているときは、説明の時間を極力短くし、指導が終わった子どもは園庭、ホールで行うにしても他のサーキットを設けてそこを回ってくることにしました。始終子どもが動いている時間を作るわけです。（簡単ですね！）

次に、あそび感覚を導入

指導開始時の準備体操も楽しく、皆が笑いながらできるような内容を盛り込み、運動指導の時間が楽しみになるように改善していきました。
講師はたいてい体育会系の出ですからビシビシと指導したいわけです。そのほうが端から見て「やってるように」見えるし、指導していて気持ちがいいはずです。ウチの講師も改善前はそうでした。今は遊んでるようなやってるような、まさにあそび半々の指導が行われています。もちろん保護者にもその意味を伝えて「あれで指導してるの？」という誤解を持たれないようにします。これは園長の担当。

コーディネーショントレーニング

２年ほど前に、コーディネーショントレーニングに出会いました。幼児教育現場でよく取り入れられている“リトミック”と似たような面があるのでわかりやすかったのですが、**「運動神経が良くなる運動」**ということで、小学校でも導入するケースが増えていると聞きます。
内容についてはご存じの方も多いと思いますのでＨＰを参照して頂くとして、
※NPO法人　日本コーディネーショントレーニング協会
http://jacot.jp/index.html

講師はこの講習に参加してノウハウを学んできました。今は、学んだノウハウを生かして独自の楽しい指導方法を模索・実践しているところです。

最後に、今回のガイドブックを見ての感想ですが、文科省は子どもの特性をきちんととらえて、幼児期に適切な指導方法を提示してくれました。
しかし未だに大人や児童向けの指導方法をそのまま幼児に流用して、早い時期から「逆効果の」指導を行っている保育現場があること。一部の運動好きな子どもはその方法でも伸びるでしょうけど、ヘタをすると水面下で運動嫌いの子どもを量産している恐れもあることを多くの人が知るべきだと思います。

余談ですが

３月に静岡県と友好都市である中国浙江省の教育庁の方と現地の幼稚園園長が数名、日本の幼児教育の視察に来られました。ちょうどジャクパの指導日だったので講師はあそびと運動を合わせたようなカリキュラムを披露したんですが、ピンときていませんでした。
それより、中国では幼稚園だけでなく小学校でも跳び箱はカリキュラムから無くなったそうです。理由は危ないから。一人っ子政策の影響で子どもに怪我をさせるのは御法度！超過保護な実態が垣間見えました。
日本はこうはなってほしくない。多少痛い思いをしても「できるようになりたいから乗り越えていく」という経験も運動（スポーツ）のならではの醍醐味なのですから。

いろんな運動場面をご紹介



▶原町幼稚園では年長組の運動会で跳び箱を披露その前段階のタイヤとび。好きな時間に跳びたい人がやってます。



▶やりたい人ー！自由に遊ぶ時間に任意で跳び箱練習
できるできない、年齢に関係なく並べばやれます。



▶体育指導中のサーキット。滑り台を頭から滑るよ–！



▶カルタの絵札をみて、ニワトリのポーズで歩こう



▶狭い園庭でサッカーをやりたい年長児が、ほかの遊びと
共存するために考えた方法であそぶ。



▶地上５メートルの高さの登り棒に挑戦、
遊具の上から登るので登る長さは２ｍですが。



▶運動指導の準備体操、いろんな動きできるかな？



▶フープを使って二人でジャンプし合います。
ゲーム感覚で動きを楽しむのです。



▶からだやわらかくなったかなー

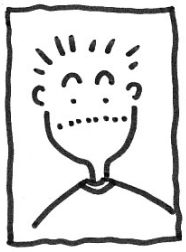


▶足を揃えてしゃがんでみよう

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」マガジンラインナップ

第１号　エピソード
第２号　園児募集の時期
第３号　幼保一体化第
第４号　障害児の入園について
第５号　幼稚園の求活
第６号　幼稚園の夏休み
第７号　怪我の対応
第８号　どうする保護者会？
第９号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

福祉系対人援助職養成の現場から㉑

西川　友理

私事ですが…

この４月、社会福祉士を養成する学校から、保育士・幼稚園教諭を養成する学校に、転職しました。

もちろん色々考えた末の転職で、不安もありました。しかし、これまで私は保育士の資格を取得し、保育士を対象に研修をしたことありますし、保育士と一緒に仕事をしたこともあります。何よりも、「保育士」は社会福祉分野の資格なのだから、これまでの経験を活用すれば、何とかなるやろ！と思って飛び込みました。

全然違うものは、違いがはっきり分かるから、意外と呑み込みやすい。しかし、少しだけ違うものは、違いがあまりわからないから、思ったより呑み込み難い…そんな感覚を今、噛みしめています。

いや、深いです、保育。毎日、衝撃を受ける事がたくさんあります。

新たに出会った考え方

「子どもは『大人になるために』生きているのではなく、『その時』を生きています。」[注1)]

これは最近私が最も衝撃を受けた保育原理に関する言葉です。東京福祉大学の関口はつ江氏の著書の中で見つけました。

「今・ここ」で行われる支援が大切、という事は、社会福祉士の養成教育の中でも十分に認識していたつもりですし、よく言われる言葉であるのですが、改めて、なるほどなあと感じ入りました。

例えば「お花屋さんになりたい」とか「サッカー選手になりたい」といった夢はあるかもしれませんが、夢を持つことと成長を意識することは違います。

大人の意図はともかく、子ども自身は「成長するぞ」と、自らの成長を意識して毎日ご飯を食べたり、ジャングルジムに上ったりしているのではありません。目の前のご飯を「おいしい」と感じなが

ら食べ、ジャングルジムにワクワクよじ登っていく日々の積み重ねをすごしています。

「いきいきしさ」

これも知らなかった言葉です。大正時代の前後に保育の場で活躍した児童心理学者、日本のフレーベルとも言われている倉橋惣三の著書『育ての心』にある言葉です。

「子どもの友となるに、一番必要なのはいきいきしさである。必要というよりも、いきいきしさなくして子どもの傍らにあるは罪悪である。子どものもっとも求めてゐる生命を与えず、子どもの生命そのものを鈍らせずにおかないからである」

「あなたの目、あなたの声、あなたの動作（中略）あなたの感じ方、考え方、欲し方のすべてが、常にいきいきしているものでなければならない」

「いきいきしさの抜けた鈍い心、子どもの傍では、このくらい存在の余地を許されないものはない」[注2)]

倉橋はこのようにいきいきしさについて説明しています。

この名詞自体は私の知っている限り、現在はあまり辞書にも載っていない様です。

私自身は、いきいきしさと言う言葉について、活気にあふれている、生きることを楽しんでいる、これらの様子を思い浮かべました。

この言葉は、様々な保育のテキストに引用されています。しかし社会福祉士の養成教育では、こういった事はそれほどテキスト等には掲載されておらず、かなり衝撃を受けました。

もちろん上記したようないきいきしさをもつ人は、社会福祉士にもたくさんいますし、そのような人は現場においても、輝くような実践をなさっているように見受けます。現場職員の日常会話や、「元気出していこう！」「まず自分が楽しくないとね！」等の励まし合いはあります。

しかし、活気にあふれているようでない人でも、自分なりの持ち味を生かした社会福祉士として、落ち着いて、しっかりと支援をされています。それに、時には活気にあふれている人と接するのが苦手なクライエントもいます。

自分自身を支援の道具として相手に関わる社会福祉士、その養成のためのテキストの中に、「いきいきしさを持たなければならない」というようなことが書かれていない理由は、このような事ではないかなと思います。

また、表現がとても難しいのですが、自分が社会福祉士として教育され、実践を重ね、養成に携わる中で、共感するとか、守秘義務を果たすとか、思いやりを持つ、といったような、「対象に配慮して行動に移す」ような言葉はよく目や耳にしましたが、いきいきするとか、活気にあふれる、といった、「内面の持ちようがそのままにじみ出るような表現を心掛ける」といったような言葉は、あまり触れたことがありません。

倉橋が、『育ての心』を刊行したのは、1936 年（昭和 11 年）。当時は人々の貧富の差が激しく、子どもによっては劣悪

な環境下、食うや食わずの日々を過ごしていました。同著で倉橋は、冬の季節を「寒さと飢えの季節」と表現しています。冬の寒さがそのまま、飢えに直結するような時代において「いきいきしさ」「生命」という言葉は今とは比較にならない程の重い意味を持つ言葉であったと推察されます。

だからといって、「いきいきしさ」にまつわる上記の倉橋の文章は、現代にそぐわないわけではありません。活気のある先生は保育の現場にたくさんいらっしゃいますし、そんな先生の実践はとても素敵で、子どもの表情がいきいきと輝き、心からその場を楽しんでいるような様子を何度も見ました。

倉橋の「いきいきしさ」は受け継がれていると思われます。

日々、このような新たな考え方に出会っています。

内面の持ちようがにじみ出るようになるためには、自らの感性を様々に刺激してセンスを磨くといったことをしなければなりません。私は、保育士というものは心の状態を常に繊細にし、センスを磨き、感受性を研ぎ澄ませている必要があるのだな、と感じました。

同じ社会福祉分野の資格でありながら、社会福祉士に比して、保育士にこれほどまで感受性が重視されているのはなぜなのか。恥ずかしながら私自身の勉強不足という理由はもちろんあるのですが、それはいったん横に置いておいて、一度、考えてみることにしました。

倫理綱領を比べてみる

社会福祉士にも、保育士にも、それぞれ日本福祉士会、全国保育士会という全国組織があり、それぞれの組織が作った倫理綱領があります。

ともに、専門職としての依拠すべき職業倫理が書いてあり、社会福祉士の行動規範はこの倫理に基づく行動規範も書かれています。

いわば倫理綱領は、それぞれの職業の指針が書かれています。

この 2 つの倫理綱領を見てみると、社会福祉士と保育士の特性が見えてきます。

まずは言うまでもなく、支援対象の特性があります。

社会福祉士の支援は「すべての人」を対象としています。

これに対し、保育士は「すべての子ども」を対象としています。

一般的に保育士の職場＝保育所と言うイメージがあるので、この「すべての子ども」は就学前の子どもを指すように感じるかもしれません。

制度上、保育士が必要とされる児童福祉施設には、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童養護施設、児童発達支援センター、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設などがあり、これらは原則的に 18 歳までの者を対象としています。ですから、社会福祉制度が示す子どもとは、18 歳までの者を指します。

しかし、保育士が対峙する子どもと言えば、一般的なイメージとしてはやはり就学前児童でしょう。

それから、支援を具体的に働きかけるターゲットの特性が見えてきます

社会福祉士は、対象となる個人の、あらゆる人間関係や社会に働きかけます。時には国際社会も、そのターゲットとします。

保育士は、子どもの育ちと、保護者の子育て、子どもと子育てにやさしい社会をターゲットとしています。

また、支援の目的の特性もあります。

社会福祉士の目的は、自己決定の尊重、エンパワメント、社会変革、人間関係の改善等、環境に働きかけたり、支援対象が自ら生きていく環境を変えていこうとすることを側面的に支援したりといったことです。

保育士は、自らを「子どもが現在(いま)を幸せに生活し、未来(あす)を生きる力を育てる」仕事であるとしていますので、これが目的であると言えます。特に、倫理綱領全体を通じて「育ちを支える」と言う表現が多く、子どもが自ら育つことをその傍ら共にいて影響を与える、という姿勢が感じられます。

文章の冒頭に「社会福祉士と保育士は、少し違う」と書きましたが、こうして見てみると、それは具体的な仕事内容が全て違うのではなく、力点や視点の重きを置く場所が違うという事が視えてきました。

つまり、第一義的に何を支援とするのかの違いです。

社会福祉士は、全ての人を対象としているので、当然子どもも対象ですが、その子どもに対して、「現在を幸せに、明日を生きる力を育てる」事の大切さも十分認識しつつ、第一義的に「社会関係や社会環境を整える」事に視点を置こうという傾向があるようです。

一方、保育士は、子どもの「社会関係や社会環境を整える」大切さも十分認識しつつ、第一義的に「現在を幸せに、明日を生きる力を育てる」事に視点を置こうという傾向があるようです。

保育士の専門性

子ども自身が意識していようがいまいが、子どもは生物学的、心理学的、社会的に、問答無用で成長過程にあります。

心理学的には、子どもが社会や周囲の人々に対して基本的信頼感を持てるようになる必要があります。そのため、保育士はその子どもの環境を一定の安心と安全の中にある状態に保ち、子ども本人が、「日々の多少の変化や刺激はあっても、それによって日々の生活が根本から脅かされはしない、またすぐに安心と安全の中にある生活に戻れる」と、認識出来る必要があります。

一定の安心と安全を保つ事は、地味に見えますが日々の努力によって成り立つケアの積み重ねです。

またそのケアには専門的な知識と技術が必要なことはもちろん、子どもの成長を感受し、これに呼応したケアを行えるセンスが求められます。

つまり、冒頭に挙げた「その時」を見つめること、そして見つめるために傍らにいるときには「いきいきしさ」が必要

だということです。これを行う専門職が、保育士なのだと思います。

「憧れ」という漢字は心（りっしんべん）に、童（わらべ）と書きます。

子どもの心は、憧れの心。この世界には、憧れの対象となるようなたくさんのすてきな物、すてきな人間、素敵な事象があると気付くことも、基本的信頼感の醸成に役立つことです。保育士はこれもサポートします。

また保育士は、この世界における善である事、よいとされる事の方向性を示すモデルにもなり得ます。何が善か、何がよい事なのか、価値観が多様化した現在においては一概に規定する事は難しいかもしれません。一般的な法制度という基準はありますが、道徳やマナー、慣習などは地域や文化の特性があるので、保護者をはじめとした子どもに関わる大人同士で話し合い、コンセンサスを得る必要があります。

以上のような取り組みが「現在を幸せに、明日を生きる力を育てる」事であると言えます。

このような点に注目すると、社会福祉士は、その人がその世界において人生を明確にしていくことを支援する仕事であるのに対して、保育士は、子どもがその世界において人生の可能性を広げることを支援する仕事であると言えます。

保育士は、アーティスト！

バワーズは「ソーシャルワークはアートである」という言葉を残しています。

「ですから、社会福祉士はみんなアーティストなんですよ！」

などと、今まで私も、社会福祉士養成の授業で言っていましたが、子どもの憧れを育む「保育士」もまたさらに、アーティストでなければならないように思います。

専門職としての技や知識を身につけている保育士が、「今・ここ」で、目の前に差し出されるものに気づき、感受する。

表情、行動、声、言葉など、自分の体を使って反応し、いきいきしさをもって表現する。

その表現には、その人の感受性と表現力の持ち味、センスが現れる。

子どもたちはそれを見聞きし、それとは知らぬ間に心と体に吸収し、成長の糧とする。

これはまるで、確かな演技力と、舞台に関する知識と、素晴らしいセンスをもって表現し、観客を魅了する、即興劇における役者のようだと思うのです。

即興劇の役者であるためには、技術や知識を習得する事と共に、「今・ここ」を受け止める感受性を磨く必要があります。

では、どのようにこれらの事を学生が自己研鑽できるように伝えていけばよいのか…色々と試行錯誤している最中です。

保育者養成の授業

先日、授業で、自然豊かな場所までみ

んなで散歩し、そこでネイチャーゲームをしました。
「音集めをしよう。口を閉じて、目を閉じて、3分間、耳をすませてみて。どれくらいの音が聞こえるかな。はい、スタート！」
様々な鳥のさえずり、風の音、虫の羽音、かすかに聞こえる車の音、少し遠くの話し声、足元の砂の音、自分の呼吸音。
「はい、目をあけて。」
この瞬間、学生たちの目の色が、語っています。
「…スゴイね。」
と。
日頃、特別に注意を払わずに生活しているけれども、静かに聴覚を研ぎ澄ませるだけで、思っていたより、ずっと豊かな音の世界に囲まれて生活していることが認識されます。
この経験を使って、次のワークや理論につなげて、授業を展開していきます。

…果たして、こういった授業方法がいいのかどうか、未だわかりません。わかりません。
ただ、「自分がケアしてもらって心地よかった方法は、自らが誰かにケアをする際にモデルになる」という事は、私が今まで携わってきた、他の対人援助職養成も保育士養成も一緒だと考えます。
またその他にも、私が今までの養成教育の中で感じた、「正論やデータ、一方的なお説教だけでは人の心は動かず、心が動かないと人は動かない」という事も、「誰かから教えられるよりも自ら気付けたことの方が身に就く」という事も、多分共通しているでしょう。
私は現在、「保育士として」「幼稚園教諭として」「社会福祉士として」という枠組みを超えて、私が今まで得た物で、「子どもと保護者に関わる人として」なにが必要か、というもっと本質的な部分まで立ち返って学生と共に考えることが出来るのではないかと思います。
ある先生にとっては苦手分野だけれど、保育士資格の制度として、絶対に教育しなければならない部分は、沢山の先達や先生方が関わっているのだから、分担すればいいだけのことです。
学生を専門職として養成するためには、多くの先達、先生方が連携し、協働していく事が不可欠だと感じます。

近接分野から来た、だからこそ

今までの対人援助マガジンで私が書いた文章を読み返してみると、私自身が、「社会福祉でない分野で社会人をしてきた人が、社会福祉士になってくれることで、社会福祉の現場は活性化する」と考えていたことがわかります。
私自身が生粋の「保育」でない分野から来た人間です。今後周囲の方々からの影響を受けて、そしてこちらからも影響を与えて、どのような専門職養成になっていくのでしょうか。なかなかエキサイティングだと思うのです。

注１）関口はつ江編著　『保育の基礎を培う保育原理』P10　萌文書林　2012年
注２）倉橋惣三著　「育ての心」『倉橋惣三選集　第三巻』P33　フレーベル館　1965年

先人の知恵から
9

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

様々な諺を紹介しつつ、今の子育てや支援を顧みる。変わってもよいもの、変わらない方がよいもの、そして変えるべきもの、変えてはいけないもの、世の中にはこの４つがあると思う。子育てや子育て支援にも同様のことが言えると思う。何を残し、何を変えていくのかは、その社会、環境によっても異なるだろうが、それでも全世界共通のもの、普遍的なものもあると諺を見ていて思う。昔のことばが今の人たちにどのくらい届くか分からない。でも今多くの親が、祖父母が子育てや孫育てに悩んで居る時だからこそ、こうした古い言葉が腑に落ちることもあるかもしれないと思う。今回はう行から次の５つ。

- 嘘(うそ)も方便(ほうべん)
- 打たれても親の杖
- 内に誠あれば外に出る
- 内弁慶の外地蔵
- 旨(うま)い事は二度考えよ

＜嘘も方便＞

嘘をつくことは良くないが、時と場合によっては物事を円滑に運ぶための手段として必要だという事。方便は元仏教語で、仏が衆生(しゅじょう)を救って、悟りの世界へ導くための便宜的な方法・手段の事。「嘘も誠も話の手管」「嘘は世の宝」等も類義。

一般的には、正直であれとどこの家庭でも子どもに教える。「嘘は泥棒の始まり」とかジョージ・ワシントンと桜の枝の話も有名で、正直であることを勧める話は沢山ある。しかし嘘をついてはいけないと言われたことで正直にばかり言っていたら、やはり様々な歪みが生まれる。

一体いくつくらいから子どもに嘘を言うことも時には必要と伝えるべきだろうか？教師だって両親だって嘘をつく。それに気付くのは小学校の中学年くらいからだろう。大人が嘘をついたり誤魔化したり、約束を破ったりしているのを見ながら、子どもた

ちも少しずつ嘘をつくこともたまには必要なのだと学んでいくし、大人は必ずしも正しくないと気付く。

真実を伝えたら余計に傷つくときは嘘を言うことも多いだろう。友達との遊ぶ約束も、別の友達と約束して居たらどうやって断るか。小学校低学年だとそのままストレートに「〇〇ちゃんと遊ぶ約束しているから遊べない。」と断っているのを見かける。成長してくると「今日は家の人と出かけるからごめん、遊べない。」と断る。その結果、他の友達と遊んでいるところを見かけられてまずいことになる場合もある。人間関係の摩擦はこんなところでも見られ、それをどのように解決して行くかが大切な学びでもある。正直に言った方が良い時と、「嘘も方便」の時の見分けは、失敗しながら覚える物である。それを大人が先取りして、あれこれ指示してしまうと、失敗の経験が減る。

コミュニケーションが上手になるコツは、たくさんコミュニケーションを取り、たくさん失敗することだと思う。子どもたちが子ども同士の関わりの中で、どこで嘘をつき、どこで正直に話すかを学べる機会を大人が奪ってしまわないように気を付けて行きたいものだ。

英語では・・・・
The end justifies the means.（目的は手段を正当化する。）
又は
He that cannot dissemble knows not how to live.（偽ることを知らない人は生き方を知らない人である。）

＜打たれても親の杖＞

例え親に杖で打たれても、そこには子を思う慈愛の心がこもっているから、有難いものだという事。「打つも撫でるも親の恩」も類義。

この諺は虐待がうるさく言われる現代においては中々口に出しづらいかもしれない。

「打つ」とか「叩く」という言葉だけでもう既に「虐待」と判断されてしまう。しかし、ここで言う「打つ」は、ただ単に感情に任せて「打つ」とは違う。何処が大きく違うかと言えば、親の子に対する愛情、想いの有無であろう。

虐待する親たちが一様に言う言葉に「躾」がある。「躾のために殴った」と言うのだ。しかし、そこにあるのは「躾」ではなく、思い通りにならない子どもへの「怒り」である。シリーズの６回目で「一朝の怒りにその身を忘る」という諺を挙げたが、「怒り」による行動は良い結果を招かない。

一方伝統的な芸能や技術に対し、その伝承における指導には厳しいものもある。師匠は扇で手や足を打ったりして教えることもある。そうやって覚えさせられる時には、感情のままに叱られるわけではないので打たれる方も納得する。

職人技を教えるときには、「見て覚えろ」とか「見て盗め」とか言われ、指導をしてもらえるのは見込みがある時ということもある。自分の跡を継がせようと思えば当然指導が厳しくなる。叩かれたり殴られたりということも普通に見られたし、そこに師匠の思いがあると感じることが出来れば恨みになることもなかった。

そんな時代の名残の諺かもしれないが、

「叩くのは虐待だ」と言い過ぎることにも問題があるのではと思う。

今我が子を叩こうとしたり、叩いたりしている親に、子どもへの思いがどのくらいあるのか。感情をただぶつけていたり、八つ当たりだったり、親の身勝手な思いだけかをしっかり見極めることも必要ではないだろうか。そしてそれは、教育の現場でも言えることかもしれない。

叩くことを肯定するつもりはないが、万引きをしたわが子を父親が叩いたとしても、叩いた行為だけで判断せず、父親の子どもへの思いが、愛情が伝わってくるかどうかで判断できるだけの「ゆとり」を我々支援者は持つべきではないかと思う。

もしれない。

以前民間企業で働いていた時に、お客様が対応した人に「お前の顔が気に入らない」と言うのを聞いたことがあった。生まれついての顔についてとやかく言われても困るが、きっと顔だけの問題ではなく対応した者の醸し出す雰囲気が気に入らなかったのだと思う。

手馴れてきたときこそ、気を付けて行かねばならない。常に、わが身におごりが無いか、上から目線になっていないか、相手の事を第一に考えているか、自分の中身を、誠意の有無をしっかりと見据えて人に対処すべきであろう。内からにじみ出る誠を目指したいものだ。

＜内に誠あれば外に出る＞

自分の心の中に誠意があれば、自然に言動などに現れて来るものだという事。「内」は「中」とも書く。出典は大学。

対人援助職として、対する人にどれだけの誠意があるかはその援助技術よりずっと大切である。下手でも一所懸命さがあれば、相手に必ず伝わる。反対にスキルばかりに頼ったり、自分は援助職としての全てを会得したと思っているおごりは、相手に不愉快な思いしか与えない。

上から目線な態度や言葉で対応している人を見かけることがある。認知症のお年寄りや子供たちに酷い言葉遣いをしているヘルパーや教師などに出会うとがっかりする。

人柄と言うのは内からにじみ出るものである。それは、第一印象にも繋がるものか

＜内弁慶の外地蔵＞

家の中では弁慶のように強がり威張っているが、外では意気地が無くなる人の事。単に「内弁慶」ともいう。

この諺は子どもの家での態度の悪さに困っている親に度々使っている。家の外では借りてきた猫のようにお利口さんなのに、家では親の言うことに一々逆らったり文句を言ったり暴れたりする。子どもの一番悪い状態である。しかし、それはとりもなおさず家の中では、自分らしく居られるという事でもある。子どもにとって家がホッとできる場所だという意味でもある。だからと言って家庭内暴力に発展するようでは困るが・・・。

親に対し「この子の最悪の姿を親が知っているということは安心でしょう。だって、

家の外ではこれ以上悪いということはないのだから。内弁慶は外弁慶より安心。ね！？」と話している。

反対に、外弁慶であったらどうだろうか？家では良い子だが、外では悪い子となる。すると保護者にはその子の本当の姿が分からない。学校で余りに悪い事ばかりするからと保護者を呼び出すと「うちの子はとても良い子でそんな悪いことするような子ではありません。」と言うことがままある。こういう子の場合は本当に家ではとても良い子なのだろう。子どもの悪い姿を全く知らない程怖い事は無いのではないかと思う。

英語では・・・
Every dog is a lion at home.（どこの犬も家の中ではライオンである。）

＜旨い事は二度考えよ＞

上手い話には、危険や落とし穴があったりするから、すぐには飛びつかず、よく検討し慎重に行動せよということ。「旨い物食わす人に油断すな」も類義。

今投資すると倍になるとか、詐欺が成り立つのは欲をかく人がいるからであろう。子どもに関する情報にもこうした「上手い話」が度々見受けられる。

子育てに自信を持てない親たちは、ネットなどで調べた情報に振り回され、必要もない物を買ってみたり、大金をはたいて「子どもの〇〇がよくなる」とか「能力開発」の効果があると謳われている物を手に入れている。

子どものためにはお金に糸目をつけないという親も多い。だからこそ、詐欺まがいの物にも引っ掛かってしまう。上手い話には大抵裏がある。ネット情報も鵜呑みにせず、保健師や支援者の話を聴いてみることを勧めている。

今回はここまで。

出典紹介

大学

一巻。孔子の遺書とも子思または曾子の著作ともいう。もと「**礼記**」中の一篇（第四十二）であったが、宋代以後、単行本として独立し、朱熹（朱子）がこれを四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）の一つとしたことから、特に広く読まれるようになった。修身、斉家、治国、平天下の道を説く。朱熹が全文を「経」と「伝」に整理し、三綱領（明徳・止至善・新民）、八条目（格物・致知・誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下）の体系をたてた。

例えば、卵子提供による家族形成について⑥

その前に・・家族形成のための支援検討会＠島根県

荒木晃子



作成：内田クリニック

「家庭が必要な子ども/親になりたいカップル」の援助者がつながる支援

ひと通りの質疑応答を終え、3 つ目の検討事項に移る。議題は「**質問票から見えてくること**」。内容は、「**当事者への理解の必要性**（不妊治療者の現状、選択を示されること、選択することへの葛藤、選択することで得られるもの、特別養子縁組里親希望者の現状）、**質問票から見える現状の問題点**」である。**質問票とは、**当日会議に出席していない県内 4 カ所の生殖医療指定医療機関を含む 32 カ所の産科医療機関と、生殖看護学会山陰地区、県庁健康推進課、県庁青少年家庭課、乳児院、児童養護施設、養子縁組里親当事者に向け、**事前にそれぞれが検討会で「確認したいこと、質問したいこと」等を質問票として提出し、一旦回収。次に、質問先の各機関へその質問票をあらためて送付し、返送された回答を、県職員であり（当時は）児童相談所相談員でもあった W 氏がまとめた資料である。**

検討会までに回収した関係各機関からの**質問事項は、全部で 29 項目**に上る。内訳は、実際に不妊治療経験後養子縁組した里親から医療機関へは 3 項目。同じく福祉関係機関へは 2 項目。他に、医療関係機関への要望として 1 件が添えられている。また、乳児院より福祉関係機関へは 1 項目。さらに、日本生殖看護学会山陰地区勉強会より福祉関係機関へは 3 項目。同じく医療関係機関へは 1 項目の質問があった。他にも関係各位への質問及び、行政への要望等は筆者よりそれぞれの担当者へ質問するに至った。なお、**質問票には、以上 29 項目に対する各機関の回答が記述さ**

れており、一見しただけで、「家庭が必要な子ども」と、「親になりたいカップル」の援助現場がそれぞれに多くの課題を抱えている現実を垣間見ることができた。回収した紙面に、実際どのような課題が浮き彫りになったのだろうか。回答を得た質問票の中から、抜粋してみよう。

援助者たちの課題

【質問1】実際、産婦人科から特別養子へとつなぐケースは年間どれくらいあるのか。どのような背景が多いのか。

まず、質問1．に対して**行政（児童相談所）**からは、産婦人科から特別養子へとつながれたケースなど、個々のケースの詳細について把握していないとしながらも、平成 23 年度以降平成 26 年 10 月末現在までの毎年、養子縁組里親委託児童は存在していたとある。子どもの年齢は、平成 23 年～25 年までが、生後数か月～2 歳児。平成 26 年度のみ、0 ヶ月児であった。また、その背景についても、詳細は把握していないとしながらも、望まない妊娠による出産、養育困難などがあると思われる旨の回答を得た。

次に、同質問に対する県内の**産科医療機関**のうち、未回収を除く 10 施設から回収した回答をみると、3 施設（いずれも総合医療施設）の産婦人科が特別養子縁組へとつなぐケースがある/あったと回答し、1 施設からはほぼなしという回答を得た。その背景には、シングルマザーで育児困難、若年妊婦、未婚などの理由が挙げられていた。産科医療施設では、当然のことながら、出産する女性の社会背景や家族背景等の記載があり、「家族の状況から育児が難しい」等の記述からは、出産予定の女性とその家族との話し合いが進行中である旨説明があった。これらの回答からは、産科医療の現場では出産以前から、出産後、児の養育に関する相談が医療関係者によって行われていることが明らかになったが、その際、児童相談所や行政の関与はなかった。

この産科医療機関の回答は、「質問1．に対する行政の回答＝特別養子へとつなぐ子どもの個々の背景について詳細を把握していない」という回答に結びつく。出産後、誕生した児の養育は困難（の可能性がある）との判断には、医学的所見（診断）や退院後の養育環境、また、出産する女性の家族の意向やその関係性の聞き取りから、先に医療者たちが検討する場合があることが明らかになった。

児童相談所の報告から

児童福祉法によると、「児童及び妊産婦の福祉」に関する業務は、市町村、都道府県の業務とされ、これまでにも養育困難と思われるケースや飛び込み出産などのケースに対しては、相談業務や里親委託、乳児院措置などの支援を行ってきた。しかし、平成 15 年 7 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日までに起きた全国の虐待児童死亡事例を検証する中で、日齢 0 日児、月齢0ヶ月児などの死亡事例がきわめて多いことなどから、平成 20 年には児童福祉法が改正（H21 年 4 月施行）され、要保護児童対策地域協議会の支援対象に「特定妊婦」（出産後の養育について出産前の支援が特に必要な妊婦）が加えられた。この改定により、出産後養育が困難（の可能性がある）妊婦に対しては、一般妊婦に対する対応とは区別した「特定妊婦」として、法律上の支援対象にあげ

られることになったことは大きいという。

この報告は、支援検討会の約１年ほど前に開催された「第2回日本生殖看護学会山陰地区勉強会」で講師を務めた県下の児童相談所所長の報告により得た情報である。報告では、生殖医療や産科医療に携わる生殖看護認定看護師たちが、自らの学びの場に児童相談所所長を招き、社会的養護下にある子どもたちの現状について知る機会を設けた。それはまさに、生殖医療技術で児を得ることがかなわなかった不妊治療後の当事者カップルが、手探りで新たな家族形成の選択肢を探る道程を知るための、道先案内の役割を担う学びであったともいえよう。他にも、毎年実施される島根県の里親研修会などでファミリー・aim・パスポート（前号で紹介した小冊子）を活用するなど、他領域の援助者たちがそれぞれに、支援検討会に至るまでに、ひとりでも多くの同領域の仲間に対して、あらたな家族形成のための支援の意識周知をはかる努力を積み上げていると聞く。児童福祉領域では、子どもの援助者たちが生殖医療現場の情報を学び、また、生殖医療者たちは家庭を必要とする児の現状を学んだ。生殖医療現場には、里親・養親候補となる（かもしれない）子どもをのぞむカップルが集い、児童福祉領域には、家庭を必要とする社会的養護下の子どもたちの存在がある。両領域の援助者たちは、それぞれの被援助者たちに必要な情報を獲得し共有するべく新たな視野を切り開く開拓者集団でもあった。

（次号へ続く）

＜ひとことメモ＞

近年、児童虐待の報道が TV 画面や新聞紙面に頻繁に取り上げられるようになった。以前は、本当にこんな親もいるんだなとか、自分の子を虐待する神経はどんなだろう、などといった意見も耳にしたが、最近では日々の生活の中にある日常的な出来事という感覚が生まれつつあるほど、事件の起こる頻度が高いと感じる。そして今回、児童福祉現場の事例検証報告で知ったその現状に、最近覚えた虐待報道についての感覚がリアルな体験に変わったように思う。ここでは、私が検討会当日覚えた感覚を、読者（特に医療関係者）のみなさんに体感していただきたいと考え、その内容を記述したいと思う。なお、以下の内容は、検討会当日報告された、島根県益田児童相談所所長　山崎俊行氏作成のスライドを一部引用させていただいたものである。

虐待児童死亡事例の報告概要

【死亡事例の検証結果（H15.7.1~H25.3.31）】

・虐待により年間 55 名の児童が死亡（9 年 9 か月間に 546 名、心中でも 394 名が犠牲に）

・4 割以上が 0 歳児（0～5 歳児が約 9 割）

・0 歳児の 4 割が 0ヶ月児（内 8 割以上が 0 日児）

・身体的虐待が 6 割以上、ネグレクトも 1～3 割

・加害者の 56%は実母（0 ヶ月児は 9 割）、実父は 16%

・妊娠期、周産期の問題では「望まない妊娠」「母子健康手帳未発行」「妊婦健診未受診」「若年（10 代）妊娠」が多い

【0 日・0ヶ月児死亡事例支援策】

＊妊娠から出産の切れ目のない支援と相談窓口の周知

＊医療機関と行政の連携

＊相談の場、縁組・里親制度の情報提供

＊思春期からの性に関する正確な情報提供

対人援助学&心理学の縦横無尽17

「科学上のブレークスルーに関するグローバルシンポジウム」

参加メモ



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

平成 27 年 5 月 26 日（火曜日）　主催　日本学術振興会　ホテルオークラ東京別館

主な論者の論点のピックアップ　（講演メモに基づくが他の資料も活用した場合があります）。

★下村文部科学大臣　特別講演

「科学上のブレークスルーを生み出す教育・科学技術政策」

★Paul Boyle 氏（イギリス・レスター大学長）

「インパクトある卓越した研究とは」



アメリカ・オバマ大統領

”科学はこれまでの時代よりも、私たちの繁栄、健康、環境（問題）そして QOL（生活の質）について、より本質的なものになってきている。”

これは多くの人の実感であろう。

※EU におけるホライゾン２０２０（FP7（第７次フレームワークプログラム）の後継＋α）について

H2020 の国際戦略

- 基本方針
- 欧州の研究・イノベーション、経済・産業競争力の向上に資する
- 世界共通の社会的課題に取り組む
- 欧州の対外政策を支える

事業としては

卓越した科学

産業界のリーダーシップ確保

社会的課題への取り組み

欧州イノベーション・技術機構（EIT）

共同研究センター（JRC）（原子力を除く）

その他

を行う。

全体の予算は、FP7（532 億€）に比べ大幅な増額（770 億€）だが、研究開発関連予算は、FP7 時と同等程度かやや減少するという声もある。科学への投資について、そもそもイギリスは GDP 比０．５以下。日本も０．５強。

※基礎と応用のバランスをどのようにとるか

ボトムアップとトップダウンのバランスをとるか？

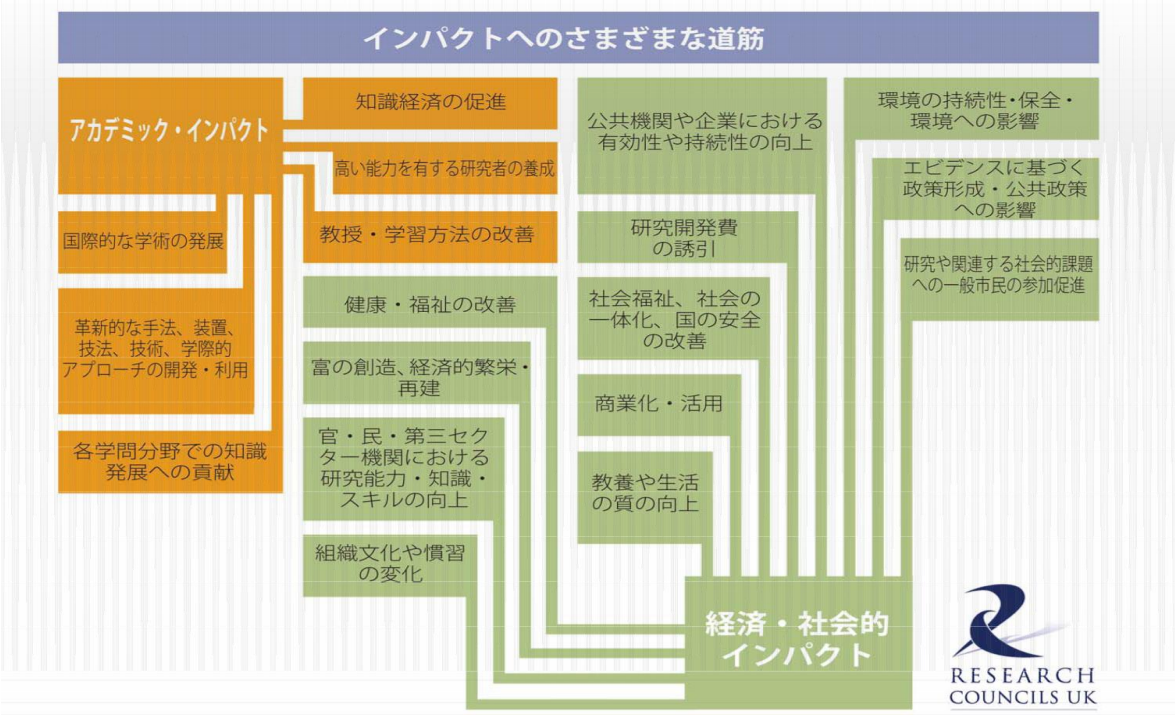
多くのファンディングエージェンシーはトップダウンプログラムをもっている。

※科学の価値、特に、インパクトについて、測る必要があるのかもしれない。

前提として、社会からの批判について敏感でなければいけないということがある。発見が次に結び付いていないという批判がある。『エコノミスト』による批判＝癌研究等では、論文による発見報告はその後ほとんど再現されてない。イギリス『ガーデアン誌』による批判＝ラット研究はラット研究でしかない！

その結果として、最近は「Excellence with Impact（インパクトのある卓越性）」という考え方がイギリス・リサーチ・カウンシル（ERC）をはじめ欧州で取り入れられるようになってきた。

インパクトは「Academic　Impact」と「Economic Impact」に分けられる。

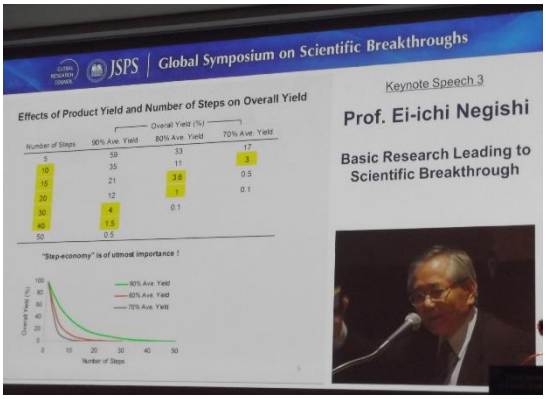


上の図は「英国 RC による Impact の概念図」より
林隆之　「研究評価の国際潮流と日本の課題」（大学評価・学位授与機構研究開発部准教授）
http://www.uec.ac.jp/about/activity/sokushinhi/symposium/pdf/20141208-1.pdf

現在、研究評価においては、アウトカム、インパクト、研究環境、の３点が評価される仕組みになっている。
たとえば、イギリスの REF（Research Excellence Framework）という評価の仕組みでは、「学術界を超えるような、経済、社会、文化、公共政策・サービス、衛生、環境、生活の質に対する効果、変化、便益」と定義されている。

インパクトは、予測できるようなインパクトではなく、インパクト・ファクターでもなく、社会の人々（User）の関与を可能にする径路を提供するということ。

★根岸英一先生　講演　（のうち一般的なメッセージのみ抽出）

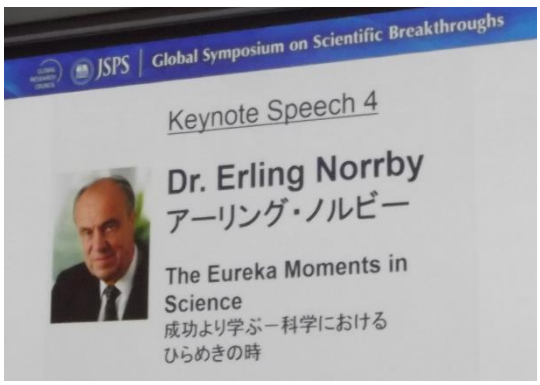


根岸先生の ABC ガイドライン

Ambition　Boys be amitious！
Broad and Basic　基礎的に広く！
Creative　常に学ぶ。

有機化合物の合成については、「メンデレエフの周期律表に戻れ！」　１９６０－６３の院生時代からそう考えてきた。

★ アーリング・ノルビー　元カロリンスカ大学医学部長　「Eureka Moments in Science」



※ノーベル賞について
科学は推論から始まり技術が開発されることで問題に対処してきた。
ノーベル賞は最初のアイディアに対するものとして与えられるのもそうした理由からである。
（ちなみに、ノーベル賞選考プロセスは５０年後に公開される）。

※現状における“Three Large conundrums”三大難問
宇宙の起源　６７％がダーク因子
生命の起源
意識の起源

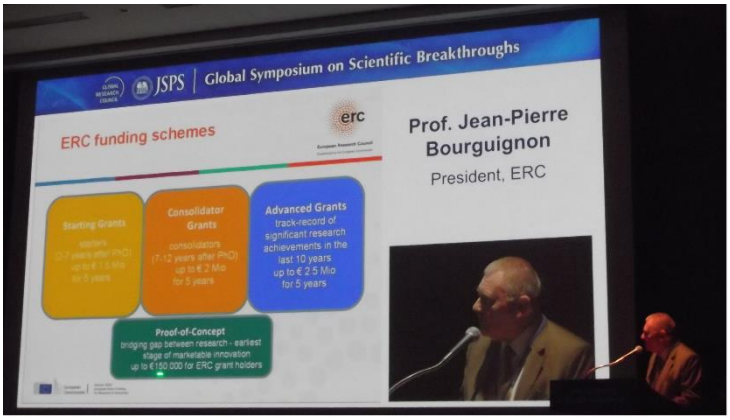
※ユーレカ！のための条件

シンプルに
大胆に
複数のドグマを
自然から学べ
優れたメンター　（知識の伝授）　社会的側面が重要
オブセッション（強迫的傾向）
運　もしくは　セレンデピティ　幸運は準備をしているものに現れる。

★　ＥＲＣ（European Research Council）プレジデント　Ｂｏｕｒｇｕｉｇｎｏｎ氏

ERC:=EU が 2007 年に設置。ファンディング分野は、自然科学に限らず、社会科学・人文科学も含まれる。

ＥＲＣはヨーロッパの研究資金８％を管理している。　ハイリスク／ハイリターン型。



市場や社会での実証

ERC は４つのスキームで研究支援を行っている。
Ｓｔａｒｔｉｎｇ　Ｇｒａｎｔｓ
スタート支援
Ｃｏｎｓｏｌｉｄａｔｏｒ　Ｇｒａｎｔｓ
基盤固め
Ａｄｖａｎｃｅｄ　Ｇｒａｎｔｓ
先端支援
Ｐｒｏｏｆ　ｏｆ　Ｃｏｎｃｅｐｔｓ

（女性が受給した場合で、その女性にライフイベントがおきた時は１８ヶ月延長可にしている）。

★文科省・常磐研究新興局長



大学教育、高等教育の質的向上のためには「融合」が重要（特に情報）

分子・原子レベルでの探索が可能になったが、情報が膨大になった。
→情報科学が重要である。

ブレークスルーを考えるために重要なこと
基礎研究のジャンプ。
卓越性のある研究の発掘
様々な領域と情報科学との融合
科研費で得られた研究の卓越性をどうやって拾い出して次につなげるか？

★オマケ・懇親会

根岸「先輩」と記念写真。（ボクも湘南高校出身なんです！と言って無理矢理とってもらった）



参考 URL

文科省による簡単な報告（海外からの約 150 名を含め，約 500 名の参加者があったとのことである）

http://blendboard.jp/government/detail/3507468/6471457

シンポジウムの予告

http://grc2015tokyo.jp/

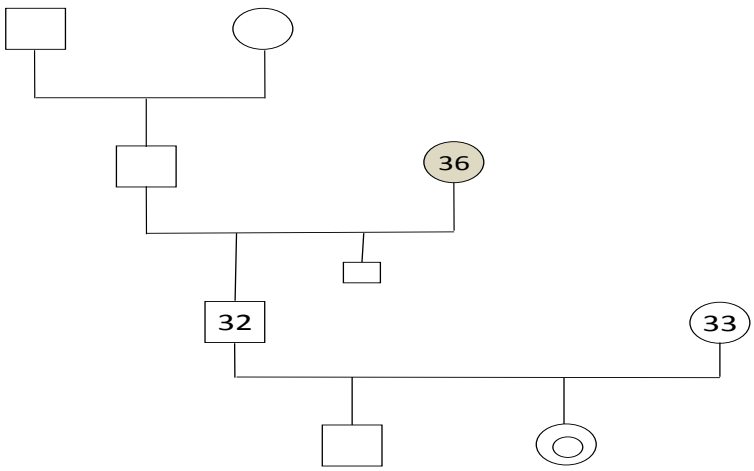
日本のジェノグラム

早樫　一男

8

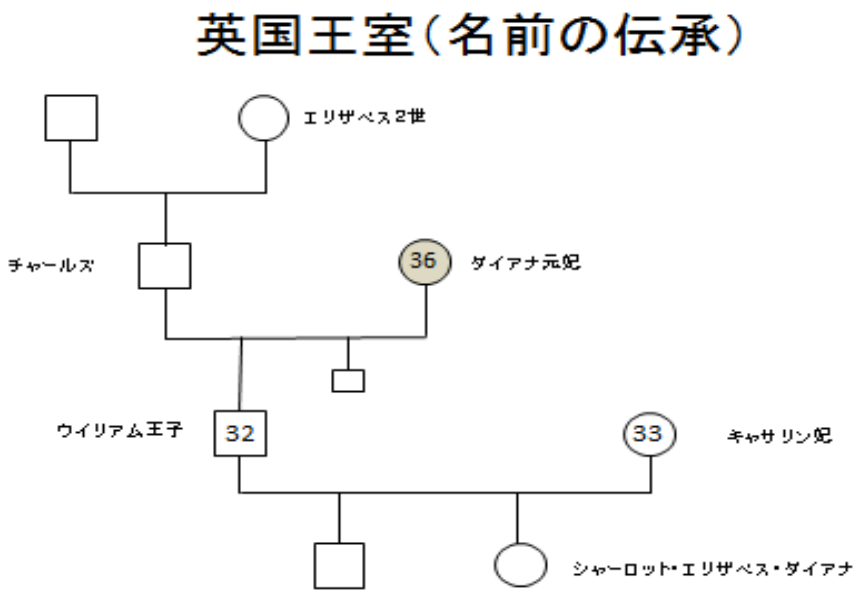
人生最初のプレゼント：名前

以下のジェノグラムは第二子の誕生と命名（名付け）に関わって、最近、話題になったご家族です。分かりますよね？



日本の場合、両親や祖父母の名前の「一字」を伝承するといったパターン、さらには、先祖代々伝わっている「一字」を使う家族があります。今回の場合は、生まれた子どもから見れば、父方祖母や曾祖母の名前がそのまま使われています。この点は日本との違いでしょうか。

いずれにせよ、名前の伝承は日本だけではないということを改めて感じた今回の話題でした。



そして、名前（日本の場合は漢字の一文字）の伝承とともに、誕生時点から家族にとっての何らかの役割を期待されることになります。子どもなりに親の思いを意識する場合もあれば、時には、その思いや期待が強すぎて、子どもがしんどくなるといったこともあるかもしれません。

〇改めて、命名の話題から

私は「一男」です。私の両親にとっては最初の子どもでした。名付けたのは父方の祖母と聞いています。祖母にとっても初孫になりました。さらに言えば、母親は私の誕生の前に流産したことがあるとか…。私の場合は、何かにつけ、「長男」という役割を担うことになってしまいました。

いずれにせよ、漢数字の「一」が名前についているだけで、「最初の男の子」「一人目の男の子」「長男」であることなどがイメージされることになります。

子どもの名前には家族のさまざまな思いが込められています。ある子は「健康に生まれたこと自体が親にとっては大きな喜び」だったという思いから、「歓喜」という名前が付けられました。「歓喜」というのは、ベートーベンの有名な交響曲第９番「歓喜の歌」で使われている漢字です。

さらに、命名のプロセスも家族によっていろいろです。それは、名前の決め方や決まり方のことです。そのエピソードを通して、家族のありようや家族の一面を垣間見ることができるのです。

ある家族の場合

彼女は事情があって、一人娘を連れて離婚しました。娘が３歳の頃でした。
その後、紆余曲折を経て、娘が小学校に入学する前に再婚することになりました。縁があった男性にも離婚歴がありましたが、その男性には子どもはいませんでした。

お互いの再婚は夫婦関係を新たに築いていくという意味で大きなハードルに向かうことになります。二人はそのことを随分意識していたので、再婚を決めるまでに、何回も話し合いを重ね、時間をかけました。

次に、意識したのは男性と子どもとの関係です。おとな同士は納得したとしても、子どもを連れた再婚の場合、新しい親との関係づくりは大きな課題になります。いわゆる、義理の関係です。

一般的に、義理の関係が生じた場合、親と子、それぞれの家族メンバーが新しい人間関係の中で、これまでとは異なったストレスを感じても不思議ではありません。

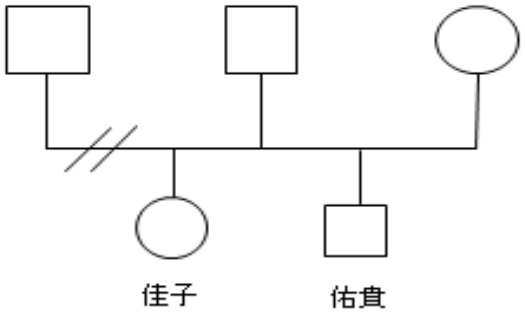
「最初から完璧にうまくいかなくても不思議ではない…」「むしろ、あたりまえ…」と思う方が、家族お互いに力まずに済み、良い関係を育てていくことにつながると思います。

二人は再婚に際して、「焦らずに、時間をかけて、ゆっくりと親子の新しい関係を築いていこう」と心に決めました。

二人の間に新しい命が芽生えたのは、再婚後、３年ほどたった頃でした。夫婦はもちろんのこと、長女も新しい家族の誕生をとても楽しみにしました。その姿を見た両親はさらに喜びました。

夫婦が時間をかけて話し合ったのは子どもの名前のことでした。生まれてくる子どもも含めた二人の子どもに対して、「分け隔てない愛情を注ぎたい」という思いと、「きょうだい仲良く育ってもらいたい」という、両親の思いをなんとか子どもの名前に反映できないかと考えたのです。

夫婦が相談した結果、生まれてくる子どもの名前は「ゆうき（佑貴)」としました。そして、「ゆうき」の「ゆう」には「にんべん」に「右」の漢字を使うことにしたのです。というのは、長女の名前には「にんべん」が使われていたからです。「にんべん」に「土二つ」の「佳」に子どもの「子」でした。



「親の思いをなんとか子どもに伝えたい」「親の思いを子どもの名前に表したい」と考えた結果、長女の名前からヒントを得たのでした。

二人の子どもに「にんべん」という共通した漢字を使うことによって、親としては、子ども達に対する思いをささやかな工夫で表したかったのです。

生まれてくる子どもにとって、名前は人生で最初の家族からのプレゼントです。また、誕生から始まって一生続く貴重なプレゼントではないかと思います。

（つづく）

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 20 話

水野　ス ウ

クッキングハウスで 11 回目のおはなし会

調布のレストラン、クッキングハウスのお招きで毎春、「スウさんのピースウォーク」と題してお話に出かけます。11 回目になる今年のテーマは、「わたしの 12 条宣言」。ちなみに去年のそれは憲法 13 条でした。

そのおさらいも兼ねて、今年、クッキングハウスやその他二つの小さな出前先で語ったことのまとめを、ここに。

出前の中味が、クッキングハウスにかぎらずこのところ憲法づいている理由は、私の中でとても明確です。

自らを「私が最高責任者」と言ったり、私たちに諮りもせずに、内閣のごく一部の人だけで集団的自衛権行使も OK と決めちゃったり、はたまた、自衛隊を「我が軍」と言ってみたり。

憲法を守る義務を負ってる総理大臣が、どうしてこうも次から次へと憲法違反するのだろ。いっとき不思議に思っていました。安倍さんが「主権在民」の意味をしっかりわかっていたなら、自分のこと、とてもそんなふうには呼べないよ。9 条をきちんと読んでいたなら、仮に心で思ってたって「我が軍」なんて言えないはずだよ。

でも今はこんなふうに考えます。いやいや、安倍さんのたび重なる憲法違反は、わざとの計算のうち。3 年前に自民党が出した憲法改正草案の中味に、私たちを徐々に馴らしていくための。数かずの違反は、私たちが真剣に怒るかどうかのリトマス試験紙で、国民がどこまで憲法を知っているか試しつつ、違憲アレルギーに免疫をつけさせつつ、いよいよ改正本番の時には、すでに私たちの主権者感覚が限りなく薄っぺらになっていて、国が私たちをしばる「国家主権」の憲法を、国民がすんなり受け入れてしまえるよう、着々準備しているのだと。

安倍さんのこんなやり方に、とても無関心でいられない。そこで、私なりに学んだ憲法のことを、こうした出前で語っているのです。

直感で発見、の13条

「すべて国民は個人として尊重される」ではじまる憲法13条に私が注目しはじめたのは、6年前でした。娘がほぼ直感に近いような形で、13条の意味を発見したことからです。

私たちは、一人ひとり、ほかの誰ともとりかえのきかない存在で、大切にされる権利やしあわせを追い求める権利を持っている、ほかの人のそれらをないがしろにしない限り。つまり、その大切さは行ったり来たりってこと。

なんでこんなことがわざわざ憲法に書かれているかといえば、一人ひとりよりも国が大切で、公(おおやけ)が大事だった前の憲法のもとでは、自分らしく生きることも、戦争はいやだと声をあげることも許されなくて、国が暴走するのをとめられなかった、という過去の歴史があるから。一人ひとりの、自由に生きる権利が大切にされなければ、そもそも、平和はなりたたないんだ。

娘のこんな憲法解釈のおかげで、それまで単なる条文としてだけ知っていた13条が、私にも急に身近なものになりました。

「13条のうた」をつくって出前先で歌い、2年前には憲法の小さな読みもの付きCDブックまでつくってしまった（詳しくはマガジンバックナンバー第16号に！）。それは、改憲の波がひたひたおしよせてくるのを肌で感じて、しろうとが無謀にも出したCDだったけど、今ではこれがわたし流“平和の名刺”。出会った人に気軽に憲法を手渡すための、格好のツールとなっています。

みややっこさんの、13条

この春、金沢で八法亭みややっこさんの憲法噺を聴きました。みややっこさん、こと飯田美弥子さんは、八王子合同法律事務所に所属する弁護士さん。なので高座名が、八法亭。高校時代、落研にいたスキルを活かして落語で憲法講座をしてみたら、これがおおいに！　受けた。以来、本業の弁護士さんをしつつ、週末は各地からひっぱりだこのみややっこさんに。

このみややっこさんも13条が大好きと知って、先にわたし流・平和の名刺をお送りしたところ、打てば響くがごとく返ってきた、13条を介してのきもちいいエール。なのでいっそう楽しみに、みややっこさんの講座、もとい、憲法高座にでかけたのです。

みややっこさん、実に端切れよく、テンポのいい口調で語ります。

――え〜、意外に思われるかもしれませんが、日本国憲法の核心は、9条ではないのです。人は9条を守るため、平和を守るために生きているのではないのです。

――日本国憲法の核心は、個人の尊厳を守ること、国民の一人ひとりがその人らしく幸福を追求できるようにすることにあり、これは、第13条の、「すべて国民は、個人として尊重される」「幸福追求に対する国民の権利については……国政の上で最大の尊重を必要とする」に表されています。

――何を幸福と感じるかは、人それぞれで違います。他人の権利を侵害しない限り、各人が好きなことをしていいんだよ、国は最大限尊重しているよ、と13条は言ってくれているのです。今の13条は、私を丸ごと肯定してくれています。どんな時も私はこの13条に支えられて、幸福になろうとしてきたのです。

――個人が幸福を追求するためには、人権が保障されること（自由）と国民主権（民主）が、必須。それに平和主義。この3つが個人の尊厳原理を支える三本柱。今の憲法が特にすばらしいのは、戦争は、個人の尊厳にとって有害なものでしかない。戦争という手段は捨てる、と見切ったことです。

時に凛と格調高く、もちろん噺家さんならではの落ちも随所にあり、大爆笑の渦の中で憲法のキーポイントが次々、腑におちていく。

みややっこさんの噺で何よりうれしかったこと。そ

れは、私たち親子が知識に依らず素直に、13 条ってすごくいい！　と感じ、表現してきたことが、専門家によって、理論とともにはっきり太鼓判を押してもらえたこと。みややっこさんから、13 条こそが憲法の核心、と言いきってもらったことは、私が 13 条を語る時の、大きな勇気と確信になりました。

同志社大学総長さんの、13 条

この春の同志社大学の卒業式で、総長・大谷實さんの述べられた祝辞がすばらしかった、と知り、早速ネットで読んでみました。そこにはこんな言葉がありました。

――私は、今日の我が国の社会や個人の考え方の基本、あるいは価値観は、個人主義に帰着すると考えています。個人主義は、最近では「個人の尊重」とか「個人の尊厳」と呼ばれていますが、その意味は、国や社会で最も尊重すべきものは、「一人ひとりの個人」であり、国や社会は、何にも勝って、個人の自由な考え方や生き方を大切に扱い、尊重しなければならないという原則であります。個人主義は、利己主義に反対しますし、全体主義とも反対します。

――あの悲惨な太平洋戦争の原因の一つであった、全体主義あるいは天皇中心主義といった国や社会のあり方について、深刻に反省し、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」て、全体主義・天皇中心主義の国や社会のあり方を 180 度転換して、「すべて国民は、個人として尊重される」としたのです。憲法 13 条は、まさに、日本国憲法の根幹を示すものとして規定されたのでした。

大谷総長さんはこの言葉に続けて、すでに自民党から出されている憲法改正草案には、個人よりも社会や秩序優先の考え方がはっきりとあらわれていて、これは全体主義への転換を目指すものであってにわかには賛成できない、とおっしゃっています。

スピーチの最後では、卒業生がいずれ直面するであろう憲法改正問題にもふれて、「どうかこの日あえてもうしあげた『個人主義』のことを思い起こしてほしい、そして熟慮に熟慮を重ねて最終的に判断してもらいたい」とまで言っておられます。

刑法学の専門家で、法学博士でもある総長さんのこのスピーチから、私が大きな勇気と確信を得たのはもちろんだけど、それ以上に、卒業生に向かって今この言葉を贈らずにいられない、総長さんの切実な危機感と、ことの重大さがひしひしと迫ってきて、思わず身震いしました。はたしてこのリアルな感覚を、今の日本でいったいどのくらいの人たちが共有しているだろうかと。

ピースウォーク金沢 2015 の、13 条

イラク開戦の日の前後に、金沢で毎年続けている「ピースウォーク」という名の市民のデモは、今年で 14 回目。

少なくともこの実行委員会メンバーたちには、13 条の意味と、今の政治状況への危機感、その両方が共有されていること、前々から感じていました。今年はとりわけ、ウォーク当日に先だっていくつもの「ピースウォークカフェ」と称する憲法の勉強会、語りあいの場がもたれたけど、それもそんな意識のあらわれです。

ある日の実行委員会で、今年はウォークの最後に「13 条のうた」の歌詞を輪読しよう、という声があがりました。私にとっては思いがけない提案だったけど、その理由が何ともうれしい。

この会ではこれまでも、一人ひとりの存在が大切にされ、違う意見にも耳を傾けながら、根気よく話しあってウォークの中味をきめることを、とても大事にしてきました。そういう時間を重ねる中で、一人ひとりのすてきさ、居ることの大切さを互いに発見していく。時には、自分にしかできないこともあるのだ、と気づいていく。

「13 条のうた」の「ほかの誰ともとりかえっこできな

い、ひとつきりのいのち」、「あなたが大切にされ、わたしも大切にされ、それが行ったり来たり、ともに生きること」という歌詞。それがまさにこの場のことで、13 条は自分たちのことで。メンバーたちの共通したそんな想いから、「13 条のうた」をみんなの前で輪読したい、という声が自然発生してきたのでした。

ピースウォーク当日。ゴール地点の街なかの広場で、11 人の輪読ガールズ、こと実行委員会メンバーたちが一列に並びました。赤ちゃんを腕に抱きながらの人、車椅子の人、福島出身の若い人、今年のすてきなピースバナーを描いてくれた人、3.11 後に関東から金沢に避難して来た人たち……が、私の朗読する「13 条やさしい日本語訳」に続けて、歌詞を順に読みあげていきました。

100 人余りが集った商店街広場には、ベビーカーの親子も、家族連れも、若い人も、もちろんシニアの人たちも。それぞれが色とりどりのプラカードや、横断幕や太鼓を持ちながら、街なかで思い思いに平和の意思表示をした、この日のピースウォーク。

ピースウォークを準備すること、参加すること、憲法を学ぶこと、行動すること。どれもみな、憲法 12 条で私たちに求められている、不断の努力の実践です。そして、個人が尊重され、それぞれに幸福を追求する権利がある、と書かれた 13 条の中味を実現させていくために欠かせないものも、やっぱり、一人ひとりの 12 条の実践なのだと、この時実感しました。

103 ある憲法条文の中でたまたまかもしれないけど、席が隣りあわせた 13 条と 12 条、この二つが私の中でしっかりリンクした、この春の金沢ピースウォークでした。

不断の努力を普段から、の 12 条

憲法は権力をしばるもので、その矢印のほとんどは国にむかっている、と数年前から言い続けているけど、12 条の矢印は逆に、国民の私たちにむけられています。

この憲法が私たち国民に保障してくれている自由と権利は、私たちが不断の努力を普段からすることで、これを保ちつづけるようにしなくちゃならない。あ、でもね、自由と権利が私たちに保障されてるからって、その間違った使い方をしちゃいけないんだよ、それはみんなの幸せのためにこそ使うものだからね、というのが 12 条に書かれていること。

この 12 条の存在をはっきりと意識したのは、遅ればせながらたったの 2 年前です。「13 条のうた」に添える憲法の読みものを書いている時に、はた、と気づいた。そうか、不断の努力！　かぁ。私、すごくさぼってたな、自分の 12 条、ちゃんとしてきてなかったな。平和憲法にあぐらかいて、平和も 9 条もいつまでもあるものだと勘違いしていたな、と。

憲法によってしばられて、好き勝手できない権力にしてみたら、窮屈だからゆるめたい、って思って当然。ゆるめようといつだってすきをねらっている。そのすきまをつくらせないためには、私たちが国のしていることをしっかり見ていて、変なことした時にはいやだと声をあげ、意思表示すること。12 条を実践する私たちと、国との、おしくらまんじゅうが常日ごろからもっと必要だったんだ、と気がつきました。

「12 条する」って、たとえば

選挙にいって投票することは、もちろんもっとも有力でわかりやすい、「12 条する」こと。国を相手に裁判することもそう。イラク戦争に自衛隊を派遣したのは憲法違反だ、と訴えることもできる（これは 9 条違反だった、という判決が出ています）。

でもそれだけじゃない、その気になってまわりをみれば、もっと日常的に、ささやかに、いろんな 12 条している人がほかにもいっぱい、いるいる。

官邸前で声をあげる人もいれば、デモに行く人、憲法の勉強会ひらく人、聞きに行く人、国に対する自分の意見をマスコミに投稿する人、権力を監視することで 12 条をしているメディアに応援メールする人、大中小のさまざまなピースアクションにかかわる人、いい情報をすばやく発信してくれる人、それを拡げる人。

平和と戦争について考えることも、平和の絵本の読み聞かせを続けることも、家や仕事場や舞台や町の広場やカフェやちいさな語りあいの場で、絵や音楽やお芝居や本や映像、その他のメディアで、平和を表現することだって、もちろんそう。

クッキングハウスでも、以前からずっと憲法に関心を寄せて、勉強も行動も続けてきている。そういう一つひとつが「12条をする」ことで、平和の一粒、peaceのpieceだ、っていうこと。

生きることは、息をすること。そうやって何気なく息するように、自分なりの小さなpeaceを、日々実行していけたとしたら、それが12条で求められている、不断の努力なのだと思います。

若いころの私の頭ん中は、まるきりピーマン、社会にも政治にも無関心だったけど、紅茶という場を通してだんだん無関心から「無」がとれてきて、学んだり考えたり。そして今の私に至ります。知ったことを自分の言葉でまわりに伝えていくこともまた、12条することだと思いつつ。

こんな話をしてから、この日のおみやげとなるA4サイズの「わたしの12条宣言」を、参加しているみなさんに輪読してもらいました（この宣言はマガジン第18号に）。

草案って、どんな案？

自民党は、憲法改正草案なるものを2012年に出しました。憲法は国のかたちと在り方を決めるものだから、これを読めば草案をつくった人たちがどういう国を作りたいと思っているか、よくわかります。

党のHPから誰でも読むことができるけど、一人で読みだすと、いかんせん、難しすぎて途中で挫折しがち。私もそうでした。それでも「あすわか」（明日の自由を考える若手弁護士の会）の弁護士さんから解説してもらって、大体のポイントだけは押さえることができたので、そのおすそわけを。

＜その１＞

一番特徴的なことは、私たちに課せられる義務がめっちゃふえている、ということ。今の憲法では、「三大義務」とよぶように、子どもに教育を受けさせる義務と、働く義務と、税金を納める義務、この3つだけなのに、草案ではそれが22にもふえています。

たとえば、国防の義務。日の丸・君が代を尊重する義務。家族が助けあう義務（国がこんなことに口だして憲法に書くのが、そも、ヘン！）などなど。

そして、今の99条では、憲法を尊重し守る義務があるのは、天皇はじめ、総理大臣や国務大臣や裁判官や公務員、となっているのに、草案では、まっ先に私たち国民にその義務が課せられている。憲法の本質は、権力をしばるためのもの。その矢印の向きが、これまでと違ってくるのです。

＜その２＞

今は“象徴”とされている天皇だけど、草案の第1章には、「天皇は元首である」と書かれています。アジアの国々は、これをどう感じるだろう。その上、今の憲法とは違って、この天皇に憲法を守る義務は課せられません。天皇は、憲法をこえた存在になるのでしょうか。

＜その３＞

これまで平和主義をつらぬいてきた憲法9条の条文が、大きく変えられています。「戦争放棄」の章は「安全保障」に、「自衛隊」は「国防軍」に、その国防軍は軍事裁判所のような審判所も持つことになります。

草案の9条では、国防軍が守る対象にまっ先にあげられているのが「我が国の平和と独立」。国民は、二の次。それに、ひとたび事がおきた時、軍は国民を守らない過去がいっぱいあったこと、忘れちゃいけない。満州でも、沖縄でも。まして、この国防軍は、国内の治安維持のためにも出動できる、と書いてあるからなおさらです。市民のデモを取り締まる目的で、軍がでてくるかもしれません。

＜その 4 ＞

まったくあたらしい章としての「緊急事態条項」は、特に要注意！　ここに書かれているのは、首相が、今が「緊急事態」と判断すれば、「緊急事態宣言」を出すことができて、その宣言が出されたら、何人も（なんにんも、じゃないよ、なんぴと、つまりどんなひとも）その命令に従わなきゃいけなくなる、ということ。

「地震等による大規模な災害」という言葉をいれて、あたかも憲法にこのきまりがなかったから、3.11 後の対応がうまくいかなかったように思わせつつ、よく読むと、「内乱などによる社会秩序の混乱」も、緊急事態の定義に含まれてるではないですか。

麻生さんの「ナチスの手口を学んだらどうか」発言が思いだされます。ヒットラーが全権委任法と大統領緊急令を使って、ワイマール憲法を完全に骨抜きにし、国を意のままに動かしていったこと。あの方法を見習え、と麻生さんは言っていたのだと、今ははっきり思っています。

来夏の参院選後、おそらく自民党は憲法改正の発議をするでしょう。いきなり 9 条ではなく、まずは受け入れられやすい、「環境権」や、この「緊急事態条項」などを新しく加えたい、と。その説得理由に、3.11 がおおいに使われるだろうこと、今からしっかり心しておかなくちゃなりません。

＜その 5 ＞

私たちの「基本的人権」が、ことごとくちっちゃくさせられ、制限されていること。

まずは、私の大好きな 13 条。今の条文にある「すべて国民は、個人として尊重される」は、それぞれの自由と、しあわせを追い求める権利を、国は尊重しますよ、ってこと。どのようなあなたであっても、それが他人の人権をじゃましないかぎり、あなたがあなたを生きる自由があるし、あなたのしあわせはあなたにしかきめられないこと、と 13 条は言ってくれています。

ところが草案では、今の「個人として」のところが、「人として」に変えられている。「個」なんてあってもなくてもそう変わらない？　いえいえ。ここで想定されている「人」とは、憲法に定められる義務をしっかり守る、国にとって都合のいい国民としての「人」。私も、私の自由も、国の考える、人たるものこうあるべきだ、の枠におしこめられたくなんかありません。

そしてこの 13 条に限らず、ほかの条文にもある「公共の福祉に反しない限り」の言葉が、草案では、「公益と公の秩序に反しない限り」と書き換えられていたり、新たに付け加えられているのも、大きな違い。幸福追求の権利も、表現の自由も、私たちの自由と権利も、財産権も、草案では公の秩序が優先されているのです。

「公共の福祉」と「公益」は、なんだか似ている気がするけど、実はまったくの別物。おおやけの利益は、国益、おかみの意向に反しない、という意味だろうけど、前述のみややっこさんはずばり、「この部分を、安倍様の好み、と読み替えてみると、草案条文の本音がよくわかりますよ」といってらした。確かに！　その方がピンときます。

自民党はもちろん最終的に 9 条を変えたいのだけど、日本が戦争できる普通の国になっていくためには、そこだけ書き換えてもうまくいかない。だからこその、「公の秩序」がここにもあそこにも、「法律の定めるところにより」という言葉が、ここにもあそこにも、ちりばめられている。

はて、この“法律”ってなんだろう。実は中身はまだ決められていなくて、時の内閣の裁量で、そこはいかようにも変えられる、という法律なわけです。

草案との読み比べ早見表

「憲法」は、政府がやるべきことと、やってはいけないことをわたしたちが決めた、国のおおもとのきまりです。戦争したい人たちには、つごうのわるいきまりです」（絵本「戦争のつくりかた」より）

この言葉を借りるならば、草案に書かれているのは、政府にとって都合のよいきまり。草案の主語は一見、私たち国民のようでいて実は、「日本国」「我が国」だったりしています。

これでは憲法が、国をしばるものから、私たちをしばり、従わせるものへと、「国民主権」から「国家主権」へと、憲法の意味が180度かわってしまう。国のための国民を求められることで、私たちの自由と権利が大きく制限されてしまう。

つまり今の憲法の三本柱である、「主権在民・基本的人権・平和主義」が、3つともくずれていく、ということ。まさに、立憲主義のさかだち。同志社の総長さんが危惧しておられた、全体主義への転換、逆走です。

クッキングハウスの出前では、現憲法VS自民党改正草案の比較早見表・てのひらサイズ、をおみやげに用意しました。せっかく来てくださったからには、憲法について知ったこと、一つでも二つでも持ち帰って、まわりの人と話す際の小道具にしてもらいたくて、私の学びをぎゅぎゅっとコンパクトにしたもの。これがみなさんにとっても好評でした。

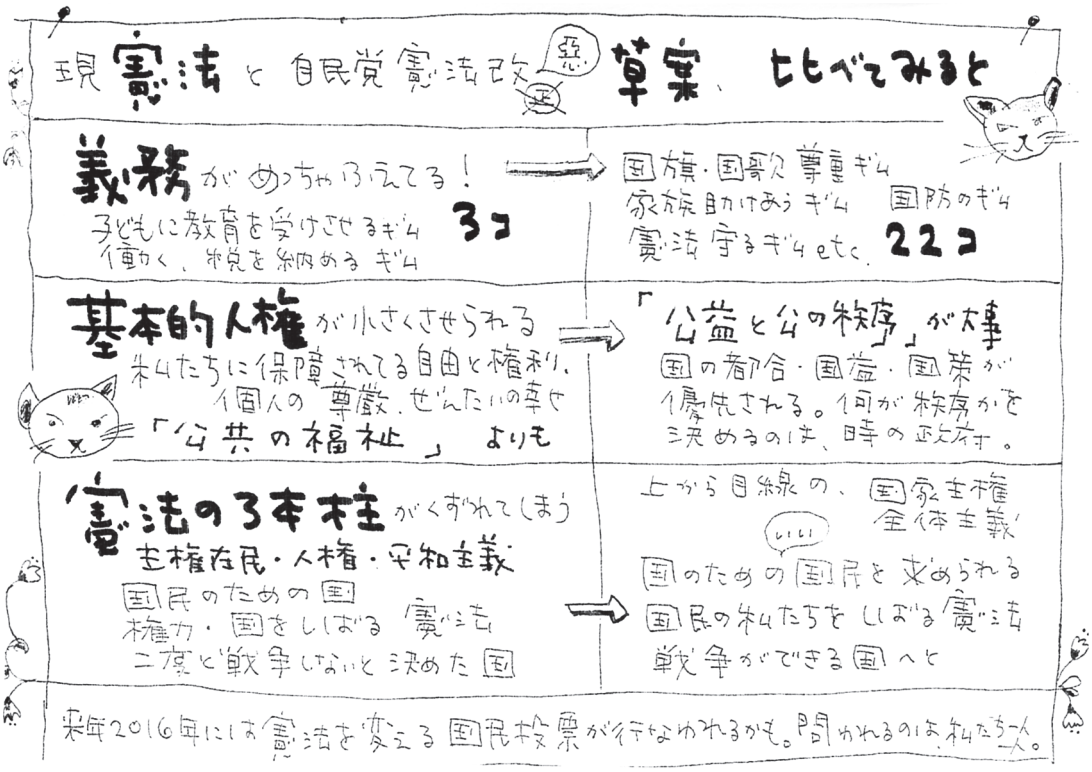
平和の場を守る

クッキングハウスが憲法を熱心に学ぶのは、今にはじまったことではありません。今から10年前の2005年、私にだされたご注文のテーマからしてもう、9条でした。その翌年は私からの提案で、憲法改正国民投票にそなえての「国民模擬投票」をしたくらいです。

今年のおはなし会で松浦幸子さんが言われたこと。「クッキングハウスが平和な場所でありつづけることが、自分にとっての、平和を守るたたかいなのです」。

国が危険な方向に進んで行こうとする時、支援をもっとも必要とする人たちへのサポートが、まず切り捨てられていく、福祉が縮小されていく。福祉の現場に長く身をおいている松浦さんは、もうそれがすでに始まっていることを、誰よりもリアルに感じている一人。

だからこそ、これまでもずっと、メンバーたちと憲法を学び、自分たちにできることを探し、みなで平和の歌を歌い、ともに行動してきたのです。クッキングハウスが平和の場であるためには、社会が平和でなければならない、それが松浦さんの活動の根っこにあることを、この日あらためて強く感じました。



ふりかえりのひと言感想で、あるメンバーさんが、「松浦さんが私たちと関わることが、松浦さんの平和の活動と知ってうれしかったです」と。

今の社会の生きにくさを、人一倍感じている人たちの心のおだやかさを保つこと、ひとりぼっちにさせないこと、支える側と支えられる側が分断されずに、今ある平和な場をともに何としても守ること。その日々の活動がまた、支える側の松浦さんをも、実は支えているのだろうなと思います。

考えてみれば、それは「紅茶の時間」にだって言えること。紅茶にやってくる人とおなじ目線で、プライベートなきもちの話も、暮らしの中のなにげない話も、家族の問題も、そしてその延長線上にある、平和や戦争、憲法や原発の話、政治の話も自由に語りあえる、こんな場のあることが、私の平和のものさし。この場が平和でありつづけるために私のできることをする。それがきっとこれまでの／これからも、私のしごと。私のしあわせ。

「12条します」

私が石川に帰ってしばらくして届いた松浦さんからのお手紙に、こうありました。

「クッキングハウスでは、スウさんのピースウォーク以来、『12条します』が合い言葉のようになりました。自然に、息するように、小さい12条を見つけています。あるメンバーが、私は、みんなの食事をおいしく作ることで12条します、とシェアリングタイムに宣言してくれて、うれしかったです。メンバーたちはこころのやさしさで、一人ひとりが12条しています」

クッキングハウスへの出前翌日、川口でのおはなし会に参加された稲城の保育園々長の田中雄二さんも、ご自分が出かける場でたびたび、「13条のうた」のCDを紹介してくださっています。

田中さんは、集団的自衛権行使容認が閣議決定された翌朝、保育者としてとても黙っておれず、「園長からの平和の伝言」を書かれた方。新聞で知り、まさに12条している園長さんがここにおられる！　と感動して、私から平和の名詞のCDをお送りしたことが、ご縁のはじまり。送っていただいた伝言の全文を読み、園長さんの勇気ある行動への“返歌”として、私は「わたしの12条宣言」を書こう、と思ったのでした（このことも詳細は第18号に）。

園長さんからはその後何度も「13条のうた」の追加注文をいただいています。添えられた言葉に、「また、いろいろな機会に12条したいと思います。peaceのpieceのことも、みなさんに伝えています」と。

そうなんです。まさにこういう感覚が、普段から不断の努力の12条する、っていうこと。自分がこの国の平和のひとかけらをつくりだしている一人なんだ、国の好き勝手にはさせないよ。そんな意識を多くの人が持つことが、「主権在民」の中味を空っぽにせず、充たしていくことだと思うのです。

紅茶けんぽうかふぇ

折しも、新法の「国際平和支援法案」と、これまであった安保法制の改訂バージョンを十把ひとからげにした「平和安全法制整備法案」が、閣議決定され、国会審議が始まったばかり。「平和」と名づけているけど、その心は、安倍さんがアメリカに出かけてオバマさんに勝手に約束してきた、名は体を表さぬ、11本もの戦争法案のこと。

どうやら、安倍さんの「平和」と、私の「平和」は違っているらしい。すれ違った言葉の使い方をそのまま放っておくと、いつしかそれが「へいわ」の意味になってしまいかねません。そんなのまっぴらごめんなので、私は私の定義での「平和」を、私の言葉でこれからも語っていくのです。

そんな想いから、東京の出前で語ってきたことを、ホームグラウンドの紅茶の時間でも、あらためて語ることにしました。名づけて「紅茶けんぽうかふぇ」。一回ごとは小さなサイズで、対話しながら、憲法の核心の13条も、そのお隣の12条も、改正草案の中

味についても、自分ごととして考えてもらえる時間を重ねていくつもりです。

秋には、春の東京で話を聴いた人たちが、自分のまわりにいる人たちにもあの話を聴いてほしいから、と、今度はそれぞれの暮らしの場で、再びのけんぽうかふぇを用意してくれることになりました。

2015.5.20

今回のお話に登場したトピックスの詳しい情報はこちら↓からどうぞ。

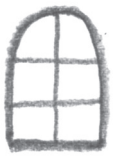
○日本国憲法改正草案（自由民主党）
https://www.jimin.jp/policy/policy_topics/pdf/seisaku-109.pdf

○『八方亭みややっこの憲法噺』（花伝社、2014）
http://kadensha.net/books/2014/201405miyayakko.html

○ 2014 年度同志社大学卒業式祝辞（2015年 3 月 20 日）
http://www.doshisha.ed.jp/message/speech20150320.html

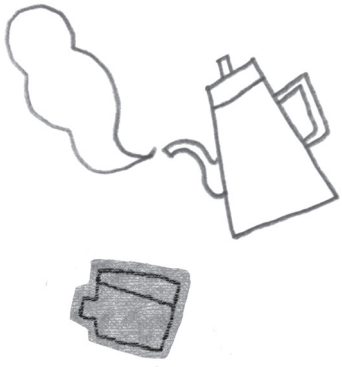
○明日の自由を守る若手弁護士の会（あすわか）
http://www.asuno-jiyuu.com

○ひらお保育園園長からの平和の伝言
http://www.kinoouchi.com/area/area%2014-08%20heiwanodenngonn.html



○「憲法 13 条のうた　ほかのだれとも」
http://maiworks.cart.fc2.com/ca2/18/p-r-s/

○対人援助学マガジン第 16 号
http://www.humanservices.jp/magazine/vol16/19.pdf



○対人援助学マガジン第 18 号
http://www.humanservices.jp/magazine/vol18/20.pdf

お寺の社会性

—生臭坊主のつぶやき—

最終回

竹中尚文

1. お寺に生まれて

私はお寺で生まれて、そこで育った。私には、お寺という空間が日常であった。それが私にとってお寺が非日常的空間と感じない理由だと思っていた。つまり、「夜の本堂は怖くないのか？」と尋ねられたときの答えである。特に怖いと思わない。この質問の背景に、お寺を霊的空間と捉える人もいる。うちは田舎寺だから、私は境内に落ちた猫や狸の糞を拾い集める作業をすることがある。お寺が霊的空間であるなら、こんな作業は不要である。夜の本堂を怖く感じないのは、私がお寺で育ったからだと思ってきた。

しかし、思い返してみると幼児の頃、何か悪戯をしでかして、罰として本堂に放置されるのがとても怖かった。きっと、そんなに長い時間ではなかったとも思うが、怖かった。今も覚えている恐怖感というのは、かなり強いものである。それは、暗闇に対する恐怖感ではない。閉じ込められたのは、昼間である。薄明るい本堂であったが、怖かった。

それは、いくら幼児であったとはいえ、本堂にやって来る大人たちにただならぬ空気を感じていたのかもしれない。普段はにこやかに接してくれる人たちが、顔をこわばらせてやって来る。お葬式の最後にお骨を抱いて本堂に参ってくるのである。深い悲しみの空気は、幼児である私にも伝わった。この時、私にとって本堂は非日常空間であった。

幼児の時に感じた恐怖感を今は感じないのはなぜだろうか。ただ単に大人になったということではなかろう。死に対しての感情は、恐怖感がなくなった訳ではない。そんな人はいないだろう。感覚が鈍くなるだけのことだ。今、私はお葬式のご縁を重ねて、死に対してとても強い悲しみを感じる。涙もろくなったと

感じる。涙を隠すのに苦労することが多くなった。

では、なぜ本堂を日常的に感ずるようになったのだろう。おそらく、得度をして僧侶になった時に、本堂や阿弥陀様を日常の暮らしの中に感ずるようにしなさいと、教えられたような気がする。教えられた明確な記憶はないが、私は仏様を日常的に感ずるようにすべきであると思うようになった。いろんな人やご縁に教えられたのだと思う。

かつて、お世話になった長尾雅人先生は起床されると直ぐに、居間にある仏壇に手を合わすのが常だった。仏壇が居間にあるのはいい。最近の住宅は、仏間を設けることが少なくなった。仏壇は居間に置けばいい。法事はお寺の本堂を借りればいい。

2. 本堂で英会話

本堂で子供たちの英会話教室を始めて約 2 年になる。今はイギリス人の講師が教えている。毎週 50 人程の子供たちが、本堂にやって来る。

お寺の境内で、子供たちの声がしなくなって久しい。それを何とかしようと、私たちは思った。私たちというのは、寺に深く関心を寄せてくれる人たちであった。そんな人たちの多くは高齢で、自分たちの子供の頃はお寺の本堂で正座をして、お経を習ったものだと言う。私にお経を教えろと言う。私が子供だったら、一番に逃げ出しそうな話しだ。私がイギリス人に変わり、お経が英会話に変わった。

本堂での英会話教室は、専光寺キッズサンガという団体が運営している。50～30 代の人たちが 10 人程で世話人となってくれて団体ができた。彼らが講師を雇い、生徒募集をして、会を運営している。私は子供の英会話教室をしたいと、お願いをして、見ているだけである。

かつて、私はカリスマ住職にならないと決めた。もちろん私にはそのような才能もない。以前にも書いたが、仏教婦人会の人たちが、ホームレス支援のいなり寿司を作ってくれている。住職は「やりたい」と言って、みんなに「やって」とお願いするだけである。住職が目立っているお寺より、そこに集う人々が輝くお寺であってほしいと思っている。

3. 住職の出番

そんなわけで子供の英会話教室でも、私の出番はあまりない。この 2 年ほどの間で、一度だけ出番があった。

一人の男の子が、周囲の子供たちにいたずらをされ、からかわれるようになった。彼の表情がみるみる暗くなった。

講師と教室アシスタントと私で相談をして、私の出番となった。布袍(ふほう)という黒い衣を着て、袈裟をかけて子供たちの前で話しをした。この本堂では、お葬式もする。またお葬式の後は、いつもお骨を抱いた家族の人たちが悲しみのうちに参ってくる。本堂は、涙の乾かない人たちが参ってくる所でもある。この本堂で、笑顔を振りまいて遊ぶ子供たちは、どれ程の人々を救ってくれているかを知ってほしい。私も、彼らの笑顔に救われた。仏教の教えでは、生きることは苦しみであると言っている。だからこの本堂で子供たちが笑顔を振りまいてくれるのは、とてもありがたいと話した。

その後、子供たちに笑顔が戻った。子供たちの笑顔や歓声は、人々の心を軽くする。本堂という空間の力もはたらいたのかもしれない。本堂という舞台で、子供たちは自分の演じるべき役割を考えたのだろうか。子供たちはここでいかに振る舞うべきかを考えたのだと思いたい。

私は、お寺の本堂という空間の力を改めて思い知った。私にとって、本堂は日常の空間であるから、その力に気付いていなかった。お寺の人間が、お寺の力に気付いていなかった。

4. おわりに

これまで私の駄文を読んでくださって、感謝の気持ちを申し上げる。これからも、私は専光寺という舞台で人々が人生物語を語ってくれるのを期待している。ここでは、一人ひとりの個の感情が語られ、それらが結集して人々に生きる力を与える結果となることを願っている。住職はこの舞台の演出家である。私は顔を出したがりの演出家であるかもしれない。

これまで私の文章を読んでくださった方々は、何処かで仏縁を結んでいただけたら嬉しい。そのご縁は専光寺とも結びついているのだろうし、私とも結びついているのだろう。

これまでもこれからも、ありがとう。

第19回　これからの男性援助を考える

個人的子育て体験から考える男性援助

松本健輔　坊隆史

この連載を区切りのよい第 20 回で終了することを決めた。必然的に私、松本健輔は今回が最終になる。これまで私の回は夫婦カウンセリングをする立場で男性援助を論じて来た。最後は私個人の体験を通して思いつくまま男性の子育て、そして支援を考察してみたい。私自身父親として決して誉められる父親ではないと思う。保育園で他のお父さん達に接すると、本当に子ども中心の生活をしている。それが出来ない父親だからこそ考えたこと、経験したことが少しでも何かの役に立てればと思う。

「仕事頑張らないと！！」

このフレーズは第一子、第二子妊娠の報告のどちらも自動的に頭をよぎったものである。夫婦カウンセリングをしていると、出産を契機に夫婦関係が悪くなった話を多く聴いてきた。子は鎹ではないようだ。カウンセリングの場で一番大きく出る違いは、男性は子どもの誕生に際して仕事を頑張るという責任を感じることである。逆に妻は、夫に仕事以上に精神的支えを期待する。かくして、夫が頑張ろうと思うことと、妻が夫に頑張って欲しいとおもうことがズレていく。プロとして日々それを実感している私ですら、無意識にそうなってしまうというのが恐ろしいことだ。

男にとっての仕事

そもそも、男は外で仕事をして、女は家庭を守ってというのは、富国強兵制度の中…といった説明は他の専門書に譲る。ここで考えたいのは、援助という視点でとらえると、仕事への頑張りがあるという点である。専業主婦に限らず、共働きであったとしても、妻は時短勤務などの育児制度を用いることで家計の男性の稼ぎの割合が増える。このような状況になれば多くの男性が家庭を支えているという自負と責任感を持つ環境が整う。一方で、女性の

子育てのストレスは相当なものがある。核家族化が進んだ今、地域や家族の支援が当たり前に受けられる環境にある人は以前よりも少ない。必然的に母親の心理的ストレスは増えていくことが安易に想像できる。子どもと２４時間向き合い、へとへとになっている妻のところに、仕事が疲れて帰ってくる夫が出会う。そこで妻は労いの言葉を夫にかければ上手くいくのかもしれないが、そんな余裕はない。夫も妻に子育ての労いをかければ上手く行くが、そもそも労う大変さは子どもと接する時間が多くなければなかなか実感できない。そこでも夫婦の間に大きな溝が生まれる。

私の話に戻ろう。私は、私設で夫婦のカウンセリングを行っている。夫婦で来る方が多いので、必然的に二人で来れる土日、平日の夜間が多くなる。それ以外空いている時間は、専門学校で講師をしたり、他機関でのカウンセリングも行っている。そうなると朝早く家を出て、帰りは夜遅くなる。当たり前だが、子どもとゆっくり過ごす時間はあまりもてない。ただ、私の中で多少の自信があった。朝は子どもを保育園に送り、出来る限り迎えに行き公園で遊び、仕事を終わった妻に子どもを引き継ぐ。限られた時間の中で子どもに関わっているという自負である。しかるあるとき妻からこんな一言をもらった。

「子どもに愛情あるの？」

カウンセリング場面で、耳にタコができるほど聞いてきた言葉だ。仕事にのめり込む夫を見て、妻は夫が子どもに愛情がないのではと疑う。そこから亀裂が発生することは多い。でも、まさか自分にも同じ状況が起こるとは夢にも思わなかった。でも、今思うと当たり前だと思う。それを実感したのは子どもとの時間を長期間共有した体験と、子どもの躾を考えた時である。

子どもと二人きりで過ごす時間

子どもと二人っきりという逃げ場のない中で、子どもの過ごす貴重な体験をいったい何人の男性が経験するのだろうか。子どもは母親がいないとだめ。泣き止ますのも、寝かしつけるのも父親にはできないと思っている父親は沢山いると思う（恐らくそれと同等数の母親も父親ではできないと思っているが）。実は私も同じまでとは言わないが、苦手意識はあった。ただ、ラッキーだったのは共働きという環境だ。つまり、妻が仕事で遅くなったり、飲み

会にいくからと子どもを寝かしつけないといけない場面があったからだ。また、妻に休養をとってもらうために、意図的に新幹線で２時間以上かかる実家に泊まりに、まだ二歳になっていない息子と小旅行したという経験も大きな意味を持った。その時間は苦痛と嬉しい驚きの連続だった。

子どもと長時間二人きりになると、まず大きな変化だったのが、母親に甘えるように自分に甘えてくることだ。それは、父親には絶対に見せない顔だと思っていたので驚きだった。ただ、もちろん夜になると母親が恋しくて泣いたり、夜に突然泣き出してなかなか泣き止まなかったりなど慣れないことの連続だった。それでもすごいのは子どもが母親がいないという環境に順応してその代わりを父親で我慢するということだ。（今二歳半をすぎ、言語化できるようになった今は母親がいなくなるとひとしきり泣いた後、「お父さんでいい」と呪文のように言うようになったが）。一方、私はその大変な変化と苦労の中で恥ずかしい話、初めて愛着が形成された気がする。冒頭で述べたように、保育園で他のお父さん達と接すると、「産まれた時から目に入れても痛くない」といった感じで接している人たちが多く、どうしても共感しにくい部分があった。それが、子どもと二人きりで甘えさせて上げる時間と、苦労する時間を共有することで子育ての自信と子どもへの愛情、そして子どもとの間の愛着すべてがあがった実感がもてた。

カウンセリングをしていると、夫の子育てが心配で夫には預けられないという母親によく出会う。その度にとてももったないと感じる。心配には根拠があるのかもしれないが、預けないと能力は伸びない。大変さも実感できない。なにより、母親が一人になる貴重な時間が失われる。夫にも妻にも大きな損失だといえる。

子育てへの無力感

父親の子育てを考えると、大学で習った学習性無力感の話を思い出す。セリングマンは犬を用い、回避できない状況で電気ショックを与え続けると、回避できる状態になっても回避しようとしなくなることを見出した有名な心理学実験の考察である。つまり、無力を学習するのだ。父親の子育てはその危険性が常につきまとう。仕事で多くの時間を使い、少ない時間で子どもに関わろうとすると子どもは「お母さんがいい」と拒否する。時折機会をみて父親がご飯をあげたり、寝かしつけようとしたりしても、子どもは普段から面倒をみてくれている母親からのそれを求める。時には、いつも子どもと長

い時間を共にして子どもをよく熟知している母親に、ダメ出しをうけたりする。どこで見たかは記憶にないが、ある記事に専業主夫達の嘆きが紹介されていた。毎日朝から晩まで育児をして家事をして頑張っているのに、お母さんが帰ってくると全部お母さんに取られてしまうと。子育てにおいて、子育ての研究領域では母親の育児に関する優位性はまったくないという主張もあるが、現実に母親と比較された形になることで無力感を感じている男性は多いように思う。

子どもの躾

子どもとの距離があり、疎外感を感じた時、ふと母親の躾が甘いように目に映った。この話も夫婦カウンセリングの場で話される定番である。片方の親はは子どもに将来的な自立を促すために厳しく躾けるように言い、もう片方の親は時期がきたらできるからと激しくもめる。そこには、同じ子どもの成長を望む親であるにも関わらず、育児の考え方で相容れない夫婦の姿がある。ただ、体験的に私個人のことで言うとそこには、母子の繋がりの強さへの嫉妬も大なり小なり入っていた気がする。恐らくだが、もっと子どもと距離があったら、一般論を振りかざして厳しい躾を促してしまう自分がいるのかも知れないと考えると少し怖くなる。関係が希薄で甘えてこないと、厳しくする選択肢を取りやすくなる。その悪循環が母親からすると愛情がないように見えたりもする。ちなみに、逆のケースもよく目にする。父親が寛大で、母親が細かく躾をする。母親からすると、父親は子どものことを考えていないから甘やかすと見えてしまう。結果、子どものことを考えていないという喧嘩になる。

父親になるということ

子どもが産まれた時に感じたことを一言で表現すると責任感という言葉が一番ぴったりくる。私にとって、子どもの誕生は父親として家計を支えるという自覚を促す経験であった。逆に考えると、子どもが可愛いとか、子どもに関わりたいという経験ではなかった。父親になりきれていなかったと言えると思う。もちろんまだ父親と胸を張って言える状態ではないかもしれない。ただ、誰の助けも借りず子どもと二人で長時間過ごすという経験は、父親になる環境を提供し、確実に父親に近づけてくれた。すべての父親にとってこの体験が必要なのかと言われると恐らく違うだろう。産まれた瞬間から父親

になれる人もいるのだと思う。ただ、そうではない場合、こういった体験をいかに作って行くか、その支援を各領域で援助者がどう促し、環境調整をしていくのか。それが父親になった男親への一つの支援の形になるのではと、自分自身の体験から感じた。

おわりに

ある女性に、一日子どもと過ごして母親の大変さがわかったと誇らしく話したことがある。「一日過ごしたからって分かったなんて言ってもらっちゃ困るわ」と返されてしまった。当然の話である。専業主婦で 24 時間子どもをみている母親には本当に頭が下がる。ただ、私がこう思えているのは、毎日夫婦のカウンセリングをする中で、子育ての大変さを聞かせて頂いていることと、たまたま子どもと長時間いる経験ができる環境で生活しているからだ。一歩間違えたら、子育ての大変さを分からない父親となっていたという自覚があるだけに、母親の大変さを共感できない男性が悪いと一言で非難する気にはなれない。でも、だからこそ、対人援助職者として、そういう環境を作るお手伝いができればと思う。

原稿を書き終えて思ったことと謝辞

この原稿を書く中でいろいろ本当に考える機会を頂きました。原稿を書く中で嫌というほど感じた思い。それは、男性支援を考えれば考えるほど、その奥にある妻の顔がでてきてしまうということです。恐らく、妻の支援で考えたら夫がでてくるだろう。さらに、もう一つ奥には家族が見えてくる。どこまでいっても、家族をシステムとして見るという視点が染み付いてしまっている自分がいる。私にとって男性支援とは、家族支援、夫婦支援の一形態なんだと思う。その気付きは自分の今の立ち位置を再確認するとてもいい機会になりました。この環境に導き、支援してくれた中村正先生、団士郎先生、そして一緒に一緒に連載し常にアドバイスをくれた坊隆史先生にはこの場を借りて感謝申し上げます。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（１７）

中村周平

２０１１年３月に立命館大学大学院応用人間科学研究科を修了してからというもの、この対人援助学マガジンで自身の経験を発信する機会をいただいてはいましたが、自ら動く、発信するという点では、ほど遠いものがありました。

卒業後の進路に私が選んだのは、知人が立ち上げた NPO 法人で働くというものでした。後期課程に進む方を除けば、院生であっても就職活動の波から逃れる？ことはおそらく困難でしょう。とくに、修士論文と同時並行で進む院生の就職活動は、論文作成と就職活動の板挟みとなり、身体的・精神的に苦しめられることになります。事実、同期の方々の大変な日々を目の当たりにしてきました。そして、私の「就活」といえばそれは散々たるものでした。一回生の１２月にやってきた就職活動の波に乗ってしまった私は、「どこでもいいから就職ができれば…」という気持ちばかりが先走っていました。その根底には、自分にできることが限られている現実と、その限られた中でも精一杯頑張れば何かに繋がるのではないかという身勝手な希望の裏腹な二つの思いが重なり合っていました。ただ、それは同時に「働くこと」に対して正面から向き合えていない自分がいたことを露呈することにもなったのです。

当時、少しでも就職活動の武器になるのではと思い学内の PC 講座に通い、障害のある学生の就職相談に乗っていただけるところにも足を運びました。それは決して無駄ではなかったと思いますが、今、振り返れば「自分」というものを持たずに、ただただやみくもに動き回っていただけだったのではと思います。ある会社で就職相談に乗っていただいたときのことです。数回のメールを経て面談の機会を設けていただき、そこで自分のできることを精一杯アピールしました…いや、自分ではしている「つもり」でした。企業における「障害者枠」といわれる採用枠の多くは、出勤時間や配属における配慮はあったとしても、仕事は他の社員と何も変わりません。少し PC が扱えたとしても、移動や何か作業を行うにあたって何かしらの支援が不可欠な私にとって、それはあまりに遠すぎる話でした。しかし、当時の私は将来における漠然とした不安や焦りから、その遠さがまったく見えていませんでした。「相談に乗ってもらうことで何か道が開けるんじゃ…」、そんな甘すぎる私の気持ちは面談担当者の方に見透かされていました。「あなたはここに何しに来たんですか？何かを期待して来られたんでしょうか？」、その言葉は非常にショックなものでしたが、それ以上に働くということに対する自分の浅はかな考えを心底恥ずかしく思ったことを鮮明に憶えています。

この面談担当者の方にそう言っていただけたことを、今では本当に感謝しています。中途半端なスキルや覚悟では、仕事上において相手の方が満足してもらえるものを提供することは困難です。できるこ

とが限られている私にとってはより厳しい現状があることは明らかでした。「自分は『働く』ってことにちゃんと向き合ってなかったんじゃないか」、「自分の強みを最大限活かす、それを考えていくこと大事なんじゃないか」。面談担当者の方の言葉は就職活動さえしていれば、という私の甘えを見事にふっ飛ばしてくれました。そして、自分のできることだけで働き方を考えるのではなく、「自分のやりたいこと」から考えや方向性を広げていくことの大切さに気づかせてもらうきっかけとなりました。

また、偶然にも同時期に修士論文を作成していたこともあり、その際「なぜ、自分は大学に来たのか？」、「どうして福祉を志そうと思ったのか？」、祖母の死をルーツとする私の福祉を志すきっかけとなったエピソードを思い返すことができました。それは、これからの自分の方向性を決めるうえでの大きな原動力となってくれたのです。「自分が学びたいと思った福祉の分野で、もう一度働くことについて考えてみたい」。社会福祉士資格を得るうえでの実習や大学で私が取り組んできたことを振り返り、自分の進路を模索していきました。「自分自身を最大限に活かせることって何なのか。自分のやりたいことって…」。心に浮かんできたのは、一度は修士論文のテーマとして考えていた「障害学生支援」でした。学部時代を含め、私の大学生活を考えるうえで無くてはならないものでした。また、自分自身が大学生活を送っていく中で何度も課題とぶつかり、その可能性に助けられました。そして、何より障害学生支援を通して、たくさんの仲間と出会い、大学で様々なことを経験することができました。自分の大学生活を振り返り、これなんじゃないかという気持ちが溢れてきました。そして、最終的に大学の先輩と後輩にあたる方々が立ち上げた「障害学生支援」を理念に掲げる NPO 法人でお世話になることを決めました。私の「就活」は文字通り散々なものだったと思いますし、就職活動を経て仕事をされている方々には本当に申し訳ないくらいのものでした。ただ、就職活動を経て感じることができた気づきと、修士論文作成における気づき…この双方の気づきも、私の大学生活において何ものにも代えがたいものとなりました。



かなり脱線してしまったので、話を本筋に…。４月からの新生活は、文字通り多忙を極めました。新しい仕事やそれに伴う生活の変化、新たな方々との出会いなど、これまで経験したことがドドドッと押し寄せてきました。新しいことを始められた喜びと同時に、失敗が許されないことへのプレッシャーから体調を崩すことも度々。ある企画の前日は、緊張から一睡もできないということもありました。そのような生活を送っていた私は、修士論文で懸命に打ち込んだスポーツ事故に関することについて何一つ手を付けることができていませんでした。

調停の際にお世話になった弁護士の方に、大学の講義などで自身のスポーツ事故について話をさせていただける機会を度々いただいていました。大学院修了後も、ありがたいことにその機会をいただきながら、仕事に時間を取られていることを自分への言い訳にして内容について大きく進歩させることができませんでした。何より、仕事一辺倒になっている私の様子を気にかけておられました。「これからどうするんや、研究は続けていくんか？」。いけないと思いながらズルズル答えを出さないままにしていた、ずるい自分を再認識する言葉でした。研究と研究の間の時間が開けば開くほど、内容は過去の振り返りばかりになりモチベーションも下がってしまう…事実、そうなりかけていた私は自分を奮い立たせるため、弁護士の方にあるお願いをすることにしました。そのことが、自分の新たなステージに成長するための最初の一歩となりました。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第15回

ハッシュ！

1．　ゲイって、何？？？

本を出してから、俺のことを最初からゲイだと思って、近づいてくる人がでてきた。俺は「ゲイだ」とカムアウトした覚えはないし、俺の単著２冊もゲイに特化した映画の本ではないのだけど、 ゲイを匂わせる画像や言葉が表紙についているから、自動的にゲイだと思ってしまう人もいるのだろう。

先日、ある若い男性からゲイであることをカムアウトされた。彼は俺の本も図書館でじっくり読んでくれていて、一緒に食事をすることになったので、俺の著書２冊プレゼントしようかと思ったのだが、親にはまだカムアウトしていないから、家に置いておくのはまずいと言われてしまった。ストレートの人だったら、むしろ気にせず、もらってくれるのだろうが、ゲイの人だと、そのことを意識しているため、ゲイの臭のするものは、遠ざけておかないと周りに気づかれるという心配があるみたいだ。

しかし、俺はゲイなのだろうか？　俺は否定も肯定もできない。彼から、「パートナーはいるんですか」と訊かれ、「いや、俺は、ゲイというよりも女性恐怖なんだよ」と答えた。

この連載で繰り返し、書いてきた通り、俺は大きなトラウマを複数の女性たちに負わされているため、どうしても女性を許すことができない。ただの友達としてつきあうのは OK だし、むしろ、周りの女性たちは、俺を普通の男よりも話ししやすいとは思ってくれている。先日、「あの人、男か女かわからないし、気持ち悪い」と俺のことを評している女性がいると聞いて、憤慨して、訴えてやろうかと思ったが、俺が、しばしば、男のことをわか

っていない女性たちからそういうことを言われるのは、男の割には表出的だからである。普通の男は顔に感情を出さないし、愚痴だってこぼさない。だけど、俺はありのままの自分を晒すことに躊躇しなくなっている。

しかし、そのことが女性的だと感じるのは、女性の思い違いである。２年前に入院した時のことだ。翌日に全身麻酔の手術をするので、俺は怖くて、色々な友達にメールして、愚痴をこぼした。すると、一人の友達から、「怖い時に怖いと言える國友さんは男らしいですよ」という返事が来た。普通の男たちは、怖くても怖くないふりをする。そして、それは決して男らしさではなく、虚勢なのである。男は、虚勢をはるやつなんて男らしくないことは、皆わかっている。しかし、女は男の身になって考えないから、そのことに気づいていないのだ。虚勢をはる男は強いんじゃない！　悲しいんだよ！！　わかってくれ、女性たち！！！

さて、ゲイって何なのだろう？　俺は、前にある学会の他の会員の人たちにゲイの定義の部分で理解してもらえなかったことがある。他の人たちは、どうやらストレートとゲイとは違った世界と思っていて、俺の説は、両者を混同していると感じているみたいなのである。しかし、それはちょっと違っているのでは？　ストレートとゲイは違った世界では決してない。

この本で何度も書いたが、俺を不登校へと追い込んだ一人は、中学３年の時の暴君のような体育教師である。この先生は、男子生徒全員に、上半身裸で体育の授業を受けることを強いた。真冬の厳寒の時期にである。他の男子たちは素直に従っていた。しかし、俺はどうしても従うことに抵抗があったので、自分はオカマなのだと思っていた。あの頃はゲイという言い方は定着していなかったし、オカマの人というと女性的な人というイメージだった。俺は裸身を強制されることに抵抗があった。男らしいことをするのに抵抗を感じるのは、俺は男じゃないからで、だから俺はオカマなのだと思っていた。

今思い返せば、他の男子たちも抵抗があったやつは多かったはずだ。しかし、番長のような、体育系の男の先生から威圧されれば、それに従うしかない。男は自分が男ではないと思われるのが一番怖いのである。

また、この教師のしていることは、今となって考えれば、ゲイである。鍛錬の名の下に、男子全員を裸にしようとする。それは男子への陵辱である。この男性教師は性格的にもドマッチョである。自分の欲望のために、他の連中を威圧し、支配し、屈辱を与え、トラウマを負わせることをなんとも思わない。しかし、彼のしていることは、きわめてゲイ的なのである。今となっては、裸を誇示する男性は、ゲイのステレオタイプだ。

３年ほど前に、ある男の人に話したことがある。「自分が男だということを疑ったことないですか」と。すると、その男性は、「男に恋したことがあったとしたら、疑っていただろうね」と答えた。男って、なぜ、こういう勘違いをするのだろう？？？　この考えは明らかに間違いだ。ジェンダー（男らしさ・女らしさ）とセクシュアリティ（異性愛・同性愛・両性愛）は別物である。性格的に男らしい人が、異性愛とは限らないし、むしろ、男らしさを追い求める人は、女よりも男の方が魅力的だと思っているわけで、むしろ、男らしい

人＝ゲイ的と考えた方があたっているのだけど、多くの男たちは、男らしい人＝異性愛というとんでもない間違いをおかしてしまっているため、異性愛者であることを誇示しようとするのである。

２．肉体関係をもつまではゲイ

しかし、この状況は徐々に変わっていくだろう。このところ、ハリウッドの男優たちも自分がゲイだということをカムアウトし始めた。『ホワイトカラー』というテレビ映画の主役で有名なマット・ボマーは、文句ないイケメンだけど、堂々とゲイであることを公言している。彼は、今年のゴールデン・グローブ賞で助演男優賞を獲得し、波に乗っている。今年のアカデミー賞の司会者ニール・パトリック・ハリスも、ゲイであることをカムアウトしている。

最近では、映画『ミルク』『１２７時間』などで人気絶頂のジェイムズ・フランコが、ゲイの噂に対して、面白いコメントを発表して、これは俺の考え方と似ているなあといっぺんにフランコのファンになった。海外ドラマナビ
http://dramanavi.net/news/2015/03/post-3533.php というサイトから、引用したいと思う。

> 米同性愛誌「FourTwoNine」3月号で表紙を飾ったジェームズが、ゲイのジェームズによるストレートのジェームズへのインタビューという形で取材に応じた。ストレートのジェームズがゲイのジェームズに向けて、″お前はゲイなのか？″と直球質問を投げかけると、「芸術においてはゲイだけど、普通の生活ではストレートだって思いたいね。普段の生活でも肉体関係を持つまではゲイだけど、まあストレートだと思ってくれたらいい。ゲイをどう定義するかによるね」と、かなり複雑な答えが返ってきた。
> さらに、「誰とセックスするかって話になると、僕はストレートだ。1920 年代や 30 年代には、ホモセクシャルはセックスの相手ではなく、どう振舞うかで定義されていた。水兵は男とヤってたけど、男らしく振舞っていたからゲイだとは思われていなかったからね」と、ジェームズ独自のゲイ理論を展開。彼は同性愛を匂わすことで、人々が″ジェームズ″という人間を簡単に特定できない今の立場が気に入っているとも付け加えている。役者という様々な役柄を演じる仕事をしているだけに、ジェームズは自分の存在を明確に定義づけしたくないのかもしれない。

まさしく同感である。俺も、フランコと同じで、「肉体関係をもつまではゲイ」である。俺は、今まで一度も男の人と肉体関係をもったことはないし、今でもアナルセックスやフェラチオなどをしたいとは思わない。しかし、精神的にはゲイだと思う。女といるよりも男といる方が楽しいし、男の人と風呂やプールで裸の付き合いをするのはすごく好きだ。

Ｎ先生とも昨年の秋、初めて一緒にお風呂に行った。教え子の男の子とも、彼の卒業を祝して一緒に船岡温泉に行った。ベストフレンドとは、もう１４年のつきあいだが、彼とは互いに風呂好きということもあって、数え切れないくらいの回数風呂にいっている。その

ほか、親しい男性とは大概は風呂に入っていて、お互いに裸になると、友達になった気持ちになる。もちろん、男にもよる。嫌いな男の人と、風呂に入ったり食事したりしても楽しくはないが、仲のいい人だとたまらなく楽しい。これはストレートの人が女性を相手にする場合でもそうだろう。一般に男はセックスの対象の射程範囲が、女性よりも広いことは確かだろうが、それでも、男にも好みというのはあって、どうしても嫌いな女性はいるのである。

俺は、男性の裸を見る時、大概は胸板を見ている。俺は裸の上半身には憧れる。しかし、一方で、ペニスはほとんど見ていないし、見たいとも思わない。俺はあくまでも、男として男と付き合うのが好きなのだ。友情の延長が好きなのだ。男同士の友情の映画は、男同士で上半身裸になる場面が必ずと言っていいほどあるが、俺はそれが好きなのである。ゲイのカップルのなかには、片方が男役、もう一方が女役というカップルもいて、女役の方が女装したりするケースもあるが、俺はあくまでも男同士で付き合いたい。

女性と付き合うよりも、男同士の方が気楽である。女性とつきあうと、男は責任をとらなくてはならないという気持ちになってくるし、子供なんかができたらなおさらである。しかも、女性は一般に、一人の男性と対になろうとするので、恋人ができてしまうと、ほかの女性との付き合いは制限しなくてはならなくなる。しかし、男同士だったら、何人と付き合っていても、そのことでとがめられることはない。子供が生まれる心配もない。経済的保証もしてあげなくていい。男と女がトラブルと、女に非がある場合でも、男の方が悪いような目で見られる。男は被害者にはなれないのだ。あれこれ考えると、男同士の方がはるかにメリットは大きい。デメリットは、子供ができないだけのことだ。

女性の方が悩みを聞いてくれる、周りの世話をしてくれると思っている人もいるみたいだが、俺が親しくしている男たちはきちっと悩みを聞いてくれる男性たちである。俺は、３０年以上も一人暮らししているから、周りの世話なんてして欲しいとは思わない。それに、一般的に言って女性は余計なことを話し過ぎるし、人の悪口を言い過ぎる。この人は好きだ、あの人は嫌いだ、あの人はカワイイ、この人はキモい、とあれやこれや感情レベルで男を物色する。女同士でやってくれるのであればかまわないが、そういう話を聞かされると、俺はその女性が嫌いになってしまう。俺は、女性から、散々、「キモい、嫌いだ」と言われ続けた男なので、いやな思い出が蘇ってくるのだ。悪いことをしているわけでもないのにキモいと言われるのは、男にとっては大変な屈辱である。好きや嫌いに理屈はない。彼女たちがキモいと感じるのは、俺の問題ではない、彼女たちの感じ方の問題なのである。

３．セックスだけがゲイじゃない！

この頃、ネットなどを見ていると、ストレートなのだけど、女性とセックスはしたくないという男性の悩みが語られていたりする。それに理解を示す女性も多いようだ。女だって、したくない人はいるから、そういう人を探せばいいじゃないのと。

ゲイを語る上での一つの問題は、セックスと同性愛を混同しているということなのでは

ないか。これは、そもそも、男性の同性愛を同性愛の基準としてとらえているがゆえに起きることでもある。例えば、昨年、『アデル、ブルーは熱い色』というレズビアン映画が話題になった。作品の評価も高く、何よりも画期的だったのは、女性同士のベッドシーンをたっぷりとリアルに見せているところだった。男の同性愛の映画の場合は、必ず、セックスシーンや裸の場面が出てくる。しかし、女性同士のものはアカデミー賞にノミネートされた『キッズ・オールライト』にしても、必ずしもそういう描き方にはならない。男性はセックスがプライオリティだが、女性はコミュニケーション重視であることはまだまだ事実なのだろう。

現実レベルで考えても、レズの女性の場合は、自分の同性愛性に気づいていない女性が多いと聞いている。男は身体が先に反応するから、自分が同性愛だということにすぐに気づくが、女性は肉欲は後からついてくるので、精神的に満たされるのならば、身体の関係はなくてもかまわないというレズビアンは多いとのことである。したがって、女性の基準にしたがって同性愛を定義するのであれば、セックスのない男同士のつながりも、精神的につながっていれば、同性愛ということになる。先にあげた通り、この頃は異性愛でもセックスしたくない男性が増えているのだから、セックスするかしないかを基準にして、同性愛を考えるのはもう古いのである。

４．ゲイになるのも悪くないか

俺も、この際だから、完全にゲイになってしまおうかと思うこともある。

この頃、ゲイになってしまったほうが、むしろ特典も多いのではないかと思うのである。まず、「なぜ、結婚しないの」と聞かれなくなる。俺の場合は、女性恐怖症だからなのだが、女性恐怖というのは理解してもらえない。女の人でも、少女時代に男に陵辱されて、男全体に偏見を持っている女性は大勢いる。そういう女性に対しては、世間は同情的だ。しかし、逆の場合は同情してもらえない。おそらく、世間の人たちは、女性が男性にトラウマを負わされるのは深刻なことだけど、逆は大して深刻な問題ではないと思ってしまっている。

俺は、自分のトラウマをわかって欲しくて、男性運動にまで参加してきたのだが、フェミニストはあれだけ怒って、男を糾弾するのに、男性運動の場合は、フェミニストから反発されることを恐れて、なかなか女性を批判することができない。俺は、別にフェミニズム反対ではないし、男が悪くないとは言っていない。ただ、女も悪いところはある、男を傷つける場合はあるのだと言っているだけのことなのに、ちょっとでも女性を批判すると、フェミニストたちは激しく反発する。男の人は見えない権力を握っている、男社会ですよ、というのが彼女（彼の場合もある）たちのエクスキューズだ。現実には、権力握れる男なんて一握り、下層の男はたくさんいる。そのことは子供にでもわかりそうなものなのに、彼女たちは、「女に責任はない理論」をふりかざそうとする。被害者の権力を乱用しようとするのである。一昨年の援助学会の大会で、ある若い男性から、「女性を糾弾するにはどうしたらいいのですか？」と質問された。やはり、女性を批判したいけど批判できないもど

かしさを感じている男性は、今はたくさんいるのだと痛感したのだった。

いっそのこと、ゲイになってしまえば、女性に抗議しやすい。ゲイは女性よりも差別されているし、偏見の目で見られる。政治家や管理職でゲイとカムアウトしている人は、女性の政治家や管理職よりも少ないだろう。ゲイだったら、「俺たちは被害者だ、俺たちに責任はない理論」を女性に行使することができるはずなのである。

５．ゲイが社会を変える。

去年、カウンセリングを受けてあやうくその女性カウンセラーと喧嘩になりかかったことは、この連載にも何度か書いた。彼女との面談を思い出すと、今でも溜飲があがってくる。

例の裸を強制された経験を話した時に、彼女は、「上半身裸になるのが好きな男もいるじゃないですか」と返してきたわけだが、なぜ、カウンセラーが、こんな安直な返し方をするのだろうか。不登校の子に、「学校に行くのが好きな子もいるじゃないですか」と返せば、不登校の子は余計に傷つくだろう。それくらいのことがなぜ、わからないのか。彼女は、男を相対的に考えたことがないのだろうか。若い女性のなかには、冬場にミニスカートや胸のあいたような格好をして闊歩している女性はたくさんいる。ほとんど水着同然である。彼女たちが好きで、ああいう格好をするのは彼女たちの自由であるが、もし、強制的にすべての女にそういう格好をしろと先生が命じたりしたら、それは大問題なのだ。しかし、男の場合は、それが問題とはされない。あなた、男には性的羞恥心がないと思っているの？　身体にコンプレックスをもっている男だっていっぱいいるし、女性の前で男が裸になるのが恥ずかしいと思うのは当然のことなのだ。

もちろん、男には裸になるのが楽しい時もあるが、それはモード次第である。大学の頃だ。自宅生の友人から、「下宿のやつはいいなあー。上半身裸で寝ることだってできるしなあ。自宅だと、自分の部屋であっても、母親や妹に入ってこられる可能性があるからなあー」と言われたことがある。彼は体育会系なので、見事ないい身体だ。その彼であってもそういうのだ。まして、女の腐ったと言われるようなタイプの男子が、脱ぐのが平気だと思っているのだろうか。

女性差別や女性批判にはフェミニストがついているが、男性にはオンブズマンがついていないため、男であるがゆえに不当な扱いを受けても、誰も理解してもらえない。

あの女性カウンセラー、今頃、どうしているだろうか。俺のことをいやなクライアントだったと思っているだろう。彼女は、３０代半ばだ。この世代になってくるとフェミニズムのことも大して知らない。だから、女性が「もの」みたいに扱われていた時代のことも知らないため、ジェンダーを受け入れることが、ある種の人々にとっては、きわめて困難であることに気がついていない。

これから社会を変えていくのはゲイだ。幸い、同性カップルが日本でも認められ始めた。これからはゲイの人を支援していけば、ゲイではない男の人にとっても生きやすい社会へと変わっていくようにも思える。そう考えるのは、楽天的すぎるかなあー。

６.『ハッシュ！』
（橋口亮輔監督・２００２）

そんなわけで、今回は必見の日本映画ということで、『ハッシュ！』を紹介しておきたいと思う。この年のキネマ旬報の第２位であり、日本でゲイを描いた映画のなかで、間違いなくもっとも評価された作品である。田辺誠一と高橋和也がゲイのカップルを演じていて、これはどちらかといえば、爽やか系ゲイの話である。

もっと濃厚なのが好きな人は、『おこげ』（中島丈博監督・１９９２）をどうぞ。インテリのマニアの人だったら、『薔薇の葬列』（松本俊夫監督・１９６９）が絶対的なオススメ。逆エディプスである。

援助職のリカバリー

《14》

～「うちの実家は、DV だったの！？」～

袴田　洋子

今年の２月中旬、アキレス腱の部分断裂をやってしまい、人生初のギプスと松葉杖を経験しました。今ようやく心から笑い飛ばして話せるようになりましたが、実は、けっこうな「喪失」と重なり、メンタルヘルスを保つのに苦労しました。

かなり肩入れしてしまった在宅での独居の方のお看取り支援が終わったこと、2 年間通った専門職大学院が終わったこと、アキレス腱断裂の保存治療のためのギプスで、卒業旅行に行けなかったことなどが要因で、「心にぽっかり穴があくというのは、こういうことか」と毎日思っていました。「なんでこんなことになってしまったのだろう」と毎日嘆いていましたが、休んでいた加圧トレーニングの再開をきっかけに、自宅でも筋トレを始めたり、専門職大学院の聴講授業が始まったりと、日常が忙しくなったことで、徐々に「寂しさ」は、薄れていったようでした。薄れていったけれども、ゼロにはならないコレと、どう対峙していけばいいのか、自分の永遠の課題だなぁと思います。

呪縛「甘えてはいけない」

プロのコーチングセッションを受け、コーチから「アサーション」を教えてもらい、自分の感情をコントロールしながら、「気持ちを相手に伝える」ことを学ぶ中で、「誰かの助けを借りて取り組んでみる」ということを体験していきました。

自分は援助職であり、誰かを支援するという職業に就いているわけですが、自分以外の人は、「人の助けを借りること」は OK なのに、なぜ自分は「人の助けを借りること」はダメなのか。おそらく、無意識のうちに、「支援」を「甘える」に置き換えているのだろうと推察します。他者は OK なのに、自分はダメって、なんだか矛盾しています。

子ども時代の「甘えない」のツケは大きい

「一人っ子はわがままで、甘ったれで、泣き虫」と言われ続けた自分は、とにかく、「甘えない」ことを人生の格言として生きてきました。子ども時代に、ここまで「絶対に甘えてはいけない」を意識して育つと、本当に人として、歪みます。生き方が、特に大人になってからの生き方が、本当に下手くそになります。

具体的には、人との距離感とか、コミュニケーション能力とか、人に対する操作性みたいなことですが、まぁ、大人になった自分がここまで生きるのが下手くそになったのを「絶対に甘えない」ということだけが原因だったかどうかは、誰にもわからないことです。が、原因のひとつになったことだけは、断言できると思っています。

仔猫や仔犬が無邪気に甘えるように、子どもが「甘えてもいいんだ」と意識などしないで済むような環境にいられることは、たぶんけっこう大事なことなのではないかと考えます。

人生初のカウンセリングを受ける

そうして、かなりな金額をかけてアサーショントレーニングに通ったり、アスクヒューマンケアのワークショップに通ったり、歪んだ自分の修正に、時間と金を費やしました。今となっては、その内容は、かなり忘れているものもあり、もったいないなぁと思うこともありますが、本当にその頃は、必死でした。必死で、自分の「生きづらさ」と戦っていました。

そうして、自分のコミュニケーションの修正や、自分の考え方（自動思考？）の修正を努力して努力して努力して行ってきた自分に、「ここまでやってきたんだから、そろそろ、本当に自分にご褒美をあげても、バチは当たらないよね」と思ったのが、2008 年の暮れ。アダルト・チルドレン概念や、「母が重くてたまらない―墓守娘の嘆き」の著書で有名な、信田さよ子さんのカウンセリングセンターに電話をして、初めてカウンセリングの予約をしました。

電話に出た受付の女性から、カウンセリングを受けたい理由などを聞かれ、正直に「ここまで自分見つめをしてきた自分に、ご褒美をあげる意味で、カウンセリングを受けたい」と話したら、「本当は、あなたくらい整理が出来てからカウンセリングに来るのがいいのよ」と言われ、舞い上がったことをよく覚えています。

2008 年 12 月、原宿カウンセリングセンターに初めてのカウンセリングに行きました。担当は、もちろん信田さんではなく、臨床心理士の T さん。同じ年代くらいの方で、穏やかで、誠実なその傾聴態度に、「こんなふうに利用者さんの話を聴けたらいいなぁ」と若干の観察をしながら、自分のアダルト・チルドレンヒストリーを冷静な感じで話していきました。

相談援助職の技を知る

セッション中、T さんは、非常に的確な質問を私にしていました。私が少し抽象的な表現をすると、「それは、具体的にはどういう意味ですか？」と聞いてきて、T さんからの質問を受けて、しばしば、「えーと、そうですねぇ…」とじっくり考えさせられました。そんなセッションを月に一度、半年ほど続けたころ、かなり「自分のことが整理できてきたかな」と思えるようになったので、そろそろカウンセリングを受けるのを一度、終わりにしようかと、なんとなく思い始めました。そして、「今日は、一度、セッションを終わりにしたい、と言ってみようかな」とちょっと心構えをして予約した時間に行きました。

「実家が DV？　マジっすか？？」

それまで、自分の「今の、生きづらさ」を話すことが多かったのですが、その日は、今までに詳しく話したことがなかった、自分の原家族の話をしました。恐ろしい父親で、いつ爆発するかわからないような父親で、父親の機嫌を毎日観察している日常だった、という内容でした。すると、T さんは、「DV ですね。AC（アダルト・チルドレン）というよりは、DV。」と、つぶやくように言い、私は驚きました。それまで、それ系の類の話は、一通り勉強してきた自分だったので、実家が DV に該当すると言われて、大変に驚きました。

恐ろしい父親だったけれども、身体的暴力として、母親を殴ったのは一度だけ、まぁ、その一度だけの暴力だったけれども、逃げる母親の腕をつかんで湯のみ茶碗で母親の頭を殴る父親、のシーンは、6 歳の自分にとっては、大変な恐怖の場面だったので、それ以降、父親の機嫌を観察する日常になっていったのですが、それが DV になるとは思ってもみなく、ちょっと意外な気がして、T さんに念を押すように、「こんなんでも（こんな暴力の程度でも）DV になるんですか…」と半信半疑、半ば独り言のように聞いたところ、「恐怖、というのが、DV です。」と言われて、あっ…、と理解しました。同時に、喪失感もありました。家は、安全基地ではなかったのだなぁ、ということが、なんとなく明らかにされたような気がしたからです。

カウンセラーの言葉が持つパワー

カウンセラーから、実家が DV、と言われ、半分、救われたような気分になりました。なぜなら、そんな家に育った自分が生きづらさを抱えるのは、仕方ないことであり、生まれつきに自分が粗悪品だったからではない、ということを第三者に言ってもらえたような気がしたからです。

今思えば、システム論とは真逆のような思考回路のようで、ややげんなりしますが、当時は、「私が悪いわけで

は、なかったのだ」という視点は、生きづらさを少しだけ減らすことに役に立ちました。しかし、減りはしたけど、無くならないのが、やっかいなのです。

その後、この「実家はDVだった」というカウンセラーの言葉は、良いようにも悪いようにも、自分にとって、大きな影響を及ぼしたように思います。良い意味では、暴力の影響の大きさを想像できるようになったことです。身体的な暴力でなくても、大声で怒鳴られて感じる恐怖など、冷水を浴びせられたように、心が「きゅっ」と縮こまる感覚の不快さなどをよく理解できます。

デメリットは、自分の物語に自分をとじ込めてしまうことでしょうか。当時、「実家はDV」というフレームに囚われてしまい、父と母の歩んできた物語を想像することが難しくなったと思います。

自己肯定感が乏しい時に、自分のイケテナサを立証してくれるような、免罪符のような援助職の言葉は、いろいろな意味で、影響力が大きいようです。

周旋家日記 14「キャリア形成について考える③ーアクティブ・ラーニングの曖昧性ー」

乾　明紀

１．混乱する現場

教育再生実行会議等で示された大学教育改革の方向性に合致した先進的な取組みを支援する「大学教育再生加速プログラム（略称 AP）」[1]という補助金事業がある。筆者が在籍している京都光華女子大学（以下、本学）も申請し、全国で唯一短大と四年制大学のダブル採択[2]を受けたが、この事業の募集テーマは「アクティブ・ラーニング」、「学修成果の可視化」、「入試改革・高大接続」の３点であった。つまり、この３点が国の大学教育改革の方向性なのである。

このようにアクティブ・ラーニングは、大学教育改革の重要な実践課題となっている。しかし、前号でも若干指摘したが、アクティブ・ラーニングとは何を指すのかについては曖昧な点が多い。大学の現場でアクティブ・ラーニングの“導入”や“推進”について議論が行われると「講義を否定するのか」、「全ての授業でディスカッションやプレゼンテーションを実施しないといけないのか」、「ノートをとりながら講義を聴くのはアクティブ・ラーニングではないのか」、「担当している講義科目を PBL にすることはできない」、「アクティブ・ラーニングは、得意な先生に担当してもらうのがよい」などの声があがったりする。

また、ある大学の名誉教授から次のような指摘を聞いたこともあった。大学教育はこれまで、効率的に知識を教授するために講義形式の授業を行い、その講義で学んだことを具体的に活用しながら知識として定着させるために演習形式の授業を行ってきた。この講義と演習の連携性が崩れていることこそ問題であり、講義を全て演習的な授業にすれば最高学府としての機能は果たせなくなる。

これらの発言に対して導入・推進役の教職員は、何がアクティブ・ラーニングかを明確に示し、その声を収束させる必要がある。しかし、アクティブ・ラーニングの概念定義については、多くの大学で共通理解が得られてないのが現状ではないだろうか。本学においても、AP 事業の採択を受けたものの短大と四年制大学では、捉える視点（力点）が異なっていた。短大は授業形態として捉え、四年制大学は学生の学修行動として捉えていたのである。

２．中教審の定義と課題

高等教育でアクティブ・ラーニングという言葉が広く使われるようになったにも関わらず、未だに概念定義が曖昧であるのは中央教育審議会にも責任があるように思われる。例えば、「質的答申」（中央教育審議会，2012）の用語集[3]にはアクティブ・ラー

---

[1] 事業の詳細や採択された事業については以下の URL を参照されたい。
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/ap/1350948.htm

[2] 京都光華女子大学の取組みは以下の URL を参照されたい。
http://www.koka.ac.jp/news/1096/

[3]新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chu

ニングを以下のように定義している。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

筆者は、この定義について 2 つの問題があると感じる。1 点目は、アクティブ・ラーニングが学修者の行動として定義されていないことである。アクティブ・ラーニングを和訳すれば「能動的な・学習（学修）」になるにも関わらず「学修者の能動的な学修」がどのような行動であるかが述べられていないのである。

2 点目は、能動的な学修がどのようなものかが定義されていないのにも関わらず「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授･学習法の総称」とした点である。このように表現にしたことで、授業の技法やデザインなど方法論としてアクティブ・ラーニング（授業形態としてのアクティブ・ラーニング）が強く打ち出されてしまった。

筆者は、「学修行為としてのアクティブ・ラーニング」と「方法論としてのアクティブ・ラーニング型の授業」を分けて定義づける必要があると考える。用語集には「学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」とあるが、育成すべき能力として強調されるべき部分は「能動的に学修する力」ではないだろうか。

答申の中には「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」とアクティブ・ラーニングが「能動的学修」と位置付けられている。

このように中央教育審議会においても「学修行為としてのアクティブ・ラーニング」と「方法論としてのアクティブ・ラーニング型の授業」が混在していたのである。

3．学修行為としてのアクティブ・ラーニング

方法論としてのアクティブ・ラーニングは用語集にも紹介されている。ここで紹介されている「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習」や「教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク」などは、数多くの書籍や論文で実践事例なども報告されている。これに比べ、我が国での学修行為としてのアクティブ・ラーニングに関する研究は著しく少なかったが、最近（2014 年以降）になって書籍などが出版されるようになり、海外の先行研究や中教審とは異なる定義も紹介されるようになった。

---

kyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

溝上（2014）[4]は、学修行為としてのアクティブ・ラーニングを「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと」とやや幅広に定義した上で「能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」ことを指摘し、関与だけでなく「認知プロセスの外化」という視点を提供した。

また、松下（2015）[5]は、アクティブ・ラーニングにおける能動性の「深さ」に焦点を当て、「ディープ・アクティブラーニング」という視点を提供した。何をもってアクティブだと定義するかは非常に難しいことが先行研究でも指摘されているが、能動性には深さや広さのスペクトラムがあると捉え、どこからが大学教育における能動性かを定義づけようとすることは重要であろう（須長、2010）[6]。（筆者は受動と能動をスペクトラムで捉えた場合に、その支援の多寡で能動性を判断できないかと考えているが、これについては今後述べることとしたい）

ボンウェルとエイソン（Bonwell & Eison,1991）[7]によるとアクティブ・ラーニングにおける学生の行動は以下の特徴があるという。

①学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること

②学生は高次の思考（分析・統合・評価）に関わっていること

③学生は活動（例：読む、議論する、書く）に関与していること

④学生が自分自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること

これらの行動の中で、知識や技能も含めてどのような深さと広さまでを習得すれば大学教育としてアクティブなのかを授業設計の際に設定しておくことは重要である。

授業毎に修得させたい、あるいは発揮させたいアクティブ・ラーニング行動（知識や技能の習得含）を明確にし、その修得や発揮のためにどのようなアクティブ・ラーニング授業（教授法・学習法）を実施するかが課題となっている。

また、ひとつの授業を越えて習得していくアクティブ・ラーニング行動もあるのではないだろうか。例えば、複数の科目から同時に課題が出された場合の対応や課外活動との両立などは、マネジメント行動の成否が、思考や関与などのアクティブ性に影響を与える。学修マネジメント行動としてのアクティブ・ラーニングも大いに検討する必要がある。（つづく）

---

[4] 溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』,東信堂

[5] 松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』,勁草書房

[6]須長一幸（2010）「アクティブ・ラーニングの諸理解と授業実践への課題―activeness概念を中心に―」,『関西大学高等教育研究』第1号, 1-11

[7] Bonwell, C. C. and Eison, J. A, (1991), Active Learning: Creating Excitement in the Classroom, ASHE-ERIC Higher Education Report No.1.

トランスジェンダーをいきる

（１３）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

第 2 次性徴の出現

１　はじめに

体の性別（セックス）と、自己の認識している性別（ジェンダー）の不一致で一番悩ましいのは、第 2 次性徴の出現である。すなわち、私の場合は、自己の認識している性別（男性）とは逆に、体はどんどん女性になっていくことで、自己の認識している性別との間で乖離が生じる。そのことで、心身ともに苦痛を感じる。それだけではなく、周囲からも体の性別（女性）にふさわしい役割を求められてしまう。

では、私の場合は、どのような形で第 2 次性徴が出現し、どのような苦痛が生じたのか。「自己物語の記述」にしたがって論じる。

２　思春期の身体変容

思春期は私にとっては当に「悪夢の時代」、すなわち、第二次性徴に伴う身体変容によって顕在化してきた身体の性別とジェンダーの性別の「不一致」よりも更に深刻な「乖離」へと認識し始めた時期でもあった。

①「胸のふくらみ」による悪夢への序幕式

小学校 6 年生の夏休みのある日の午後、室内で遊んでいたとき、私は微かな胸の痛みとしこりに違和感を感じた。そのとき私は、たまたま小児がんで亡くなってしまった子どもの本を読んで

いたので、(もしかして、自分の体にもがんが発症したのでは）と思い、一瞬顔が蒼白になった。そして、その日の夜、母に胸の痛みとしこりへの違和感を訴えた。すると、母から返ってきた答えは、私を愕然とさせるものだった。

「あんたも女の子やから、胸が膨らんできたんや。そろそろブラジャーをせんとなあ」

「　この母の答えは、単なる胸のふくらみ」を意識させられただけではなく、私に男性ジェンダーから女性ジェンダーへの移行を迫るイニシエーションであり、もはや言葉を差し挟む余地を与えなかった。軌を一にして、このころから、両親や周囲の大人たちからも、私に女性としてのジェンダー役割を強制するようになった。当に、「悪夢への除幕式」であった。

②新たな父からの宣告

悪夢への除幕式に続いて、次に訪れたのはまたしても父からの宣告であった。

子どものころから、父とプロレスごっこをするのが楽しみの１つであった私は、中学校１年生になっても、父にプロレスごっこをせがんでいた。このプロレスごっこは、盲学校の寄宿舎から週末ごとに実家に帰省していた私が、唯一「男の子になれる（もしくはなってもよい）貴重な場」として機能していた。

そんなある日、私は父の異変に気づいた。それは、どんな技でも向かい合って対応してくれた父とは違う、何かよそよそしいムードが漂っていた。そこで私は父に、なぜいつもとは違うよそよそしい態度をするのかについて聞いてみた。すると、父からは予想もしなかった答えが返って来た。私は父からの「予想もしなかった答え」に、思わず涙を流してしまった。

「お前ももう女の子やもんなあ･･･」

この父の答えは、幼少期のころに、「お前は女の子やから、ちんちんは生えてきいひん」という答えと同様、「宣告」という形で私の身に降りかかってきた。しかし、「宣告」の意味するところは、幼少期のころとは違った「神聖かつ厳格な宣告」として自己認識させられた。つまり、自己の女性への身体変容によって、それまで唯一機能していた「男の子になれる（もしくはなってもよい）貴重な場」が、父からの新たな宣告によって奪われたことである。

また、父の前で流した涙というのは、父が自己の女性への身体変容に対して、単に手加減しただけではなく、女性への身体変容によって、ジェンダーの性別を男性から女性へと変更させられたことへの屈辱感であった。そのことが、「一人前扱いされないようになった」こと、つまり、ホモソーシャルな男性同士の関係性から排除されたことを意味した。

③身体化された症状は「不良になりきれなかった自己への消化不良」

小学校３年生から中学校１年生にかけて、盲学校の寄宿舎生活を送っていた私は、女子寮の中でも粗暴な行為と寡黙を繰り返していた。その行動様式が「女の子らしくない」という理由でいじめの対象になった。また、第Ⅲ章で詳述したように、寮母たちからも「母親代わり」と称して、不必要な善意を押し付けられたことに対して反抗していた。

その行動様式は中学校１年生になり、高校の女子の先輩方と同室になってから更に顕著になった。それは、女性への身体変容にしたがって、男性ジェンダーとの間の不一致が更に顕在化し、

自暴自棄に陥ったことでいっそう粗暴な行為と寡黙が強化されていったからである。女子の先輩方とのいざこざが絶えなかったことを理由に、中学校2年生から電車通学に切り替え、最寄り駅で同じクラスの女子の友達と待ち合わせて一緒に盲学校に通うようになった。

そのころのクラスは、私を含めて女子ばかりの4人、担任は女性教師という、私にとっては当に、女の園の中に、男が一人ぽつんといるような状況であった。そのために、寄宿舎での生活と同様、クラスの中でも浮いた存在、つまり、「空気を読めない逸脱した存在」として扱われ、いじめの対象になった。また、クラスの中で何か事件が起こる度に、いつも担任の女性教師からの叱責のターゲットにもなっていた。そのような女性たちからの扱いに対して、いつも「粗暴な行為と寡黙」という決まった行動パターンで自己の感情を言葉にすることなく、男らしく封印してきた。

しかし、「男らしく封印してきた感情」は、思わぬ手段で自己の身体に警告を発するようになった。ある日、いつものように友達と電車通学していたとき、突然下痢や腹痛に襲われた。その日は学校を欠席し、家に引き返して病院で診察を受けたが、異常は見つからなかった。それ以後、ほとんど毎日のように、いつも決まった駅で下痢や腹痛・時には嘔吐を催して途中下車を余儀なくし、場合によっては学校を欠席した日も出てきた。

そのような症状に悩まされ、途中下車して学校を欠席し、家に引き返した私に、祖母は、「何で引き返してきたんや、お前はそんな弱虫やったんか」と罵倒した。私は、祖母から罵倒される度に、「ああ俺は何でこんなに「男らしくない」んか」って嘆くしかなかった。

祖母は私がクラスや担任の女性教師からいじめられていたことは知っていたものの、そのような逆境に耐えることこそが「女の子」であり、将来独立するための試金石であると思っていたのだろう。ところが、祖母の私への女の子としての役割期待をすべて「男の子」に代入していた私にとっては、祖母からの「弱虫」という言葉、女性たちからいじめられたことによる腹痛や下痢などの身体化された症状が出現したこと、その身体化された症状に屈して学校を欠席したこと、更には、女性への身体変容と、男性ジェンダーとの間をうまく統合できずに悶々としている自己に対する「弱さ」が、そのまま「男らしくないこと」と認識し、ますます自暴自棄に陥った。

また、祖母罵倒されたことによって、このような身体化された症状が、登校拒否を表していることにもうすうす気づいていた。しかし、登校拒否をすると、ますます女性たちからのいじめへの敗北を意味するので、男らしく耐えていた。そこには、「男は攻撃されないもの」、あるいは、「まして、男が女から攻撃されるなんてありえない」、「攻撃される男に問題・欠陥あり」など、「男は攻撃しても攻撃されない」という思い込みが内面化していたのだろう。

そのような心性の下、私は自ら「不良になりきれない自己」に直面した。当時、「不良」をテーマにした歌やドラマなどのメディアの影響もあって、「不良」に憧れていた。そこに描かれていた「不良」とは、粗暴な行為に加え、多弁で反抗的な口調、序列意識の厳格化などであり、女子ばかりのクラスの中や担任の女性教師の前で発揮してみたい行動様式であった。しかし、現実はといえば、「粗暴な行為」のわりに「寡黙」によって感情を封印していたために、根っからの「不良」になりきれなかった。その代わり、腹痛や下痢・嘔吐などの身体化された「消化不良」が出現したことは、私にとっては皮肉な結果であったと言わざるを得ない。

④身体化された症状のもう１つの側面

中学校３年生の夏休み前、原因不明の高熱に襲われ、学校を欠席した。その２日後、ついに「あってはならないこと」が自己の身に起きてしまった。

他の女子より遅ればせながら、私にもついに「初潮」が来訪した。それは、今まで味わったことのなかった「有無を言わせぬ身体感覚」で、私に男性ジェンダーから女性ジェンダーへの変更を迫る現象として、いっそう明確に突きつけられた。

前項で述べたように、腹痛や下痢・嘔吐などの身体化された症状は、確かに登校拒否の症状としての役割を果たしていた。その一方で、この身体化された症状は、初潮来訪に対する拒否反応の前段階としての役割をも果たし、「原因不明の高熱」は、いよいよ初潮来訪を警告するとどめの症状であったと理解することができる。

よく、「初潮になったら赤飯を炊いてもらう」という話があるが、私の場合はどうだったか、覚えていない。よほど、初潮来訪への違和感や拒否感が鮮明だったのだろう。

⑤レイプ・妊娠への妄想に悩まされる

初潮を最後に、女性への身体変容が完了すると、今度はレイプ・妊娠に対する妄想に悩まされた。

高校生のころ、交際していた男性がいたとはいえ、親密な関係性を構築するまでには至らなかった。ただし、交際していたとはいえ、決して自身が女性として、相手の男性を好きになったのではなく、男性として相手の男性を好きになっていたので、ジェンダーレベルではゲイである。それにも関わらず、当時視聴していたドラマの１シーンで、レイプされた女性が妊娠してしまった場面への強烈なショックが引き金になり、それ以来、レイプ・妊娠に対する妄想に悩まされた。さらに、そのレイプされ、妊娠してしまった女性の身体と自己の体との距離を適切に取ることができずに、このレイプ・妊娠の場面を直に感じてしまったことへの恐れ、つまり、実際はレイプされたり、妊娠させられたりしていなくても、いつ自己の身に降りかかるかという予期不安が重なった。それは、ジェンダーレベルで「男が妊娠するなんてあってはならない」という強固な思い込みも手伝って、完了した自己の女性の身体を否定しつつも、現実にはレイプ・妊娠する可能性を否定できないことへの予期不安に悩んでいる自己に対する「男らしくない」という否定的感情が、更に妄想を強化していった。そこには、盲学校教育の中で教えられた保健体育などの授業で、「女は妊娠する」という内容を自明として受け止めていたことも関与しているだろう。

⑥私にもちょっとした「変声期」が

最後に、私にとって残酷だった第２次性徴の中でも、ちょっとした「嬉しいエピソード」を紹介しよう。

中学１年の音楽の時間に合唱をしているときである。合唱のパートを選ぶときに、先生が突然私に言った。「あれ！もしかして変声期？」。そのとき、私は「まさか」とは思いながらも、他の女子とは違って、自己の声が少しずつ低くなってきてるんだろうか、と思い、にやにやしてしま

った。女子にも多少の「変声期」があるというのは当時知ってはいたものの、他の女子とは異なって、自己の「変声期」が、音楽の先生である他者に気づかれていることへの優越感を覚えたことを今でも覚えている。

3　終わりに

第2次性徴に差し掛かったとき、誰しもが少なからず「戸惑い」を覚えるだろう。その現象は、男女に関わらず同じであろう。問題は、私のように、体の性別と、自己の認識しているジェンダーの性別が不一致である場合、この第2次性徴とどのように「付き合うか」である。

次回は、FTMトランスジェンダーの自己の恋愛または恋愛感情のあり方について記述する。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（１３）

岡崎　正明

（広島市）

個人情報、守るも。攻めるも。

お年寄りの窓口にいると、ときどきこんな電話を受ける。

「さっき役所の田中さんいう人から電話があって、今日までに手続きしたらお金が戻ってくるいうんじゃが、ホンマじゃろうか？」

いわゆる還付金詐欺とか、振り込め詐欺とかいうやつである。

ニュースでさんざんとりあげられている出来事。だがそれが自分の身に降りかかってくる実感は、やはり体験しないと分からない。驚きや戸惑いを感じ、なんとか冷静さを取り戻そうと電話をくれる方がいる。正しい選択である。

こちらも努めて冷静に状況をよくお聞きする。そして役所はそんな親切な連絡はしないこと、ＡＴＭの操作でお金は絶対入金されないことを伝える。

被害を免れている人の方がもちろん大多数である。だからといって、数少ない騙された人を「注意が足りない」などと断じる気にはなれない。様々な要因や不運がかさなって、人は「そんなはずじゃなかった」と思うことに、ときに巻き込まれるものだ。

先日私にも「ニュースな出来事」が降りかかってきた。届いたのは１通の手紙。中には謝罪文と１枚の図書カード。送り主は大手教育系出版社である。数か月前、顧客情報を社員が名簿業者に売っていた事件が世間をにぎわせていた。私の住所・名前・年齢といった情報が漏れた可能性があるとのことだった。

驚くには驚いたが正直複雑な気持ちがした。なにせ私には被害を受けた実感がない。そもそもこの費用はどう捻出するのだろう。価格転嫁は消費者が納得しそうにない。では会社負担なら喜んでもらえばいいのか。いや、会社だって結局は社員という個人の集合体。それは隣に住む誰かであり、いずれ自分がその誰かにならない保障はない。「５００円儲かった」と単純にいっている場合ではない気がした。

テレビの話によれば、名簿業者というのはありとあらゆる名簿を扱い、顧客である

一般企業に情報を売っている。そしてごく普通に社会生活を営んでいる人であれば、どんな名簿にも名前が載っていない人、というのは皆無とのことだった。
思えば結婚当初は分譲マンションのチラシがやたら来ていたが、いつの間にかこなくなった。年頃の子がいれば塾や習い事の、高齢になれば介護サービスやお墓の広告が、自然と送られてくる。多くの人が体験している現象。そこには名簿業者と企業の需給の一致がある。ターゲットになるお客も、効率良く宣伝したい企業で働くのも、元をたどれば同じ我々市民なだけに、事件を受けたコメンテーターの正論がなんだかむなしく空回りして聞こえた。

個人情報を扱うプロフェッショナル（企業・自治体など）が、情報を適切に扱い管理するべきなのは、無論当然だ。特に対人援助職は個人のプライバシーに関わる極めて秘匿性の高い情報に接する職業である。役所の様々な相談窓口にも、必ずといっていいほど「秘密は厳守いたします」と書かれている。我々もたとえ同じ役所内でも、適正な手続きをふまない限り情報は出せない仕組みになっている。

だが最近個人情報に関して寄せられる意見で多いのは、「なぜ出すのか」よりも圧倒的に「なぜ出せないのか」という声の方だ。

民生委員さんや自治会長さんなど、いわゆる地域の顔役と呼ばれる人達がいる。こうした方から「２丁目の〇〇さんを３日前から見かけないが、大丈夫だろうか？」といった問い合わせが時々ある。もちろんこちらでもまったく把握していないこともある。だが中にはこちらで状況が分かっていても、個人情報保護の壁があってなかなかスムーズに情報を出せないケースがある。

個人情報保護法には生命身体の危険など、緊急時には当人の承諾を得なくても、個人情報を出してよいとの規定がある。しかし現実は様々なケースがあり、どこまでをこの規定に当てはめてよいか、判断が難しい。お役所という所は市民に重大な影響を及ぼす決定をするのが仕事であるため「万が一にも間違ってはいけない」という思想がある。そのため判断に迷うようなことがあると、どうしても回答は慎重になり、時間がかかる傾向になってしまう。
そんなときによくいただくのが「以前ならすぐ教えてくれた」「これだから地域の関係が希薄になる」といった声である。少子高齢化と人口減少社会を迎える中で、国は「互いに支え合う地域」を目指している。なんでも役所に任せる時代は終わろうとしている。そんな時にあってこうした声は、お役所にとって痛烈なジレンマになっている。

ではどうすればいいのか。もちろん簡単に答えが出るようなものではないが、こんなときこそ解決志向。リフレーミング。発想の転換が大切である。

岡檀（おか　まゆみ）著『生き心地の良い町　この自殺率の低さには理由がある』（講談社）は、徳島県の南端、太平洋側にある人口３千人ほどの旧海部町（現在は合併し、海陽町の一部）という小さな町が、なぜ全国的に突出して自殺率が低いのか。その謎に迫ろうとする名著である。

自然に恵まれた、逆をいえばけして便利とはいえない、日本のどこにでもある田舎町。旧海部町の地理的・経済的な条件は、他の周辺自治体と比べても特徴は無く、自殺率の低さを決定づけるような要因は見当たらないという。そこで著者が数年に渡って現地調査をし、いくつかのこの地域特有のコミュニティ特性が、自殺予防因子になっているのではないかとの結論に辿り着いた。
詳しくはぜひ本を読んでもらいたいが、旧海部町の人々は多様性を尊重する傾向が強く、古くから存在する「朋輩組」という相互扶助組織などにより、ゆるやかに繋がりを持つという。

その旧海部町に「病、市（いち）に出せ」という、昔からの格言がある。

本にはその説明がこうある。
「『病』とは病気のみならず、家庭内のトラブルや、事業の不振、生きていく上でのあらゆる問題を意味している。そして『市』というのはマーケット、公開の場を指す。体調がおかしいと思ったら、とにかく早めに開示せよ、そうすれば、この薬が効くだの、あの医者が良いだのと、周囲が何かしら対処法を教えてくれる」
「悩みやトラブルを隠して耐えるよりも、思いきってさらけ出せば、妙案を授けてくれる者がいるかもしれないし、援助の手が差し伸べられるかもしれない」というわけだ。

この教えは、とかく「守ること」一辺倒だった個人情報に対する私たちの態度に、コペルニクス的発想の転換を投げかけているような気がする。
個人情報の保護と適正な管理はたしかに大切である。だがどんなにセキュリティを高めても、悪意のある者による行為を完全に防ぐことは難しい。そして私たちが社会という群れを作って生活する生き物である以上、他者との繋がりは良くも悪くも切っても切り離せない。おのれのすべての個人情報を、誰にも知らせずに隠し通して生きていくことなど不可能だ。
であるならば、私たちは悪徳業者や詐欺師ほか、生きていく上でのあらゆる困難に対し、個人情報を「守る」ことばかりではなく、それを使って「攻める」ことを考える必要があるのではないだろうか。

「病、市に出せ」一。家族や友人だけでなく、顔見知りの、ご近所の、職場の、ちょっとした繋がりの人々に、可能な範囲で自らの弱みや悩み、「ちょっとした事情」を開示する。それもなるべく早く、深刻になる前に。実に能動的な態度。まさしく攻めの姿勢である。

「じつは最近…」「うちの家族がね…」
ここから、様々なお役立ち情報が入る可能性が高まる。もちろん中にはおとしめたり、騙す輩もいるかもしれない。悪気はなくとも、間違った情報を掴まされることもあるだろう。だからこそより複数に開示することが、リスクマネジメントとして正しい。１人だけに相談した場合、その助言が間違っていれば１００％間違いしか聞けない。５人に聞けば、全員が間違う確率は下がる。仮に１人間違っても、それは２０％の意見に過ぎなくなる。様々な意見を、比較検討することができるようになるのだ。

またこちらが情報を開示することで、相手も開示をしやすくなり、関係の深化に繋がるメリットもある。そうして自分の周りに、自分の「ちょっとした事情」を知る味方が増えることは、振り込め詐欺や、認知症、うつ、借金、災害など、人生のありとあらゆる問題にぶつかったとき、緊急防御装置となってくれるはずである。

ヒトは騙される生き物だと脳科学でも証明されているという。
他の霊長類の大脳新皮質の大きさと群れの大きさから計算すると、ヒトが作れる群れ（一定の信頼関係を持ったグループ）の最適数は１５０人程度らしい。しかし我々の社会は、例えば日本という国だけでも 1 億人を超えるグループだ。そのため、ヒトは肩書きや身分・職業などの情報で、相手を信頼するという約束事が成立しており、それをいちいち疑わない脳になっているのだそうだ。
考えてみれば警察官の服を着て歩いている人がいたら、私たちは警察官だと思ってしまう。警察署に身元確認したわけでもないのに。まさか「あれは趣味かもしれない」などとは思わない。病院で白衣の人を見れば医師だと思うし、弁護士の名刺を見せられればそうだと思う。そしてその職業のイメージで勝手に相手のことを判断・推測する。その方が社会生活上便利だからだ。
当たり前のように思われるかもしれないが、この脳のクセがある限り、騙されることはさけられないらしい。ディカプリオがパイロットの制服を着た詐欺師を演じた映画があったが、あれも確か実話である。

「騙されない社会」
「個人情報がもれない社会」
理想に近づく努力はすればよい。しかし絶対そうでなければならないとして、それのみを志向する対策しか考えないというのは、いかがなものだろう。あまりに現実を知らな過ぎるし、効果が薄く、副作用も強いと言わざるを得ない。
それよりも、
「騙されそうになっても、助けてくれる人がいる社会」
「個人情報が万が一漏れても、ヘンな勧誘に惑わされないよう助言をくれる味方がいる社会」
のほうが、目指す方向として理にかなっている気がするのは、私だけだろうか。

我々が本当に守りたいものは「個人情報」なのか「個人」なのか。それを考えれば、おのずと答えは出てくるはずである。

改訂に向けて

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その⑪

大谷　多加志

K 式発達検査は現在 2020 年をめどとした改訂作業に取り掛かっています。次回の改訂に向けて、大枠を維持しながらも、いくらかは変化もする予定です。その変化は、もちろん臨床的なニーズや、ユーザーである検査者、社会の期待や要請に応えるものでなくてはならないと思いますが、一方で K 式がこれまで大事にしてきたところや、パッと見にはわかりにくい K 式のよさ、良くも悪くもあるが K 式らしいところなどをきちんと残していくこともまた、大切だと思っています。

前号に書いたように、生澤先生が亡くなった後、私の K 式に関する仕事は一時完全に停止しました。方向を示す指揮官を失い、私自身には具体的な何かを進める力もなかったのですから当然ではあります。その頃のことを思うと、何とか改訂作業に着手できるところまで辿り着けたことに、ちょっとした感慨を覚えます。

さて本題に移ると、今回の改訂では、いくつか新しい検査項目を取り入れることを検討しています。公刊前ですし、検査内容に関わることなので具体的な内容は書けないのですが、K 式らしい項目を導入できたのではないかと考えています。まだ、最終段階で没になる可能性もあるのはあるのですが、ここまでの予備調査ではまずまずの手応えでしたので、きっと無事お披露目できることであろうと思っています。

１．新しい検査項目を作るということ

新しい項目を作ろうと考えた理由はいくつかあります。検査作成を行う研究会のなかで、より検査内容を充実させるために検討をしてきたということもありますし、ユーザーである検査者の方の意見や要望を聞く中でそれに応える形で考えたものもあります。しかし、頂いた意見がすべて反映されたわけでもありません。ここでは、新しい検査項目を作るにあたって、どのようなことを考え、検討したのかをまとめてみようと思います。

１歳０ヶ月~3 ヶ月	１歳３ヶ月~6 ヶ月	１歳６ヶ月~9 ヶ月	１歳９ヶ月~2 歳	２歳~2 歳３ヶ月
	検査項目 C		検査項目 F	
検査項目 A			検査項目 G	検査項目 I
検査項目 B		新設項目 K		
	検査項目 D	検査項目 E	検査項目 H	検査項目 J

図１　検査用紙のサンプル

図 1 に、検査用紙のサンプルを示しました。一番上の欄が、年齢区分です。そして、それぞれの年齢区分に対応して、その年齢の子どもたちの発達の水準に合わせた検査項目がその下の欄に配置されています。

ご覧の通り、各年齢区分を見ていくと、配置された検査項目の数にばらつきがあります。これはサンプルですが、実際の検査用紙でも同様です。基本的に検査項目がたくさんある方が検査法としての精度は向上するはずです。同じ列にたくさんの項目があればより多面的に発達の諸側面を評価できることになりますし、同じ行にたくさんの項目があれば発達の段階をより細かく評価することができるでしょう。そうすると、「新設項目 K」のあたりにうまく検査項目が配置できないかと考えてしまうかもしれません。単純ですが、これも新設項目を考える動機の 1 つではあります。

さて、こうしてみると「検査項目が多いに越したことはないのでは」と思われるかもしれませんが、残念ながらそう単純ではありません。その理由を以下に挙げていきます。

① 検査時間

新版 K 式発達検査の実施にかかる時間は、対象者の年齢や検査者の進め方によっても異なりますが、乳児の場合は 20 分程度、幼児の場合は 30~40 分、小学生では 1 時間、それ以上だと 1 時間強というところです。この時間を長いととるか短いととるかは評価がわかれるかもしれませんが、検査対象者にとってはそれなりに負担のかかる時間です。特に乳幼児では検査に付き合えるのはこのくらいの時間がほぼ限界、というところがあります。

むやみに検査項目を増やすと、検査の所要時間が長くなっていきます。時間が長すぎれば子どもが検査に付き合いきれず、検査を完了できないケースも出てきます。また何とか完了できた場合でも、要した時間やそれに伴う子どもの疲労が、検査のパフォーマンスにどのくらい影響を与えたのかを考慮する必要があるでしょう。その意味では、新しく項目を加える場合、「所要時間が短い」ことは重要な要素でした。

② 検査用具・検査スペース

ほとんどの検査用具は、片手で持てる程度の大きさのアタッシュケースに収められています。一部そこに収まらないものがあり、「持ち運びの利便性を考えてほしい」という要望は既に耳にしています。新しく設定したい検査項目に大掛かりな用具が必要であれば、それをどこの収めるかを考える必要があります。現状でも決して手軽に持ち運べる分量ではないだけに、考慮すべき点です。

また、実施の際のスペースの問題もあります。今、新 K 式検査は様々な現場で使われていますが、それぞれの機関によってどのようなスペースが検査場所として割り当てられているかはまちまちです。少なくとも子どもが用具を扱うための机は必要ですし、検査者と子どもが座れるスペースも要りますが、場合によってはそれだけでやっとという小さな空きスペースで検査を実施しているという話も聞きます。

検査項目のうち、粗大運動に関する検査項目を充実してほしいというご要望を耳にすることがあります。しかし、なかなか適

切な項目を設定することができない理由として、このスペースの問題があります。例えばですが『鉄棒ができるかどうか』ということを検査項目として設定すること自体は可能だとは思うのですが、それを実際確認するための用具（鉄棒）を室内に設置することは基本的には困難で、断念せざるを得ないわけです。

③ 実施と評価の基準

新 K 式検査は、基本的に検査マニュアルを見ずに実施手順や評価基準を覚えて実施します。また評価基準は項目の通過・不通過を決める重要なものですので、検査者によって評価がブレたり、迷いが生じないように、可能な限り客観性が高い基準を設定しておく必要があります。

実施手順についても、検査を「構造化された観察場面」と捉えるならば『どのように課題を実施したか』が結果に影響を与えることもある訳ですから、できる限りわかりやすい手順であることが望ましいと言えます。

④ 面白さ

特に乳幼児期の検査項目においてですが、検査内容は基本的には子どもにとって「遊び」であってほしいと思っています。その意味では子どもが「試されている」とか「できる・できない」だけにとらわれないで楽しみながら取り組めるものがよいと考えています。

２．標準化作業へ

ここまで挙げた観点をクリアしたいくつかの検査項目を、標準化作業のなかで検証し、そこでも問題がなければ、正規の検査項目として採用する方向で動いています。このマガジンが発行される頃には実際の標準化作業に着手している予定です。データ収集には概ね 3 年程度の期間を見込んでいますが、何分多くの方々に協力していただかないと達成できない仕事です。こちらの思い描いた通りに進行すると考えてはいけませんが、多くの人と一緒に仕事をするまたとない機会でもあります。停滞せず焦らず、これまで検査を作ってきた方々の誠実な仕事に恥じないよう、着実に取り組んでいきたいと思います。

10 代の母という生き方 ⑪

大川 聡子

★まえがき

マガジン 14～19 号で、若年母親へのインタビューを基に、若年母親が持つ社会的経験の特徴について記述しました。今号からは、これまでのインタビューをまとめた考察をしていきたいと思います。

若年母親は、どのような社会的要因の下に出産に至るのでしょうか。14～19 号に掲載した若年母親に対するインタビューから、Bongaarts(1982)の図を参考に、若年母親が出産に至るまでの社会的要因・中間要因について[図 5]の通り整理しました。

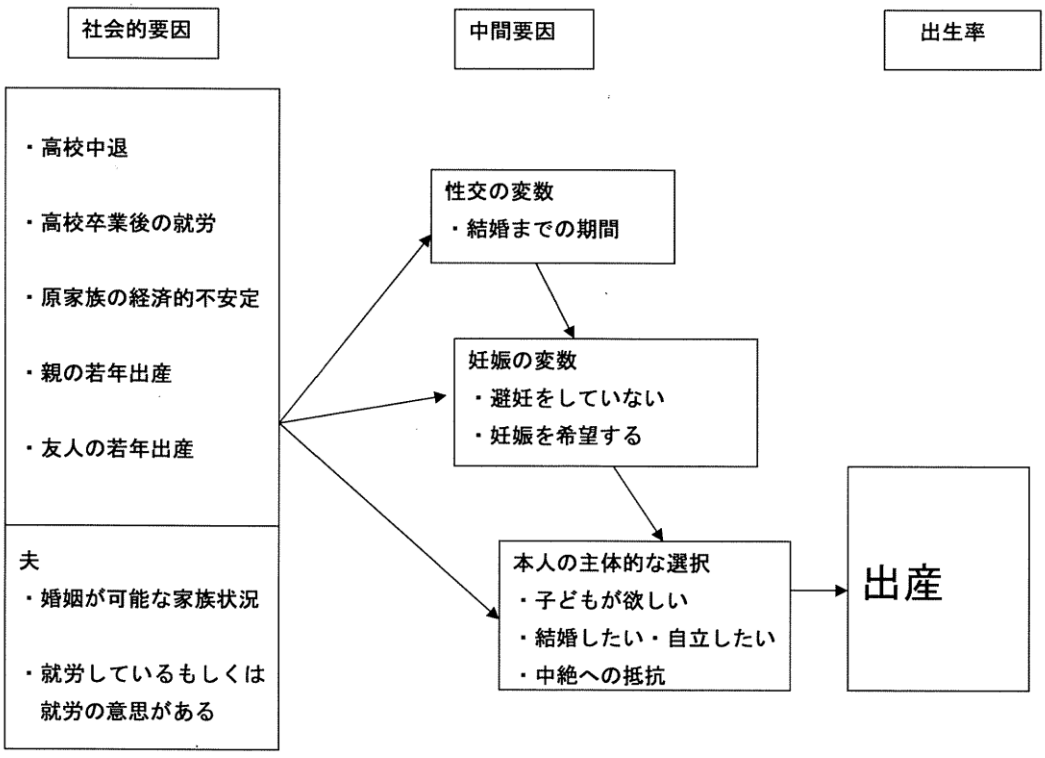


図 5　出生率に影響を与える要因

先行研究から、若年母親は経済的問題、教育の中断、夫との関係構築の困難さ、祖父母との同居に伴う問題など、多くの問題を抱えていました。インタビュー結果から、高校中退や経済的に不安定な家庭環境により、中学・高校在学時、もしくは進学せず早期に労働市場に参入していること、また親や友人等の身近な人が若年出産している事が、出産への選択に影響を及ぼしていると考えられます。さらに、夫自身が婚姻可能な家族環境である事、就労している、もしくは就労する意欲があり金銭的に自立をしている事も、出産の選択に影響を及ぼしていると考えられます。妊娠については、避妊しなかった事、または妊娠を希望する事が影響していると考えられます。今回インタビューの内容から「本人の主体的な選択」と名付けた項目を新たに付け加えました。この内容として、子どもが欲しいという思い、結婚したい、または自立したいという思い、中絶への抵抗があると考えました。これらの要因が、若年母親が出産に至る過程において複層的に影響し合っています。

インタビューに答えた若年母親のうち、高校中退もしくは中学卒業の学歴を持つ人は、24 名中 19 人であり、7 割を超えています。小川(2009)の調査では 10 人中 7 人が中学卒業もしくは高校中退であったため、ほぼ同じ割合です。学齢期の妊娠であっても、母親は出産と学業の継続に葛藤することもなく、強い意志を持って出産を選択していました。こうした背景に原家族の貧困状況が垣間見られます。高校の学費も自分で納め、学生時代からアルバイトを通して家計を支えている母親もいました。こうした状況の下では、強い学習への意欲を持たなければ高校に在学し続けることは困難であったでしょう。一方で、高校生でありながらも金銭的に自立した環境におかれていたことは、出産を実現しやすい環境を作っていたとも考えられます。

高校中退に至るまでの教師の関わり方も様々で、学校に来ず友人と遊んでいる生徒に何度も学校に誘う教師もいれば、本人が在学したいと願っても校則違反のためあっさりと退学を宣告されていることもありました。小・中学校での学業達成が困難であった様子も見受けられます。中学までの基礎学力がなければ、高校へ行く意欲を見出せなくなることは必然です。苅谷(2001)が高校生を対象に行なった調査によれば、「意欲」は社会階層によって差が見られ、意欲や、意欲の源泉とされる興味・関心は、各人を取り巻く生育環境やその変化によって影響を受けるといいます。さらに、「相対的に低い階層出身者達にとって、将来のことを考えることをやめ、あくせく勉強しても仕方がないと思うことで高められた〈自信〉は、勉強からの離脱という実際の行動に基づいている。そして勉強から〈降りる〉ことによって自己を肯定できる低い階層の子ども達を〈降りずに〉いさせることはかえって彼らから自己の有能感を奪うことになりかねない」としています。若年母親の中には、経済的に困難な家族の下で、家計を助けるためのアルバイトに励みながら高校に通っている母親もいました。こうした中では、「勉強」は母親達の自己を肯定するものに成り得ず、勉強から〈降り〉、妊娠・出産して母親になることが、自己の有能感を高めること、すなわち自己肯定感を高めることにつながったのではないでしょうか。

若年出産は、若者を取り巻く社会問題とも強く関連しています。1955 年～2009 年の人工

妊娠中絶率、出生率、高校中退率(左軸)、高卒内定者の就職率(右軸)を[図 6]に示しました。10 代の人工妊娠中絶率、出生率両方とも急激に上昇した 2000 年は、高校卒業後の就職内定率が 90%を切り、高校中退率も上昇しています。高卒者の就職内定率と 10 代の人工妊娠中絶率は、1990 年～2005 年にかけて、逆のカーブを描いているように見えます。経済状況が悪く、若者に将来への展望が見えないことも、若年妊娠・出産の要因の一因となっていると考えられます。

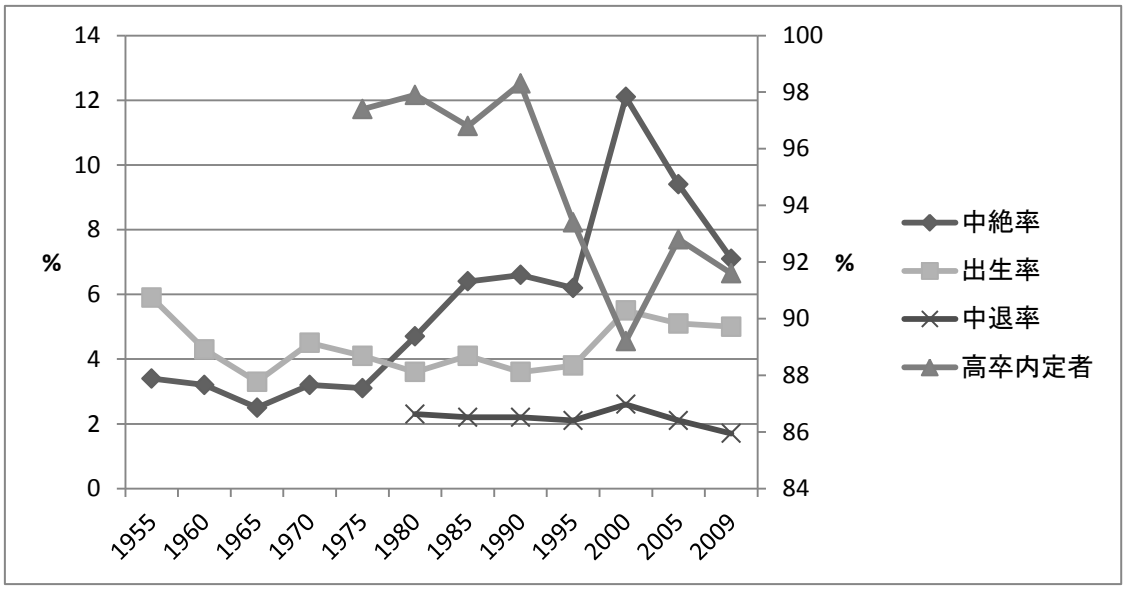


図 6　10 代の人工妊娠中絶実施率、出生率、高校中退率及び高卒就職内定者数の推移

他にも、高い高校進学率に押されて入学するも、学業への意欲が乏しく、クラスメイトとの関係が築きにくく高校を中退するといった高校中退問題、親世代からの貧困の連鎖、ステップファミリー問題など、若年母親は多くの社会問題が絡み合う環境の中で、「主体的」に出産を選択していました。その結果、社会的に不利な状況が再生産されています。Francesconi(2008)は、「若年母親は社会経済的不利が世代間連鎖する原因であるとし、若年母親を減少させる事により子どもの貧困を根絶させることはなく、また貧困状態にある親の下での子どもの成長に効果ももたらさない。社会的に不利な状況にある子ども達の生存戦略は、人生における機会を拡大することである」としています。若年母親の機会の平等を保障するためには、社会的不利の連鎖が断ち切れるような、貧困や住環境の不備、経済的困難を解消するための環境を整えていくことが必要です。

一方、アメリカ医学研究所(Institute of medicine)は、人々の行動は家族や友人、環境要因等、異なる範囲にある複数の要素の相互作用を受けているという、Brofenbrenner(1979)のエコロジカルモデルを参考に広い基盤を持ったエコロジカルアプローチを、健康状態の向上のために採用するよう勧めています。本稿では、若年母親の育児に関連する要因について、このモデルを参考にし、インタビュー内容から明らかになった若年母親の育児に関

連する要因について、個人・家族・友人・環境のそれぞれの項目ごとに[図 7]にまとめました。

若年母親の育児を困難にする「個人」的要因については、修学年数の短さ、出産への後悔、子育てへのプレッシャー、支援の受け入れにくさが挙げられました。「家族」では、夫の不安定就労、父親役割の取れない夫、離婚が挙げられました。「友人」では、育児リスクとなる要因はなく、「環境」では、経済的困難、住環境の不備、選べない仕事、周囲との軋轢が挙げられました。若年母親の育児を困難にする要因は、個人や家族だけでなく、出産前から継続している社会的に不利な環境に負うところも大きいです。

一方で、中間要因として「家族」では親の若年出産、「友人」では、友人の若年出産が挙げられました。育児を肯定する要因として、「個人」では、活発な性格、旺盛な自立心、将来を見越した生活設計、自己肯定感の向上が挙げられました。「家族」では家族の支援、「友人」では社会性のない友人との決別、友人の応援、ピアグループ、「環境」では職場の理解、若年母親を理解し継続的に関わる支援者が挙げられました。若年母親は「個人」や「環境」に「育児リスクとなる要因」を多数持ってはいますが、「個人」において、活発な性格や将来を見越した生活設計、自己肯定感の向上など「育児を肯定的にする要因」を多く持っています。また「友人」からも育児を肯定する要因を多く得られています。こうした若年母親の長所を生かして、育児リスクとなる要因を排除し、育児を行ないやすい環境を作るための社会資源の整備について検討していく必要があるでしょう。

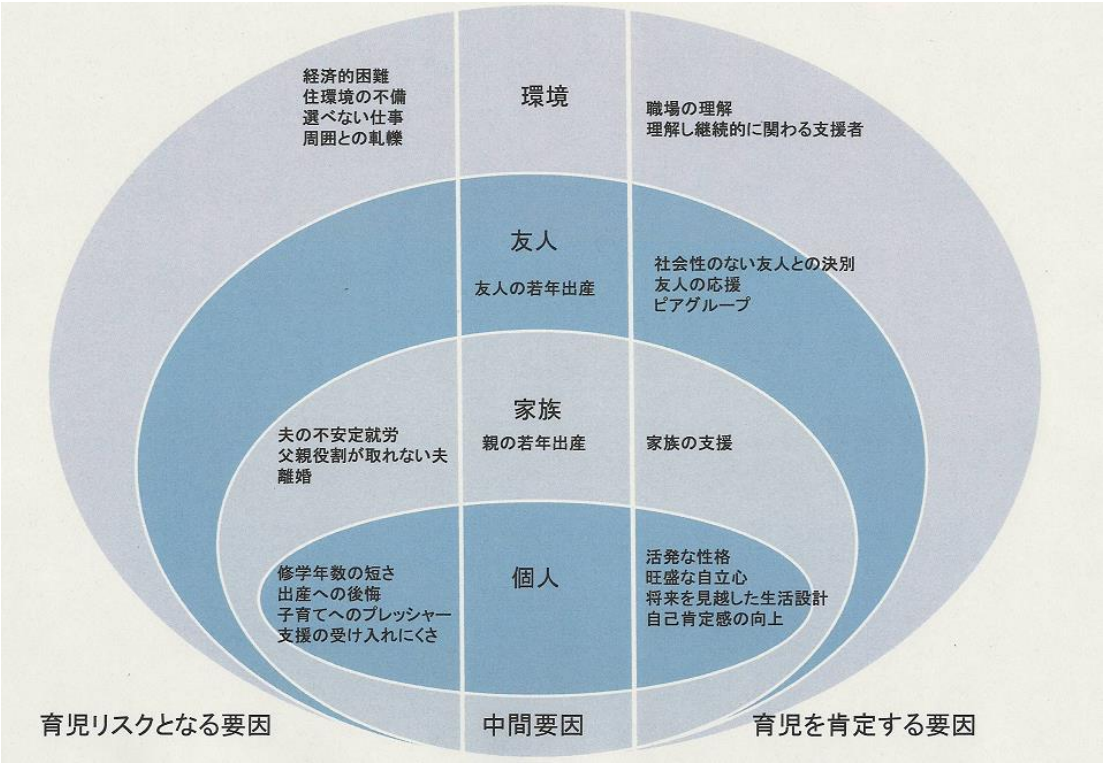


図 7　若年母親の育児に関連するエコロジカルモデル

ここまで、若年出産をもたらす社会的要因について述べました。西田(2009)は社会的不利な条件にある家庭の多い地域での調査において、「世間の狭さ」、「モデルの限定」から、排除の連関としての大人への移行過程が進んでいることを指摘しています。若年出産という「選択」は、これまでの生育暦や周囲の文化に影響を受けた轍をたどっているのに過ぎないのでしょうか。若年母親は「育児を肯定する要因」を多く持っており、インタビューでは、〈子どもが欲しかった〉と若年での出産を主体的に選択している母親もいました。彼女たちの出産したいという思いを支持したものは何だったのでしょうか。次号、若年母親が出産に至る径路を見ることで明らかにしていきます。

★引用文献

Bongaarts J., 1982, Proximate determinants, In Ross J.A.ed International Encyclopedia of population, Free Press.

Brofenbrenner, U., 1979, The Ecology of Human Development-Experiments by Nature and Design, (=1996, 磯貝芳郎, 福富護訳, 人間発達の生態学, 川島書店)

Francesconi M., 2008, Adult outcomes for children of teenage mothers, The Scandinavian Journal of Economics, 110(1), pp93-117.

Institute of Medicine, 2002, The future of the public's Health in the 21st century, National Academy Press.

苅谷剛彦, 2001, 階層化社会と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会へ, 有信堂高文社.

西田芳正, 2009, 自己責任論とアンダークラス論を乗り越えるために－若者と貧困に関する実証研究の課題, 貧困研究, 2, pp72-79.

小川久喜子, 2009, 若年妊婦のストレスフルライフイベントにおける対処法略パターンとその変化, 日本保健科学学会誌, 12(2), pp77-90.

電脳援助

浅田英輔 Ver.11



昨今、いろいろとうるさい著作権。「著作物を作る人」を守るための権利ですが、私たちはどちらかといえば「著作物を使う側」のことが多いと思います。音楽ダウンロードだとか、写真を撮ってもいいのか悪いのかとか、文章の引用はマズイのかなど。ただ、私がこうやって書いているものも著作物ですし、皆さんも身近なところで著作物を作り出しているかと思います。今回はそういう著作権を理解してみたいと思います。

☆著作物とは

「思想又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの」

☆著作物に含まれるもの

小説、脚本、論文、公園、音楽、舞踊、絵画、版画、彫刻、建築、地図、図面、図表、模型、映画、写真、プログラム、データベース、美術工芸品など。

著作権法で面白いのは、「○○が固定されたもの」という表現。固定された時点で著作権が発生するという解釈なのだろう。だから、録音されていない音楽には著作権がないといえる。逆に、ハナウタでも録音すれば著作権が発生すると言っていいのだろう。

☆著作権のないもの

- 著作権が消滅したもの（日本では、作者の死後50年）
- 事実の伝達（いつどこどこで火事がありました、といった情報）
- 創作性のないもの（事実など）
- 著作権ないよ！としているもの（著作権を放棄しています、といった記述のあるもの）

例えば、手塚治虫さんは平成元年になくなっているので、平成51年になると「火の鳥」は無料で読めるようになる。平成51年にはweb漫画は手塚治虫シリーズであふれることだろう。

ニュースなどで話される情報は著作物にはならない。ただし、ニュース映像だったり、分析が含まれていたりすると著作物扱いになる。

☆著作権フリー

　ネット上にはたまに「著作権フリー」としているものがある。「パブリックドメイン」というのも概ね同じ意味で、著作権云々に問われる心配がないもの。ただし、著作権フリーにもいくつか種類があり、フリーだからといって好きなように使っていいものではない。イラストサイトなどに使われているものをみてみる。

•商用利用

　ショッピングサイトや販売するものを載せたチラシなどに使っていいかどうか。

　電脳援助に使う場合は、商用ではないので「商用不可」のものも使える。

•販売

　商用利用と似ているが、イラストそのものを売って良いかどうか。イラストをメインとしたカレンダーを売ったり、Tシャツを売ったり。大抵の場合は「販売不可」。

•加工

　色を変えたり切り取ったり組み合わせたりしてよいかどうか。サイトによって、よしとしている場合もある。

•二次利用

　加工に似ているが、そのイラストを元に作品などと作って良いかどうか。いわゆる「元アニメがある同人誌」が二次利用の代表。

　漫画家の佐藤秀峰さんは、「ブラックジャックによろしく」の二次利用をフリーにした。「著作権は放棄しないが、行使しない」とのこと。いろいろなサイトで全巻無料で読める。

　対人援助に関わる人は一読をおすすめする。

•メインコンテンツ

　それ自体をメインコンテンツとしてよいかどうか。つまり、無料サイトからダウンロードしたイラストを集めて「無料イラストサイト」を運営するなど。大抵ダメ。

•アダルト利用

　アダルトサイトなどで利用してよいかどうか。これはそのサイトによるが、たいていのサイトはダメ。



ブラックジャックによろしく
佐藤秀峰　漫画 on web

•著作権の放棄
「自由に利用していいですよ」と謳っていても、 大抵、著作権は放棄していない。無料で使ってよくても、作者の品位や名誉を害する場合はダメ。

•クレジット表記
「不要」となっている場合は引用元を表記しなくてよい。上の佐藤秀峰さんのサイトではクレジット表記すべきものが決まっている。

☆著作権を元にした引用

これらを満たせば、許諾は不要で著作権云々言われない。もちろん、線引きが微妙なものもあるので絶対大丈夫というわけではない。

1.メインではないこと
引用したもの自体がメインコンテンツになっているとダメ。
ネット上の文章などを批評したいのであれば、それ自体を載せるのではなく、URLのリンクを貼るなどして誘導するほうがよい。

2.カギカッコつける
どこからどこまでが引用なのかはっきりさせる。

3.使う意味があること
なぜそこでそれを引用したのかの必然性が必要。



4.どこから持ってきたか書いておく
クレジット表記。引用元表記。

5.ちょっとだけ
長すぎると盗用になる。線引きは難しいけど。

例えば、アーティストの歌詞。
「CDを買ったから歌詞カードもオレのもの」ではない。
ブログに全文を書いたらアウト。もしかしたら、全文を書いても「歌詞の意味をてってーてきに解説する」といったやりかたなら、解説がメインだし、引用を明確にすればいいし、使う意味もあるし、クレジット表記をすればOKの可能性がある（責任はもたないし、たぶん実際は「長すぎる」にひっかかってNGと思う）。

論文引用はもうちょっと厳密だが、基本的にこのルールに沿っていると思う。

☆私的複製について

私的利用のためにコピーすることはOKとされている。「私的」の範囲は基本的に家族。使い道も同様で、コピーしたものを公共配信するとだめ。「友達限定のSNS上にアップする」こともNGとなるようだ。

•レンタルCDをパソコンに取り込んで聞く→たぶんOK
•iPodに取り込んで聞く→たぶんOK
•妹に貸す→たぶんOK
•友達に貸す→たぶんOK（レンタル規約をよく読む）
•CD-Rにコピーして友達にあげる→たぶんNG
•CD-Rにコピーして自分の喫茶店のBGM にする→たぶんNG

解釈の仕方によるが、「レンタルCDをCD−Rに焼いて友達にあげる」のはNGだが、「レンタルCDを又貸ししたら、友達が勝手にCD-Rに焼いた」であればOKの可能性がある。（可能性があるだけで、本気で訴えられたら負けると思います）

また、基本的に私的コピーは問題ないが、コピーガードを解除して複製するとこれは違法になる。一時期、CDのコピーガードが話題になったが、最近はガードされていない？かもしれない。映画などのDVDは基本的にガードがされているので、「レンタルDVDをコピーするのは違法」と考えておくのがよいだろう。



•新聞のコピー

「息子が載っている記事をコピーしてとっておく」のであれば、私的複製の範囲に含まれると思われる。

基本的に、新聞をコピーすることは著作権の侵害になる。「職場でコピーを回覧する」のは私的利用の範囲を超えるので違法となる。「新聞著作権協議会」というところがそこを担っていて、適切な手続きをすれば問題ない。

自分、家族などの間でみたりきいたりするぶんにはたいてい大丈夫。「私的複製範囲を超えていないか」「多数の人がみれるようになっていないか」というところがポイントのようだ。

☆ダウンロードについて

•厳密にいえば、Youtubeで動画をみることはすべてダウンロード。見えないところで一時的にパソコンに保存しているが、法律はそこまで文句つけないことにしたようだ。法律では「意図的にダウンロードして保存しちゃだめ」となっている。

ふつーにYoutubeで見る限りは問題ないが、様々なソフトでファイルとして保存したらNGになる。スマホにはいろいろな動画閲覧アプリがあり、多くがダウンロードできるようになっている。（最近、こういったアプリが使えなくなったらしいが。）これを「意図していない」と捉えるかどうかである。

わかりにくいと思うが、「インターネットが繋がらない状態でみれる」場合は意図的なダウンロードの結果といえる。これは必要以上の私的複製とみなされている。

また、「違法にアップロードされた動画をみること」自体は今のところ明らかに違法とはされていないが、「違法にアップロードされた動画へのリンクを貼ること」は違法とされる可能性があるようだ。

※違法なアップロードとは、著作権の問題をクリアしていないものをインターネット上でみれるようにすること。買ってきたDVDをパソコンファイルにして動画サイトにアップする（誰でもみれるようにするという点で問題）など。

•違法なアップロードかどうかの見分け方

適切なアップロードであれば、たいていはなんらかのコピーライト表示がされているはずである。動画サイトであれば、作成者を見てみるとわかりやすいかもしれない。



こんなかんじ。

これはワーナーミュージックがアップロードしていることがわかる。

曲の前に広告が入る場合も、たいていはだいじょうぶ。

•みることは問題ない。
•「いい歌だよ！」とSNSでリンクを貼って紹介してよい。
•自分のパソコンにダウンロードするのはもちろんだめ。



われらが編集長のアニメーションは、著作権について何も書かれていない。書かれていないからといって好きにしていいわけではない。また、作者と著作権者が別の場合も当たり前にある。この場合、作者は団士郎氏だが、著作権はホンブロック出版社にある可能性がある。勝手にアニメーションを使った場合、団編集長が「まあええやないか」といっても、ホンブロックの団代表が「イヤ、アカんやろ！」といったらアウトである。

この場合の「使う」とは引用を超えた場合である。「こんな素敵なアニメーションがあります。お勧めします！」として上記1から5を満たしていれば、おそらく問題ないだろう。著作権者もウダウダ言わないだろうと思う。しかし、「木陰の物語上映会」として入場料を取って上映した場合は、訴えられてもしょうがないといえる。

同じように、例えば研修資料を作るときはどうなのだろう？

書籍からの文章の引用は上記に従えば問題ないと思われる。論文の引用の仕方に基づけば、文句を言われることもないだろう。

ただ、心理検査の類は倫理的にも著作権的にも注意しなければならない。例えば、ロールシャッハテストの図版は誰でもみれる場所（ネット上など）においてはならない。もちろん、講演会で見せたりしてはいけない。心理専門職対象の研修などでは別だが。知能検査の問題はもちろん、検査結果の表なども、被験者の承諾うんぬんのみではなく、検査の著作権として使ってはいけない場合も多い。ウェクスラー知能検査を使う人は、解答用紙やグラフの扱いについて、テキストに書いてある規約などをきちんと読んでみることをお勧めする。

各種技法についても同様で、大抵の場合は研修会をやるときの約束があるはず。お金をとってもいいとか、これこれの資料は使ってはいけないとか、対象はこういう人に限るとか。世の中は細かな「約束」でできているんだなぁ。

正直、「バレなければいい」部分も大いにあるのだが、いい大人なのだから「知りませんでした」で言い逃れするような場面には立ちたくないとも思う。

今はメールやSNSなどがあるのだから、「これをこういうふうに使ってもいいか」と一言聞くのが大人の作法ではないだろうか。



個人的には、電脳援助を書くようになってから特に著作権を意識しています。自分のSNSなどであれば、問題があれば自分が怒られればいいのだけれど、対人援助学マガジン全体に迷惑がかかるとなると慎重になります。そういう視点で写真やら文章やらを使おうとすると、「規約」もチェックするし、やばそうだなと思ったら使わないようにします。

（と言っていても気づかずにマズイこともしているかもしれません）

今はインターネットがあります。わからないことは大抵「グーグル先生」が教えてくれます。「これってどうなんだろう？使っていいのかな？」と思ったら、一発ググってみましょう。

この電脳援助も、いろいろと調べて作られています。「引用」なのかどうか疑問はありますが、そのまま使っているかどうか、自分の言葉で解釈して語るということも大事なようです。

イイトコ取りつつ、自分の言葉を語ろうぜ！Let's引用！

疑問・感想は dennouenzyo@gmail.com まで!

講演会＆ライブな日々③

古川　秀明

Ａ中学校の入学説明会の時に講演を依頼された。
演題は「子どもの思春期を考える」
講演時間は６０分。対象は来年度入学する新一年生の保護者。
会場の会議室には例年より多い８０人の人が来ていた。

最初は校長先生のご挨拶。
中学生活で大切なことの要点をまとめて話される。
なかなかわかりやすい内容で、参加した保護者のみなさんも頷きながら熱心に聴いていた。
時折ユーモアも交えたお話に、場が和んでいく。
これはやりやすいかも。
先に会場の空気を暖めておいてもらえると、とてもやりやすい。

その次は制服の採寸について。
最近は詰襟ではなく、ブレザーだ。
学ランなどと呼んでいた自分の中学時代がまるで古代史のように思える。
採寸するときは、かなり大きめのサイズを選ぶと良いらしい。
中学生の成長は著しいので、中一と中三ではかなりサイズが変わるのだそうだ。
だから今はかなりゆったり目のサイズでも、中三になると、小さいくらいになるのだそうだ。
もちろん保護者はメモを取りながら必死で聞いている。

その次は教務主任から細かい事務的な説明があった。
給食の申し込みはいつまでとか、時間割とか、諸費の納入方法とか・・・。
これも保護者は食い入るように聴いて、質問もたくさんあった。

会場は熱気にあふれ、良い感じになっている。
これは本当にありがたい。
講演会はライブと同じで、臨場感が大切。
すでに熱気のある聴衆を惹きつけるのは、何にも反応のない所から始めるよりもかなり楽なのだ。

そして次はいよいよ私の講演会。
ここまでは割と実務的な話が多く、会場の保護者はみんな少し疲れているかもしれない。
ここはひとつ笑い話を入れて、みなさんの緊張を和らげたほうが良さそうだ。
ここまであんなに熱心に聴いていたから、ここで一気にリラックスしてもらい、私の話に集中してもらおう。
うんうん、なかなか良い流れだ。
さて、どんな冗談を言おうか・・・。
アドリブは得意中の得意なので、出たとこ勝負で行こう。
私は張り切って話し始めた。

「みなさん、こんにちは。スクールカウンセラーの古川です。今日は今から１時間ほど話をさせて頂きます。これまでの話は制服とか給食とか、諸費納入の手続きとか、大切なお話が多かったんですけど、私の話はまぁ余興みたいなもんでして、そんな話に付き合っている間はないなぁ、早く帰りたいなぁと思われる方は、講演が始まる今が帰るチャンスですよ。講演が始まると会場を出にくいですからね。さぁ、帰りたい方は今帰りましょう！」

会場は温かい笑いに包まれ、話が進んで行く・・・と思ったが、なんと、私が帰って良いと言った途端、一斉に保護者が立ちあがり、なんと参加者の三分の二が会場から出て行った。

残された校長、教務主任、私の三人は開いた口がふさがってしまった。

それでも私は講演を続けた（当たり前だ）。

残られたみなさんはみんな熱心に聴いてくれた。
だけどなんだか、ザラッとした感じが残った。
みんな用事があったり、合理的に必要なことだけ手に入れられればいいのだろうけど、講演会を聴く余裕もあっていいのではないだろうか・・・。

口は災いの元というのを実感できた講演会だった。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

養育里親

～もうひとつの家族～

9

坂口　伊都

家庭に入るまでのステップ

里親制度に限らず、社会的養護の場で育ち、家庭から離れていた子どもが家庭引取りになるまでには、子どもが本当に家庭に戻れるかどうかを児童相談所のワーカーが判断するための材料がいります。親子の関係を重ねる目的も含めて、まず施設で出会う面会、施設の外に出かける外出、短期外泊、長期外泊というステップで親子の関係の構築と家庭引取りについて判断していきます。

施設の面会室等で親と子どもが出会う面会を重ねる事が多いのですが、なかなか上手くいかないという話を耳にします。親が面会に行っても、子どもが固まってしまう、親を見て泣き出し施設職員から離れない、親がおもちゃやおやつで子どもの気を引こうとする、親と出会った後子どもが荒れる等です。子どもにとっても面会室は、日常的に行く部屋ではなく、遊び道具もない殺風景な部屋だと余計に不安を覚えます。親の方も施設に出向くのは敷居が高く感じ、子どもは親である自分よりも友達や施設職員といる方がいいのではないかと恐れ、だんだんと面会に行く足が遠のきます。面会の約束をしていてもその日に突然キャンセルしたり、現れなかったりする親がいるのも事実です。親を待ち、来なかった時の子どもの落胆を知り、親に出会った後の荒れた姿を見る施設職員の中には、子どもを傷つけるぐらいなら親と交流しない方がいいと感じる人もいるといいます。

親子が共に安心して会うためにどのような配慮がいるのかを考える必要があると感じています。現在、養育しているのは施設職員で、施設

が子どもにとって安心できる場所であり、信頼できる施設職員と親子でまず出会っていく手順を取る事が子どもにとって安心できる場面になるのではないかと思います。そして施設職員が、親に今の子どもの状況や好きな遊び等を伝え、親が子どもの事を尋ねられる関係になっていけば、親の意識が面会に向かう原動力になっていくと感じます。親子の時間をお互いにとって心地よい時間にしていく工夫が求められているのではないでしょうか。

里親の場合も、家庭に迎え入れるまでに丁寧な子どもとの関係を築く関わりがいるのだと改めて感じます。今回は、何故そのように感じているのかを書いていきます。

家に行く

他のケースがどのようにしているかはわかりませんが、我が家の場合は自宅にこの子を招くまで家以外の外出を 2 回し、3 回目の外出で初めて自宅に行きました。

初めの頃の自宅に行かない外出では、時間を使うのに苦労をしました。天気や気候にも左右されますし、あまり施設から離れないような場所でとなると限られてきます。商業施設に行けば刺激が多く、誘惑が押し寄せてきます。「あれ買って、これ欲しい」とせがむこの子に対して、どこまで応じてあげればいいのか判断に迷います。買ってあげたい気持ち半分と買ってあげることでつながっていく関係は好ましくないだろうと思う気持ち半分です。この子にとって買ってもらえることは嬉しいことですし、児童養護施設ではおもちゃ等を買ってもらえる日は限られています。子どもが大好きなゲームでも、保護者等から贈られなければ、自分の小遣いを貯めてゲーム機を買うと聞きました。大きなおもちゃを手に取っているので、「誕生日になら買ってあげられるよ」と声をかけると、その子はおもちゃの値段を見て、少しでも高い方を買って欲しいと言います。そして、何につけても「高級なのがいい」と言って、高い物を買ってもらう事で満足しようとします。あまりにも高級なものをと連発するので、パジャマを買う時に「いくらくらいのが、高級なの？」と尋ねると、「うーん、3,000 円ぐらいするの」と答えたので、思わず笑ってしまいました。児童養護施設では、誕生日のプレゼントも日用品も上限が決められていて、決して高い金額設定にはなっていません。だから、こんな風に値段を気にして言うのかなと感じました。

また、この子は買ってもらえなくても駄々をこねません。すぐに気持ちを切り替えます。店におもちゃを買ってもらえなくて、床にはりついて泣いている子を横目でじっと見ていました。「買ってもらえなくて泣いているねぇ。あなたもしてみる？」と聞くと、ううんと恥ずかしそうに顔を横に振っていました。この先、どう変わるかはわかりませんが、何かを買ってもらう、自分の物が増えるという経験をしながら、物とどう付き合っていくのかを感じていくのでしょう。息子も娘も、何かのおまけのような、どうでもいいおもちゃを欲しがりました。欲しいのはその時だけで、家でしばし遊ぶと床に転がっている。ガラクタが溜まると場所を取って片付かない。捨ててもいいかと尋ねれば、必ずダメと言われるので、忘れた頃にそっと処分するなんてことをしていました。一見、無駄だと思われることの積み重ねの先に物との付き合い方を学ぶのかも知れません。程度はありますが、その時の子どもの欲求を受けることで、「してもらえた」という体験が子どもの中に残っていくのだろうと感じています。

3 回目の外出で自宅に行けるとなった時は、ホッとしました。気疲れの度合いが、全く違います。自宅で過ごせるようになっても、自宅での

んびりするにはならず、ちょくちょくと出かけています。それはやはり、外出や外泊が子どもにとっても大人にとっても特別な日で、気持ちが落ち着かない日になっている事実があるからでしょう。家で過ごす日常生活に慣れていかなくてはと思うのですが、子どものウキウキ気分が伝わってくるのと、こちらもせっかくだしどこかに連れて行きたいなぁと思う気持ちが勝ってしまいます。1 泊の外泊でも同じように、今日は急いで施設に戻らなくてもいいから、どこかに出かけようかとなりました。外出では行けない所にも足を延ばして行けるので、バタバタと忙しく時間を過ごしてしまう事が多く、一緒にいる時間を楽しくいい関係で過ごせていましたが、これでいいのだろうかとも感じていました。この頃は、外出や外泊が、この子にとっても私達家族にとってもイベントとして過ごす時期だったのだと思います。このイベント期は、ある一定期間続き、一区切りしてから次のステップに気持ちが移っていきました。

この子も私達家族も落ち着いて家で過ごす時間が増えたのは、金曜から日曜の 2 泊 3 日の外泊からです。2 泊になると決まった時、長く共に過ごす時間ができると思うと、理由もなくザワザワと不安にかられました。それまではいつも、私以外の家族が誰かいたのですが、高齢者施設職員の夫は勤務、息子と娘はそれぞれ部活動と重なり、私一人で大丈夫かなぁと心細くなります。今思えば、2 泊を過ごすイメージが出来ずにいて、不安を漠然と感じていたのでしょう。交流をしている子の口癖は、「ひま～」だったので、その言葉に引っ張られるように何かしなければとしていた向きも否めません。

2 泊になると、当然ですが初日は家で過ごし、2 日目か 3 日目かに何処かに出かけたとしても、家で過ごす時間は確保されます。宿題もしなければなりません。掃除や洗濯の時間も一緒にいます。家族のリズムの中にその子を招けた感じがしました。イベントとしての外出・外泊から日常生活へ移行したと言っていいのでしょう。

子どもも家に慣れる、家族に慣れる、一緒に過ごす時間に慣れることで、一人でトイレや 2 階に行けるようになっていきました。それまでは、盛んに「一緒にきて」と言っていたのですが、気がつけばいなくなっていることが増えました。見知らぬ家から、見慣れた家に変わってきたようです。それからは、何日間の長期外泊でも不安を抱くことはなくなりました。だんだんとお互いの距離感を縮めてきているようです。日常生活を共にするためには、お互いのリズムを揃える波長合わせの期間がいるのだと思います。結婚する時もそうですが、お互いに違う日常を過ごしているのですから、生活を共にする中で衝突することも出てきます。大人と子どもでは、大人の方が強いですから、子ども側が必死になって合わせる事態が起こりうることを忘れてはならないと思います。

夜

夜は、子どもにとって不安が活性される時間です。寂しくなったり、怖くなったりする時間だからこそ、安心できる大人がそばに寄り添っていたいと考えています。よく子どもがよその家に泊まりに来て、昼間は元気で過ごせられるのに寝る時間になると自分の家が恋しくなって、帰りたいよぉと泣き出すことがあります。泣き出さないまでも、子どもなりに辛抱して自分自身をなだめている姿を見うけます。

この子との交流が始まって、初外泊の晩は特に印象に残っています。少しでも夜の怖さが和らげばと思い、夫、この子、私と川の字になって寝ることにしました。するとこの子が、「一緒に寝るの？朝までいるの？」と聞いてきます。「一人で寝たい？」と聞くと、「いやー」と答え

たので、「一緒に寝ようね」と言うところまではほのぼのとしていたのですが、川の字ではなく、H の字型になってみたり、反対向きになってみたり、私達の上に乗ってみたり、目覚まし時計を鳴らしてみたりと落ち着きません。落ち着かせようと思って、背中をトントンとすると嫌がられてしまいました。娘なんかは、背中をトントンして寝かしてもらうことが好きで、かなり大きくなってからも「ママ、トントンして」と甘えていたのですが、その子にとっては理由がわからない行動だったようです。

添い寝をして、背中をトントンしたり、手を握ったりできないとなると、どう落ち着かせようかと悩みました。これは、長丁場になるなと覚悟を決め、電気を豆球にしたり、消灯したり、寝たふりしたりしながら落ち着かせていきました。その内、寝息が聞こえてきたので、やっと寝たなぁとホッとしていると、目がパチリと開きます。暗闇の中で目があい、微笑みかけると何とも言えず嬉しそうな顔で笑っていました。忘れられない笑顔です。朝までに何回も目が開いて、目が合いました。まるで、本当のことなのかどうか確かめているかのように、何度も何度も確認しているのかも知れません。

夜中に何回も起きているので、私は寝たのかどうかよくわからない、身体が重い朝を迎えたのですが、この子はとても早起きで、元気いっぱいです。猛烈な興奮状態なのだろうと感じ、次の日の学校がしんどくなるのではないかと心配しましたが、その時はいつも通りに学校に行ったそうです。

外泊を繰り返し、夜中に何回も起きることは減りましたが、寝る体制がなかなか整いません。夜になると、興奮するようです。寝るのがもったいないと感じているかのように見えます。朝も早起きをすると張り切っています。休日なのだから、ゆっくり寝てもいいよと思うのですけどね。

私達家族もこの子も当たり前のことが当たり前ではない体験をしているのだと思います。寝かしつけ一つでも、自分がしてきた添い寝をして背中をトントンしたり、手をつないだりしないと私の方が落ち着かない気分になってきます。以前は、頭をなでられても逃げていましたが、時間が経って頭をなでられるようになりました。変な言い回しですが、頭をなでられるのが上手になったなぁと感じます。我が家での心地よさとこの子が培ってきた心地よさに齟齬があるのでしょう。とても小さなことでも、前提が違うのだと教えられています。

寂しさ

外出でも外泊でも、迎えにいく時間があれば、同じように送りに行く時間があります。長期外泊になればなるほど、日常生活を共にしている感覚があり、何とも言えない寂しさと落ち着かなさを感じるので、送りに行く時間はあまり好きではありません。

この子も迎えに行った時は、車の中でいろいろなことをしゃべり、饒舌だなぁと感じますが、送りに行く車の中では、口数が少なくなります。それが、寂しさなのかどうなのかはわかりませんが、よくわかる違いです。この子が意識しているとは思えませんので、正直な反応なのでしょう。少しは寂しさを感じているのかなと思い、もうじき車に乗って送る時間が近づいた時に私が、「何か寂しいなぁ」と同意を求めるように話しかけたのですが、「えっ、寂しいって？別に寂しくないよ」と言われました。笑って「そうか」と答えましたが、正直ショックでした。5 日間を我が家で過ごした日だったので、余計にそう感じたのです。施設に戻ることも楽しみでいられることも大切だなと思いながらも、寂しいって何？と聞こうとしたのかも知れないので、もし

かしたら寂しいという感情を意識したことがないのかも知れないとも感じました。自分の中の感情を知るにも、誰かと一緒に体験し、語り合うことが必要なのでしょう。

この子は、初めての外泊でも長期外泊でも、施設に帰りたがったことがありません。夜になっても、泣きそうにもならずに興奮して楽しそうに過ごしています。この子は、我が家にいる時に施設の話をあまりしませんし、会わなかった間に何をしたとかもありません。我が家のことは、職員さんが「どうだった？何したの？」と話題にしてくれるので、いろいろと話しているそうです。それも最初の内は、〇〇を買ってもらったという話が中心でしたが、時間が経つとともに、こんなことをしたという話題が増えていると伺いました。

ある時、送る車の中で「パパとママを思い出したりすることあるの？」と聞くと、「ぜーんぜん」と憎たらしい口調で返したことがありました。あまりにも不自然な返事だったので照れ隠しで、逆に思い出している時もあるのかなと思ったほどです。この時、「ママはあなたのことを思い出しているよ。早く会いたいなと思ったりしているよ」と伝えました。素直に感情を言葉にして伝えていくことの経験がいるのでしょう。嫌いな物や嫌な事は、「いや」や「えー」「したくない」「めんどくさい」等の表現ですらすらと言えるのですが、「楽しい」や「嬉しい」「美味しい」等のポジティブな表現が少ないように感じます。食べる物も嫌いな物は言えますが、好きな物は「肉」と言っていました。肉は、メニューではなく分類です。いつの日か、あれ食べたいなぁとメニューを言う日を楽しみに待つことにしました。共に時間を過ごし、楽しかったことや悲しかったことを共有し、言葉でのやりとりをこの子が耳にするだけでも、意味があるような気がしています。

この子にとって、私達家族はどのような存在なのでしょうか。今度来る日を確認し、また遊びに行けると思ってくれていることは、伝わっています。我が家を少しは自分の居場所と感じてくれているのでしょうか。わからないことだらけです。

この子がどのように私達を感じてくれているかはわかりませんが、家族となっていくために夫婦で話し合って決めたことがあります。それは、この子の呼び方です。施設では、〇〇ちゃんや〇〇くんと呼ばれていたので、私達もそれに従って呼んでいました。しかし、息子も娘も名前を呼び捨てで呼んでいます。ふざけて、「ちゃん」や「くん」をつけることはありますが、基本は呼び捨てです。その中で、この子だけが呼び捨てでないことに違和感を覚えました。いつまでも、一定程度の距離感が縮まらないような気がして、家族なのだからこの子も呼び捨てで呼ぼうと決めました。呼び方を変えても、この子はそれを指摘することもなく受け入れています。

不思議なもので、呼び捨てにすると今までよりも距離感が縮まったように感じ、この子のお母さんらしくなってきたような気がしています。小さな変化で、随分と変わるものだと驚いています。まだまだ、家族としては未完成品ですが、この状況を素直に受け止めればいいと感じています。中途養育が、そんなに簡単なはずがありません。ましてや、違う生活を送っていた者同士なのですから、戸惑いや発見があって当然です。一緒にどんなリズムを作り出せていけるかの方が大事なのでしょう。子どもは、大人の予想以上に大人の顔色を見て、観察して、振る舞っています。きっと、本人も何が何だかわからずに今を生きているのではないかと思います。子どもがどのように感じているのかわからなくて不安に陥りますが、わからなくて当たり前、これからじんわりとお互いを感じていくのだろうと、自分に言い聞かせています。

最後に

子育ては、どんな子であってもわからないことだらけです。我が子だから、全てがわかるなんてことはあり得ません。それを途中からやろうとしているのですから、なおさら難しいわけです。全く違う家族のルールの中に身を置くのですから、本当に難しいのは私達よりもこの子の方でしょう。私達家族は、自分達の暗黙のルールを日常生活の中から作ってきました。影響力の強さで言えば、こちら側が優勢です。子どもが家族に合わせればそれでいいということではなく、小さな体で、余裕もなく新しい生活を覚えようとしている現実を知ろうとすることが大切です。大人側は、今の状況の成り行きをわかっていますが、子ども側は何も知らされていないことも多いです。自分自身に何が起ころうしているのかもわからず、違う日常生活に身を置かなければなりません。苦労しているのは、子どもの方のはずです。それを大人側は意識しようと努力すべきなのだと強く思います。

大人側も子どもが何を考えているのかわからずに不安に陥ることもあります。もともと子どもは、多様な表現方法を持っていませんし、表現の仕方も上手くできないことも多いです。大人として、冷静に構え、温かい眼差しを忘れずに子どもを見守る姿勢が求められるのではないかと思います。本当にお互いの関係が積み重なっているのか、何を持って確信すればいいのかわかりません。だからこそ、第三者の立場で関係を一緒に見守ってくれる人が必要なのです。我が家の場合、施設職員が言ってくれる施設でのこの子の様子、こんなことを話していましたよと伝えてくれることが支えになっています。そんな会話をしてくれているのだと思うだけで、心がホッとします。この子を中心に養育者同志がつながり、中途養育の難しさを前提とし、子どもの戸惑いがどこにあるのかを話し合うことが重要だと体験しています。この子を養育している職員と親、里親が連絡を密にしていくことで、わかりにくい子どもの内面を感じ取る手がかりになると思っています。

周辺からの記憶７

～2012 年度　京都、むつ～

村本邦子（立命館大学）

ＪＲ西日本あんしん社会財団助成募集に、通勤客や観光客が多く足を運ぶ京都周辺の駅で漫画展をやってはどうかと思いついて応募したところ、採択され、３月下旬、授賞式に出席した。正直なところ、たぶんに儀式的な集まりだろう思って行ったのだが、これがなかなか感動的な集まりだった。

この財団は、2005年4月25日の福知山線事故の反省に基づき、「安全で安心できる社会づくり」の一端を担おうと設立され、被害者ケアや地域の安全構築に関わる活動の支援、安全への啓発活動等を行ってきたという。活動助成、研究助成合わせ、今年度は70件が採択され、それぞれの団体の決意表明があった。被災地と交流する高校生のグループやスポーツ少年団、川遊びの安全マップづくり、グリーフケアや防災教育の試みなど、社会で活動するありとあらゆる世代のユニークな取り組みが紹介され、知らないところでこうして多くの人々が社会のためにあれこれ考え、試行錯誤しながら頑張っているのだなあと思った。聞いているだけでも、信頼や希望、安心が感じられるような気がした。福知山線事故の被害者や遺族を中心にしたグループも複数あった。詳しいことはわからないが、おそらくは、こうして応募し助成を受ける関係ができていくまでには双方の長い道のりがあったことだろう。どこかの電力会社や国にも見習って欲しいものだ。

この助成による取り組みは、東日本・家族応援プロジェクト番外編の「こころの防災プロジェクト」として、６月27日～７月５日、京阪三条駅の構内で開催準備中である。合わせて、プロジェクトの途中経過をまとめた本を出版準備中である。７月には出せると思うが、なかなか面白いものになったのではないかと思う。いろんなことが面白く動いていく。よい兆しと言えるだろう。

準備

2 年目のプロジェクトが始まる。まずは予算確保。初年度不採択だった大学復興支援室の震災関連研究助成の総額を小さくして再度申請、昨年採用された復興支援助成にも申請して、今年は両方採択された。まずはひと安心だ。

それから院生たちへの説明会を兼ね、6 月に第 1 回目の研究会を開催した。プロジェクトに関心を持っている院生たちが集まってくれたが、昨年に引き続き参加してくれる院生のほか、新入生の中には、「プロジェクト HP に十年行うとあるのを見て、必ずしも復興支援に関心があったわけではないが、コミットメントという点で対人援助に大切なことではないかと共感し、プロジェクトに参加したいと思って研究科への入学を決めた」という者もいて、驚くとともに、届く人には届くのだと嬉しかった。

2012 年 8 月 17~21 日 京都

＜京都の避難者たちのこと＞

きょうと NPO センターからの呼びかけで、2012 年度からは京都でのプロジェクトをスタートさせることになった。7 月開催の第 2 回研究会では、きょうと NPO センターから野池雅人さんと藤野正弘さんを招いて、まずは、京都の避難者の現状について学ぶことにした。事務局長である野池さんは研究科の 1 期生で、昨年からプロジェクトを通じて修了生と在学生を繋ぐ協働ができるようになったことも嬉しいことのひとつである。

きょうと NPO センターは、京都市と京都府の社会福祉協議会とともに、2011 年 3 月 13 日、時限的に京都災害ボランティア支援センターを立ち上げ、2012 年 3 月まで活動した。センター長を務めた藤野さんによれば、多くが行政単位で災害ボランティアセンターを立ち上げたのに対して、京都は市・府・NPO が一元でやったため、よく機能し、高く評価されたという。おもに、①情報収集と発信　②被災地支援　③京都でできる支援　④物品サービス提供・仲介・マッチングという 4 つをやってきた。

京都にいる避難者は、行政が把握しているだけで 800 人。7 割近くが福島からで、幼い子どもを連れた若い母親が大半で、茨城も 3 桁。京都の受け入れは暖かいとの口コミや京都の支援情報を載せた「ほっこり通信」の影響か、京都の避難者は増えている。経済的な理由や自営、公務員や学校の先生など仕事上、避難したくてもできない人たちがいて、「避難できる人はいいね」と言っている。避難してきた人たちは、向こうで歯を食いしばって生きている人がいるのに、自分だけ逃げてきたという負い目があったり、逃げたと責められ、家族・友人関係にもひびが入って孤立したりしている。二重生活を強いられ、経済的にいつまでもつのか、なかなか家族に会えず育児ストレスもたまる、子どものためにこっちに来たけれども、この選択が正しかったのかどうか毎日悩んでいる･･･などさまざまな声がある。

最近では、支援したい人のミスマッチが顕著。物資やサービスを提供したいという人たちがいるが、その段階は過ぎた。枚方パークや USJ に招待しますといったサー

ビスは、初期には良かったかもしれないが、避難者たちは、いつまでも施される立場でなく自分たちも役立ちたいと思っている。支援を受けながら生きるという生きづらさは何とも言えない。それでいて、そろそろ自立しなさいと言われる。避難した選択が正しかったのか毎日悩む人、罪悪感、京都に骨を埋めて暮らすつもりで、被災者・避難者ではなく一市民として生きたいと思うという人、思いはさまざまである。

話を聞きながら、過去の災害や事件の被害者たちのことを思い、時間経過とともにその存在は見えにくくなっていくこと、関わりのない人々にとっては見えなければないことになっていくこと、それだけに当事者は孤立して問題を抱え込むしかなくなることを考え合わせた。だからこそ、このプロジェクトでは、直接的な形で被災に焦点を当てるのでなく、「忘れてはいませんよ」というメッセージを発しながら、被災のことを話してもいいし、話さなくてもいいという形をとっている。

＜京都でのプロジェクト＞

「東日本・家族応援プロジェクト in きょうと 2012」は、8 月 17～21 日、ウィングス京都にて開催した。内容は、漫画展、漫画トーク、子育て中の避難者向け「こころとからだお話サロン」「遊びワークショップ」で、報告は研究科 HP。
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-kyoto.html

今回は、地元でのプロジェクトだったため、プログラム開催日以外も院生スタッフが漫画展にアテンドしてくれた。ウィングス京都では、毎日さまざまな企画が開催されており、漫画展は通路にあったことから、200 名近くの人が眼にしたようだ。もちろん、全員が展示を見たわけではないが、足を止めて見てくれたり、スタッフと言葉を交わしたり、直接災害のことを話すわけでなくても、「東日本・家族応援プロジェクト」を開催していることから、何らかのメッセージ性はあったはずだ。

サロン以外は避難者に限定しておらず、避難者と名乗って参加してくださった方は多くはなかったが、案内を出したのは避難者に対してのみだったので、子連れで遊びワークショップに来てくださった方などは、案内を見て来てくださったのだと思う。京都にはたくさんの支援組織があり、日程の重なったイベントも複数あったと聞く。

支援機関とすでにつながりを持っている人もいるが、さまざまな事情や思いから、どこにも所属していない人たちが不確かさを抱えておられるようだ。とくに自主避難の場合、「自分の選択は正解なのか、間違いなのか？」という迷いが日々ある。避難によって失ったものが大きければ大きいほど後悔は強くなるだろう。放射能に関する正確な情報が得られないまま、自分の判断による選択の責任をすべて背負わなければならない厳しさをあらためて感じた。

2012 年度の京都でのプロジェクトでは、日程の関係上、支援者支援セミナーのみ、12 月 11 日 10～14 時、Nagomi (七條大宮) で開催した。支援者たちが抱えている現実は重かった。支援者のなかに住職などお寺の関係者たちが複数含まれており、当事者でもある支援者は、一人の人生はちっぽけだが、お寺は時代を超えて継承してくれるものがあり、お坊さんたちが関わってくれ

ることがありがたいとおっしゃっていた。
京都らしい側面かもしれない。





京都でのプロジェクト



2012年9月3~10日 むつ

<フィールドワーク>

むつのプロジェクト期間は夏休みということもあり、一足早く青森に入り、フィールドワークをした。ロープウェイで八甲田に上り、樹海を見下ろしながら、日本にもまだまだ未踏の地があることをあらためて思った。荒々しく、そして謙虚な気持ちになる。温泉巡りを楽しみ、美術館や博物館に立ち寄り、六ヶ所村、原燃PRセンター、東通村を経由して、恐山、そしてむつ入りした。

運転していると、走るのに骨が折れる生活道や山道が、六ヶ所村周辺になると途端に広くまっすぐ快適に走れる道路になるということも体感した。気候の良いこの時期でさえそうなのだから、雪が降り始めたら、その落差は甚だしいものだろう。原燃施設、六ヶ所村再処理工場には近づくことができず、原発関連会社と思われる看板の掛かった小さな建物や、ものものしい柵で囲われた大企業の周辺を走った。

原燃PRセンターには見学者が数人おり、韓国からの訪問客らしき男性がいた。接待されている感じだったが、いったいどういう人なのだろう？週末ごとのキャラクター・ショー、原燃カレンダー写真展では応募作品からなる美しい青森の自然の写真展示があり、ゲームやクイズを使った一見科学的に見える展示や体験型学習機があった。展示から流れるメッセージは、「原発は温暖化の原因となる二酸化炭素を出さず、リサイクル可能な自然にやさしい燃料」というもので、現実に起こっていることを思うとやりきれず、すっかり気分が悪くなった。



八甲田

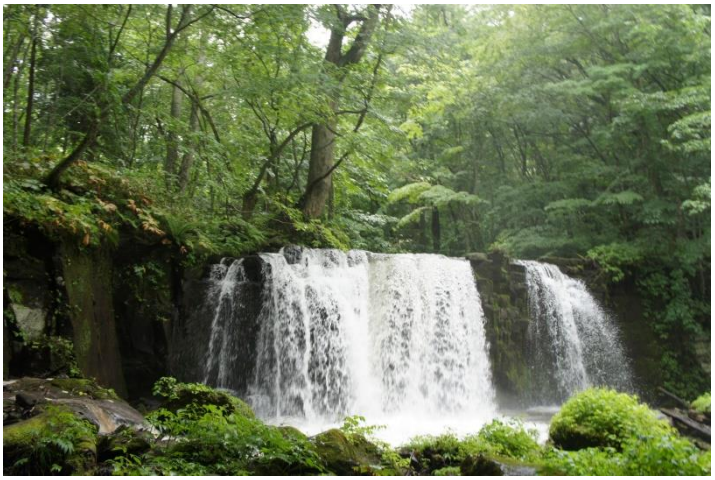





鉄乍湯










六ケ所原燃PRセンター
見学記念 平成24年9月6日


福島第一原子力発電所の事故を踏まえ、再処理施設の安全対策の強化に万全を期しています。
■従来から二重三重の体制で電源確保に万全を期しています。
■「起こりえない」ではなく「起こる」と考え、さらに安全対策の強化に取り組んでいます。
イメージ図 再処理施設における電源確保の仕組み
送電線2回線
再処理施設本体
使用済燃料受入れ・貯蔵施設


放射能と放射線の違い
光を出す能力
放射線を出す能力(放射能)
放射線
ほうしゃのう
ほうしゃせん
放射能と放射線

原燃ＰＲセンター

周囲には風車がやけにたくさんある。六ヶ所村は春から夏にかけてヤマセ（北東風）が吹き、陸奥湾を超えて津軽半島平野からの西風も吹くという年間を通じて安定した風力発電を行える環境にある。現在 3 社で 77 基の風車を運転しているという。それなのに、他所の電力のために原発関連施設をたくさん抱えているなんて。そのまま 338 号線を上って東通村を通るが、一風変わった形をした体育館、官舎、消防署、小学校が並ぶテーマパークのような不思議な光景だった。本当に何も知らなかったと恥じ入る。

初めて訪れた恐山。これまでそういう名前の山があるのだと思っていたが、そうではなく、恐山とはカルデラ湖である宇曽利湖を中心とした外輪山の総称だそうだ。地獄は一面、カラカラと乾いた白い岩場に石を積んだ小さな山が散在しており、ところどころ、硫黄のガスが噴き出し、周辺が黄色くなっている。おどろおどしい。地獄を通って宇曽利湖の方へ抜けると極楽浜。真っ白な砂浜と透明度の高い湖は異様に美しく、思わず入っていきそうになる。浜辺に 1 羽の黒いカラスがいて、何やら苦しそうに話しているので、じっと耳を傾けてみたが、結局、聴き取れなかった。

2012 年 7 月にできた鎮魂の鐘と希望の鐘のある記念碑が設置されており、参拝に訪れた人々が鐘をならしていた。境内にある温泉で身を清めて下山したが、相当な異文化体験となったフィールドワークだった。









＜むつでのプロジェクト＞

むつでのプロジェクトは、下北地域県民局、むつ市、むつ市教育委員会との共催で、9 月 3～10 日、むつ市立図書館で漫画展、7･8 日、むつ市中央公民館で各種プログラムを実施した。

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-mutsu2.html

プログラムは団さんの漫画トーク、中村さんと私がファシリテートする支援者支援セミナーの他、中村さんの「お父さんのコミュニケーション教室」と並行して、地元の方々が「キッズセミナー（パンづくり）」を準備してくださり、子どもの焼いたパンをお父さんと一緒におみやげに持って帰るというものだった。

むつのスタッフがチラシを作ってくれたが、サブタイトルには「本州のてっぺん下北半島から家族の笑顔を」とあり、「立命館大学と本州最北の地元自治体の協働により、実現したこの企画は、『家族支援』という視点から地域の家族力向上及び被災地や被災者に対する復興の一助とすることを願い、サブタイトルには少しでも元気のある地域から被災家族を応援しようという思いを込めました」と記載された。プロジェクト実施にあたり、現地共催機関のスタッフたちが 6 回も会議を重ね、昨年の振り返りに基づいて、さらによいプログラムをと工夫してくれたことが随所に感じられ、こちらのモチベーションも上がる。

私は中村さんと支援者支援セミナーを担当したが、初めに自己紹介と知識編としてそれぞれ短い話題提供を行い、後半は実践編としてワークショップ形式で事例検討を行った。中村さんの話題提供は、男性に焦点をあてて暴力や虐待をなくす取り組みをしていること、家族をシステムとして見ること、父親役割が家族システムを健康的に機能させる際にどんな役割を発揮するかについてだった。私からは、女性問題、ジェンダーの問題に取り組んできたが、西洋型の個人主義をモデルにすることに無理があること、かと言って伝統的な役割分担が孕む暴力や抑圧が肯定されるものではないことを話した。

紹介したのは、エリザベス・ボット(1955)の「都市の家族～夫婦役割と社会的ネットワーク」という研究で、性別役割を前提としたカップルは、男には男の世界が、女には女の世界があると考えており、家族外で、男同士、女同士の密接な関係を結ぶ。友人・近隣・親類・同僚といった複数の役割が一人の人に重複しており、母と娘の絆は強く、女性同士の関係は濃密でサポートを提供しあっていた。逆に、性別役割を超えた夫婦では、近隣や親族とのネットワークは希薄で、夫婦共通の趣味や友人関係を持ち、ともに時間を共有し、夫婦の絆が強いという結果が出ていた。

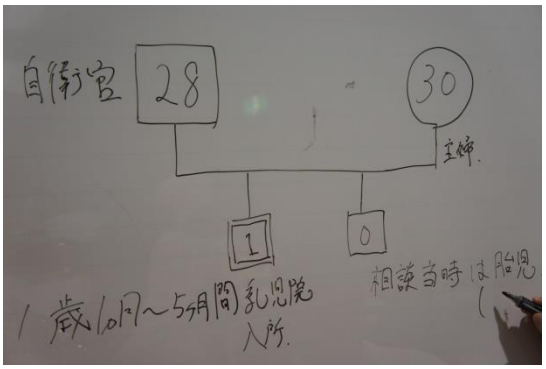
昨年から気づいていることであるが、たとえば、会場となった公民館がある大湊では自衛隊が 6 割、ひとつの小学校に 6 年間留まる子どもはほとんどいないという現状のなかで、どのようにジェンダーの問題を扱うことができるのか。関係性に生きることは望ましいことだと思うが、しがらみや望まない役割を担わされることを避けようと、都市部では関係性を稀薄にしたのだった。力の格差、とくに現代社会では貨幣価値によって選択肢が決まってしまう。ケア役割は、家庭でも職場でも圧倒的に女性の

肩にかかること、役割が固定化し関係が閉鎖すると暴力の温床となるリスクがあること、ネットワークからはずれた人は居場所がないことなど、答えのない問題提起である。閉鎖させず変化の風を吹き込むこと、ネットワークからこぼれた人との結び目をどう作るかが課題だろう。

実践編では、児相と学校から地域の事例を提供してもらい、ジェノグラムを用いて事例検討をした。50 名ほどの参加者だったが、なるべく所属をバラバラにして 6 名程度のグループに分かれてもらった。最初の事例は、妊娠 6 ヶ月の母親が流産の危険があって入院したいが、1 歳の子を乳児院に預けるという判断をした事例、二番目は中学で不登校からひきこもり傾向のある少年の事例だった。背景となる家族事情を考えながら、家族の見立て、母親の成育歴、地域との関連などの視点から家族の強みを見つけて伸ばしていくための支援を考える。初めは緊張の高かった参加メンバーも、グループで話すうちに少しずつほぐれていった。最初は事例の難しさにばかり眼がいっていたが、グループで協力し、自衛隊経験者を含め多様な背景の方々がそれぞれの立場や視点の違いを活かして知恵を出し合い、事例像を膨らまし、少しずつ家族の肯定的な力を見つけ、見立てを変えていくプロセスは感動的でもあった。

初年度の支援者支援セミナーのバズセッションで、むつの支援者の課題として多職種連携ができていないという声があって、「来年は、多職種混合の小グループで事例検討を行うワークショップをやるとよいかもしれませんね」と言ったのだが、それを理想的な形で実現してもらった形だった。







打ち合わせや反省会、懇親会の場で、各機関のスタッフたちから肯定的なフィードバックを多く聞いたが、なかでも、「このようなイベントを教育委員会、児童相談所、公民館、図書館が一緒になってやるのは初めてだった。むつの支援者たちが、このようにネットワークし、むつの家族のために力を合わせることができれば、十年後にはむつの家族が幸せになっているのではないか」という言葉を聞き、このプロジェクトをきっかけに、むつのコミュニティがエンパワメントされていくとしたら素晴らしい

と思った。私たちの役割は、何はともあれ外から定期的にやってくるというところにあるのかもしれない。

懇親会では、どちらかと言えば面白おかしく下北の人々の生活について教えてもらったが、熊やカモシカが現れて畑を荒らし困っているという話、青森は何でも国際とつけ研修生の外人たちが「地吹雪」まで観光にしてしまったという逞しさを見習わなければいけないという話のほか、海上自衛隊が誤って鉄砲を撃った話（車に当たった）や訓練機が頭上 50 メートルを飛んだ話、上から物が落ちてくる話など笑い話のように話されたが、胸の痛む話だった。タクシーの運転手さんも、釜伏山にたくさんのレーダーがあって怖いという話をしていた。沖縄の話は聞いていたが、下北の話は知らなかった。

厳しく美しい大自然に抱かれて培われてきた下北の暖かさをもっともっと知りたいし、苦難と抵抗の歴史について学びたい。お父さんのためにパンを焼いていた子どもたちの笑顔が、本州のてっぺん下北から京都までどんな形で届いてくるのか楽しみに待とう。





毎年恒例になった反省会と記念撮影

病児保育奮闘記

(6)

子どもサポート H&K
大石　仁美

美味しいものは幸せ❤

食事提供どうする？

今回は、食べ物についてお話ししたいと思います。病児保育をするにあたって、日々の食事をどうするか、これはとても大事なことだと思います。

お弁当を持ってきてもらう所もあるようですが、保育園からの急な呼び出しに、お迎え　ということをメインサービスにしている当方としては、初めからお弁当持参など無理なことです。

0 才から小学三年生までの子どもにどう対応したらいいのか、はたして何人来るのか、全く来ないのか、その日にならないと分からないわけですからまさに暗中模索です。

一番手っ取り早いのはレトルト食品を使うことですが、はたして、使えるものがあるのかどうか、とりあえず赤ちゃんの離乳食をいろいろ買い込んで試食をしてみることにしました。瓶詰、パウチー、粉末ジュース等々。有名メーカーのものならある程度美味しいかも・・ん～？食べてみると・・・残念ながら、こんなものを赤ちゃんは食べさせられているのかとちょっとショックでしたね。私は「**たべたくな～い！**」メーカーさんごめんなさい。味が悪いというよりは、食材そのものの本当の味がしないのです。味覚の発達する時期にこれでいいのだろうか。栄養価を満たせばいいという考えもあるかも知れないけれど、私が食べたくないものを赤ちゃんに食べさせる気にはなれませんでした。忙しくて日常的に利用されているお母さんごめんなさい。

結局私が作ることにしました。まずお粥を炊く。それから数種類の野菜をとろとろ煮る。甘いかぼちゃと人参を加えコンブを一切れ入れて煮ると、それなりに美味しいのです。そして一食分ずつ日付を書いて冷凍しておくのです。この基本食に、その日の子どもの月齢によって豆腐や魚を足して離乳食は完成です。機嫌が悪くてどうしても食べてくれないときは赤ちゃんにはミルクという強い味方があります。嬉しいことに、たいていの子どもはぱくぱく食べてくれました。離乳食はこれでよし！

次に幼児食をどうしょう。熱のある時はやっぱりおかゆ？洋食？和食？実際に子どもをみている

と、大人が考えているような病人食を喜ぶ子はほとんどいなくて、おかゆよりご飯にふりかけ、出来ればおにぎりを要求し、それぞれのご家庭の食生活の違いで、肉好きの子、魚好きの子、たまに野菜大好きの子もいて、今どきの子どもはハンバーグ好きの野菜嫌い？という一般論はあてはまらないのでした。おそるべし母の力です。葉物野菜の嫌いな子は多いですが、いずれなおるでしょうから気にしないことにして、無理強いせず、好きなものを食べてもらうことにしました。となると、どの子にも一品は好きなものが入っているような数種類の献立にしなければいけません。はて、どうしたものか。「子どもに人気の野菜料理」「子どもに人気の肉料理」「子どもに人気の・・・・」etc.

いろいろ料理本を買い込んで、一通り眺めてみましたが、これはいい！と感動するようなものはほとんどなく、「なぁんだぁ、ただの普段どおりの食事じゃないか」ということが分かっただけでした。期待していた分、ちょっとがっかり。これじゃ自分で考えるしかないと思うとかえって覚悟が決まりました。

いろんな食材を使って自分が食べたいものをつくろう。

小さい子は、細かく切ってやわらかくし、大きい子は楽しい盛り付けにすればいい。肉料理と魚料理を少しずつ。卵料理は単品で、アレルギーの子が来ればすぐ外せるようにすればいい。野菜は、赤黄緑白とカラフルにして大人が楽しそうに食べて見せよう。そして、水分補給もかねて、みそ汁をつける。これで決まりです。

大人も一緒に食べるので、全部で６食ほど作り子どもが来なければ、残念ながら同じものが大人の夕食に回るということになりました。

子どもの一番のお気に入りは❤

なにがたべたい？と聞くと、「から揚げ」「ラーメン」などという子がいたりして、えっ？病気なのに！？と驚かされることがあります。子どもって不思議です。でも、どの子も喜んで食べてくれるものがありました。それは**みそ汁**です。「おかわり！」と元気よく言ってくれると、嬉しくなります。実は味噌は手作り。減塩みそです。作り始めてもう３５年になります。村役場で保健師をしていた時に、減塩食指導の一環で、農業改良普及所の指導員さんから学びました。作り始めると、出来上がるのが待ち遠しくて、作らないと歯が抜けたようで落ち着きません。最初に手間をかけて熟成するのをじっと待つ。よい環境に置き、ひたすら待つ。子育てと似たところがあるなあと思います。

麹菌を購入し、蒸した米に擦り込み麹づくりもしていましたが、最近は特注発酵器はお蔵入り。年のせいか気力がなくなり麹は購入しています。それでもやっぱり続けたい。味は少し変わったけれど、手作り味噌がないとさみしいのです。一年分 16 ㎏。子ども達に好評だったので、「持って帰りたい！」という子たちの要求に応じて、お土産に 500g ずつ配った年もありました。この年は 30 ㎏も作りました。

持って帰るだけでは飽き足らず、「作りた～い!!」という子も出て、二組の親子の講習会。わいわい言いながら、楽しかったですね。病児保育でこんなふうに人と人が繋がっていくなんて、嬉しくてそして幸せでした。この当時、病児保育室は他にはなかったので、親子ふくめて、人間関係は濃厚でした。たまにしか来ない孫よりも病児保育にやってくる子どもの方が“可愛い”というのが実感でした。

10 年経って今はどうかといいますと、勤務先の病院内に病児保育室が出来たり、補助金で安くて利用できる病児保育室が出来たおかげで、利用者の選択肢が広がり、安い施設が満員の時だけうちの施設を使うという利用の仕方が定着したように思います。それはそれでいいと思うのですが、利用者親子との人間関係を築くところまでには至り

ません。それでも「ここが親子とも気に入っています。」とおっしゃって、安心して甘えられる場所でゆっくりさせてやりたいと、うちを御ひいきにしてくださる親御さんもいらっしゃいます。有難いことです。

さて、お味噌ですが、一昨年から強力な助っ人が現れました。現在小学 3 年生の孫です。喜んで手伝ってくれるので大助かり。今年は病児保育室で使うほとんどが、彼の力によるものです。自慢というより、とても幸せな気持ちです。





食材選びで辿り着いたのは❤

食材で一番気にしていたのは**卵**です。動物は体内に害があるものを排出しょうとします。「胎児に移行して出産という形で排出することもある」ということを考えれば、卵はかなり危ないということになります。

以前、狭いゲージに入れられて薬づけにされ、卵をうむマシーンと化した鶏の写真集をみてからは、安い卵は絶対に買うまいと思ってきました。実際、平飼いといっても、本当のところ、どんな鶏舎で飼っているのか分かりません。餌はどんなものを食べているのか、薬は使っていないのか、運動の出来る環境なのか。そういう情報は入ってこないので分からないわけです。一つ目安として有精卵かどうか。雄鶏が鶏舎にいるということは、ある程度の広さが確保されているということになりますから、そういうものを買うことにしていました。

ある日、小川の母親から卵を一包み頂きました。えっ？これは?!　味が違う!!　なんで？　いままで食べたどの卵とも違う濃厚さ。新鮮で強烈な驚き。「美味しい!!　」と思わず声に出してしまいました。

大原から毎週届けられるというその卵にすっかり魅せられた私は、鶏舎を見学に行くことに。鶏舎ごとに決められた数の鶏がはしりまわつており、砂遊びをしたり、日向ぼっこをしたり。もちろん有精卵。自家栽培の野菜を混ぜたエサを与えていると聞いて、ああ、そうだったのかと納得。でも昔はみんなそうだったんだよね。いつの頃からか、食べ物は本来の味を失い、“人の餌化”してしまったんだ。そう思うと、経済効率優先の社会を恨めしく思うと同時に、いつかきっとほころび、崩れさるに違いない。そうならないとしても、その渦中にわが身をおくまいと思うのでした。

（　卵は毎週 20 個届けてもらっています。）

野菜は農民連の産直を 2 箱とっています。それでも足りないので、エルコープの無農薬野菜を足しています。スーパーで以前メキシコ産のかぼちゃを買ったら味に苦みがあり、もしかしたら輸送中、薬が散布されているかもと気になって買うのを止めました。やはり出荷元がはっきりしているのが安心です。

農民連の野菜箱は、届けてもらわなければ、自

分では買わないような野菜も入っており、料理のレパートリーが広がってそれも楽しみの一つです。エルコープの野菜はというと、これはちょっと店には並べられないよね、というような美目麗しくない野菜の間からにゅーっと虫が顔を出すと、「おおっ　やっぱり無農薬！」と嬉しくなるのです。そして食べてみると、なんと自然の甘さがジワーッと口の中に広がるのです。野菜ってこんなに美味しかったの?身体が喜んでいるのがわかります。やはり有機栽培、無農薬が一番ですね。でも、作るのにかなりの手間がかかり、苦労が絶えないようです。作ってくださっているお百姓さん、ありがとう！

おやつの**果物**もエルコープ、**肉**もエルコープです。果物は予約制なので、欲しいときにすぐ手に入らないのが難ですが、これを食べるともうスーパーのものは買えません。木生りなので、はやく摘果したものとは比べられません。えっ、本当はこんな味だったの？と驚くほど、甘くておいしいものが多いです。肉は一頭買いなので、生産者がはっきりしており、なにより安心、そして美味しいのです。エルコープの宣伝ばかりしているようですが、やっとたどり着いた、安心な食材販売ルートです。ただ魚は冷凍がほとんどなので、味が落ちるため、舞鶴直送の魚屋さんと半々の購入です。



ある日の産直野菜

出来上がったものを少し紹介しましょう。私は料理が得意なわけではありません。本を見ながら難しいものを作ったこともありましたが、長続きはしません。プロの真似をしても、所詮素人。美味しいものは食べにいけばいい。私がめざすのは、食材を生かした、シンプルな家庭料理です。



サバの味噌煮　野菜の蒸し煮(人参、たまねぎ　しいたけ、きゃべつ、スナップえんどう)　ミニトマト　干しだいこんの煮物　みそ汁



鰆の塩焼き　豚肉とカラーピーマン、たまねぎ、しめじの甘酢あんかけ　ミニトマト　りんご　みそ汁

わが子が小さいときは、「この子たちのおかげで、栄養のバランスのいい食事がたべられる。一人身だったら、手抜きばかりしてきっと一食抜いたり、いい加減なものばかり食べていたかも知れない。有難いことだ。」と思っていました。

今のパートナーと一緒に暮らすようになると、彼の糖尿病のおかげで、健康的な食事が食べられることを感謝しました。今は病児保育室に来る子

どもたちのおかげで、いろいろな食材を使った食事が食べられることに感謝しています。



小学生の食事

とんかつ　レタス、トマト　グリーンアスパラ添え

ピーマンいため　だし巻き卵　干しだいこん煮　みそ汁

そう、最後になりましたが、調味料もとても大切。化学調味利用の入っていないものを選び、油はオリーブ油、手絞りで、薬品処理していないものにこだわっています。イタリア産かギリシャ産、小豆島産のものもよく使います。さっぱりしていて胃もたれしません。いいものはヤッパリいい。

昔はバターが良くないと言ってマーガリンを勧めていましたが、最近はマーガリンは健康に悪いと言われています。時代の情報もいい加減なもの。私はマーガリンは美味しくないので初めから食べませんでした。取り過ぎなければ、美味しいものがいいに決まっています。

遺伝子組み換えの食品を避け、自然の恵みをいただく。

食は命の源。人間が生きていく上で一番大切なもの。健康を支える土台ですから、これからも自分の勘を信じて、良いものを求めていきたいと思っています。

ラホヤ村通信

(4)

高垣愉佳

1. インターナショナル・センター

前回、インターナショナル・センターの交流カフェでの出来事についての話をしたので、今回も引き続き、インターナショナル・センターの話しから始めたいと思う。

インターナショナル・センターでは様々な活動が行われている。日本の大学では見られない活動としては、常設のリサイクルショップがある事、クリスマスや感謝祭にアメリカ人の家庭で一泊共に過ごすようなイベントがあることなどが挙げられる。またインターナショナル・センターで活動するボランティアの人達が学生だけではなく、学生の保護者、卒業生を含む地域の人々であることも特徴と言えるだろう。次の学期からは新たに、一流の教授達とお茶をしながら気軽に話をする、『プロフェッサー・カフェ』という取り組みが始まるらしい。

最近になって気づいたのだが、“インターナショナル・センター”というネーミング自体が、この部署の在り方を端的に表しているように思う。日本の大学によくあるのは、インターナショナル・エクスチェンジ・センター（国際交流センター）だが、似ているようでいて違う。

もちろんインターナショナル・センターの活動の多くも国際交流に関するものだが、国際交流をすることが目的になっているわけではなく、国際交流を行った結果、学問や社会が発展することを真の目的としているのではないかと思った。

インターナショナル・センターの取り組みには、留学生以外にも様々な人達が参加する。留学生以外の人たちが思わず参加してしまう仕組みが、あちこちに散りばめられている。

例えば、常設のリサイクルショップでは、大学内の留学生、学生、教職員から寄付された物を売るだけではなく、地域の人からの寄付を受け入れ、更に地域のリサイクルショップ業者の売れ残りを無料で引き取って販売している。そんなわけで、インターナショナル・センターのリサイクルショップは物が豊富で、且つ本当に安い。そのことを知っている人たちは、学外から買い物をする為に大学にやってくる。リサイクルショップの店番も学内外のボランティアが行っている。レジのカウンター越しに日々交流が行われている。

また、毎週 5 ドルで外国文化の紹介を見ながら外国料理が食べられる、インターナショナル・ランチはこの辺りでは有名な催しものになっているようで、インターナショナル・センターの前に毎週長蛇の列が出来る。留学生や学生、教職員、地域の人だけでなく、ホームレスの人達もちらほら参

加している。

というのも、サラダ、メイン、デザート、ドリンク付きで 5 ドルというのは、アメリカでは破格の値段だからだ。あれだけの物をお腹いっぱい食べようと思うと、2 倍から 3 倍の値段になる。

そもそも、アメリカの大学には、日本の大学のように安価で比較的バランスの良い食事が出来る“学生食堂”というものは存在しない。日本のショッピングモールのイートインコーナーのような所に、ピザ屋さんやサブウェイ、パンダ・エクスプレス、タコス屋さんなど、日本人から見るとジャンクフードのようなお店がたくさん入っている。そして、それらとて、決して安くは無い。

そんなわけで、このイベントには国際交流に興味は無さそうな人達も、食べ物につられて多数参加している。それはそれで、普段出会う機会の無い人達の出会いの場となっているようで、興味深く思った。

普段食事の支度をしている主婦の視点からすると、5 ドルでは食材すら賄えないのではないか？と心配していたが、そんな心配は無用であった。地域のロータリークラブが、この催し物の資金援助をしているということだった。

ロータリークラブと聞くと、日本でも観光地などに植樹したとか、記念碑を建てたとかで掲示してあるのを見かけたことがあるのを思い出した。記念碑を見てもロータリークラブに入ろうという気にはならないように思うが、このような活動を見たり体験した人達の中には、将来ロータリークラブに入会する人が出てくるかもしれないなと思った。大学にとっても、学生にとっても、地域にとっても益のある、win・win・win のいいアイデアだと思った。



ワールドランチの様子。この日はインドがテーマ。

2. ホームレス

インターナショナル・センターの催し物にもホームレスの人が参加するように、サンディエゴにはホームレスの人達がたくさん居る。アメリカ人に聞いた話しでは、サンディエゴは気候が良くて、治安が良いので、ホームレスに人気の街なのだそうだ。特に、冬場になると寒い地域からバスや電車を乗り継いで、サンディエゴにやって来るホームレスの人達がたくさん居るのだと聞いた。まるで渡り鳥のようだなと思った。

ダウンタウンには一ブロック毎に一人くらいのホームレスの人を見かける。私が普段うろうろしているラホヤ市内でも、スーパーマーケットの近くの交差点などで、いつも決まったホームレスの人達を何人も見かける。

彼らはなかなか活動的で、交差点の各コーナーや、中央分離帯に段ボールで作った

プラカードを持って立っていることが多い。プラカードに書かれている内容は人によって様々だ。『スマイル』『変化か死か』など、恐らくその人それぞれの人生哲学と思われるようなことを書いている人もあれば、『コンピューターの会社に勤めていましたが、先月首になりました。子供が 3 人居て、生活が出来ません。私に助けをください。』というような具体的な事を長めの文章で書いている人も居る。

そういうホームレスの人達のアクションに対して、アメリカ人の人達がどのように対応しているのかを観察したところ、15 分に一回くらいの割合で、お金を恵んであげる人が居るようだった。ほとんどが、信号待ちで止まった時に、窓を開けて 1～10 ドルくらいを渡すパターンだった。ホームレスの近くで信号停止にならなかった人の中には、わざわざクラクションを鳴らして、ホームレスの人を自分の近くに呼んで、お金を渡す人も居た。

大抵の場合、お金を受け取ったホームレスの人は、お金をくれた人に何かお礼を言う。「ありがとう。」だけのこともあれば、「あなたにも神の恵みがありますように。」というような祝福の言葉を贈る人も居る。また、「あなたの行動は、この世界の変化が始まる第一歩となるだろう。」というような、とても意味深そうな言葉を贈るホームレスの人も居た。

このようにして、人が人にお金を渡すことに関しては、賛否両論あるだろうとは思う。もらったお金をドラッグに使ってしまう人が居るかもしれないし、一方でそのお金で生きながらえている人も居るだろうと思う。なので、簡単にいい悪いと言うことは出来ないと思う。

いいか悪いかは別として、ホームレスの人達が、思いのほか晴れやかで楽しそうな顔でアクションしているのを見る度に、私は少し嬉しくなるのだった。日本でよく見かけるホームレスのように、段ボールの中で包まっているタイプのホームレスはほとんど見かけなかった。サンディエゴのホームレスの瞳に宿る晴れやかさは、今自分に出来ることを考えて精一杯実行している、という所から来る晴れやかさなのだろうか？本当の所は彼ら自身にしか分からない。

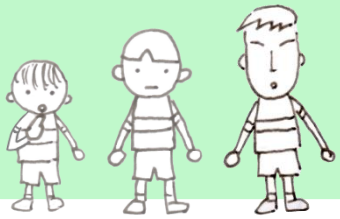


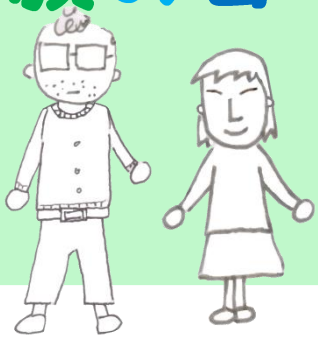
笑顔（SMILE）のプラカードを掲げていつも立っているホームレスのおじさん。

知的発達障害の家族の日々

3

大谷　多加志





アール・ブリュット!?

Q:「コンクリートブロックに水性絵の具で色を塗るとどうなるか。」

答えは「普通に絵の具の色が付く」。そして、落ちない。
これがどのくらい一般的な知識なのかよく知らないけれど、私がこのことを知ったのはあまり一般的ではない経過からだった。

ある日、家に帰ると家の塀のコンクリートブロックがカラフルに色づいていた。塗ったのはもちろん弟。彼は、時に思いがけない創作活動を始めることがある。大抵のものは特に気にもせず流せるのだけれど、キャンパスが家自体となると、さすがに放っておけない。友達の目も気になった。平屋の典型的な日本家屋に、LEGO のようなカラフルな塀（しかも素地はコンクリ）という奇抜な外観は看過できず、何とか元に戻そうと洗剤をつけ水をかけ必死でブラシでこすったが、びっくりするほど色は落ちなかった。



『水性絵の具なのに、落ちないんだ…』。諦めとともに、１つのどうでもよい知識が、私の中に根付いた。

よいか悪いか、色がとれないと諦めると、次第に気にならなくなった。周りも最初こそ『テトリスハウス』とかいじっていたものの、すぐに飽きた。だから、中学、高校と進学して、新しい友人が家に訪れる時、自分のチェック機能の甘くなってい

ることに気づくことになった。塀は仕方ないとして、家の中はなるべく片付けていたのだけれど、ふと見ると壁に妙なオブジェが貼ってあったりする。一時彼の中で流行ったのが、折紙を対角線で丸めてテープで張り付けた謎のオブジェ。これが、家中のドアというドアの上に貼り付けてあった。暮らしていると存在すら忘れているが、時にはドアの上にびっしりと並んだ折紙オブジェは、新鮮な眼で見ると奇妙ではあった。

大人になり、すっかりなりを潜めてしまったが、中学生くらいまでの弟には、唐突に始まる謎の創作活動があった。

ビデオ!

Q：「VHS のビデオテープに、しつこいくらい重ね撮りを繰り返すとどうなるか。」

家にビデオがやってきたのは、私が小学校高学年の頃。

元々テレビ好きの弟は、好きな番組をビデオに撮って観るようになった。「ドラゴンボール」「ナースのお仕事」「志村けん」がお気に入りのラインナップ。リアクションが大きくてわかりやすいもの、展開が読みやすいものが好きだった。

また、放映当日に観るよりむしろ録画で観る方を好み、気に入った場面を何度も繰り返し再生していた。これもおそらく、初見でどう話が展開するかわからない放送当日よりも、話の先がすっかりわかって安心してから観る録画の方が好きだったのだろうと思う。

ただ、ビデオには依存的にもなった。日中の大半の時間をビデオを観て過ごす日もあったし、日常の言葉がベジータ化（通常語：『何してるの？』 → ベジータ語：『おい！何をやってるんだ貴様』に変換）もしていた。弟は朝起きるなりビデオを観はじめるので、襖一枚隔てた先で寝ていた私は、早朝からドラゴンボールのハイテンションなバトルの音声で起こされるという、少々迷惑な目に遭っていた。

そのようにひっきりなしにビデオを観ている弟なので、お気に入りの番組の放送

直前まで録画したビデオを観ていることも珍しくなく、時には放送が始まってから慌てて録画スイッチを押すこともあった。この時は、たいてい直前まで見ていたビデオテープに上書きする形で録画される。



結果、１本のビデオテープに、ドラえもんやドラゴンボール、バカ殿…など、多様なコンテンツが盛り込まれることになった（もちろん、突然録画するのでそれぞれの話の途中でもお構いなしに別の番組に変わる）。

そんなことを繰り返していると、２つの現象が確認されるようになった。

①通常の再生と早送りとで、表示される番組が違う。

再生するとドラえもんなのだが、早送りにするとその前に録画していたドラゴンボールの映像が早送りで流れる。ただ、早送りをやめるとまたドラえもんに戻る。なお、これは３倍速で録画した場合に限り、通常録画では起きない。

②録画された映像と音声が分離する

映像のみが録画され、音声が入らないということが起こるようになった。さらに何かの偶然が重なったのか、映像は最後に録画されたものだが、音声は１つ前に録画されたものになる、という現象も起きた。ドラゴンボールのフリーザ様の自信満々の表情に合わせ、当時の日清焼そば UFO の CM のセリフ『大盛り。嘘じゃないって』が重なるという奇跡の作品も生まれた。

今は DVD と HDD 録画になり、すっかり便利になったが、これほど入れ込む番組はないようだ。強烈にはまり込むことがよいのか悪いのかは、どちらとも言えないが、力を注ぐものがない今の弟は、どこか寂しそうだ。

弟が作ったドラゴンボールとやきそばUFOのアテレコビデオは、友人に見せたりもして、一時周辺でウケをとっていた。弟は、人が普通あまりしないことをする。それはたいてい無駄なことで、時には困ったことでもあり、何か役に立つものを生むことはまずなかったけれど、記憶には残った。

対人支援点描（２）

「入院に頼らない精神医療①」

小林　茂（臨床心理士）

少し長いイントロダクション.

浦河にある浦河赤十字病院精神神経科病棟は、２０１４年９月末を持って“休棟”となった。実質、廃止といっても良いのだが、単純に廃止といえない事情がある。２０１１年３月に始まった建て替えは、総事業費約５６億円のうち、国の特例交付金で１１億９０００万円、同病院で約２０億円程度を負担し、残る約２４億円については、日高管内７町に援助を要請して始まった。実際、日高管内７町で負担した金額は１９億円を上限としたものであったが、管内の総合病院が廃止、撤退にでもなれば地域の医療に支障が出るということで地域の経済事情が悪化するなかで苦心して各町は補助金を捻出した。建て替えの計画では既存の精神神経科とその病棟も含まれた計画であり、事実、設計にも含まれていた。



＜北海道日高地方と７つの町＞



＜新築された浦河赤十字病院＞

しかし、１年６ヶ月後の２０１２年９月に建て替え完成後、年間５億円余りの経営赤字を理由に不採算部門である精神神経科の縮小、廃止が発表されることになった。当然、各町は実質的に国から借金をして、実は“民間病院”である赤十字病院に多額の補助金を支出したうえ、箱モノが完成後に「(精神神経科は）やっぱり止めます」「精神科医師が定年となるので…（これは後付けの理由であるのだが)」となったわけである。当然、各町は何億という無駄な支出を強いられたわけなので怒る。おまけに、工事業者の選定は赤十字本社が行うということで、建築のための補助金を出した地元日高圏域各町の建築関係の業者は１社もなく、補助金を捻出した地元への経済効果は一部に留まっていた。浦河赤十字病院への不満は鬱積していた。その後、紆余曲折しながら、浦河赤十字病院は２０１４年９月末を持って精神神経科病棟は“廃止”ではなく“休棟”という歯切れの悪い結末に至ったのである。誰のためだったのか、勝者が誰もいない。現在、浦河赤十字病院の精神神経科は、浦河べてるの家つながりで大阪の阪南病院、東京大学医局などから隔週で週１日の医師の派遣を受け､細々と外来診療を続けている｡立派に改装新築された精神科デイケア、病棟はまったく使われずに開かずの間になっている。ここで使われた何億というお金が地域福祉に使われたのなら、どれほど有効にお金が活かされたことだろうかと思う。病院も病院だが、医療のためならばお金を使うことも仕方がない、しかし福祉のためにはお金を抑制したいと気持ちが傾く行政にも責任がある。

こうした事情をよそに、とばっちりを受け、無理繰り退院患者を受け入れた浦河べてるの家と川村敏明医師が新しく開業した浦河ひがし町診療所のある日高東部３町では、こうして入院に頼らない地域精神保健福祉を出発させたわけである。



＜川村敏明医師が開業した浦河ひがし町診療所＞

だが、新たに増やしたグループホームは、地域の福祉計画にない増設であり、係る福祉が町に新たな負担を強いているという見解に複雑な心境を抱いたのは私だけだろうか。病

棟を維持する経費に比べ、グループホームにかかる経費負担は比べるまでもない。億単位の箱モノへ補助した費用に比べ､グループホームを確保するための町の負担は皆無である。入院患者のために負担する行政の費用に比べ、グループホームの入居者へ掛かる負担は多く見積もっても半分程度である。総体的に見て負担ではなく節約したはずであるのだが、行政や町民意識からすれば更なる負担の累積ということになるのだろうか。患者の受け皿となった福祉事業所と地域に出た精神障害当事者への偏見は、疲弊した地域経済から見た“財政的なお荷物”という新しい形のスティグマを作り出す。

もちろん、精神科病棟の休棟に至る前に、浦河では２０００年以降に地域に患者の受け皿作りを強力に推し進めてきた。地域で患者を支える支援体制は、病院に赤字を強力に産み出す原因となったといえる。公立の病院ならば税金の節約に貢献したといえるが、民間の病院であれば経営を圧迫したという見方となる。世界的に悪評高い日本の精神科病床が一向に減らないのは、民間に依存してきた日本の精神科医療の国の問題と社会的入院を含め入院中心の精神科医療から経営転換を行えない民間精神病院の課題である。

＜浦河赤十字病院　精神神経科病床数の推移＞

１９３３年	浦河赤十字病院設立。一時、町立病院となるが１９５６年に再び赤十字病院となる。
１９５９年１２月	日高管内最初の精神病棟として５０床で開設される。
１９７９年	後に浦河べてるの家立ち上げに関わる向谷地生良ＳＷが浦河赤十字病院に赴任する。
１９８１年４月～ １９８３年３月	精神科医師川村敏明氏が浦河赤十字病院に赴任。
１９８４年	後の浦河べてるの家理事長佐々木実氏が退院する。
１９８８年	特例許可（アルコール、認知症）で１３０床まで増床される。 川村敏明氏、４月浦河赤十字病院に再赴任。
１９９９年～ ２０００年	全国の赤十字病院で赤字病床を縮小する指示があり、浦河では精神神経科開放病棟を廃止する方針が出される。浦河べてるの家が地域の受け皿としてグループホーム、共同住居を確保する。
２００１年	開放病棟を閉鎖し、６０床に削減を行う。
２００２年	浦河べてるの家、社会福祉法人化。
２０１１年３月	浦河赤十字病院が老朽化のため建て替えが始まる。
２０１２年９月	浦河赤十字病院の改築が完了する。
２０１３年	病床定員を維持できず、他科の看護師確保のため５０床に削減する。
２０１４年４月	更に１０床に削減する。
２０１４年５月	川村敏明医師、浦河ひがし町診療所を開所。
２０１４年１０月	“休棟”となる。

また、医療経済学的に医療による入院治療に比べて、福祉による地域支援による治療の方が経済的コストが低いことなどをきちんと検証し、エビデンスとして地域社会に情報を伝えていく努力が必要である。地域社会の福祉への好感度を上げるためにも、障がい者が受け入れらるためにも、こうした努力はしていきたい。ただ、言い訳になるが、私自身は心理学を専門とし、経済学の専門家ではない。日々、時間に追われる福祉現場で調査に費やす時間と労が取れないでいる。さらに、まとめたものをどうすれば政策に活かせるだろうか。自分の身の丈以上の課題を前に見上げるばかりである。関心のある各分野の専門家や研究者と共同で、この課題に取り組むことができることを願っている。

（つづく）

「あ！萌え」の構造：序論

応用人間科学研究科　齋藤清二

はじめに

今回新連載を開始させていただく齋藤清二です。本論は、実はすでにかなり以前から書きためてあったもので、一部は前の職場の学生や職員向けの広報誌で公開したり、一部はインターネット上に公開したりしたものです。今回、新連載開始にあたり、（実は今回新しく書いたのは、第 10 節だけ、字数にして約 2500 字だけです。すみません）なぜこのテーマについて書こうとしているのか、あるいはこれまで進めてきた考察（全然真面目な内容ではありませんが）についてまとめた要約を書いてからと思ったのですが、これまで多くの人に読まれた文章でもないので、いっそ、最初から読んでいただこうと思い、再録させていただきました。学術誌であれば、二重投稿ということになってしまうのですが、メールマガジンという本誌の性格を考慮して、お許しいただければと思います。次回からは気合いを入れ直して、書き下ろしで続きを連載したいと思います。ご感想があればぜひお聞かせください。それでは今後ともよろしくお願い致します。

１．人はなぜ何かに魅惑されるのか？

人間というものはどうして、「何かに魅惑される（being fascinated）」ようにできているのだろう？…なんてことをかなり以前から考えている。まあ、それを何らかの理論によって説明したからといって、どうなるというものでもないかもしれない。しかし、何でも説明したくなるのも人間の性（さ

が）というものだし、何かしっくりくる説明というものに人間は魅惑されるものでもある。

もちろん、「魅惑される」という言葉で扱おうとする現象を外延設定（扱う範囲を決めること）しておくのは大切だが、けっこう難しい作業だ。ここで扱いたいものは、もちろん特定の対象に限定されるものではないので、かなり広範（欲張ればあらゆる対象）にあてはまるような外延を設定したい。

異性を対象とする場合の「恋愛」という現象は典型例として当然含まれるが、「一目惚れ」とか「憧れ」とか「胸キュン」などといった、もっとずっと広範な現象を含むものである。もちろん、対象は異性でなくてもいっこうにかまわず、同性でも、中性でも、両性でも、無性でも良いし、そもそも人間でなくとも良い（キティちゃんとか、リラックマとか）。さらには生物でなくても良い（お月さまとか、古九谷の壺とか、ハイヒールとか）。あるものの全体でもよいし、部分でも良い（アキレス腱とか、鎖骨とか、目頭とか）。個体を越えた共通性でもよい（イケメンとか、オレ様上司とか）。あるいは形がないもの（思考や概念など）でも良い。

特定の思考（知）に惹かれる態度を、愛知（フィロソフィア＝哲学）と呼び、この場合の「愛＝フィリア」も上記の外延の中に入る。しかし、「愛」という言葉はこれはこれで扱いにくい。小児性愛（ペドフィリア）なんて言葉にも同じフィリアという言葉が使われる。こうなると、いっぺんに怪しげな感じになってしまう。

２．「魅惑される」という現象をなんと呼ぶか？

そうなると、なかなか一つの言葉で表すのが難しい。「関心」というのはなかなかいい線行っていると思うのだが、ちょっと迫力に乏しいし、「志向性」だと、概念としてはほぼ完璧だが、何のことが言いたいのかさっぱり分からなくなる。だから、「魅惑」くらいが良いのかなとも思っていた。「フェチ」なんてのは、意表をついているが、けっこう前記の条件を満たす有効な概念ではないかと思う。例えば「哲学者とは『思考フェチ』である」とか「外科医とは『手術フェチ』である」というような表現ができるかもしれない（もちろんそう言われたら怒る人も多いと思うが）。

ところで、最近、「萌え」という概念が流布しているのだそうで、これなんかは、なかなか微妙な感情を含む「魅惑される」という現象をかなり良い感じで表現しているのではないかと思うし、思考実験の素材の描写としては、かなり扱いやすいかなと思うわけなのである（もうすでに古いと言われる向きもあるとは思うが）。

…で、「萌え」という現象を考察の対象にしたいわけなのだが、当然のことながら、「萌え」という現象は、萌えを感じる「主体」と、萌えの「対象」

と、おそらく「萌えそのもの（今のところ正体不明）」からなる認識構造として描写できるだろう(…本当かよ？)。

ここで、萌えの対象を例示してイメージを具体的にしてみたい。ここでは仮に「眼鏡をかけた美少女」であるとする（うーむ。具体例を挙げると、急にこっぱずかしくなるが、これこそが「萌え」の本態を具現しているのであろう）。

…で、この場合の主体であるが、同じ対象に「萌え」を感じない人も当然いるわけであるから、「萌え現象」が主体の個別性に関連していることは確かである。それは当然なのだが、この主体の問題はちょっとしばらく置いておいて、先に萌えの「対象」について考察してみたい。

３．萌えの対象は物理的実在か？

「萌えの対象」を考えるとき非常におもしろいのは、この「対象」は、一見物理的実在のように見えるが、実はそうではないだろうということである。例えばある主体が「眼鏡をかけたフカキョン」という現実（？）の人間と、「眼鏡をかけたフカキョンのテレビ映像」と、「眼鏡をかけた美少女が登場するアニメ（あるいはゲーム）画像」と「眼鏡をかけた美少女が描かれたイラスト」と「眼鏡をかけた美少女フィギュア」に対して、ほとんど同じような「萌え」を感じるということは決して珍しいことではない。

もし、物質的実在が、「萌え」の対象であるとすれば、血や肉やタンパク質などの生体物質、液晶パネル、紙とインク、粘土やプラスチック（？）などが、どれも同じ「萌え」の対象となっているということになるのだが、断じてそんな説明はナンセンスである。だから、少なくとも「萌え」の対象は、物理的実在ではないし、物質的実在が「萌え」をアフォードしているとは考えられない（…アフォードという言葉の使いかたが間違っているかもしれないが）。

さて、そもそも、私にとって興味があるのは、「人間というものは、どうして、『何かに魅惑される（being fascinated）』ようにできているのだろう？」ということなのであるが、この「どうして？」というのは、また別の形で表現することもできる。それは、以下のような二つの疑問のセットとして、最も適切に表現されるだろう。

「私が魅惑される○○とは何か？」（対象への問い）

「○○に魅惑されるこの『私』とは何か？」（主体への問い）

これらは、極めて実存的な問いであり、ここで初めて萌えの対象だけではなく、「萌えの主体」が問われることになる。しかし、ここでやっぱり疑問が生ずる。私が○○に魅惑されている時、私は○○がとても好きだ。そういったことがあるとして、なぜ、私はそこで、わざわざさらに問いを立てる必

要があるのか？「私は○○がとても好きだ」という現象は、それ自体が心地よいものであり、それ自体が私に元気を与えるものであり、それ自体に十分な価値があることは明らかである。誰からもそれについてけちをつけられるいわれはない！ まず、そのことを確認しておく必要がある。つまり、「私が○○に魅惑されている」ということは、「説明されなければ価値を剥奪されてしまう」ようなことではないのだ。

しかし、どうも、それだけでは済まないようなのだ。多くの場合、私達は、そこから一歩先に踏み出したくなる。さきほど挙げたような疑問が自然に湧いてくるのだ（別に湧いてこない人がいてもそれはそれでよいが）。しかし通常、この疑問について熟考することには困難が伴う。

４．考察を先に進めるにあたって取り除くべき妨害

本題に入る前に、この、熟考に対する妨害要因のいくつかを明らかにして、それを前もって防止する方法を考えておきたい。まず第一に、このような考察を表明すると、すぐに、それに対して次のような言説が投げか掛けられる（他人からも自分自身からも）。

「○○なんて、結局はただの△△に過ぎないのさ」

「○○が好きだなんて、お前は単なる■■に過ぎないのさ」

一般に、△△や■■は、明らかに「価値の引き下げ」をもたらすような表現が採用される。例えば、「未熟」「現実逃避」「幻想」「コンプレックスの裏返し」「ナルシズム」「変人」「変○（表現自粛）」「キ○オ○（以下同じ）」「ロ○コ○」「厨○病」…など、などである。もちろん、もっと難解な専門用語や学術用語が持ち出されることもある。

私は、上記のような言説を「還元主義的価値の引き下げ」と呼びたいと思う。ようするに、「それは単なる○○に過ぎない」という言い方だ（最近では「dis る」などと表現される）。これは、熟考したり、表現したりする当事者を傷つけ、意欲をそぐ。自分にとってかけがえがないほど大切なものを否定されるということは、自分自身を否定されることにつながる。こういう言い方をされるのが嫌さに、私達は口をつぐんでしまうのだ。まず、他者に対しても、自分に対してもこのような「還元主義的価値の引き下げ」を全面的に排除することが必要だ。これなしには、このような繊細な問題について熟考や議論を続けることはできない。

第２に、前節でも触れたように、熟考の対象とする現象をとりあえずどういうことばで呼ぶかが難しいという問題がある。前節ではこれを「萌え」ということばで呼ぼうとしたが、それでさえも、すでに先入観によって汚染されていることが明らかである。つまり、「萌え」ということばそのものが、自

動的に何らかの価値判断を含む意味づけを誘発してしまい、正当な、中立的な議論を困難にするのだ。

これを回避するためには、できるかぎり、先入観を誘発しない、中立的なことばを用いる必要があるが、これは厳密に言えば不可能である。例えことば自体としては、全く無意味な新造語をつくり出したとしても、それは完全に価値フリーにはならないだろう。したがって、ここでは妥協が必要である。完全に中立的なことばは無理でも、何かに決めなければ議論は難しい。それを試みなければならない。暫定的にどういうことばを当てはめるか、それについては，あとでまた思いついたら提案してみたい（←逃げるな！）。

５.「萌え」は人間の行動にどのように影響するか？

前節では、「萌え」という現象を、認知的側面から考察したが、これだけでは「萌え」の本質に迫るには十分ではないという疑問が当然生ずると思う（え、「そんなもの生じない」って？ それならそれでもよろしい）。そこでしばらくの間、「萌え」という現象が、私達の行動にどのような影響を与えるかという観点から、色々考えてみたい。これは要するに、体験している本人から言えば、当たり前すぎるようなことなのである。

例によって、「眼鏡をかけた美少女」にあなたが魅せられている（「萌え」を感じる）と仮定してみよう。もちろんこの「」の中を、「遮光器土偶」「特撮戦隊もののヒーロー（ゴーグルＶなど）」にしても良いのだが、それでは想像しにくいという人は、誰か適当なアイドルタレント（男性でも女性でも）を代入していただいても良い。

まず、最初に言えることは、「萌え」が生じるとき、あなたは普段とは異なる行動をとるということである。この「普段とは異なる行動」というのも定義は難しいのだが、例えばあなたが、普段はできる限り無駄なお金は使わず、リーズナブルな値段のもの以外を衝動的に買うようなことはない、という行動パターンをとっている人だとする（これを性格とかパーソナリティと呼びたがる人もいるだろう）。

ところが、「眼鏡をかけた美少女のフィギュア」（もちろん、何でも良いというわけではなく、お気に入りのものでなければならないのだが、これは「萌え」の前提だから、ここでは当然のこととする）が、仮に１万円で売り出されたとすると、あなたは迷わずにそれを注文する、あるいは出かけていってそれを買うだろう。普段、数十円単位で買い物のことを考えるあなたでも…である。

もしそれが、本当にお気に入りのものであれば、もしかしたら 10 万円でも、アルバイトをしてお金をためてでも買うかもしれない。これは第三者から見ると理解できないかもしれないが、他人からみて常識はずれということよりも、むしろあなたの普段のパターンと比べた時の逸脱の方が重要だろう。要するに「萌え」が生じたとき、あなたは「人が変わってしまう」のである。

こういった例を挙げることはいくらでもできる。例えば、学校には遅刻せずにきちんと通うという行動パターンを普段は確実

にとっている生徒が、アイドルや声優に関する何かが発売される時には、当然のように学校を休んだり、遅刻したりする。また、普段、嘘を絶対につかないという行動パターンをとっているまじめな人が、仕事を休んでコンサートへ駆けつけるためには、平気で「親が死んだ」などと嘘をつく。つまり、「萌え」は、ある個人のそれまでの固定化した行動パターンから甚だしく逸脱した行動を、その個人にとらせるのである。

考えてみると、どんな人にとっても、その人のパーソナリティと呼ばれるような、一定の固定したパターンとは違った行動をとるのは一般にとても難しい。努力してそうしようと思ってもできないことが多い。グレゴリー・ベイトソンの学習理論によれば、これは、私達が何らかの行動を学習するときには、その行動そのものを学習している（これを「学習１」と呼ぶ）だけではなく、同時に必ず、学習のしかたの学習をしているからであるという。この「学習のしかたの学習」すなわち、「学習のコンテクストの学習」をベイトソンは「学習２」と呼ぶのだが、この「学習２」は基本的に自己強化的なのである。

例えば、何かを買い物する時に、私達は、100 円を出せばスーパーでパック入りの総菜を買うことができるという行動そのものを学習するだけではなく、できるだけ少ないお金で良い買い物をするためには、スーパーの棚にならんでいる一番手前のものをとらずに、奥の方の賞味期限の長いものをとったほうが良い、というようなことをも同時に学習する。こうした行動が成功（値段の割りに新鮮なものが手に入った）すると、「やっぱり、同じ値段でも賞味期限まで調べるような態度は正しかった」ということも一緒に学習される。その人の、スーパーの棚を引っかき回すような行動（態度）は益々促進される。

こういったことは当たり前のように思えるのだが、問題はこうした行動が失敗した場合である（つまり、努力したわりには買ってきたものがすぐに傷んでしまったような経験をした場合）。おそらくその人は、「新鮮なものを探す努力が足りなかったのだ」と考えて、上記のような探索行動をやめるのではなくて、さらに熱心に行うようになるだろう。

このように、まじめな人は、なんらかの行動を経験するたびにますますまじめになり、けちな人は益々けちになる。つまり、「まじめ」とか「けち」とか「極楽とんぼ」とか「天然」などというような、一般に性格とかパーソナリティとか呼ばれるものは、実は、個々の行動のコンテクストの学習なのであり、それは、一般にいったん形成されると自己強化的なのである。だから、「性格を変えるのは難しい」ということに、多くの人が賛同するのであろう。

ところが、上述のように「萌え」は、極めてやすやすと、この「性格＝行動パターンのコンテクスト」を破壊してしまう。これは、あたりまえのように見えるが、実は極めて希有かつ重大なことではないだろうか。ベイトソンは「学習２」の自己強化傾向を変えることができるような学習があることを指摘して、それを「学習３」と呼んだ。「学習３」とは、「学習２」のコンテクストについての学習であり、「学習３」によって、我々は、「学習２」（一般には性格傾向とかパーソナリティとか呼ばれるもの）

を変容させることができるという。「萌え」という現象は、したがって、ベイトソンの言う、「学習３」の少なくとも一部に関わっているのではないかと、私は思っている。

６．「萌え」現象の苦痛軽減効果

「萌え」という現象が、人間にどういう影響を与えるかという点について更に考察を続けたい。次に取り上げたいのは、「萌え」現象の「苦痛軽減作用」である。　以下のような話を白血病などの重篤な血液疾患の診療を専門とする医師から聞いたことがある。

小児の白血病の治療の進歩は著しく、最近では小児の白血病の約 80%が治癒する。そのような効果をもたらしている治療は、化学療法と、骨髄移植である。少し前までは、骨髄移植のためには、治療を受ける患者さんの骨髄機能を前もって完全に破壊しておく必要があった。そのための処置として、全身に致死量に近い大量の放射線を照射するということが必須であった（今では必ずしもそうではない）。つまり、自分自身の骨髄を死滅させないと、新しい骨髄を移植、生着させることができなかったのだ。

この、全身放射線照射は、急性の副作用があり、それはひどい吐き気や、船酔いに似た不快な症状だ（これを放射線宿酔という）。しかも、照射の処置が終わるまでには通常数時間かかり、その間照射装置の下で処置を受ける子供はじっとしてなければならない。大人でも強烈な船酔いに似た症状に耐えながらじっとしているのは困難であるのに、子供にそんなことができるわけがない。いくら言って聞かせたところで、どうしても身体をじっとさせていることはできない。そこで、苦痛を軽減するために、鎮静剤を投与するということになるのだが、呼吸抑制を来さない範囲で、できるだけ強い鎮静剤を使っても苦痛を完全にとることができず、全身照射の際には、子供をじっとさせて置くことがとても難しかった。

ところが、ある病院で、ある先生が、こういうことを考えた。「薬で苦痛をとるよりも、子供が熱中するようなことを与えれば、子供は苦痛を忘れてじっとしているのではないか？」。そこで、その先生は、レントゲン照射室にビデオとテレビを持ち込んで、『大長編ドラえもん』のビデオを流した。そうすると、驚いたことに、子供は、じーっと『大長編ドラえもん』のビデオに熱中し、照射中全く動かずに画面を見続けたのだ。どんなに強い鎮静剤でも取り除くことのできない苦痛を、見事に『大長編ドラえもん』は取り除いたのだ。

これは、何を意味しているのかということである。『大長編ドラえもん』は多くの子供を魅惑する。これは事実であると思われる。ビデオさえみせれば、どんなビデオであっても良いというわけでは全然ない。子供にも好みはある。しかし、『大長編ドラえもん』はほとんど全ての子供に絶大なる「苦痛抑制効果」を発揮したのだ。もちろん、科学的に厳密なスタデイが行われたわけではないが、このエピソードに強い説得力を感じるのは私だけではないだろう。

私の仮説はこうである、『大長編ドラえもん』は多くの子供（大人にさえも）に対して、「魅惑される＝萌え」現象を体験させる。このことを通じて、「苦痛が抑制」される。

これは、ありきたりの薬剤よりも強力である。だから「萌え」の効果は一種の「万能薬＝エリクサー」であると言える。しかしもちろん、この現象は良いことばかりではない。苦痛を取り除く薬剤一般（その最も強力なものは麻薬である）と同じように、「萌え」現象にも危険性があることは間違いがない。それは、依存とか中毒とか言われる現象なのだが、それについては十分考察しておく必要があるだろう。そうしないとせっかくの人間にとっての「萌え」の価値が、だいなしにされてしまいかねない。

７．萌え現象に伴う「依存性」の問題。

前節では「萌え」という現象には強力な苦痛軽減効果があるということを述べてきた。しかしそこには「中毒」とか「依存」などと呼ばれる問題が必ず付随してくる。このような問題がどうして起こるかについて、それなりの適切な説明と対処法が明確にされないと、せっかくの苦痛軽減効果を有効に生かすことができないだろう。この問題はかなり難しく、複雑な要因を含んでいるので、ゆっくりと論じてみたいと思う。

そもそも「乱用」とか「中毒」とか「嗜癖」とか「依存」とか呼ばれる現象はどう定義されるか、ということが最初に問題になるが、これについては必ずしも定説があるわけではない。しかし、次に述べるいくつかの要素を含む現象であることは、ほぼ合意されている。

１）ある現象を求める行動を自由意志でやめることが難しい。

２）ある現象を求める行動が、頻度、量などにおいて、次第にエスカレートする傾向がある。

３）そのために当事者の一般的な生活や日常にかなりの程度の不都合が生じる。

４）最終的に当事者の人生に破壊的な影響を及ぼす。

上記のうちの、３）、４）は程度の問題であり、おそらく「中毒」「乱用」のコアは、１）と２）にあるように思われる。すなわち、「意思によるコントロールの難しさ」と「エスカレートする傾向」の二つである。この特徴は「萌え」現象の持つ性質にぴったりあてはまる。もし、「萌え現象への没頭」が生じても、３）４）に至らないのであれば、おそらく臨床的にはなんら問題にはならない。だから、１）２）は容認して、３）４）に至らないように工夫すればよいということ。になる（たぶん）。

４）に至りやすい現象の代表としては「麻薬」「覚醒剤」などの違法薬物、「アルコール」「タバコ」などの嗜好品があり、最近ではいわゆる「危険ドラッグ」が問題になっているが、これらは、精神的、身体的、物理的な非可逆性の害を与える点に特徴がある。経済的破綻や社会的役割を破壊する点で３）４）に至りやすい現象のとしては「ギャンブル」が代表格であろう。それらに比べると比較的マイルドで、中間的な現象としては「買い物（依存）」とか「仕事（中毒）」とかがある。また違法性のない薬物の場合は微妙で、「下剤」や「健康食品」などは、時として重大な健康被害をもたらす場合もあるが、それほどの社会的不都合を起こさないこともあるだろう。

これらものに比べると、「萌え」としてくくられるような現象は、物理的な害や経済的な害が全くないというわけではないが、ある許容範囲内に入っていることが多く、比較的危険性の少ないものであると言えるだろう。「萌え現象」は、物理的、身体的に非可逆的な害を人間に与えるわけではないから、薬物やアルコールなどへの依存にくらべるとずっとましなものである。意志によるコントロールの難しさとエスカレートしやすさをうまくマネジメントするコツについて、さらに考えて行きたい。

8．萌え中毒は「問題」なのか？

「萌え体験」が「中毒」や「依存」といった状況に陥っている時、これをなんとかしなければならないと本人や周りが意識すれば、「萌え現象」は、「解決すべき問題」として定義されることになる。例えば「ゲーム中毒」などと呼ばれる現象が、この代表例だろう。子供が（大人や大学生や主婦でもいっこうに差し支えないが）TV ゲームやオンラインゲームに熱中して自分では時間をコントロールできず、そのために現実生活が破たんしてしまうような場合、その状況は通常「解決すべき問題」としてまわりから定義され、時には当人もこれを「問題」として認識する。しかし、「萌え体験」が持つ強い苦痛抑制効果のことを考えに入れると、「ゲーム依存」という状態そのものが「問題」なのかどうかは慎重に考える必要がある。

つまり、「ゲームに没頭する」という現象は、何らかの苦痛に対する対処行動であるかも知れないということだ。もし、その子供（あるいは大学生）が通常生きている世界が（理由はなんであるにせよ）常に苦痛に満ちた世界であり、その苦痛は簡単には取り除けないものである場合、ゲームに没頭することによって得られる「萌え体験」は、その苦痛を緩和するためのほとんど唯一の「有効な対処行動」かも知れない。「ゲーム依存」といった目に見える現象に対して、それを「問題」と定義することもできれば、「問題に対する対処行動」として定義することもできる。後者の場合、問題は「世界が苦痛に満ちていること」であり、「萌え現象」は問題解決のための手段であり、一種の自己治療であると言える。

「ゲーム依存」などの「萌え現象」を、「解決すべき問題」と考えるか、「対処行動」と考えるかは、どちらもありとしか言えない場合が多いが、どちらの捉え方が、「中毒」や「依存」に対する有効な働きかけになりうるかというと、まちがいなく「対処行動」として理解する方が役にたつ。その最大の理由は、「萌え現象」そのものを「解決すべき問題」と定義すると、「萌え現象は意識的にコントロールできない」という萌え現象の本質的な性質とぶつかってしまうからである。

これは特に自分で自分の行動を評価する時に典型的に起こる。結局は「解決すべきなのに解決できない（ゲームをやめることができない）自分はダメな人間だ」という自己嫌悪につながり、世界は益々苦しいものとなり、その苦しさを緩和するために再びゲームの世界へと戻っていくという悪循環が生ずることになる。結論として、「ゲーム依存」などの萌え中毒現象を「苦しみの緩和のための対処行動」と認識し、対処行動をとらざるをえなくさせている「世界が苦しみに

満ちていること」に対してアプローチする方略を設定することが、より有効な「萌え中毒」へのアプローチとなるだろう。

９．ストレス対処行動としての「萌えの探求」

あまり大きな声では言いにくいのだが、「耐え難い苦しみに満ちた世界」への最強の対処行動は「自分自身の意識を消してしまう」ことであり、これを文字通りにとると、「自分の存在を消す＝自殺する」ことが唯一の対処行動であると勘違いしてしまう。「耐え難い苦しみ」を感じているのは間違いなく「私の意識」であるから、「甚だしい苦痛」に対する対処法で最も強力なものは「私の意識を消す」ことである。例えば「寝逃げ」と呼ばれる行動が可能な時は、それは決して逃げているのではなく、有効な対処法が選択できているということになる。

意識を完全に消すことから、意識を何らかの形で変性させるというマイルドな方法まで、「耐え難い苦痛」を緩和する方法はたくさんあり、たくさんあるということを知っているということ自体が、極めて重要な対処能力になるのである。「対処行動」を考える上で重要なのは、

１）選択しうる対処行動の種類や数を増やす。

２）その対処行動自体が持つ非可逆的な害ができるだけ少ない対処行動を選択する。

といったことだろう。異論があるかも知れないが「自殺という対処行動」は、あまりにも非可逆性が甚しすぎるのでお勧めできない。

このように「対処の方法は多ければ多いほど良い」ということを、文字通りに訓練する方法の一つに「弁証法的行動療法」と呼ばれる技法がある。そのマニュアルの一つに、「大人向けの楽しいイベントリスト」というものがあり、ここにはなんと 173 通りもの方法がリストアップされている。当然のことであるが、自分独自の方法をこのリストに加えて、もっと数を増やすことはとても役にたつだろう。多くの場合、あなたにとって有効な対処行動は、私にとって有効な対処行動であるとは限らないからである。

アトランダムにこのリストを引用してみる。23.仲の良い友達と夜を過ごす。26.美しい景色を思い出す。27.お金を貯める。28.ギャンブルをする。30.食事をする。31.カラテ、柔道、ヨガをする。32.定年退職後のことを考える。36.セクシーな服を着る。39.株を売買する。40.泳ぎに行く。41.だらだら過ごす。55.家の中で歌い回る。58.体重を減らす。100.白昼夢を見る。102.セックスについて考える。114.脂っこい太りそうなものを食べる。141.政治について議論する。…本当にアトランダムである。

大切なことは、「自分を楽しくさせるための方法はたくさん持っていたほうがよい」「他人に言われたことではなく、自分が楽しめることを探すことが大切」「道徳に反しているとか、理屈に合わない、といった理由で選択肢を狭めないこと」などである。対処行動（コーピング）には非常にたくさんの方法があり得るし、たくさんの選択肢があればあるほどよい。大きく分類するな

らば、コーピングには１）問題解決型のコーピングと、２）情動調整型のコーピングがあり、さらに３番目の有力な要素として３）社会的資源の利用というのがある。

問題解決型コーピングとは、直球勝負で困っていることを解決すること、情動調整型は「気分を変えること」、社会的資源の利用とは「他者とつながること」である。これらの方策は全て有力で、どれが良いかということはない。問題解決型コーピングは確かに正攻法であり、それがうまくいけばそれに越したことはない。社会に問題があれば社会の問題を解決する。個人に問題があればその個人の問題を解決する。しかし多くの場合、それができるならばとっくにしているのである。そもそもひどく困っている状況ということは、問題解決がすぐにはうまく行かないということなのである。そこで、問題解決にこだわりすぎると、解決しないうちに当人やその集団がつぶれてしまう。

情動調整型のコーピングは、問題がすぐには解決できない状態の中でもつぶれてしまうことを防ぐ、強力なコーピングである。しかし、このタイプのコーピングは、「逃避」とか「ごまかし」といった否定的な価値判断をされてしまうことが多い。しかし、おそらくその判断は間違いである。

社会資源の活用は、あからさまに言えば「他人や他のものとつながり、頼り、利用する」ということであるから、「物事は他人に頼ってはダメで、自力で解決しなければならない」という信念（ビリーフ）が強すぎると、社会的資源の利用が難しくなり、これもつぶれるもとになる。他人に相談したり、必要な時に上手に人の力を借りるということは、強力なコーピングとなるし、「問題を自分で解決しよう」とする姿勢と必ずしも矛盾するものではない。

「萌え」の考察をしているはずが、いつの間にかストレス・コーピングの話になってしまったが、苦しみに満ちた世界に対するコーピングとして「萌えを探求すること」は、比較的害の少ない、安全な方法であると言えるだろう。

10.「萌えの探求」はなぜエスカレートしやすいのか？

前節まで、「萌え」という現象の持つ苦痛抑制効果や、それに伴う副作用としての「依存性」の問題について考察してきた。特に、「萌え」の過剰を「問題あるいは病理」として扱うのではなく、それ自体をひとつの自助努力、自己治療のありかたとして理解することの重要性を指摘してきた。しかしこれだけでは、なぜ「萌え」という現象がエスカレートしやすいのかということは十分に説明されていない。

私達にとって、「萌え」という現象が、一種の（時には他には代えがたいくらいの）「快」をもたらすということは、否定のできない事実であろう。ただしここでも、「萌え」という現象に対して「快感」あるいは「快楽」というラベルを貼る時には注意深くしなければならない。自分自身の（あるいは自分に自分で）快感を惹起するような行為という考え方は、知らず知らずのうちに一種の道徳的嫌悪（我々に道徳などというものがあればの話だが）を呼び起こしやすい。ここで進めている議論は、あくまでも道徳

的には価値中立でなければならないし、そもそも人間にとって、「苦痛」と「快楽」とは必須のかつ重要なものであり、どちらの感覚も極めて自然なものであることは、少し考えてみれば分かることだからである。

通常人間の感覚というものは、常に一種のバランスをとるようにできているはずなので、例えば、「萌え」が過剰に体験されれば、むしろ「萌え」を減らすような自律的な動きが生じて、結果的にはある一定のレベルに落ち着くということが期待される。「慣れ」とか「飽きる」とかいうことは、生物にとって極めて普遍的なできごとである。この現象はゾウリムシのような極めて下等な生物においても認められるらしい。例えば、ゾウリムシを顕微鏡下で針でつんつんと突くような実験を繰り返すと、最初は慌てて逃走していたゾウリムシが、次第に刺激に慣れてしまい、針で突かれてもあまり逃げなくなってしまうという（ただし、ゾウリムシも鬱になるとか、M 感覚に目覚めることがあるなどと解釈するのは擬人化のしすぎであろう）。

それにもかかわらず多くの場合、傍目から見ると「萌えの探求」には、「慣れてしまう」「飽きてしまう」ということはあまりないように思える。もちろん、すぐに飽きてしまうようなものは、そもそも「萌え」の対象とは呼ばないので、このあたりは同義語反復なのかも知れないが。とは言っても、典型的な場合、例えばあなたが、あるアイドルや声優や、アニメのキャラや、戦隊もののヒーローなどに「萌え」ている場合、あなたは写真やらグッズやら、フィギュアやらといった関連したものを、片っ端から集めるようになる。もしそれに関連した画像や動画をインターネットで「拾う」ことができることを発見したりすると、新たな「収穫物」を探して、一晩かけてでも、ずっとサーフィンを続けることになる。ハードディスクは萌えの対象の関連画像で溢れかえり、部屋はグッズやフィギュアやポスターでいっぱいになってしまう。なぜその場合、「もう十分満足したし目標を達成したから、途中だけどやめておこう」ということができないのだろうか？

このエスカレート現象のメカニズムをうまく説明することは難しいが、候補がないわけではない。根本的には、「快」を求め「不快」を避けるという原則 は、あなたにもゾウリムシにもあてはまるはずである。しかしそれではなぜ、あなたに快感を与える「萌えるグッズ」を首尾良く手にいれることができたのに、しばらくの間それを愛でることで満足するのではなく、すぐまた次の「新しいグッズ」を手に入れようとするのか？これは、単にたくさん商品を売りたいというコマーシャリズムに毒されているためだけとは言えないのではないだろうか？（それにはめられているという可能性はもちろんあるが）

ある種の心理学的立場からは、このような探索行動がエスカレートしたり、欲求が満たされるのではなくさらに増強したりするという現象への説明として、「実は微妙に偽物を掴まされているのだ」というものがある。例えば、母親からの愛情がほしいといつも飢えている子供は、母親の愛情の代替物（例えば良い成績をとるとか良い子であることを示すことで母親からの賞賛を得る）ことに執着するようになるという。もちろん、良い成績をとった時に得られる賞

賛は、実は条件付きのものであり、子供が求めている「母親からの無条件の愛」とは似て非なるものである。だから、母親に賞賛されても本当の安心は得られず、むしろ、次は母親の愛情を失うのではないかという不安が益々強くなるために、良い子であろうとする行動がエスカレートするという理屈である。この説明にはある程度の説得力はある。

しかし、「母親の無私の愛情」などという概念を、実在するものとして無自覚に具象化してしまっていることこそが問題なのではないかという考え方も当然ある。「母親の無私の愛情」など、生身の（そして普通の）人間である現実の母親に求めるほうがむしろ幻想であり、それを断念する（あるいは幻想であることを見抜く）ことで執着から解放され、適度な距離感をもった成熟した人間関係を構築しうるということは、確かに実際に経験される。

いずれにせよ、充足感や満足感を得るはずの行動が、欲求の沈静化に向かわず、むしろエスカレートする場合、実はその「充足感を与えてくれる（かのように見える）対象」は，微妙に本物とは異なっている可能性がある。しかし、ここではむしろ「微妙に」というところが大事なのではないだろうか。もしも「萌えの対象」が、あなたが本当に探求している何かと見分けがつかないほど似ているものであるとすれば、それを「単なる偽物」として捨ててしまうことは難しいだろうし（だって見分けがつかないのだから）、そもそもそれはもったいないことではないだろうか。あなたに「萌え」を感じさせるものは、あなたが本当に必要としているもののすぐ近くにある（しかしそれそのものではない）という理解は、私達が、通常は知ることが非常に難しい（多くの場合はそれを知るまでに寿命が尽きてしまうような）「誰にとっても本当に大切なもの」を探求するための、有用で（同時に扱うのが極めてやっかいな）一つの道しるべになってくれる可能性があるのではないだろうか。

（続きます）

海の向こうにでて見れば

（1）自己紹介

石田 佳子

はじめに

私は 2013 年（52 歳）の春に仕事を辞め、同秋からマレーシアの首都クアラルンプールで暮らし始めました。何年住むのか、何をして暮らすのかといったこともしっかりとは決めず、同い年の夫と二人でマレーシアへやって来ました。

そう決めたのは、今から考えると、経済的な問題と健康上の問題に背中を押されたからです。経済的な問題とは、私の夫の失業によるものです。夫はそれまで某大学で研究職に携わっていましたが、常勤の職を解かれたため、生活費を切り詰める必要があったのです。しかしそれだけなら、私が常勤の職に就くなり田舎に住むなりすればよいのですから、あえて海外に出る理由にはなりませんでした。

健康上の問題とは、私の持病である C 型肝炎に良い治療法がなかったため、60 歳を過ぎる頃から深刻な状況に陥る可能性が高いと思ったことです。近年事情が変わりつつあるのでこれについては回を改めて書くつもりですが、その時点では治療を諦め、徐々に健康状態が悪化して行くのを覚悟する他ありませんでした。

折しも、私の両親、同年代の親しい友人たちが、それぞれ原因は違いましたが、立て続けに亡くなりました。私は「次は自分の番かもしれない」「命のカウントダウンが始まっている」と考え、「残りの時間をどう過ごすべきか？」と自問しました。

当時の生活に不満があったわけではありません。好きな仕事と良い人間関係に恵まれて幸せでした。特に仕事については、一番好きで得意なことをしているとの自覚があり、やり甲斐と喜びを感じていました。だから「今のような生活を続けて死ぬのも、それはそれで幸せではないか」と思いました。しかしそれと同時に、「でも死ぬ間際に自分の人生を顧みて、後悔したくない。まだできるうちに、今まで無縁だったこと、したくても出来なかったこと、したいとさえ思えなかったことをしておきたい」という囁き声が、心の片隅にあるような気もしたのです。

「人並み」にという信念（思い込み）

振り返ってみると、多くの日本人と同じように、私も日本で生まれ育ち生きてきました。生まれた時から身体が弱く、入院と手術の繰り返しで過ごしたため、幼い頃は「大人になったら看護婦さんになりたい」と言ったそう

です。長じるにつれ自らの体力のなさを自覚して看護職に就くのは無理なことを悟りましたが、対人援助職への憧れは強く、若い頃からカウンセラーになりたいと思っていました。

しかしそれ以上に、私には「まず、皆と同じことができなくてはならない」との想いがあり、「人並みになれないうちから好きなことをする」のに、抵抗と罪悪感があったのです。今思うと、ずっと自尊心が低くて「自分は人並み以下である。(だから人並みにならねばならない。)」「対人援助職というのは立派な人が就く仕事だ。(だから自分には無理だ。)」という信念のような思い(込み)を抱いていたのでしょう。若い頃の私にとってカウンセラーを目指すことは、結婚・出産・育児といった「皆と同じこと」をクリアできた後にだけ許される「ご褒美」や「贅沢」のように思われていました。

その妙な信念(思い込み)が、結婚後、夫の留学に随行してアメリカでの生活を経験してから、変わりました。たった一年間でしたが、出会った人々の中にこれまでと違う「空気」や「常識」があることを感じたからです。

いくつか例を挙げると、日本では『空気を読む』とか『出る杭は打たれる』と、周囲を気にして自分を抑えるのが美徳のように言うけれど、アメリカでは女性であっても自分の意見を求められる。未熟な内容でも自己表現や自己主張をした方が認められる。日本人ばかりで排他的な集団を作り一緒に行動している(日本では当たり前の)人たちの方が奇異な目で見られ、一人でどこへでも行く私のような(日本では変わり者の)方が歓迎される･･･これらは私にとって非常に新鮮な体験でした。

それまで抱いていた「皆と同じでなければならない」という信念が、私の個人的な「問題」から生まれた思い込みだっただけではなく、日本社会の「空気」や「常識」によって育まれ強化された教義(処世術)でもあったことに気づいたのです。

やりたいことを

帰国して、以前と同じ建築の仕事に就きながら出産年齢のタイムリミットを迎えた私は、(40 歳の時)不妊治療を受ける代わりに大学院に入り直し、臨床心理士になる途を選びました。

カウンセラーとして働く時、アメリカ生活で得た新たな教義･･･でなく、そもそも教義などなく自分で自分を縛っていただけであり、視点を変えれば生き方も変えられる経験をしたことは、私の役に立ちました。私のクライエントには、かつての私と同じように、見えない鎖に囚われて生き難さを感じたり、別のもっと自分らしい生き方を模索したりしている人が多かったからです。

また、学生相談を行っていたので、対人援助職を目指している大学生との交流も多く、次のように感じるようになりました。「対人援助職を目指す者の少なからずが、利害損得からではなく、気質や成育歴からそれしか選べずに、必然的な生き方としてその職を選ぶのだ」と。

私の場合もそうですが、興味の尽きない領域で自分の得意なことを仕事にしたいと思うのは、自然なことだと思います(ただし対人援助職に就く場合は、自己の来歴と必然性を悲しみと共に言語化しておく必要がありますが、これについては本稿では省略します)。世の中には、物心ついた頃から「他人のため」に尽力することが苦にならず、それどころか

楽しくて遣り甲斐があると感じる人がいるのです。つまり、他人のために尽くすことが「自分のため」なのです。

少し意地悪く考えると、「人を援助することで自分を満足させている」「自分で自分を満足させるのでなく、他人を満足させることで自分が満足するという、まわりくどい方法を採っている」と言えるかもしれません。そこまで極端なことにならなくとも、「他人のため」に時間やエネルギーを使っていれば、「自分のため」に使える時間やエネルギーは減ると考えるべきでしょう。

もともと心理学オタクで趣味を仕事にしてしまった私には、いつしか仕事が最大の楽しみになっていました。それで心が満たされた反面、その当然の対価として、自分のことを後回しにするなど自分で自分を満たす時間は減って行きました。

しかし、親しい人々の死に何回か立ち会ううちに、「残りの時間」を次第に意識するようになった私は、「これまでやり足りなかったことをしよう」「自分のために生きよう」と思いました。具体的には、「自分で自分を満たすこと、つまり“遊び”が足りなかった」「予めゴールを決めず、心の赴くままに、好きなことを好きなようにやってみたい」と思ったのです。私は後ろ髪を引かれながらも、大切にしていた仕事、居心地の良かった職場と住居、これまで関わってきた人たちに別れを告げて、海の外へ出て新しい生活を始めることにしました。

住む場所については、①気候が温暖で過ごしやすいこと、②治安が良いこと、③物価が安いこと、④日本との往来が容易なこと、⑤長期滞在可能な VISA が得られること、⑥インフラ、公共交通機関、医療設備が整っていること、⑦英語が通じることといった条件で絞り込みました。

ネットや書物で情報を収集すると、①～⑦に関して好条件を備えているのが、マレーシアだったのです。特に物価が日本の１／３であること、マレー系・中華系・インド系を擁する多民族国家で日本と違う「空気」がありそうなことは、私にとって大きな魅力でした（以上の事前情報については住んでみたら違っていたと思うことも含まれるため、回を改めて書くつもりです)。

また、一定条件を満たす外国人の受け入れにマレーシアが積極的であること（※１）、日本人のシニア層にリタイア後のロングステイ先として人気が高く、首都クアラルンプールには彼らによるボランティアのグループがあって現地情報を提供するとともに、ロングステイを支援していること（※２）なども、海外生活初心者には有利なように感じました。いずれにしろ、住み始める前の私には、マレーシアでの生活が新たな冒険のはじまりのように思えたのです。

以上のように今回は、自己紹介として、私がマレーシアで暮らし始める前に考えていたことなどをご紹介しました。

次回以降は、マレーシアに住み始めた一人の平凡な日本人（私）が、感じたり考えたりしたことを書かせていただくつもりです。と言うのは、たとえ短期間でも、海の向こうに出てみれば、日本にいた時には疑いもしなかった「空気」や「常識」が違う色合いで見えてきたり、それまでは見ようともしなかった「自分」や「日本」が改めて見えてくると思うからです。

[注釈]

※１　マレーシア政府は、一定条件以上の資産を有する外国人に、MM2H(Malaysia My Second Home)という 10 年間出入国自由の滞在を許可するビザを発行しています。これは就労や永住を許可するものではありませんが、10 年後に再申請すれば更新は可能だと言われています。詳しくは、マレーシア政府観光省のホームページをご覧ください。
http://www.tourismmalaysia.or.jp/

※２　長年クアラルンプールに住んでいる日本人夫妻が主催している『ご褒美人生の泉』http://gohoubi.com.my/という会員制の SNS があって、登録するとマレーシアでのロングステイに関する膨大な口コミ情報が入手できます。また、この SNS 内で有志がボランティアグループを作り、現地での住居探しや携帯電話の使い方講習会など、これから上陸する人への支援活動を行っています。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

～シーズン１「SM クラブの受付」～

エピドード１　なぜ書くの？

しすてむ❤□きよたけ

「清武システムズ」は、世の中の何であるのか言っている本人すらわかっていない。ただ、「具体的なアイディアや意見ではなく、具体的な変化のための装置」であることをあげている。「何か変化をと思うが手立てがわからない」そのようなヒトやチームから、お声かけいただけるといいな～と思っている。しかし、僕自身が、清武システムズが何であるかわかっていなければ、声なんてかからないだろう。

ちょっと傲慢だが、わかりきっていることをするつもりもない…そんな潜在意識が、僕の中にあるのだと思う。ちょっぴり謙虚にいうと、僕ができることや理想を打ち出したところで、それが良いサービスであるなんて思わないから、あえてわからぬまま、積み重ねていってみようという試みでもある。ただ…そんなに自信があるわけでもない。が、何かと組み合わさったとき、何が起きる。そのコトを楽しみに過ごしている。

この原稿、「そんな最中に声がかかりました！それが SM クラブでした。」なんて言ったら、面白いだろうに…と思うのだが、そうではない。僕が、清武システムズと言い始めた頃、携わっていた場。それが、SM クラブでした❤□

清武システムズの始まりや中心ではなかったものの、しすてむ❤□きよたけにとって、全く関係ない場所だったと思えないのだ。

そこで、シーズン１である「SM クラブの受付」は、僕が体験をし、勝手に思ったことを勝手に綴っていこうと思う。

この職に強い好奇心があったわけでもなく、仕事を探していたら、たまたま人手不足だったみたいだし、即面接、即日決定だった。あえて添えておくと、「SM」を研究や調査の対象に選び、観察していたわけではない。

調査や研究の対象かのように参加をしようとしてくる人に「行ってみたい」なんて言われたときには、「来ないで」と言ってしまったぐらいだし、かかわりたくないな～～、とまで思ったくらいだった（かといって、以降、かかわらなくなった相手はいないし、来たいなら金を用意し、予約をしてくれるならどうぞ、と仕事モードに切り替え、振る舞ったこともあった）。

こうした場を公開したいと思っているわけではない。むしろ、そっとしておいてくれと思っている人なのだ。

社会は、ひっそりとしている場も含めて存在しているのだし、人には、誰にも言えないことだって、むしろ、あえて言わないことだって、あるのだから。

では、なぜ書ちゃうのか。「SM クラブの受付」を通して、待機室にいる女の子やママ（と呼ばれる人）、他の受付の人たち、お客さんとかかわる中、指向が理解できず、業務が過酷だと思ったこともあったのだが、総合的に楽しかったからだ。あえて言う！変態とカテゴライズされるであろう人たちが、僕にとって鬱陶しくもあったが、好きだったし、今も好きだ。結局、僕が、その場やそこで過ごす時間や人たちに惚れていたことに気がついたから書くってわけ。

いつか、あの場で働いていた人たちが、このマガジンにたどり着いたとき、こんなことあったとか、そんな人いたとか、こんな話してた！とか、そんなつもりではなかった！！なんてことを思い出し、いろいろな感情を湧かせていただくのも悪くないかな、なんて思っている。

上がりを迎えた（辞めた）ら、なかった経験かのようにしてしまうこと、せざるを得ないこともある、と思う。むしろ、わざわざ言うまでもないと思っていたりもするだろう。プレイヤー真っ最中の時のほうが、そういう場合が多いかもしれない。話す相手や状況によりけりといった具合だろうか。

少なくとも僕はそうだったし、今もそうだ。でも、自分にとって確かな経験であることも事実だ。

いろいろ、ぼやいているが、結局のところ、先に述べた気持ちを彼女らに直接言うのって、照れくさかった。言った気もするが、チャラけて言ったに違いない。あれこれ真剣に考えていただなんて、わざわざ言うことでもないと思っていたからだと思う。だから、ここでひっそりと「SM クラブの受付」だった清武の経験を掘り起こし、少々理解し難かったことなんかもいじってみたりしながら、「僕、理解できなかったこともあるけど、好きだったんだよ」ってラブレター的な投稿をしちゃおっかな、と思っているのだ。

こんなこと言ってたら、彼女たちから「清武くん・キヨ・ウシジマくん・清 P・お父さん・ヒゲチビ・チイサイオッサン、キモい！」って言われるだろう。それはそれで、快感 ε-(´∀`;)

あとは…社会はそういう場も含めてある、ということをひっそりと残しておこうという意図もある。世の中のみながみな惚れるわけではなく、性風俗に反対だったり、SM なんて興味ない人もいる。僕も大賛成の人ではない。でも、大反対でもない。だって、あるものはあるんだもの。性風俗の場も含まれた社会の中で、僕らは暮らしているのだから。

今回は、ここまで。

この時点で、女の子たちに気づかれませんよぉに…もじもじ(´Д`)ｙ━･~~

次は、面接日のコトを、ダラダラと綴っていくと思う。これがま～ビクビクしながら行ったのだが、僕にとって、なんだか意外だった。

そうだ、猫に聞いてみよう

連載にあたって

私は昨年度まで、立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助学領域に在籍し、対人援助の視点から広義の「地域猫活動」の実践と研究を行ってきました。それと同時に、猫の視点から対人援助を再考してきました。大学院修了時に、「生存確認も含めて、対人援助学マガジン連載書いてみ！」とありがたい声掛けをいただき今回から書かせていただくことになりました。

システム論的な地域猫活動の理論や問題の捉え方、介入によって生じるシステムの循環や心理面の変化を私が実際に関わった事例を紹介しながら解説します。もう一つのテーマとして、活動の中で、猫から投げかけられた「生の現在」への「問い」を一緒に考えてもらいたいと思っています。

「はじめに」の前に―問題はどこ？―

いきなりですが、想像してみてください。

ある朝、家を出ると近所のおじさんとおばさんが喧嘩をしています。

「あんたが猫に餌をやるから猫が増えて皆が迷惑してるんだ！！」とおじさんが怒鳴っています。

「猫が死んでもいいって言うの？！」おばあさんが言い返します。「可哀想だと思うなら自分の家の中で飼えばいいじゃないか！」、「家にも猫がいるし、全部のノラ猫を家に入れるなんて無理よ！」「じゃあ餌なんかやるなよ！」「猫が可愛そうだと思わないの？！」… そして、またはじめに戻る。

ご近所の猫を巡る言い争いは、この「永遠のループ」に陥って数年が経っている。今日も決着がつく気配はない。そんなことを考えていたら、

「あなたはどう思う？！」

突然二人から意見を求められた。



あなたは、なんて答えますか――――？

ここでの「問題」はなんでしょうか。

迷惑なえさやりおばあさんでしょうか。
猫嫌いのおじさんでしょうか。
それとも猫の存在でしょうか。
あるいはもっと別のところにあるのでしょうか。

Ⅰ．事例から

私が冒頭のような揉め事に初めて出くわしたのは、確か中学３年生か高校１年生の頃でした。犬の散歩コースの途中に、いつも猫が数匹いる家がありました。あの家の人はきっと猫が好きなんだろうな。猫、可愛いな。」と思って見ていたら、一緒に犬の散歩をしていた散歩仲間のおばちゃんが「あの家のじいちゃんがノラ猫に餌をあげているから猫が集まってくるのよ。もう迷惑だから保健所に連絡しようと思って‼」とプンプンしながら話してきます。犬のおばちゃんの家と、おじいち

ゃんの家は道を挟んで向かい同士だ。

私は犬も猫も好きなので、この揉め事に巻き込まれて猫が保健所に連れて行かれてしまうなんて可哀想すぎるから何とかしたいと思った。そこで、後日おじいちゃんの家にピンポンし、「猫、可愛いですね、私も好きなんです。けど、ノラ猫にご飯あげると文句言われたりしませんか？堂々とご飯あげられるように、この子たち不妊去勢手術しちゃいませんか？手伝いますよ！」猫トークで仲良くなってから不妊手術の提案をした。すると、意外にもおじいちゃんはとても喜んでくれた。

私「おばちゃん、じいちゃんとこの猫、不妊手術することにしたよ」

おばちゃん「不妊手術をしたってこれ以上増えないかもしれないけどさ、猫がいることに変わりはないんだろう？」

私「おばちゃん猫のどんなことに迷惑してるんだっけ？」

おばちゃん「ニャーニャー、ギャーギャーうるさいし、トイレの臭いが臭いんだよ。」

私「なら、大丈夫だよ！」

おばちゃん「？？？」

Ⅱ．問題の再焦点化

猫の二大苦情は「鳴き声」と「糞尿の臭い」です。この二つは、「発情期特有の行動」という共通点があります。猫は犬と違い待ち伏せ型のハンターです。倉庫なんかで身を潜め、穀物を食べに来たネズミを捕獲する。そういう習性を持っています（日本に猫がやってきたのも、奈良時代に中国からの貴重な経典をネズミが齧ってしまわないように、船に乗せられてきたのが始まりだと言われているそうですね）。待ち伏せするためには自分の臭いを消す必要があります。だから猫はトイレをした後、砂をかけて臭いを消す習性を持っています。臭いのは、発情期のマーキングです。スプレーのようにおしっこをシャッと壁や木に吹きかけます。それはそれは強烈です。鳴き声も同様です。猫は普段わざわざ鳴いて自分の存在をアピールしません。うるさいのは、発情期の異性を求める鳴き声と、一番強烈なのは、オス同士の「鳴き合い」です。赤ちゃんが大癇癪を起しているのかと思ったら、猫だった。そんな経験はありませんか？猫はいきなり取っ組み合いの喧嘩をせずに、交互に鳴き合って強さを図ります。これで決着がつけば、傷つけ合うことはしません。結構平和的ですよね、でも 30 分にも及ぶ長期戦になることもあり、近所に住んでいる人からしたらとても迷惑な騒音です。

つまり、この二大苦情はどちらも発情期特有の行動であることから、不妊去勢手術を行うことで解消されてしまうんです。それでも、手術にお金をかけるくらいなら猫を殺処分するか、どっかほかの地域へ持って行って欲しいと考える過激派の方もおられます。でも、感情論抜きで、それは違います。なぜなら猫は縄張りを持つ生き物だからです。だから、猫を捕まえて殺処分しても、空いたスペースに外から猫がはいってきて、すぐ元通りです。不妊去勢手術が済んだ、人にとって共存しやすい猫が縄張りを張っていてくれることで、地域の平穏は維持されます。

そんなこんなで、プチご近所トラブルは鎮火されました。

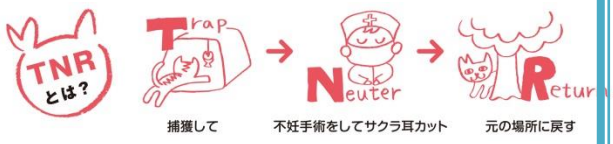


Ⅲ-1．問題の捉え方　―問題の本質を立体的に捉える―

さて、ここでの「問題」はなんだったのでしょうか。

猫の存在でも、餌やりさんの存在でも、猫に迷

惑している人の存在でもありません。
ここでの問題は「猫の発情期特有の行動」です。だから、捕まえて、不妊去勢手術をして、元の場所に戻すことで、問題は解決することができました。実はこれ、「TNR」というちょっとした専門用語がある世界的な取り組みなんです。



©公益財団法人どうぶつ基金

でも今回は連載の初回なので、専門的な話の説明は次回以降にしたいと思います。

Ⅲ-２．問題の捉え方　―悪者探しをしないー

ここでのポイントは原因究明をしていないところです。様々な要因が関わりあって、ある事象を生んでいる社会システムの中で、悪者探し（安易な原因の特定）は危険です。実際、何が原因で何が結果かなんて、分かりません。餌をやる人がいるから猫がいるのかもしれないし、猫がいるから餌をやる人がいるのかもしれない。マナーの悪い餌やりさんがいるから怒る人がいるのかもしれないし、怒る人がいるから隠れ隠れ餌をやることによってマナーの悪い餌やりさんになってしまっているのかもしれない。“誰が悪いのか”を永遠にぐるぐる議論するよりも、問題を解決してしまった方がよっぽど生産的だと思いませんか？

Ⅲ-３．問題の捉え方　―３つの視点―

上記の事例で、おばさんもおじいちゃんも“猫と自分”という二者関係の「ミクロな視点」を持って文句を言ったり、餌をあげたりとそれぞれ自由に行動していました。そういった、「猫、おじいちゃん、おばあちゃん、私」の四者が登場する事例を読んでいる皆さんは、関係性を客観的に捉えた「メゾな視点」で、見ていると言えるでしょう。次は、さらに目線あげて、広く日本を「マクロな視点」で見てもらいたいと思います。

その前に、ここで猫からの一つ目の「問い」が投げかけられます。

猫からの問い１　不妊去勢手術の是非

上記の問題解決において必須なのが猫の不妊去勢手術である。しかし、不妊去勢手術は子孫を残すという猫が本来持つ本能を奪うことであるため、手術の是非を巡って大きな葛藤が生じる。人間の都合で、そこまでしていいのか。短命でも多くの子孫を残すことが猫にとっての幸せか、子孫を残せなくても平和に長生きすることが幸せか。

皆さんはどう考えるだろうか。皆さんにとっての幸せとはなんですか。「生きる」上で大切なことは何ですか。

手術の是非を巡ってひとまずの結論を出すためには、「マクロな視点」で日本の現状を捉えることが必要になってきます。

平成 25 年度の１年間で殺処分された猫の数は、全国で 99､566 頭 にものぼります。1 日あたり 273 頭の猫が殺されているこの現状下で、不妊去勢手術の対案は「殺処分」であり、現状稼働している対策だということを理解する必要があります。したがって、「不妊去勢手術が可哀想ではないか」という論点の争点は「殺処分するよりも不妊去勢手術の方が可哀想なのか」となり、「本能を奪うこと」の是非を問う場合の争点は「生命を奪うこととどちらがためらわれるか」ということになります。殺処分を行っている行政機関を非難することもお門違いです。社会の一員である以上、自分自身も社会的な共犯関係にあると考えるべきでしょう。

哲学的な話でも、切り取られた道徳観でもなく、地に足の着いたリアルな共存について考えることが必要です。

正直に言って、不妊去勢手術をすることは可哀想だと思います。でも、「可愛い」と「可哀想」でこの大きな社会問題は解決することはできないのです。

Ⅲ-４．問題の捉え方―背後ストーリーの理解―

ミクロ、メゾ、マクロ、それぞれの視点で問題を捉えてもらいました。最後に、問題の「背後ストーリー」を見てもらうことで、問題を立体的に捉える作業が完了します。具体的には、猫を社会的文脈の中で捉える作業になります。

そもそも「猫」とはいったい何なのか。猫の歴史については諸説ありますが、古代エジプトにおいて、リビヤヤマネコを家畜化し、8 世紀の奈良時代に仏教の伝来とともに経典をネズミから守る役目として日本に輸入されたのが始まりだと言われています。貴族のペットやネズミ番など様々な場面で猫は好まれてきました。また、ペストが大流行した明治時代に、1909 年（明治 42 年）２月９日付の読売新聞社説ではペスト菌を媒介するノミを媒介するネズミを駆除するため警視庁がペスト予防のために猫を飼うことを奨励し、さらには住宅を廻り、猫を飼うよう説得するという内容が書かれていることからも猫が意図的に広められた過去がわかります。



Ⅳ．まとめ

長々と書いてしまいましたが、今回はまず「猫問題」を立体的にとらえてもらいたいと思い、つらつらと書かせていただきました。

☆問題の本質を立体的に捉えるポイントは

①　悪者探しをしない　（Ⅲ-2）

②　３つの視点で捉える（Ⅲ-3）

- ミクロな視点で見えているものを理解する。
- メゾな視点で全体図を捉える
- マクロな視点で、社会システムの中で捉えなおす

③　背後ストーリーを理解する（Ⅲ-4）

以上３点のステップが猫流問題の捉え方でした。

次回は、ミクロ、メゾ、マクロ、３つの視点を獲得していくことで、活動内容がどう変化していくのか、立命館大学猫の会事例を紹介しながら解説していきたいと思います。また、猫との関わりを通して生まれる学生の心理的な変化にも焦点を当て、大学猫活動の教育的意義にも触れられたらいいなと思っています。では、最後まで読んでくださってありがとうございました！

引用・参考文献

大石孝雄（2013）．ネコの動物学　東京大学出版
山根明弘（2007）．わたしのノラネコ研究　さ・え・ら書房
武井誠（2014）．美しき孤高のハンター世界の野生猫　(株)エディング出版編集部
環境省（2015）．「平成 25 年　犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容状況」（http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html、2015 年 1 月 10 日）

・・

小池英梨子
2015 年立命館大学応用人間科学研究科修了
現在は、公益財団法人どうぶつ基金に所属。
ご意見やご感想はこちら。e.kosame12@gmail.com

編集後記

編集長(ダン シロウ)

六年目に入ったマガジン。今回からの新連載が四本。少々欲張りすぎの拡大路線だが、それぞれ興味深いことが書いていただけていると思う。まず順調な航行を継続できている Web マガジンだと思う。どうぞ、好きなところからお楽しみ下さい。

ノンフィクション雑誌［Ｇ２］講談社刊が先日、１９号をもって休刊となった。目に付いた時には、ほぼ毎号購入していたが、全てを読んでいたわけではない。

こういう媒体が商品として継続的に存在するためには、読者から賛同の意志表示がなければならない。それは具体的には金を出して買うことである。だから記事の全てを読むかどうかは微妙だが、とにかく私は買っていた。しかしそんな読者を一億人以上の人口から１万人も確保できないということで休刊・店じまいになってしまった。

一方このマガジン、販売していないから商品ではない。原稿料も出していない。印刷物として制作しないから、そこにもコストはかかっていない。発送費用や在庫管理費、執筆者、読者への様々な用件は基本的にない。おまけにカラーページ入れ放題、動画や自分のＨＰ、ブログへのリンクもイッパツだ。ここから出発したのに、戻って来ない読者もあるかもしれない。

そんなことも含めて、Web マガジンであることを最大限に生かして、ゆっくり進化させてきたつもりだ。

６年目の第２１号発行に向けて執筆者の皆さんに送ったメッセージを後に掲載しておく。水野スウさんも執筆者短信のところで触れてくださっているが、意図を形にし、持続可能なものにして社会に定着させていく。大変化ではない。システム論者の考える社会変革とはこういう事である。

◆２１号　執筆者の皆様へ◆

対人援助学マガジン編集長の団です。２０号では、私の都合で発刊が遅れましたこと、お詫びします。

さて、第６巻　No.1（２１号）は予定通り、５月２５日締め切り、６月１５日発行の予定をしています。執筆のスケジュールをどうぞ整えておいてください。

２０号では病気ややむを得ない事情で休載になった方が相次ぎました。その結果、少々スリムサイズになりました。どうぞ６年目のスタート、２１号では元気で復帰をお願いします。マガジンは時代に逆行して「肥満」を目指しています。

対人援助学マガジンも 6 年目を迎えます。基本的にこのマガジン自体は目的の成果物ではなく、執筆者の皆さんや、読者の方達の共用ステージだと考えています。

この場があるから記録され、次の時代に向けたメモとして残ってゆく。私達は何事も簡単に忘却し、同じ過ちを繰り返してしまう生き物です。そのことを忘れないためには共有できる記録を残すことだと思います。自慢の昔話ではなく、検討可能な時代の記録はいつも必要です。

何かがあったときだけではなく、私達それぞれの目が及ぶ範囲の今を、自分の言葉で整理して記述する。その意味の大きさは、時間が経つほどに明らかになってきます。

５年前にスタートした時、考えてもいなかった今に立っている方も少なくないでしょう。又５年経ったら、マガジンの10周年を迎えます。その時、どんな事態が待ち受けているのか、誰も予想することは出来ないと思います。できることなら、今のようなことを言い続けていられることを願います。

編集員(チバ アキオ)

ネットに上がったものは半永久的に消えない。そのことによる被害が問題となり、「忘れられる権利」として話題になっている。また、故人がネット上に残したもの等を「ネット遺産」といい、故人自身しかアクセスできない状況に死後もあり続けることも問題になっている。そんななか、このマガジンの執筆陣はこうしてwebマガジンの連載を続けている。書き残すことで起こる何もかもを引き受けている。

なおかつである。多くの執筆者はいわゆるギリギリのところをテーマにして記している。その努力や繊細な気遣いがあちこちに感じられる。「この文章を、もしもこの立場の人が読んだなら…」と何度も試行錯誤し、さらにそんな読み手にもメッセージを残していることが多い。みんなが行儀よく、だれが見ても「シロ」の記録ばかりを残してはそれだけがこの世の中に起こっている事実の全てと思われかねない。世の中には「クロ」もあるし、「グレー」もある。このマガジンには「グレー」といえるような、普段は多くの関係者が書かないテーマ、タブーとされてきたことも出てくる。時にはさまざまなリアクション生む可能性を含んでいる。しかし、こうして広く日に当たるところで記録をしなければ、世の中にそういった事実は存在しないのも同然となってしまう。

無料のWeb雑誌で、ギリギリのテーマで、そして連載。これ自体が新しい連載のデザインといえる。今までしてないことを起こすことは変化のチャンスになりうる。

編集員　オオタニタカシ

先日、大阪市で大阪都構想をめぐる住民投票があり、否決という結果を受けて、橋下市長が任期満了ののち政界を引退すると明言しました。その後は、都構想や橋下氏の政治手法、住民投票による意思決定という方法の是非等について新聞やTVが賑わっているところですが、その中で橋下氏が『必要とされた一時、公に務めるために政治家になったのであり、また弁護士に戻る』と発言したことに注目しているものがありました。それは多分正しくて、政治の世界で「当選回数〇回で入閣」とかいう一般の感覚からは乖離したルールがまかり通っていることが、政治家が国民に「政治屋」と揶揄されるような現状を生み出しているのだろうと思います。短信でも書きましたが、久しぶりに大学に戻って同じようなことを思いました。私は必要があって3年間の有期で学生になる選択をしましたが、その期限が過ぎればまた今取り組んでいる仕事に戻って行きます。大学というシステムを考えた時、このような使い方ももっ

とあってよいのではないかと思います。
　マガジンも 20 号を超え、新連載も次々始まる中、当初から連載されていた方が区切りをつけられることも出てきて、『出たり入ったり』が自然に生じる状況になってきました。これは、きっと健全です。『マガジン』というプラットフォームを必要と思われた方は、あまり先のことまで考えなくてもいいのです。ぜひ、今この一時をご一緒しましょう。

■ご意見･ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８
ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻21号

第6巻　第一号
２０１５年０６月１５日発行
http://humanservices.jp/

第22号は2015年9月15日
発刊の予定です。
原稿締切2015年8月25日！

新規執筆者を常に募っています。連載誌ですが、必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数、書いていただけるよう設定しています。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

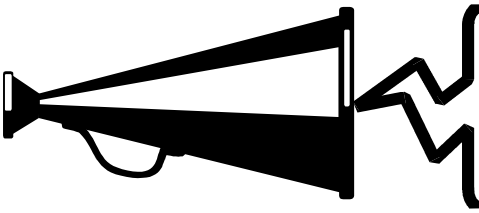
入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

ミラクル

　二人は姉弟。他に末っ子の妹と父親が来談していた。主訴は長男の非行。中学三年にもなって、まだそんなことをしている･･･と、学校や近隣での評判が悪かった。みんなが困り切っていたときに、家族面接を実施して会った。
　面接でどんなことが起きたかは、『木陰の物語一八〇話』に描いた（機会があれば、ご覧下さい。タイトルは「ひとつめ」。
　人は様々な方法で復活をする。無論、意図を持って取り組まれる努力も多いが、たまに思いがけず起こるミラクルもある。この面接ではそれが起きた。



第７回年次大会

2015 年 10 月 31 日～11 月 1 日（予定）

場所：立命館大学

大会委員長　中村　正

募集！！

企画ワークショップ・ポスター発表・研究報告

受付開始は、８ 月頃に皆さんにお知らせいたします。